徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第23集

石井城ノ内遺跡　石井・神山線地区

－主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1999
徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

調査地点　1／25,000航空写真

朱の付着した土器と石器

序　文

本書は、主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴い、徳島県教育委員会及び財団法人徳島県埋蔵文化財センターが平成４年度～平成７年度に実施した石井城ノ内遺跡　石井・神山線地区の発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は、吉野川下流南岸の沖積平野から四国山地北端の丘陵地帯にかけて位置する広範なものであり、主として弥生時代終末期から古墳時代初頭と平安時代の２時期の集落遺構が確認されました。調査区からは数多くの遺物が出土しましたが、中でも膨大な量の土器は該期における吉野川下流域の土器様相の解明に貴重な成果を上げることができました。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施，報告書の作成にあたり、徳島県土木部道路建設課をはじめ多くの関係諸機関及び地元の皆様に多大な御援助，御協力をいただきましたことに深く感謝の意を表します。

1999年３月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
理事長　　青　木　武　久

例　言

1　本書は主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴い、平成４～７年度に実施した石井城ノ内遺跡石井・神山線地区（徳島県名西郡石井町石井字城ノ内所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は徳島県土木部から委託を受け、平成４～６年度に徳島県教育委員会文化課（現文化財課）が実施した。組織の改編により平成７年度は財団法人徳島県埋蔵文化財センターが調査を引き継いで実施した。また、整理業務及び報告書の作成は、平成６年度は文化課が、平成７～10年度は埋蔵文化財センターがそれぞれ行った。

3　精密分布調査・試掘調査，発掘調査及び報告書作成についての実施期間はそれぞれ次の通りである。

・精密分布調査及び
試掘調査期間　平成３年４月１日～平成３年６月30日
　　平成５年７月５日～平成５年７月７日
・発掘調査期間　平成４年５月１日～平成４年11月30日
　　平成５年４月１日～平成６年３月31日
　　平成６年４月１日～平成６年12月27日
　　平成７年４月１日～平成７年７月31日
　　平成７年11月１日～平成７年12月28日
・整理期間　平成６年８月１日～平成６年８月31日
　　平成６年11月１日～平成６年11月30日
　　平成７年１月１日～平成７年３月31日
　　平成７年４月１日～平成７年８月31日
　　平成８年４月１日～平成８年９月30日
　　平成９年４月１日～平成９年６月30日
　　平成10年１月１日～平成10年３月31日
　　平成10年４月１日～平成10年９月30日

4　遺構の表示記号は基本的には徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用い、土器溜りについてはSZとした。凡例を以下に記す。

凡例

SA	掘立柱建物	SG	柵列	SD	溝	SK	土坑
SP	柱穴，小穴	SX	性格不明遺構	SZ	土器溜り		

5　本書で用いた土層及び遺物の胎土の色調は、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帖」によった。

6　巻頭図版１は建設省国土地理院発行の航空写真１／25,000を、第４図は国土地理院発行の１／50,000の地形図「川島」を使用した。

7　調査にあたっては徳島県土木部道路建設課の全面的な御協力，御指導を得た。

8　報告書作成に際し、次の方々，機関の御協力，御教示を得た。

次山　　淳　　中村　　豊　　橋本　達也　　北條　芳隆

（五十音順　敬称略）

9　遺構の写真撮影は調査を担当した各社会教育主事及び研究員（Ⅰ－１章参照）が、遺物の写真撮影は宮本和宏，日下正剛が、遺物のエックス線撮影及び材質科学調査は植地岳彦が行った。遺物の観察表は主として渡邊信之，井利元裕哉，宮本，日下が作成し、遺物の実測及びトレースは４者の監督のもと徳島県埋蔵文化財センター整理作業員，調査補助員が行った。編集・執筆は日下が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査経緯
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 3
(1)　調査の経過…… 3
(2)　発掘調査の方法…… 5
(3)　調査日誌抄…… 6
Ⅱ　遺跡の立地と環境
1　地理的環境…… 7
2　歴史的環境…… 7
Ⅲ　調査成果
1　基本層序…… 12
2　第１～４調査区…… 14
(1)　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 19
掘立柱建物…… 19
溝…… 25
土坑…… 36
土器溜り…… 57
不明遺構…… 58
小穴・柱穴…… 58
(2)　遺構外出土の遺物…… 63
(3)　小結…… 70
3　第５調査区…… 74
(1)　各遺構と弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物…… 74
溝…… 74
土坑…… 82
土器溜り…… 90
(2)　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 95
溝…… 95
土坑…… 97
(3)　遺構外出土の遺物…… 98
(4)　小結…… 110
4　第６～12調査区…… 111

(1) 弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構と遺物…… 111
掘立柱建物…… 111
溝…… 116
土坑…… 130
不明遺構…… 170
小穴・柱穴…… 171
その他の遺構出土遺物…… 172
(2) 遺構外出土の遺物…… 173
(3) 小結…… 176
5 第13調査区…… 177
(1) 第１分割出土の遺構と遺物…… 177
(2) 第２分割出土の遺構と遺物…… 194
(3) 第３分割出土の遺構と遺物…… 196
(4) 遺構外出土の遺物…… 196
(5) 小結…… 197
Ⅳ 考察
1 石井城ノ内遺跡における弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器様相…… 200
2 石井城ノ内遺跡における９～10世紀の土器様相…… 214

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　調査区位置図……4
第３図　第１～第12調査区グリッド配置図……5
第４図　周辺の遺跡分布図……9
第５図　基本土層柱状図……13
第６図　第１，２調査区第１遺構面遺構配置図　…15
第７図　第１，２調査区第２遺構面遺構配置図　…16
第８図　第３，４調査区第１遺構面遺構配置図　17･18
第９図　SA2001実測図　……19
第10図　SA2001各柱穴出土遺物実測図　……19
第11図　SA2002実測図　……19
第12図　SP2023実測図　……20
第13図　SP2030実測図　……20
第14図　SP2032実測図　……20
第15図　SA2002各柱穴出土遺物実測図　……21
第16図　SA2003実測図　……23
第17図　SP2059実測図　……23
第18図　SA2003各柱穴出土遺物実測図　……24
第19図　SA2005実測図　……24
第20図　SA2005各柱穴出土遺物実測図　……25
第21図　SD1001断面実測図　……25
第22図　SD1002断面実測図　……25
第23図　SD1001，SD1002出土遺物実測図　……26
第24図　SD2001断面実測図　……26
第25図　SD2001出土遺物実測図　……27
第26図　SD2002，SK2003実測図　……28
第27図　SD2002出土遺物実測図　……28
第28図　SD2004，SD2005実測図　……29
第29図　SD2004，SD2005出土遺物実測図　……30
第30図　SD2008，SK2008実測図　……30
第31図　SD2008出土遺物実測図　……31
第32図　SD2009実測図　……31
第33図　SD2009出土遺物実測図　……32
第34図　SD2010実測図，出土遺物実測図　……33
第35図　SD2006，SD2012出土遺物実測図　……34
第36図　SD2013断面実測図，出土遺物実測図　34
第37図　SD1005，SD1006実測図　……35
第38図　SD1007，SD1008実測図（第３調査区）35
第39図　SD1009実測図（第３調査区）……36
第40図　SD1013，SD1014，SX1002実測図……37
第41図　SD1013出土遺物実測図　……38
第42図　SK2003出土遺物実測図　……39
第43図　SK2004実測図　……40
第44図　SK2004出土遺物実測図　……40
第45図　SK2005実測図　……41
第46図　SK2005出土遺物実測図　……41
第47図　SK2007実測図　……42
第48図　SK2007出土遺物実測図　……43
第49図　SK2008出土遺物実測図　……43
第50図　SK2009実測図　……44
第51図　SK2009出土遺物実測図　……45
第52図　SK2011，SK2012実測図　……46
第53図　SK2011出土遺物実測図　……47
第54図　SK2014実測図　……48
第55図　SK2014出土遺物実測図(1)　……49
第56図　SK2014出土遺物実測図(2)　……50
第57図　SK2017実測図　……50
第58図　SK2017出土遺物実測図　……51
第59図　SK1004～SK1008実測図　……51
第60図　SK1015～SK1021実測図　……52
第61図　SK1018出土遺物実測図　……53
第62図　SK1048～SK1052実測図　……53
第63図　SK1023実測図　……54
第64図　SK1023出土遺物実測図　……54

第65図　SK1027実測図 ……54
第66図　SK1027出土遺物実測図 ……55
第67図　SK1028実測図 ……55
第68図　SK1028出土遺物実測図 ……55
第69図　SK1037実測図 ……55
第70図　SK1037出土遺物実測図 ……55
第71図　SK1039実測図 ……55
第72図　SK1039出土遺物実測図 ……56
第73図　SK1042出土遺物実測図 ……56
第74図　SK1046実測図 ……56
第75図　SK1046出土遺物実測図 ……57
第76図　SZ2001（土器溜り１）実測図 ……57
第77図　SZ2001（土器溜り１）出土遺物実測図 57
第78図　SX1002出土遺物実測図 ……58
第79図　SP2001実測図 ……58
第80図　SP2001出土遺物実測図 ……59
第81図　SP2003実測図 ……59
第82図　SP2003出土遺物実測図 ……59
第83図　SP2015実測図 ……59
第84図　SP2015出土遺物図 ……60
第85図　SP2041実測図 ……60
第86図　SP2041出土遺物実測図 ……60
第87図　SP2042実測図 ……61
第88図　SP2042出土遺物実測図 ……61
第89図　SP1006出土遺物実測図 ……61
第90図　第１，４調査区柱穴出土遺物実測図…62
第91図　第４調査区遺構外出土遺物実測図……63
第92図　第１，２調査区第６層出土遺物実測図 …64
第93図　第１，２調査区第５層出土遺物実測図 …66
第94図　第４調査区第４層出土遺物実測図……67
第95図　第４調査区第３層出土遺物実測図……68
第96図　第１，４調査区遺構外出土遺物実測図 …69
第97図　第５調査区第１遺構面遺構配置図……72
第98図　第５調査区第２遺構面遺構配置図……73
第99図　SD2014，SD2015実測図 ……75
第100図　SD2014出土遺物実測図 ……76
第101図　SD2015出土遺物実測図(1)……77
第102図　SD2015出土遺物実測図(2)……78
第103図　SD2015出土遺物実測図(3)……79
第104図　SD1020実測図 ……80
第105図　SD1020出土遺物実測図(1)……81
第106図　SK2023実測図 ……82
第107図　SK2023出土遺物実測図(1)……83
第108図　SK2023出土遺物実測図(2)……85
第109図　SK2024実測図 ……86
第110図　SK2024出土遺物実測図 ……86
第111図　SK2025実測図 ……86
第112図　SK2025出土遺物実測図(1)……87
第113図　SK2025出土遺物実測図(2)……88
第114図　SK2026実測図 ……88
第115図　SK2026出土遺物実測図 ……89
第116図　SZ2002（土器溜り２）実測図 ……91
第117図　SZ2002（土器溜り２）出土遺物実測図(1)92
第118図　SZ2002（土器溜り２）出土遺物実測図(2)93
第119図　SZ2003（土器溜り３）実測図 ……94
第120図　SZ2003（土器溜り３）出土遺物実測図(1)95
第121図　SZ2003（土器溜り３）出土遺物実測図(2)96
第122図　SD1020出土遺物実測図(2)……97
第123図　SD1021出土遺物実測図 ……97
第124図　SK1070実測図 ……98
第125図　SK1070出土遺物実測図 ……98
第126図　SK1072出土遺物実測図 ……98
第127図　第５調査区第９層出土遺物実測図(1)……99
第128図　第５調査区第９層出土遺物実測図(2) …101
第129図　第５調査区第９層出土遺物実測図(3) …102
第130図　第５調査区第９層出土遺物実測図(4) …104
第131図　第５調査区第７層出土遺物実測図…105
第132図　第５調査区第５層出土遺物実測図…106
第133図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(1) …107
第134図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(2) …108
第135図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(3) …109
第136図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(4) …110

第137図　第６調査区第１遺構面遺構配置図…112
第138図　第６調査区第２遺構面遺構配置図…112
第139図　第７調査区第１遺構面遺構配置図…113
第140図　第７調査区第２遺構面遺構配置図…113
第141図　第８調査区第１遺構面遺構配置図…114
第142図　第８調査区第２遺構面遺構配置図…114
第143図　第９，10調査区第１遺構面遺構配置図　115
第144図　第９，10調査区第２遺構面遺構配置図　115
第145図　SA2007実測図 ……116
第146図　SD1022，SK1077，SX1005実測図…117
第147図　SD1022出土遺物実測図 ……118
第148図　SD1028実測図 ……119
第149図　SD1029断面実測図 ……119
第150図　SD1028，SD1029出土遺物実測図 …120
第151図　SD1037実測図 ……121
第152図　SD1037出土遺物実測図 ……122
第153図　SD1038出土遺物実測図 ……123
第154図　SD1044実測図 ……124
第155図　SD1044出土遺物実測図(1) ……125
第156図　SD1044出土遺物実測図(2) ……126
第157図　SD1045実測図 ……127
第158図　SD1045出土遺物実測図 ……128
第159図　SD2020実測図 ……129
第160図　SD2020出土遺物実測図 ……131
第161図　SK1074実測図 ……132
第162図　SK1074出土遺物実測図(1) ……133
第163図　SK1074出土遺物実測図(2) ……135
第164図　SK1074出土遺物実測図(3) ……136
第165図　SK1074出土遺物実測図(4) ……137
第166図　SK1074出土遺物実測図(5) ……138
第167図　SK1077出土遺物実測図 ……139
第168図　SK1078実測図 ……139
第169図　SK1078出土遺物実測図 ……139
第170図　SK1079実測図 ……140
第171図　SK1079出土遺物実測図 ……140
第172図　SK2034実測図 ……140
第173図　SK2034出土遺物実測図 ……140
第174図　SK2030，SK2031実測図 ……141
第175図　SK2030出土遺物実測図 ……142
第176図　SK2031出土遺物実測図 ……143
第177図　SK2032実測図 ……145
第178図　SK2032出土遺物実測図 ……146
第179図　SK2033実測図 ……147
第180図　SK2033出土遺物実測図(1) ……148
第181図　SK2033出土遺物実測図(2) ……149
第182図　SK2033出土遺物実測図(3) ……150
第183図　SK1081実測図 ……150
第184図　SK1081出土遺物実測図 ……150
第185図　SK1083実測図 ……151
第186図　SK1083出土遺物実測図 ……152
第187図　SK1084出土遺物実測図 ……152
第188図　SK1085実測図 ……153
第189図　SK1085出土遺物実測図 ……153
第190図　SK1086実測図 ……154
第191図　SK1086出土遺物実測図 ……154
第192図　SK1087，SK1088実測図 ……155
第193図　SK1087出土遺物実測図 ……156
第194図　SK1088出土遺物実測図 ……157
第195図　SK2038実測図 ……157
第196図　SK2038出土遺物実測図 ……157
第197図　SK2039実測図 ……158
第198図　SK2039出土遺物実測図 ……159
第199図　SK2041実測図 ……160
第200図　SK2041出土遺物実測図 ……160
第201図　SK2042実測図 ……160
第202図　SK2042出土遺物実測図 ……161
第203図　SK2044実測図 ……163
第204図　SK2044出土遺物実測図(1) ……164
第205図　SK2044出土遺物実測図(2) ……165
第206図　SK2045実測図 ……166
第207図　SK2045出土遺物実測図 ……167
第208図　SK2046実測図 ……167

第209図　SK2046出土遺物実測図(1) ……168
第210図　SK2046出土遺物実測図(2) ……169
第211図　SX1004出土遺物実測図 ……170
第212図　SX1005出土遺物実測図 ……170
第213図　SX1007出土遺物実測図 ……171
第214図　SX1008出土遺物実測図 ……171
第215図　SP2124実測図 ……171
第216図　SP2124出土遺物実測図 ……172
第217図　SP2136実測図 ……172
第218図　SP2136出土遺物実測図 ……172
第219図　各遺構出土遺物実測図……173
第220図　第６～10調査区遺構外出土遺物実測図(1) …174
第221図　第６～10調査区遺構外出土遺物実測図(2) …174
第222図　第６～10調査区遺構外出土遺物実測図(3) …175
第223図　第６～10調査区遺構外出土遺物実測図(4) …175
第224図　第６～10調査区遺構外出土遺物実測図(5) …175
第225図　第13調査区グリッド配置図……177
第226図　南東壁土層図……177
第227図　北西壁土層図……178
第228図　第13調査区第１分割第１遺構面遺構配置図 179
第229図　第13調査区第１分割第２遺構面遺構配置図 180
第230図　SD1048，SD1049実測図 ……181
第231図　SD1048出土遺物実測図 ……183
第232図　SK1091実測図 ……184
第233図　SK1091出土遺物実測図 ……184
第234図　SK1093実測図 ……185
第235図　SK1093出土遺物実測図 ……185
第236図　SK1094実測図 ……186
第237図　SK1094出土遺物実測図 ……186
第238図　SX1009実測図 ……188
第239図　SX1009出土遺物実測図(1) ……189
第240図　SX1009出土遺物実測図(2) ……190
第241図　SK1092，SK1095，SX1010出土遺物実測図 192
第242図　SK2053実測図 ……193
第243図　SK2053出土遺物実測図 ……193
第244図　第13調査区第２分割遺構実測図……195
第245図　SK1110実測図 ……196
第246図　SK1110，SK1111，SK1112出土遺物実測図　196
第247図　第13調査区第３分割遺構配置図……197
第248図　SK1114出土遺物実測図 ……198
第249図　第13調査区遺構外出土遺物実測図…198

表　目　次

第１表　各遺構出土の器種組成(1) ……208
第２表　各遺構出土の器種組成(2) ……209
第３表　各遺構出土の器種組成(3) ……210
第４表　各遺構出土の器種組成(4) ……211
第５表　石井城ノ内遺跡と各遺跡の遺構年代 213
第６表　第１，２調査区主要遺構における供膳具出土状況(1) ……222
第７表　第１，２調査区主要遺構における供膳具出土状況(2) ……223
第８表　９・10世紀の遺構（遺跡）一覧表 …224
第９表　主要遺構における土師器皿・杯類の赤色塗彩率 ……225
第10表　第１，２調査区第２遺構面出土の土師器皿類における赤色塗彩率 ……226
第11表　第１，２調査区第２遺構面出土の土師器杯類における赤色塗彩率 ……226
第12表　出土遺物観察表（１） ……231
第13表　出土遺物観察表（２） ……232

第14表　出土遺物観察表（３）……233
第15表　出土遺物観察表（４）……234
第16表　出土遺物観察表（５）……235
第17表　出土遺物観察表（６）……236
第18表　出土遺物観察表（７）……237
第19表　出土遺物観察表（８）……238
第20表　出土遺物観察表（９）……239
第21表　出土遺物観察表（10）……240
第22表　出土遺物観察表（11）……241
第23表　出土遺物観察表（12）……242
第24表　出土遺物観察表（13）……243
第25表　出土遺物観察表（14）……244
第26表　出土遺物観察表（15）……245
第27表　出土遺物観察表（16）……246
第28表　出土遺物観察表（17）……247
第29表　出土遺物観察表（18）……248
第30表　出土遺物観察表（19）……249
第31表　出土遺物観察表（20）……250
第32表　出土遺物観察表（21）……251
第33表　出土遺物観察表（22）……252
第34表　出土遺物観察表（23）……253
第35表　出土遺物観察表（24）……254
第36表　出土遺物観察表（25）……255
第37表　出土遺物観察表（26）……256
第38表　出土遺物観察表（27）……257
第39表　出土遺物観察表（28）……258
第40表　出土遺物観察表（29）……259
第41表　出土遺物観察表（30）……260
第42表　出土遺物観察表（31）……261
第43表　出土遺物観察表（32）……262
第44表　出土遺物観察表（33）……263
第45表　出土遺物観察表（34）……264
第46表　出土遺物観察表（35）……265
第47表　出土遺物観察表（36）……266
第48表　出土遺物観察表（37）……267
第49表　出土遺物観察表（38）……268
第50表　出土遺物観察表（39）……269
第51表　出土遺物観察表（40）……270
第52表　出土遺物観察表（41）……271
第53表　出土遺物観察表（42）……272
第54表　出土遺物観察表（43）……273
第55表　出土遺物観察表（44）……274
第56表　出土遺物観察表（45）……275
第57表　出土遺物観察表（46）……276
第58表　出土遺物観察表（47）……277
第59表　出土遺物観察表（48）……278
第60表　出土遺物観察表（49）……279
第61表　出土遺物観察表（50）……280
第62表　出土遺物観察表（51）……281
第63表　出土遺物観察表（52）……282
第64表　出土遺物観察表（53）……283
第65表　出土遺物観察表（54）……284
第66表　出土遺物観察表（55）……285
第67表　出土遺物観察表（56）……286
第68表　出土遺物観察表（57）……287
第69表　出土遺物観察表（58）……288
第70表　出土遺物観察表（59）……289
第71表　出土遺物観察表（60）……290
第72表　出土遺物観察表（61）……291
第73表　出土遺物観察表（62）……292
第74表　出土遺物観察表（63）……293
第75表　出土遺物観察表（64）……294
第76表　出土遺物観察表（65）……295
第77表　出土遺物観察表（66）……296
第78表　出土遺物観察表（67）……297
第79表　出土遺物観察表（68）……298
第80表　出土遺物観察表（69）……299
第81表　出土遺物観察表（70）……300
第82表　出土遺物観察表（71）……301
第83表　出土遺物観察表（72）……302
第84表　出土遺物観察表（73）……303
第85表　出土遺物観察表（74）……304

第86表　出土遺物観察表（75）……305
第87表　出土遺物観察表（76）……306
第88表　出土遺物観察表（77）……307
第89表　出土遺物観察表（78）……308
第90表　出土遺物観察表（79）……309
第91表　出土遺物観察表（80）……310
第92表　出土遺物観察表（81）……311
第93表　出土遺物観察表（82）……312
第94表　出土遺物観察表（83）……313
第95表　出土遺物観察表（84）……314
第96表　出土遺物観察表（85）……315
第97表　出土遺物観察表（86）……316
第98表　出土遺物観察表（87）……317
第99表　出土遺物観察表（88）……318
第100表　出土遺物観察表（89）……319
第101表　出土遺物観察表（90）……320
第102表　出土遺物観察表（91）……321
第103表　出土遺物観察表（92）……322
第104表　出土遺物観察表（93）……323
第105表　出土遺物観察表（94）……324

写　真　目　次

写真１　現地説明会 ……5

図　版　目　次

図版　１－１　第１調査区調査前風景 ……327
１－２　第１調査区第２遺構面検出状況　327
１－３　SD2009検出状況……327
１－４　SK2008検出状況……327
１－５　SK2009検出状況……327
１－６　SK2014検出状況……327
１－７　SK2011検出状況……327
図版　２－１　SP2029検出状況……328
２－２　SP2031検出状況……328
２－３　第１調査区完掘状況 ……328
２－４　第４調査区調査前風景 ……328
２－５　SX1002検出状況……328
２－６　第４調査区完掘状況 ……328
２－７　SZ2003検出状況……328
２－８　第５調査区北壁土層 ……328
図版　３－１　SZ2002検出状況……329
３－２　SK1074検出状況……329
３－３　SX1004検出状況……329
３－４　第９～12調査区調査前風景 …329
３－５　SD1037検出状況（１）……329
３－６　SD1037検出状況（２）……329
３－７　SK1083検出状況……329
３－８　SK2044検出状況……329
図版　４－１　SK2046検出状況……330
４－２　第10調査区西壁土層 ……330
４－３　SK1086検出状況……330

4－4　SD1044検出状況……330
4－5　SD2020検出状況……330
4－6　第10調査区完掘状況 ……330
4－7　第13調査区完掘状況 ……330
4－8　第13調査区第２分割完掘状況 330
図版５　第１～４調査区出土遺物 ……331
図版６　第１～５調査区出土遺物 ……332
図版７　第５～10調査区出土遺物 ……333
図版８　第６～13調査区出土遺物 ……334

巻頭図版目次

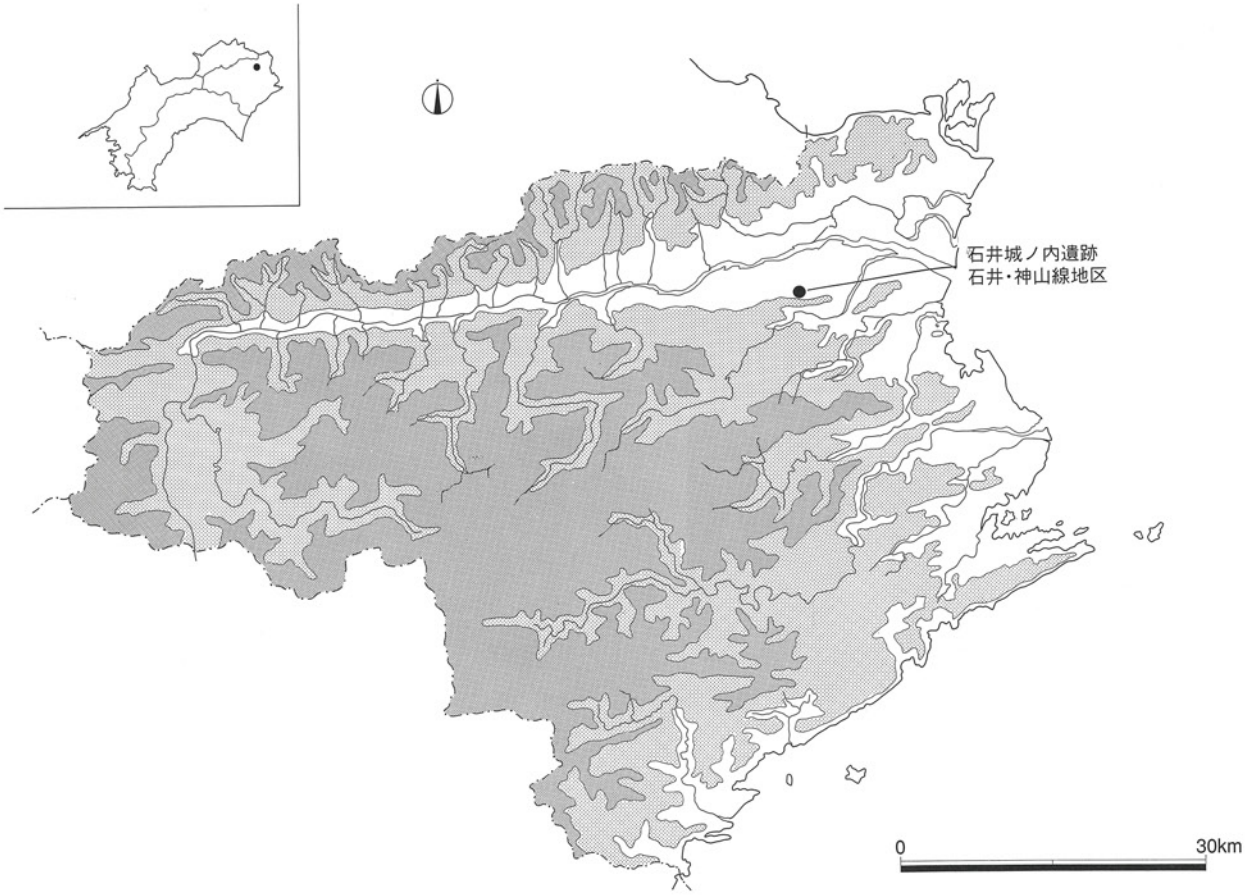
巻頭図版１　調査地点　１／25,000航空写真
巻頭図版２　朱の付着した土器と石器

Ⅰ　調査経緯

1　調査に至る経緯

平成２年度、徳島県土木部より主要地方道石井・神山線道路改良事業計画が発表された。従来から本調査地区周辺とりわけ調査区以東の石井町及び徳島市国府町にかけての気延山を中心とした地域は、古墳密集地帯として知られ、また調査地点東側の清成遺跡は弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落遺跡として確認されていた。このことから調査地区が未確認ではあるものの、遺跡包合地である可能性が高いため、平成３年４月から７月まで徳島県教育委員会文化課は精密分布調査及び試掘調査を実施した。精密分布調査は、国道192号線以南の道路建設地点を中心とした総面積89,000㎡について行った。その結果、調査区内を東西に流れる渡内川流域及びその南側の自然堤防あるいは微高地に集中的な遺物の散在が認められた。さらにそのデータを元に、渡内川以南の建設予定地内に26地点のトレンチによる試掘調査を実施した結果、平安時代及び弥生時代終末期から古墳時代初頭と推定できる遺構面２面を確認できた。これにより文化課は平成４年度からの本調査の実施を決定した。

調査は用地取得がなされた地区から工事の工程に応じて順次実施したため、平成４年度から７



第１図　遺跡位置図

年度までの４年間に合わせて13調査区に分割した、総面積6,550㎡について実施した。また平成７年度の組織改編により、以降の発掘調査及び整理，報告書作成業務は徳島県教育委員会文化財課の委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターに引き継がれて実施された。この間、担当者の人事異動等もあり、発掘調査は10名、整理，報告書執筆業務は調査担当者以外を含め８名が担当したことから、調査担当者の意図と報告内容の検討は今後も調整することが必要である。

調査組織及び整理体制は以下の通りである。

総括，総務担当

○徳島県教育委員会文化課

課　　長　安藝　武（平成４年度）、浜　高公（平成５年度）、浅香寿穂（平成６年度）
課長補佐　藤本憲和（平成４年度）、天野尊温（平成５年度）、中田良雄（平成６年度）
庶務係長　高土地章男（平成４，５年度）、多田　祐（平成６年度）
文化財保護班長　霜田精奏（平成４，５年度）
埋蔵文化財係長　松永住美（平成６年度）
事務職員　竹岡正雄（平成４，５年度）、志田美穂（平成４～６年度）、
松本良男（平成６年度）

○財団法人徳島県埋蔵文化財センター

所　　長　筒井豊祐（平成７～９年度）、寒川光明（平成10年度）
事務局長　柴田　広（平成７年度）、庄野徳保（平成８，９年度）、
細川靖夫（平成10年度）
総務課長　小林敬治（平成７年度）、長江　仁（平成８，９年度）、
井後伸一（平成10年度）
調査課長　島巡賢二（平成７～９年度）
整理普及課長　島巡賢二（平成10年度）
調査係長　逢坂俊男（平成７，８年度）、南　信義（平成９年度）
整理係長　松永雅行（平成10年度）
主　　事　三木和文（平成７年度）、西木未香（平成７～９年度）、
集堂正士（平成８～10年度）、佐藤真紀（平成10年度）

発掘調査担当

○徳島県教育委員会文化課

平成４年度　社会教育主事　井上　章生、稲井　弘道、相原　　聡
文化財調査員　佐藤　育代、福本　恭子、松浦　光賢、堺　　圭子、

若岡　佐知、坂東　建司、内輪　敏幸、神辺　　哲、
重金　良拓

平成５年度　社会教育主事　相原　　聡、田上　　隆

文化財調査員　川真田隆子、島田　晶子、坂東　健司、川口　領子、
内輪　敏幸、福本　恭子

平成６年度　社会教育主事　田上　　隆、泊　　強、石井　伸夫、高柳　孝治

文化財調査員　川真田隆子、神辺　　哲、坂東　建司、三井　雅史、
菊池　　薫、宮本　文代、岸本多美子、児玉　安弘

○徳島県埋蔵文化財センター

平成７年度　研　　究　　員　宮本　和宏、荒瀬　往央、湯浅　文則

調査補助員　堺　　圭子、中川美智子、福本　恭子

整理担当

○徳島県教育委員会文化課

平成６年度　社会教育主事　田上　　隆、森本　浩史、泊　　強

文化財調査員　川真田隆子、神辺　　哲、坂東　建司、三井　雅史、
堺　　圭子、中川美智子、武田三千子、福本　恭子、
立石　志穂

○徳島県埋蔵文化財センター

平成７年度　研　　究　　員　渡邊　信之

平成８年度　研　　究　　員　荒瀬　往央、井利元裕哉

調査補助員　宮本　文代、原　美由紀

平成９年度　研　　究　　員　宮本　和宏

平成10年度　研　　究　　員　日下　正剛

2　調査の経過

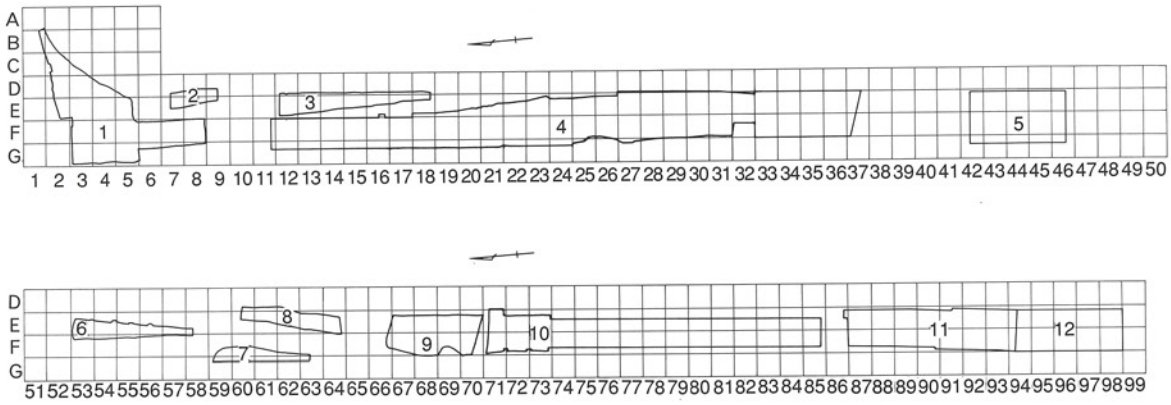
(1)　調査の経過

調査は用地取得のなされた地区から順次行い、第１次調査　850㎡を平成４年５月１日～11月30日に、第２次調査1,700㎡を平成５年４月１日～平成６年３月31日に、第３次調査2,700㎡を平成６年４月１日～平成６年12月27日に、第４次調査1,300㎡を平成７年４月１日～12月28日においてそれぞれ実施した。総面積は6,550㎡である。（第２図）尚、第１次調査期間中の平成４年10月３日には現地説明会を開催し、調査成果を公開発表した。

第２図　調査区位置図

(2) 発掘調査の方法

調査区のグリッド配置は第１～12調査区については調査区が南北に細長くしかも正直線であることから、道路建設用地の中心杭を基準として、５m×５mのグリッドを設定し、当時文化課の基準に則り、北から南へ１，２，３…、東から西へA，B，C…の順に番号，記号を振り、その組み合わせで各グリッドを表示した。したがってグリッドは第Ⅳ系国土座標に対してはN-5°-E傾くことに留意されたい。調査区番号は報告書作成時に便宜上、北から順に第１調査区から第12調査区まで付け直したため、発掘調査時に調査年度順と分布及び試掘時に設定した地区記号を組み合わせて付けたⅠA区，ⅡA区，ⅡB区…とは異なることに注意されたい。したがって平成４年度調査が第１調査区、平成５年度調査が第４，第５調査区、平成６年度調査が第２，第３，第６，第８～第12調査区、平成７年度調査が第７調査区にあたる。（第３図）



第３図　第１～第12調査区グリッド配置図

また平成７年度調査の第13調査区については中心杭No37を通る南北座標軸を基準として５m×５mのグリッドを設定し、西から東へ１，２，３…、南から北へA，B，C…の順に番号，記号を振り、その組み合わせで各グリッド表示した。この調査区は尾根斜面に立地するため、さらに３分割して発掘を行い、それぞれを第１分割，第２分割，第３分割とした。（第１分割と第２分割は一部が上下重複する。）（第225図）

第12調査区と第13調査区の間の部分については試掘調査を平成５年度に実施したが、当地は元来深田であり近年埋立てられていることから、遺構、遺物とも検出されず、その結果本調査の必要なしと判断した。

遺構番号については、徳島県埋蔵文化財センターの統一様式に則り例言で示したアルファベット記号と４桁番号の組み合せを用い、発掘調査時の遺構番号を報告書作成時に第１調査区から第13調査区までの順に通し番号として付け直した。

写真１　現地説明会

(3) 調査日誌抄

調査区番号，グリッド番号及び遺構番号については報告書掲載番号で表記する。

平成４年度

５月１日　第１調査区掘り下げ開始
６月８日　第１調査区第１遺構面検出
８月31日　第１調査区第２遺構面検出状況写真撮影
９月２日　第１調査区遺構断面図作成開始
10月３日　現地説明会開催
10月５日　第１調査区南側拡張部分掘り下げ開始
10月28日　第１調査区拡張部分第２遺構面検出
11月17日　第１調査区遺構完掘状況写真撮影
11月18日　第１調査区確認のための深堀開始
11月30日　第１調査区完掘

平成５年度

４月10日　第４調査区掘り下げ開始
６月20日　第４調査区第１遺構面検出
７月５日　第12，第13調査区間の試掘開始
７月16日　第４調査区断面図作成開始
12月20日　第４調査区完掘
１月10日　第５調査区掘り下げ開始
２月９日　第５調査区第１遺構面検出
３月７日　第５調査区第２遺構面検出

平成６年度

４月７日　第３，第６調査区表土削り荒掘り開始
４月11日　第９～第12調査区畦作り
４月18日　第９～第12調査区先行トレンチ
４月25日　第９～第12調査区表土削り開始
４月26日　第６調査区第１遺構面プラン検出
５月９日　第11調査区割付杭打ち
５月10日　第３調査区第１遺構面検出
　　第11調査区掘り下げ
５月12日　第８調査区掘り下げ
５月16日　第６調査区精査
　　第２調査区掘り下げ開始
５月25日　第３調査区完掘
６月２日　第２調査区第１遺構面完掘
６月３日　第６調査区第１遺構面完掘
　　第８調査区第１遺構面検出
６月７日　第２調査区第２遺構面精査
６月10日　第６調査区第２遺構面検出
　　第２調査区第２遺構面精査
６月14日　第８調査区第２遺構面検出
６月20日　第９調査区表土削り
６月22日　第６調査区完掘
６月23日　第９調査区グリッド杭打ち
６月24日　第２調査区遺構断面実測
６月27日　第８調査区完掘
７月５日　第９調査区第１遺構面検出
７月７日　第２調査区完掘
７月18日　第９調査区第１遺構面遺物取上げ
７月28日　第９調査区第１遺構面完掘
８月３日　第９調査区第２遺構面検出
８月24日　第９調査区第２遺構面遺物取上げ
８月25日　第９調査区完掘
８月26日　第９調査区埋め戻し
９月２日　第10調査区グリッド杭打ち
９月４日　第10調査区掘り下げ開始
９月５日　第12調査区重機による試掘トレンチ
９月12日　第10調査区土器列（SD1044）検出
　　写真撮影
９月29日　台風26号により調査区水没
９月30日　排水作業
10月４日　復旧作業開始
10月７日　第10調査区土器列遺物取上げ
10月12日　第10調査区Ｅ～Ｆ－71グリッド
　　第１遺構面完掘写真撮影
10月17日　第10調査区南端土層検出
10月19日　第10調査区Ｅ～Ｆ－72～73グリッド第１遺構面検出
10月31日　第10調査区Ｅ～Ｆ－71グリッド掘り下げ
11月７日　第10調査区Ｅ～Ｆ－72～73グリッド遺構実測
11月10日　第10調査区Ｅ～Ｆ－72～73グリッド完掘、写真撮影
11月16日　第10調査区Ｅ～Ｆ－71～73グリッド第２遺構面検出写真撮影
12月５日　第10調査区第２遺構面遺物取上げ
12月６日　第10調査区Ｅ～Ｆ－71～73グリッド第２遺構面完掘写真撮影
12月７日　Ｅ～Ｆ－74～85グリッド精査開始
12月16日　第10～第12調査区完掘
12月22日　第９～第12調査区完掘写真撮影
12月27日　第９～第12調査区発掘終了

平成７年度

４月11日　第13調査区重機による表土掘削開始
４月17日　第13調査区人力によるトレンチ
４月26日　第13調査区重機掘削再開
５月６日　第13調査区第１分割人力による掘り下げ開始
６月12日　第13調査区第２分割遺構掘り下げ開始
６月29日　第13調査区第３分割遺構掘り下げ開始
６月30日　確認のための深堀、第13調査区完掘
11月６日　第７調査区掘り下げ開始
11月22日　第７調査区第１遺構面検出
12月２日　第７調査区第２遺構面検出
12月11日　第７調査区完掘

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

別名四国三郎と呼ばれる四国最大の河川、吉野川は水源を高知県瓶ケ森山南方に発し、四国山地西部から中央構造線に沿って東流し紀伊水道に注いでおり、総延長194km，流域面積3,750km²に及ぶ。その吉野川流域に楔形に細長く広がる沖積平野が徳島平野であり、下流域はかつての旧河道が網目状に広がり、後背湿地と自然堤防を形成しているが、本遺跡はその吉野川下流南岸の沖積平野及び丘陵地に位置する。（第１図，巻頭図版１）

調査区は、北端の国道192号線交差点南地点から途中渡内（わたうち）川を挟んで南端の前山地点までの南北1,600m に細長く延びるものである。そのため北部と南部とでは地形的にかなりの相違が認められ、北側の平野部には吉野川の旧河道である飯尾（いのお）川及び渡内川の蛇行により発達した自然堤防と後背湿地が広がる一方、南端の前山地域では四国山地から延びる丘陵地帯となっている。前山は四国山地北東端に位置し、標高は平均200m 程度でしかも稜線から山麓まで平均6,700m と、低山性で浅く東西方向に広がるもので、北側の山麓は緩傾斜帯が延びて低地に移行している。

調査区は地質的には、中央構造線の南側に位置し、地質構造上は西南日本外帯に属しており、平野部は吉野川によって作られた沖積層から成り、山地は三波川変成帯に属し緑色片岩層や緑色片岩と泥質片岩の互層から成り立っている。三波川結晶片岩層は中・古生代の海底に堆積した塩基性凝灰岩及び砕屑岩が源岩となっていると考えられている。

2　歴史的環境

鮎喰川が吉野川に合流する地点にあたる徳島市国府町から名西郡石井町東部は、川を挟んで東の眉山と西の気延山に自然区画された小さな平野部を形成し、古くから阿波国の中心地として隆盛した遺跡密集地帯である。調査区はその地域の西端に位置する。ここでは主に吉野川南岸から鮎喰川西岸の調査区周辺における遺跡を時代ごとに概観する。（第４図）

縄文時代

縄文海進時のピークにあたる6,000年前には吉野川河口部の汀線は、現地標高の５m 程の内陸部まで入り込んでいた推定され、鮎喰川も紀伊水道に直接注ぎ込み，河口部に三角州性扇状地を形成していたと考えられる。吉野川の旧河道が現在の江川，飯尾川にあたり石井町は大部分が低湿地であったと考えられるが、近年の発掘により、鮎喰川下流左岸の沖積地に位置する矢野遺跡から、縄文時代後期前葉の中津式段階を中心とした大量の土器及び竪穴式住居跡等が検出されている。同時に福田ＫⅡ式段階の水銀朱を彩色した土器及び精製用の石杵，石臼等や、土製仮面が確認されたことも注目される。本調査区東側の石井城ノ内遺跡石井曽我団地地点では、後期及び晩期の遺物包含層を確認し、また中期の玦状耳飾も出土している。

弥生時代

寒冷化による海面の低下にしたがい、吉野川が吐き出す土砂の堆積によって河口付近には三角州が発達し、石井でも水田経営が始まり低い段丘や自然堤防上に集落が発達するようになる。本県最大級の集落遺跡である矢野遺跡は気延山と鮎喰川左岸の間の沖積地に位置し、東西１㎞，南北２㎞の規模を有し、鮎喰川対岸の眉山北麓及び西側にひしめく庄遺跡，南庄遺跡，名東遺跡，鮎喰遺跡とともに遺跡密集地帯を形成している。中期から後期の住居址、朱の付着した土器及び精製に使用した石杵，石臼に加え、とりわけ銅鐸埋納坑からは突線鈕式袈裟襷紋銅鐸が出土している。銅鐸は周辺の名東遺跡，安都真（あづま）遺跡，源田遺跡からも出土し、まさに全国有数の集中地帯である。さらに矢野遺跡からは中期末から後期初頭の鍛冶工房が確認され、古墳時代初頭の鍛冶遺構からは砂鉄を収めた細頸壺を検出している。矢野遺跡の南に続く延命遺跡では微高地縁辺部の低湿地を利用した水田跡を確認している。

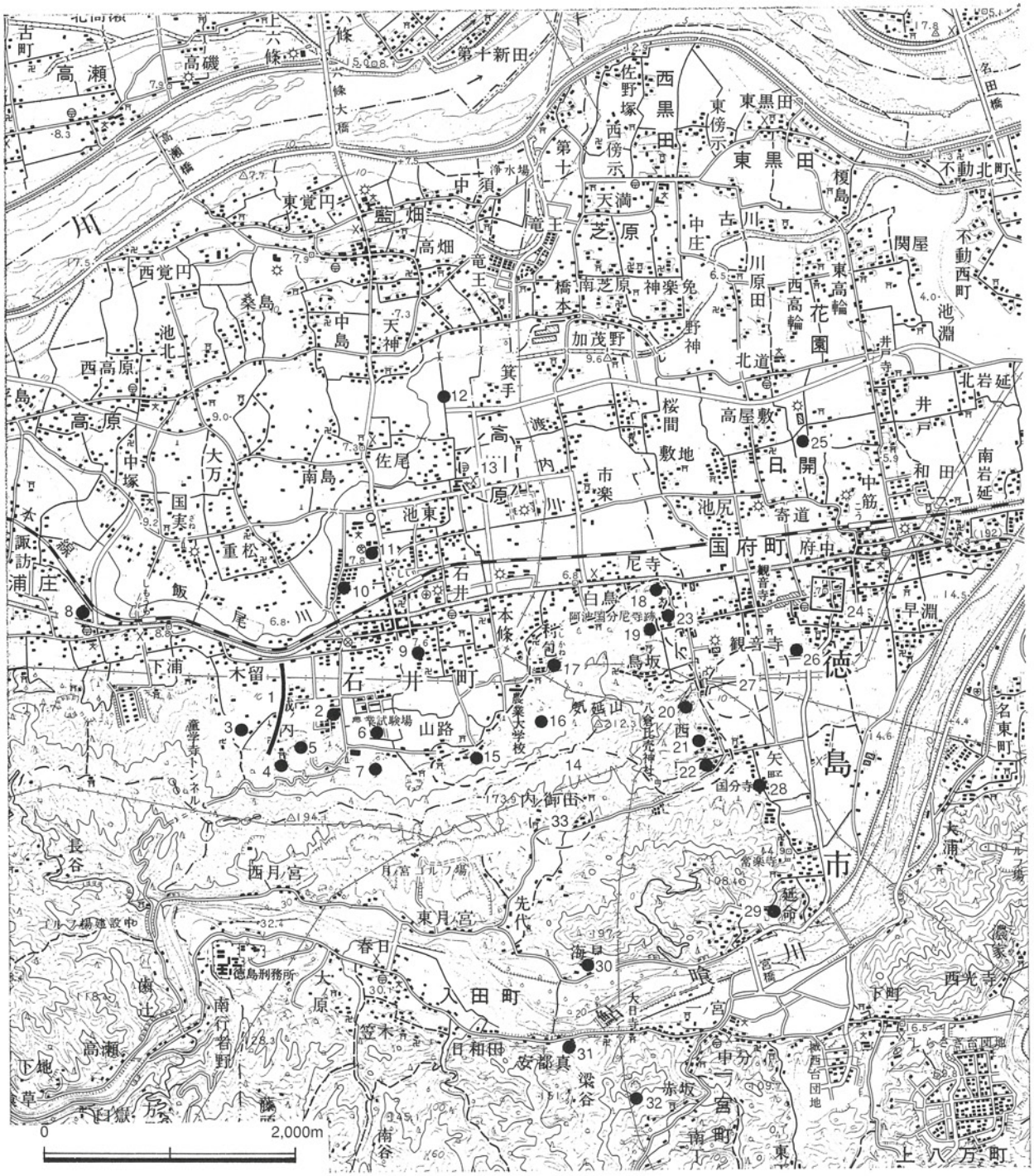
一方、気延山西側に目を転じると、高川原遺跡は渡内川と飯尾川の微高地上に立地し、中期から後期の竪穴住居址の他に、極めて精巧に作られた銅鐸形土製品が出土したことは特筆すべきである。さらに西方の清成遺跡は本遺跡同様渡内川南岸の自然堤防上の微高地に立地し、後期から古墳時代初頭の竪穴式住居址に加え、等間隔に土器の埋葬された溝は、庄遺跡，板野町の黒谷川郡頭遺跡等にみられる方形周溝墓と理解できる。石井城ノ内遺跡石井曽我団地地点は前期の竪穴住居及び土坑が確認される一方、終末期の袋状土坑と山陰系土器のセット関係が注目される。尚、本遺跡西側にあたる石井町西部から鴨島町では発掘例に乏しく、現在まで遺跡はほとんど確認されていない。

古墳時代

気延山の東から北斜面では約100基の古墳が把握されており、徳島最大の密集地帯でしかも本県では少ない前方後円墳の集中する地域である。この地域の優位性は次代以降につながっている。前期には奥谷古墳群，宮谷古墳，山ノ神古墳群，内谷古墳等がある。奥谷１号墳は４世紀後半の徳島唯一の盛り土による前方後方墳であり、４世紀初頭の宮谷古墳は前方後円墳で三角縁神獣鏡の出土が注目される。また気延山西麓の清成古墳は清成遺跡南尾根に位置する竪穴式石室を持つものである。さらに、調査区東隣には曽我氏神社１号墳及び２号墳があり、南側の神山町との境の長谷古墳からは鉄製品等の豊富な副葬品を出土している。日枝田神社古墳群の中で１号墳は内谷古墳と呼ばれ県下で数少ない石製品の副葬例として貴重である。一時５世紀後半から６世紀前半に激減する中で、尼寺１号墳はこの時期の貴重な円墳である。６世紀後半以後の後期に入ると再び、矢野古墳，ひびき岩古墳群，利包古墳，高良古墳等重要な古墳が並ぶ。ひびき岩古墳群はほとんどが小円墳で箱式石棺を内部主体とするものが多いなかで、16号墳は前方後円墳である。

内ノ御田瓦窯跡では６世紀末から７世紀前半の須恵器を生産したことが確認されており、隣接して製作工人との関連が想定される横穴式石室が開口しており、周辺には同形態の海見古墳がある。

矢野遺跡北に続く敷地遺跡は、本年度の調査で５世紀末の竪穴住居址及び６世紀末から７世紀前半の竪穴住居と掘立柱建物址が検出され、本時期では初めて集落跡の存在が明かにされた。



1 石井城ノ内遺跡　石井・神山線地区
2 石井城ノ内遺跡　石井曽我団地地点
3 石井廃寺
4 曽我氏神社古墳群
5 前山公園遺跡
6 清成遺跡
7 清成古墳
8 浦庄遺跡
9 井ノ元遺跡
10 石井遺跡　教職員住宅地点
11 石井遺跡　名西高校地点
12 箕の手遺跡
13 高川原遺跡
14 気延山古墳群
15 阿波国造墓碑
16 清成古墳
17 山ノ神古墳群
18 内谷古墳
19 ひびき岩古墳群
20 奥谷２号墳
21 奥谷１号墳
22 宮谷古墳
23 阿波国分尼寺跡
24 阿波国府推定地
25 日開遺跡
26 高畑遺跡
27 矢野遺跡
28 阿波国分寺跡
29 源田遺跡
30 海見古墳
31 安都真遺跡
32 一宮城跡
33 内ノ御田窯跡群

第４図　周辺の遺跡分布図

古　代

鮎喰川左岸に阿波国府が誕生し、古代の政治，経済の中心地となった。国庁跡については国府町府中付近に所在する大御和神社周辺が想定されているが、まだ所在を判定するまでには至っていない。近隣の阿波国分尼寺は方１町半の寺域を有する全国有数の規模であり、阿波国分寺跡は方２町と推定できるが詳細な規模，伽藍配置等不明である。調査区西側の石井廃寺は法起寺式伽藍配置であり７世紀後半から８世紀前半の創建が推定され、軒丸瓦，軒平瓦が出土しているが、下浦廃寺，国分寺，国分尼寺からも同笵の瓦が出土しており、内ノ御田窯跡群内の入田瓦窯跡等が供給地と想定できる。

近年、国府推定地内の観音寺遺跡から、７世紀第２四半期から末の論語や和歌、税に関する文字等を記した日本最古級の木簡及び建築部材を出土したことは非常に貴重である。

石井町では大化の改新以後それまで支配していた粟凡直と長直の国造を統轄して息長田別命の子孫が国司として治めるようになり、古代以後の条理制の遺構が現在の徳島市蔵本町から鮎喰川を越えて国府町，名西郡石井町さらに麻植郡鴨島町西飯尾まで及ぶ。平城京出土の木簡のうち石井町に関係する次のものがある。

…名方郡石井郷川□里…

名方郡は「和名類聚抄」郡里駅名考證によると、現在の名東郡と名西郡の両郡の総称である。また寛平８年（896年）９月５日付の延喜民部式頭に名西郡（名方西郡），名東郡（名方東郡）とあることから、名西郡と称することになったことを示している。石井町石井字石井清成所在の中王子神社の磚製の墓碑に官姓名を記している。

阿波国造　名方郡大領□(7)　粟凡直弟臣墓

養老七年歳次発亥年立

養老７年（723年）の墓誌であり、粟凡直氏は吉野川下流域全体（律令制下の阿波，板野，名方３郡）にその勢力を伸ばしていた地方豪族で、弟臣はその一族である。

中　世

既出の遺跡では庄，南庄，名東遺跡が該当するが、名東遺跡からは平安時代末期から鎌倉時代初期頃と推定される大規模な建物跡や掘状の遺構が検出されており、平安期に成立期限を持つ安楽寿院領名東荘に伴う倉庫などの施設の可能性が指摘されている。また鎌倉から室町時代の集落が展開したことも明らかになっている。

鎌倉時代初期頃には、現在の徳島市街地中心部が春日神社領富田荘に属していた。国府領に準じる別納保であった所領が1204年に在地領主の寄進によって春日神社領として立券されたものである。したがって平安末期には在地勢力による吉野川の三角州地帯の開発が進み、新たな中世所領の形成が推進されていたことが窺える。中島田遺跡と南島田遺跡は吉野川と鮎喰川の合流点近くにあり標高3.0～3.5mの沖積低地に立地している。鮎喰川流路の変遷等の自然条件変化により次第に高燥な土地になるにつれて、農民が出作して集落を形成したと推測される。中島田遺跡からは13世紀後半～14世紀前半を中心とした遺構や土器，呪符木簡等が出土している。

近　世

1585年豊臣秀吉の四国平定により、蜂須賀家正は阿波国17万５千７百余国を与えられ、初代藩主として領国経営に着手し当初は一宮城を居城としたが、すぐに現在の徳島城を築城した。藩政の確立に伴い村方の支配も整備されていき、石井は名西郡に属する農村地帯であった。藩政末期の総石高は14,167石であり阿波藩の4.6％に当たる。そのうち城ノ内村は602石であるが、水田は溜め池掛かりか渡内川に沿った低湿田つまり生産性の低いものであったし、陸田も渡内川，飯尾川の沖積によるもののため土質は重く耕土も浅いため土地生産力は低く、また地下水位が低いため干害が多かった。このため畑作中心を余儀なくされたが、その中で藍作は18世紀以降全国的な特産地となった阿波の中でも吉野川下流域特に石井はその中心地帯であった。藍作隆盛の要因として、河川係数の高い吉野川が氾濫の頻発により肥沃な土壌を提供し連作を可能にしたこと等もあげられる。

【参考文献】

天羽　利夫・岡山真知子　1985　『徳島の遺跡散歩』

阿波学会・徳島県立博物館　1986『総合学術調査報告　石井町』

菅原　康夫　1988『日本の古代遺跡　37　徳島』

石井町史編纂会　1991『石井町史上巻』

大矢　雅彦　1993『河川地理学』

坂口　　豊　1995『日本の川＜新版　日本の自然３＞』

中村　和郎　1995『日本の自然地域偏６　中国四国』

寺戸　恒夫　1995『徳島の地理』

東　　潮他　1998『川と人間－吉野川流域史－』

福家　清司編　1989『県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島田遺跡　南島田遺跡』徳島県教育委員会

徳島県教育委員会　1994『埋蔵文化財資料展図録　掘ったでよ阿波』

徳島県教育委員会　1995『埋蔵文化財資料展図録　掘ったでよ阿波』

石尾　和仁編　1996『中島田遺跡Ⅱ－都市計画道路常三島中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（財）徳島県埋蔵文化財センター

徳島市教育委員会　1997『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要７』

徳島市教育委員会　1998『第13回文化財調査報告会要旨』

徳島市教育委員会　1998『第18回埋蔵文化財資料展図録　阿波を掘る－最近の発掘調査と発掘調査20年の歩み－』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1993『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 4』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1994『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 5』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1995『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 6』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1997『1997発掘とくしま　平成８年度埋蔵文化財速報展図録』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1997『平成８年度第１回調査成果報告会資料』

Ⅲ　調査成果

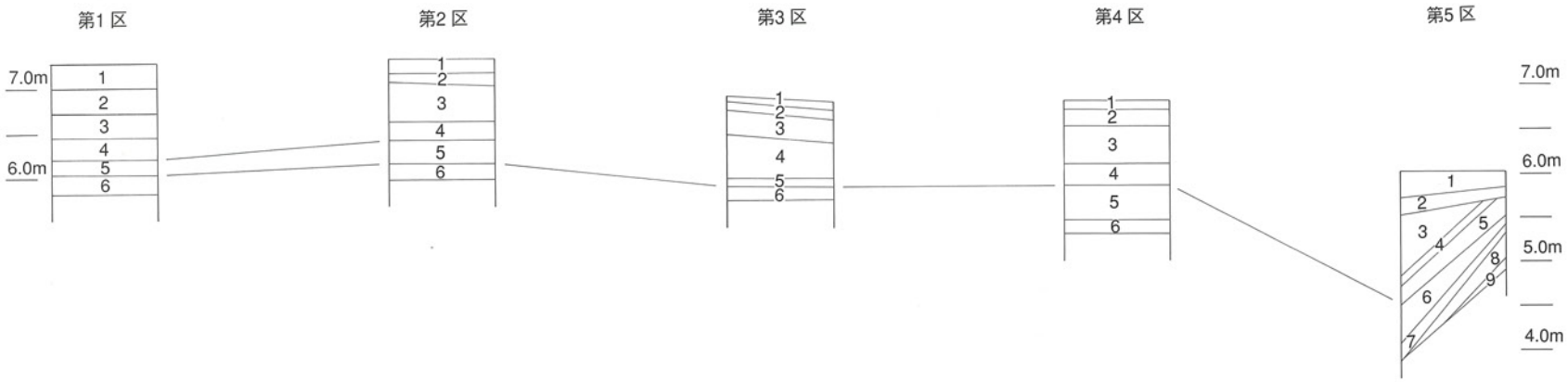
1　基本層序

本調査区は吉野川下流域南岸に広がる沖積平野から四国山地北端の丘陵地まで細長く広がり、東西幅約10～20m，南北延長は約1,600mである。そのうち第１～12調査区は、吉野川支流の渡内川を挟み、自然堤防と後背湿地が繰返し、さらにその中に旧河道が複雑に入り組んでいる。第５図は、第１調査区から第10調査区までそれぞれの調査区の東側壁から基本土層図を作成し、それを柱状模式化し、各層位の対応関係を示したものである。

第１～４調査区は渡内川北岸の自然堤防上に展開する微高地である。第１，２調査区と第３，４調査区の間には用水路が流れ、現在は共に水田や畑地として利用されている。現地標高は第１，２調査区で7.3m、第３，４調査区で6.85mを測る。第１，２調査区では、第１層が水田の床土層にあたり、鉄分を含む粘質土である。第２層，第３層は無遺物層であり、第４層には中世の土器片が少量含まれている。第５層は黄褐色粘質土の土器を含む遺物包含層であり、第５層上面（標高6.4～6.5m）を第１遺構面とした。さらに第６層の褐色粘質土中には多量の古代の土器類が含まれ、上面（標高6.1m）を第２遺構面とした。以上の土層の堆積には傾斜がほとんど認められず、平坦なものである。南側に続く第３，４調査区は、渡内川北岸に達するまでの南北延長125mを測る地区である。第４調査区の第１層は耕作土、第２層は水田の床土にあたり、第３層において少量の中世遺物を検出し、第４層は古代の遺物包含層である。第５層オリーブ褐色粘質土中には古代の土器が多量に含まれている。この上面（標高5.85m）を第１遺構面とした。第３調査区の第６層オリーブ褐色粘性砂質土もこの遺構面に対応する。したがって第３，４調査区においては、遺構面１枚のみの検出であり、これらは、第１，２調査区の第２遺構面に対応するものである。第３，４調査区においては、土層堆積に傾斜はほとんど認められない。なお第４調査区においては第５層下に第６層オリーブ褐色粘性砂質土を検出したが、遺構・遺物は存在しない。

渡内川南岸の第５調査区は渡内川の旧河道にあたり、南から北に向かって傾斜している。第１層の耕作土と第２層の灰オリーブ色粘性砂質土よりも下、つまり第３層以下（標高5.7～5.5m）が河川による堆積部分にあたる。第６層の灰黄色粘性砂質土には、古代の土器・須恵器と、弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物が混在しており、この上面（標高4.6～5.5m）を第１遺構面とした。第８層暗灰黄色粘性砂質土中には弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物が含まれており、この上面（標高4.0～5.3m）を第２遺構面とした。さらに第９層暗オリーブ褐色粘性砂質土中にも弥生時代終末期の遺物が含まれているが、明確な遺構面を確認できなかった。

第６調査区～第10調査区は渡内川南岸の自然堤防上に広がる微高地にあたる。第６調査区は第１層が灰オリーブ色シルト層の耕作土である。直下の第２層黄褐色シルト層は、古墳時代初頭の土器が大量に含まれているが、上部が削平を受けている。この第２層上面（標高7.80m）を第１遺構面とした。第３層のにぶい黄色粘質土中にも少量の土器と、遺構を検出している。この上面



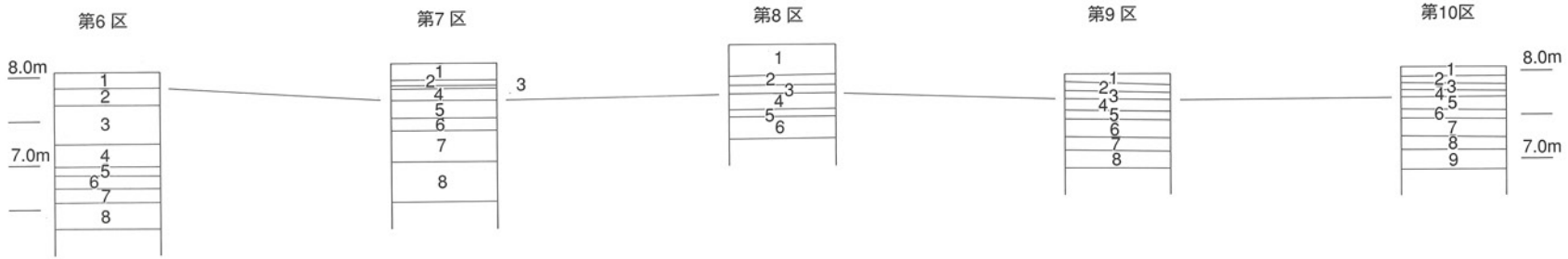
1．灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土（水田床土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/6　粘質土
3．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土
4．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土　粘性がやや強い
5．黄褐色　2.5Y5/3　粘質土
6．褐色　10YR4/4　粘質土

1．オリーブ色　5Y5/4　砂質土
2．オリーブ褐色　2.5Y4/6　砂質土
3．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
4．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土　粘性がやや強い
5．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土
6．褐色　10YR4/4　粘質土

1．オリーブ黒色　5Y3/2　砂質土
2．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土
3．黄褐色　2.5Y5/4　粘性砂質土
4．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
5．にぶい黄褐色　10YR5/3　粘性砂質土
6．オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘性砂質土

1．黄褐色　2.5Y5/6　粘質土（耕作土）
2．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（水田床土）
3．黄褐色　2.5Y5/3　粘質土
4．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
5．オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘質土
6．オリーブ褐色　2.5Y4/6　粘質土

1．耕作土
2．灰オリーブ色　5Y5/2　粘性砂質土
3．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
4．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土（粘性やや強い）
5．灰オリーブ色　5Y5/3　粘性砂質土
6．灰黄色　2.5Y6/2　粘性砂質土
7．暗オリーブ色　5Y4/3　粘性砂質土
8．暗灰黄色　10YR4/2　砂質土
9．暗オリーブ褐色　2.5Y2/3　粘性砂質土



1．灰オリーブ色　5Y4/2　シルト
2．黄褐色　2.5Y5/3　シルト
3．にぶい黄色　2.5Y6/4　粘質土
4．黄褐色　2.5Y5/4　粘性砂質土
5．にぶい黄色　2.5Y6/3　粘性砂質土
6．オリーブ色　5Y5/4　粘性砂質土
7．オリーブ色　5Y5/6　粘質土
8．オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土

1．表土
2．灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土
3．オリーブ色　5Y5/4　粘質土
4．灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土
5．暗オリーブ色　5Y4/4　粘質土
6．灰色　5Y5/1　粘質土
7．灰オリーブ色　5Y5/2　粘質土
8．オリーブ黄色　5Y5/2　粘質土

1．表土　耕作土
2．オリーブ色　5Y5/4シルト
3．灰オリーブ色　5Y5/3シルト
4．灰オリーブ色　5Y5/2シルト
5．黄灰色　2.5Y5/1粘質土
6．オリーブ色　5Y5/6粘質土

1．オリーブ色　5Y5/4　砂質土
2．灰オリーブ色　5Y5/3　粘性砂質土
3．灰褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
4．灰オリーブ色　5Y4/2　粘質土
5．黄褐色　2.5Y5/3　粘質土
6．灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土
7．灰オリーブ色　5Y5/2　粘質土
8．灰オリーブ色　5Y6/2　粘質土

1．耕作土
2．オリーブ色　5Y5/4　砂質土
3．灰オリーブ色　5Y5/3　粘性砂質土
4．灰褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
5．灰オリーブ色　5Y4/2　粘質土
6．黄褐色　2.5Y5/3　粘質土
7．灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土
8．灰オリーブ色　5Y5/2　粘質土
9．灰オリーブ色　5Y6/2　粘質土

第5図　基本土層柱状図

（標高7.65m）を第２遺構面としたが、先の第１遺構面よりもそれほど遡る時期のものではない。第４，５層はマンガン・炭化物を含む粘性砂質土である。第６，７層はマンガン・鉄分を含む粘性砂質土及び粘質土、第８層はマンガンを含む粘質土であるが、いずれも遺構・遺物を含まない自然堆積層である。第７調査区は第５層の暗オリーブ色粘質土中に古墳時代初頭の遺物を含んでおり、この上面（標高7.7m）を第１遺構面とした。また第６層の灰色粘質土中には多量の古墳時代初頭の土器に加え、弥生時代後期の土器も含まれている。この上面（標高7.6m）を第２遺構面とした。なお、第７調査区南部第２遺構面の土坑SK2033には層位等不明ではあるが、縄文時代晩期の遺物も一部含まれている。第８調査区は第４層の灰オリーブ色シルト上面（標高7.7m）を第１遺構面とした。第６層のオリーブ色粘質土上面（標高7.52m）を第２遺構面とした。この層には弥生時代終末期及び古墳時代初頭の遺物が含まれている。第９調査区は第４層の灰オリーブ色粘質土上面（標高7.75m）を第１遺構面とした。第６層には弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物を含んでおり、この上面（標高7.5m）を第２遺構面とした。第10調査区については、第３，４層が須恵器等を少量含む古墳時代の包含層である。第５層は古墳時代初頭の土器を多量に含む遺物包含層であり、この上面（標高7.7m）を第１遺構面とした。第７層灰オリーブ色粘質土中には弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が含まれており、この上面（標高7.4m）を第２遺構面とした。第６～10調査区においてはいずれも遺構面２枚を検出したが、古墳時代初頭の第１遺構面とそれほど遡らない第２遺構面という構造は共通する。第７調査区の第２遺構面においては、他よりやや遡る弥生時代後期の土器が混じることからも、第２遺構面の取扱いにはやや検討の余地を残すが、少なくとも第６～10調査区のそれぞれの第１遺構面が同一の遺構面として対応すると考えてよい。

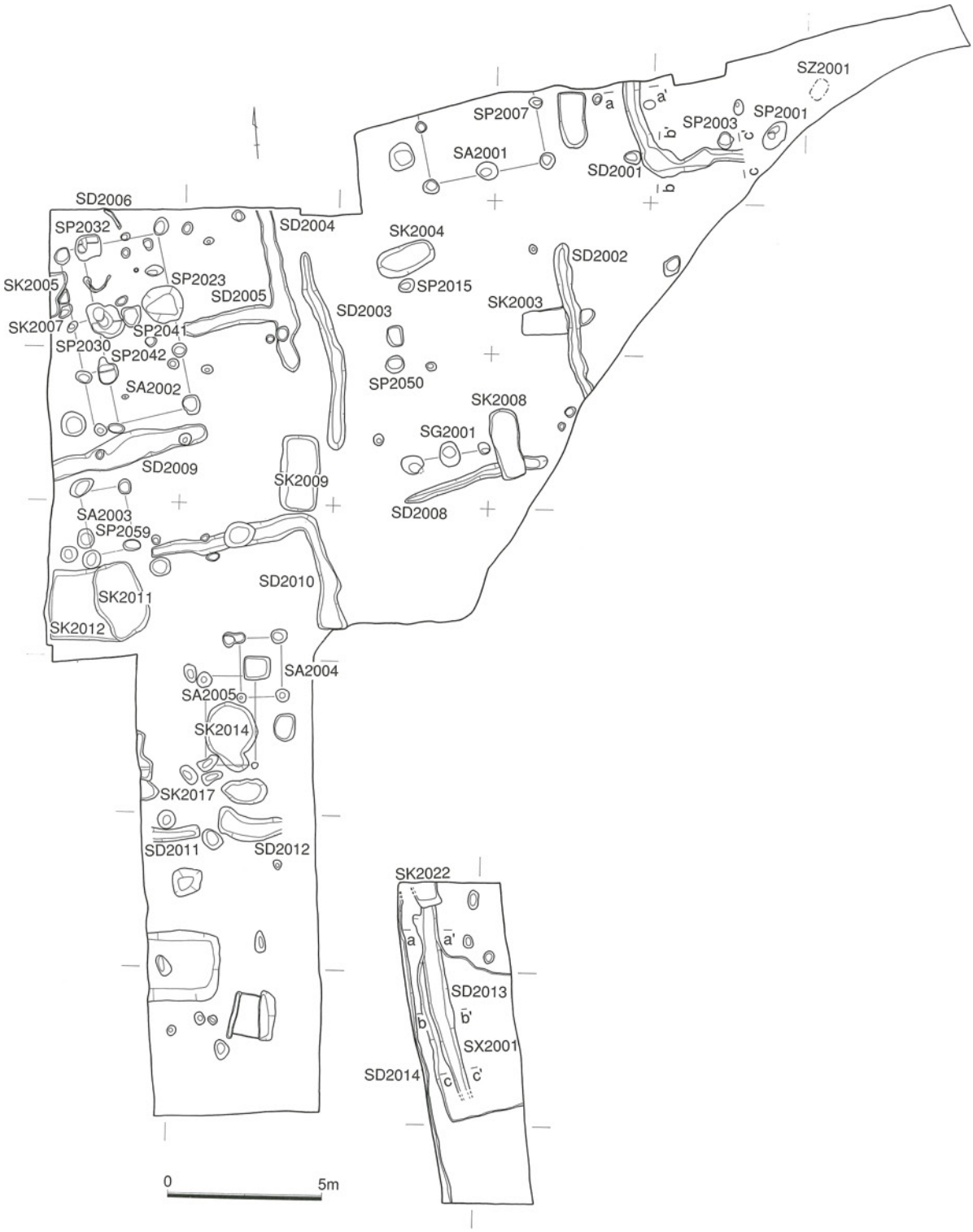
第11，12調査区は調査前は水田及び畑地であったが、旧河道を埋立てたものであり、第11調査区の北部は撹乱層が広がり、また第11調査区の南部と第12調査区では湧水が激しく、遺構・遺物とも全く確認できなかった。

以上のことより、調査区はその地形、遺構の連続性から、第１～４調査区，第５調査区，第６～10調査区の３つに区分して考えることができ、さらに丘陵地帯の第13調査区を含め、調査区を４分割して以下に説明していく。

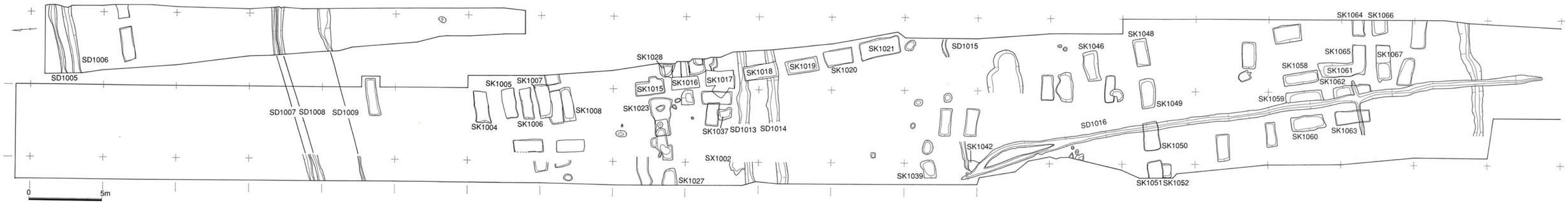
2　第１～４調査区

第１～４調査区は現在の渡内川北岸自然堤防上に形成された微高地である。第１，２調査区では９世紀～10世紀前半の遺物を含む第２遺構面と、明確に時期は確定できないが、それより若干新しい時期に相当する第１遺構面の２枚を検出した。一方、第３，４調査区では遺構面１枚のみの検出であるが、これは第１，２調査区の第２遺構面に相当する時期のものである。遺構の内訳は掘立柱建物５棟，柵列１基，溝28条，土坑91基，不明遺構３基，土器溜り１基である。以下では検出遺構，出土遺物のうち資料化可能なものを取り上げ説明する。尚、遺物のうち供膳具についてはⅣ-２章で器種を詳細に分類しており参照されたい。

第６図　第１，２調査区第１遺構面遺構配置図



第７図　第１，２調査区第２遺構面遺構配置図



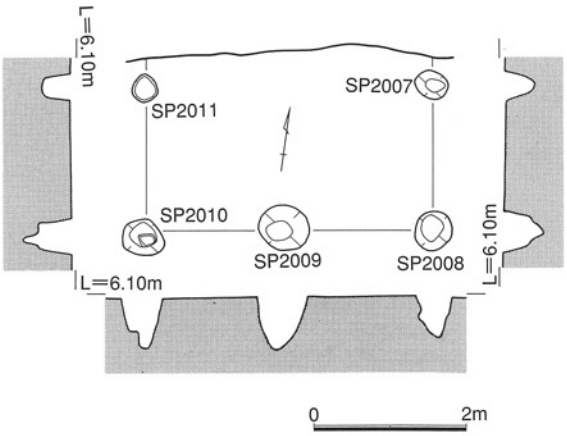
第８図　第３，４調査区第１遺構面遺構配置図

(1) 奈良・平安時代の遺構と遺物

掘立柱建物

掘立柱建物 SA2001（第９図）

第１調査区北端において検出した建物であり、その一部が調査区外にかかる。５基の柱穴から構成され、規模は桁行２間（3.73m）×梁間１間（1.90m）以上、床面積7.09㎡以上を測る。柱間は桁間1.73～2.00mを測るものであり、棟方向はN－82°－Eである。柱穴は平面不整円形を呈し、直径0.35～0.64m，深さ0.37～0.70mを測り、埋土は主に暗灰黄色粘質土である。柱穴SP2007，SP2009，SP2011内部からは土師器，黒色土器Ａ類等が出土している。

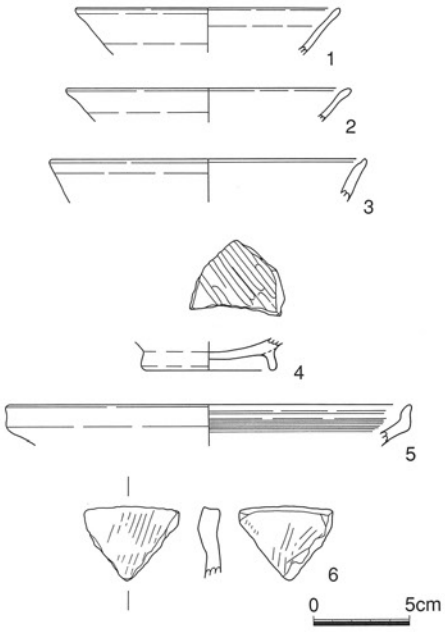


第９図　SA2001実測図

出土遺物（第10図）

１はSP2009、２～４，６はSP2011、５はSP2007出土の遺物である。

１～３は土師器杯である。いずれも内外面とも回転ヨコナデ調整を施す。３は口縁端部内側に１条の沈線を廻らせ、内外面とも赤色塗彩されている。

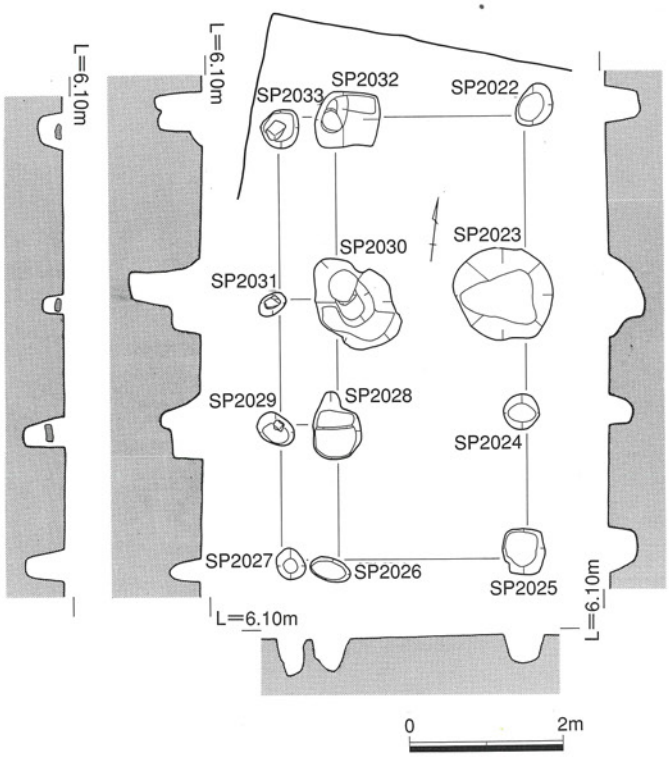


第10図　SA2001各柱穴出土遺物実測図

４は黒色土器Ａ類椀である。細く高めの高台を貼付け、内面は綿密なヘラミガキ、外面はヨコナデ、底部は回転ヘラ切りのちナデ調整を施す。結晶片岩を含むものである。

５は土師器甕である。口縁端部を屈曲させ上方に摘み上げ、内面はヨコハケ、外面はヨコナデ調整を施す。

６は土師器竈である。内外面ともハケ調整である。

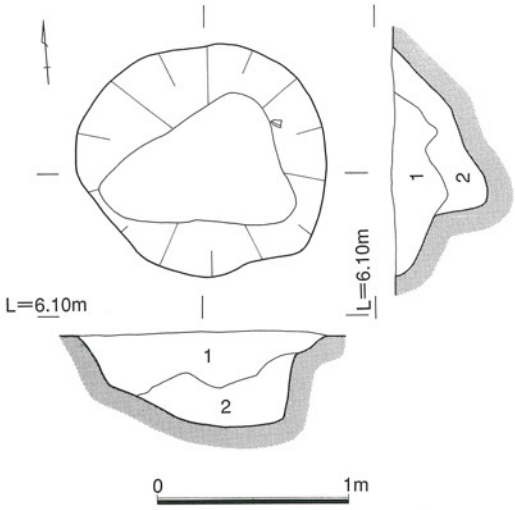


第11図　SA2002実測図

掘立柱建物 SA2002

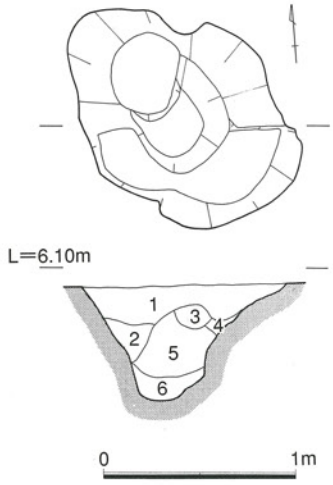
（第11図）

第１調査区北西隅において検出した12基の柱穴より構成される掘立柱建物であり、北側は調査区外に延伸する可能性もある。規模は桁行３間（5.70m）×梁間１間（2.45m）を測る南北棟であり、西側に半間分の廂を伴う。柱間は桁行1.6～2.35mを測り、北側の桁行１間幅が若干長い。床面積は18.24㎡を測るものであり、棟方向はN－７°－Wである。構成するそれぞれの柱穴は、直径0.38～1.29m，深さ0.26～0.87mを測る。柱穴SP2029，SP2031，SP2033内には根石を伴う。（図版２－１，２）以下に３基の柱穴を図示する。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　砂質土
　炭化物・マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土
　炭化物・マンガンを含む

第12図　SP2023実測図



1．暗灰黄色　2.5Y 4/2　粘質土
　炭化物・マンガンを含む
2．褐色　10YR 4/4　粘質土
　炭化物・マンガンを含む
3．暗灰黄色　2.5Y 5/2　粘質土
　炭化物・マンガンを含む
4．にぶい黄褐色　10Y 4/3　粘質土
　マンガンを含む
5．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘質土
　炭化物・マンガンを含む
6．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　粘質土
　炭化物・マンガンを含む

第13図　SP2030実測図

柱穴 SP2023（第12図）

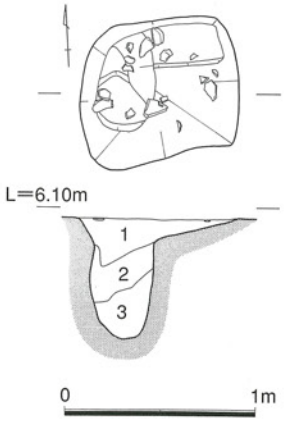
長軸1.52m，短軸1.20m，深さ0.48mを測り、平面不整円形を呈する。埋土はオリーブ褐色砂質土と黄褐色粘質土の２層からなり、共に炭化物，マンガンを含有しており、内部より土師器類を出土している。

柱穴 SP2030（第13図）

長軸1.38m，短軸1.01m，深さ0.58mを測り、平面不整楕円形を呈する。覆土は６層に分層できるが、土層堆積状況及び遺物の組成からやや年代幅のあるものと想定できよう。覆土中から土師器，緑釉陶器等が出土している。

柱穴 SP2032（第14図）

長軸0.84m，短軸0.73m，深さ0.62mを測り、平面隅丸方形を呈する。覆土は、炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色系の砂質土であり、３層に分層できる。土師器が出土している。



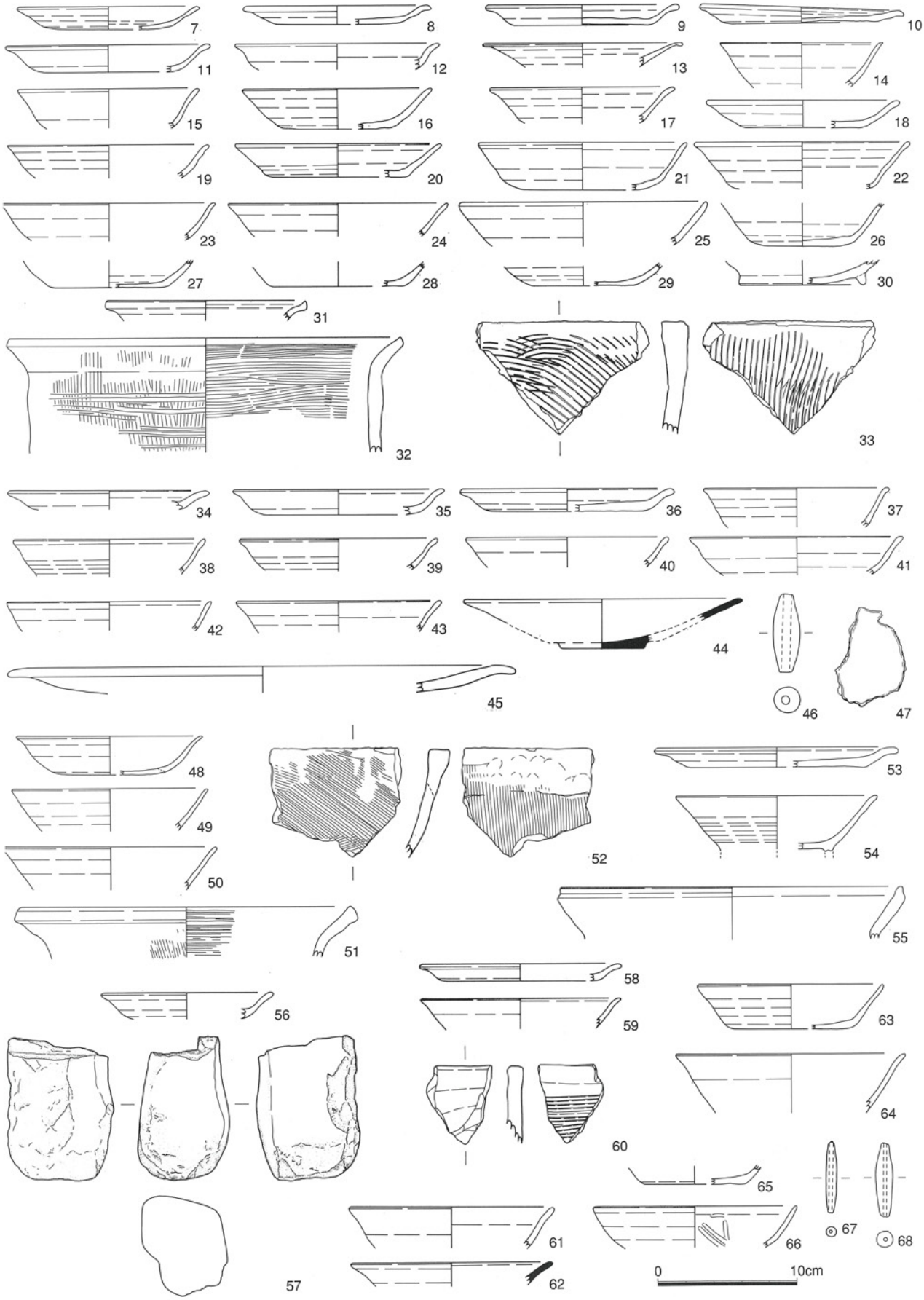
1．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　砂質土
　炭化物・マンガンを含む
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　砂質土
　炭化物・マンガンを含む
3．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土
　炭化物・マンガンを含む

第14図　SP2032実測図

出土遺物（第15図）

７～33は柱穴SP2032出土遺物である。

７～13，18は土師器皿である。皿Ａ３類の７～９、皿Ａ４類の10、皿Ａ５類の11、皿A11類の13がある。法量から分類すると口



第15図　SA2002各柱穴出土遺物実測図

径は12.7～13.6cmの７～９，18と14.0～14.6cmの10～13の２種がある。７～９，11～13は内外面とも回転ヨコナデ調整であり、底部は回転ヘラ切りのちナデ調整を施しており、９は特に綿密なナデでありヘラ切り離しの痕跡を殆ど留めない。10は内面に回転ナデのち一部ハケ調整を施し、底部回転糸切り離し痕を明瞭に残すものである。

14～17，19～30は土師器杯である。杯Ａ３類の21，22、杯Ａ４類の20、杯Ａ７類の16がある。法量的には、口径11.6cmの14、12.8cm～13.1cmの15，17、13.6～14.3cmの16，19、14.8～15.8cmの20～24、17.8cmの25の合計５種類がある。いずれも内外面回転ナデ調整であり、26～30は底部回転ヘラ切りのちナデ調整を施している。30は断面方形の高台を貼り付けている。16，23，30は内外面を赤色塗彩している。

31，32は土師器甕である。31は口縁端部を上方に拡張するものであり、内外面ともヨコナデ調整である。32は口縁端部を方形状に収め、内面がヨコハケ、外面がタテハケのち口縁部ヨコナデ，体部ヨコハケ調整を施している。

33は土師器竈である。両面とも強く荒いハケ調整で、端部はナデである。

34～47は柱穴 SP2030出土遺物である。

34～36は土師器皿である。皿Ａ３類35と皿Ａ４類36とがある。口径14.1cmの34と15.0～15.1cmの35，36がある。いずれも口縁部を外反させ端部を丸く仕上げるものであり、内外面とも回転ナデ調整であり、36の底部は非常に丁寧なナデを施し、回転切り離し痕を留めない。

37～43は土師器杯である。口径13.2～14.6cmの37～40，42，43と口径15.2cmの41がある。いずれも内外面とも回転ナデ調整である。形態的には、口縁端部が外反する37～41と口縁端部が直線的に伸びる42，43に分類できる。

44は京都系の緑釉陶器皿である。口径19.1cm，器高3.5cmを測り、円盤状の高台を持ち、口縁端部は僅かに外反し丸く収めている。内外面回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り離しであり、底部外面を除く全面にうすい黄緑色の釉を掛け、焼成は軟質である。

45は土師器高杯である。口縁端部を外反させ、丸く収めている。内外面ともヨコナデ調整であり、内外面に赤色塗彩を施している。

46は土師質の環状土錘である。47は金属製品である。

48～52は SP2023出土遺物である。

48～50は土師器杯である。48は杯Ａ３類に比定できる。49は口縁端部が直線的に伸びている。いずれも回転ナデ調整であり、48は底部回転ヘラ切りのちナデである。

51は土師器甕である。口縁端部を上下に拡張し、内面はヨコハケ、外面は口縁部ヨコナデ，体部タテハケ調整である。52は土師器竈である。外面はタテハケ、内面はナナメハケ調整である。

53，54は SP2033出土遺物である。53は土師器皿Ａ４類である。内外面回転ナデ調整であり、底部に丁寧なナデ調整を施し回転切り離し痕を留めない。54は土師器杯Ｂ１類である。高台の貼付け痕が認められ、内外面回転ナデ調整であり、体部外面に回転台によるナデの痕跡が顕著に観られる。

55はSP2022出土の土師器甕である。口縁端部を上方に拡張させている。

56，57はSP2029出土遺物である。56は土師器皿A５類である。口縁端部を外反させ丸く収める。57は砥石である。砂岩製で、長側面の３面に使用痕が認められる。

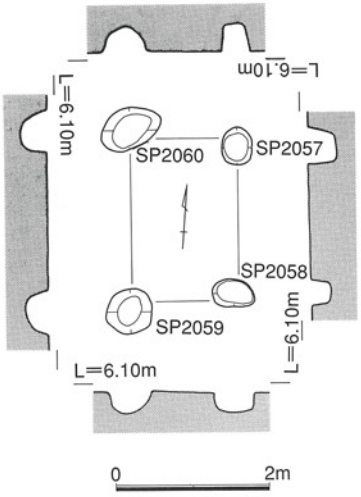
58～60はSP2028出土遺物である。58は土師器皿Ａ４類である。口縁端部を外反させ丸く収める。59は土師器杯である。口縁端部を外反させ丸く収め、内外面に赤色塗彩を施している。60は土師器竈である。外面はヨコハケ、内面はヨコナデである。

61，62はSP2025出土遺物である。61は土師器杯である。口縁端部が直線的に延び丸く収める。62は須恵器皿である。口縁端部を丸く収める。

63～68はSP2027出土遺物である。63～65は土師器杯である。63は杯A10類であり、内外面に赤色塗彩を施している。63は底部丁寧なナデ調整であり、回転切り離し痕が認められないが、65は回転切り離し痕が顕著である。66は黒色土器Ａ類椀である。67，68は土師質の環状土錘である。

掘立柱建物 SA2003（第16図）

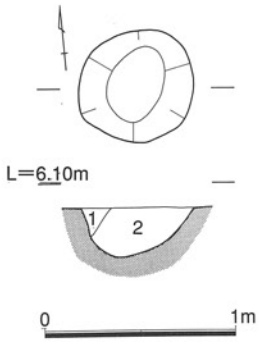
第１調査区西端に位置し、４基の柱穴から構成される掘立柱建物である。桁行１間（2.08m）×梁間１間（1.37m）、床面積2.85㎡と小規模なものであるが、調査区西側に延伸する可能性もある。棟方向はN－６°－Wである。柱穴は、直径0.49～0.80m，深さ0.25～0.37mを測る、平面不整円形のものであり、以下にそのうちの１基SP2059を図示する。



第16図　SA2003実測図

柱穴 SP2059（第17図）

長軸0.64m，短軸0.60m，深さ0.25mを測り、平面不整円形を呈する。覆土は２層に分層でき、第２層から土師器，黒色土器，須恵器を出土した。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　粘質土
　マンガンを含む
2．にぶい黄褐色　10YR 4/3　粘質土
　炭化物、マンガンを含む

第17図　SP2059実測図

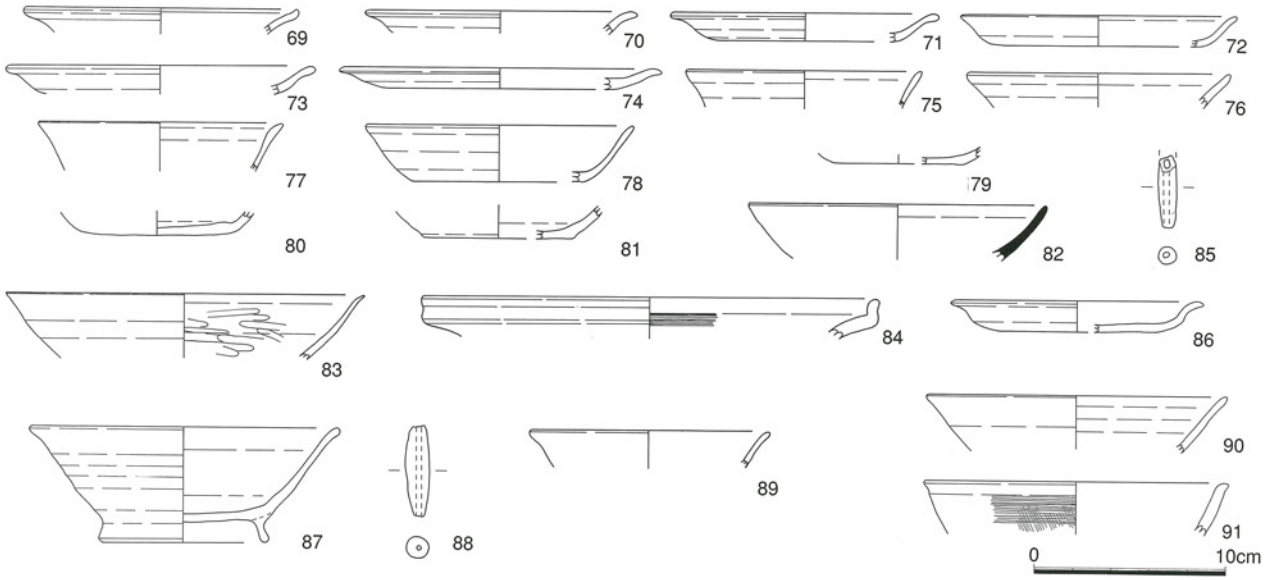
出土遺物（第18図）

69～85はSP2059出土遺物である。

69～74は土師器皿である。皿Ａ２類69、皿Ａ３類71～73、皿A10類74がある。法量からは口径13.8～14.4㎝の69～72と口径15.8～16.2㎝の73，74とに分類できる。72，74は内外面に赤色塗彩を施している。

75～81は土師器杯である。78は杯Ａ３類に比定できる。75，76は口縁端部が直線的に伸び、77は口縁端部が外反する。いずれも口径12.3～14.0㎝を測り、回転ナデ成形であり、79～81の底部は回転ヘラ切りの後、その痕跡が残る程度のナデ調整を施している。

82は須恵器杯である。口縁部を丸く収め、内外面とも回転ナ



第18図　SA2003各柱穴出土遺物実測図

デ調整である。

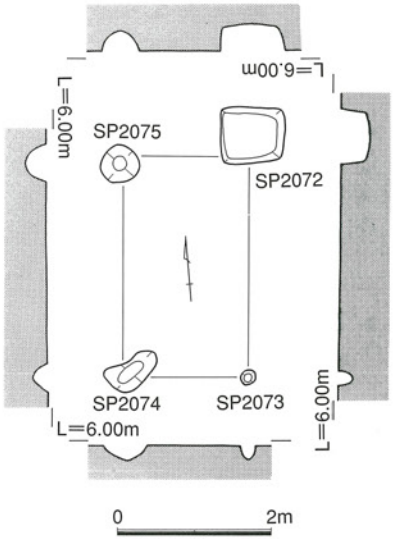
83は黒色土器Ａ類椀である。結晶片岩を含む在地のものと考えられ、内面は横方向のヘラミガキ、外面はヨコナデ調整を施している。

84は土師器甕である。口縁端部を上方に拡張させ、内面は横方向のハケ、外面はヨコナデ調整である。85は土師質の環状土錘である。

86～88はSP2060出土の遺物である。86は土師器皿Ａ３類である。口縁端部を外反させ丸く収めるもので、底部回転ヘラ切りのちナデ調整である。87は土師器杯Ｂ１類である。口縁端部は外反し端部を丸く収める。内外面とも回転ナデ調整であり、底部は回転ヘラ切り離しのち丁寧なナデを施し、外方に開く断面方形状の高台を貼付ける。88は土師質の環状土錘である。

89はSP2058出土の土師器杯である。内外面に赤色塗彩を施している。

90，91はSP2057からの出土である。90は土師器杯である。口縁端部が直線的に伸び端部を丸く収めている。91は黒色土器である。口縁端部は外方に拡張している。両面とも黒色であり、内面は僅かにヘラミガキ痕があるが、外面はタテハケのちヨコハケである。



第19図　SA2005実測図

掘立柱建物 SA2005（第19図）

第１調査区中央部に位置し、SA2004と重複するが、４基の柱穴から構成される。桁行１間(2.80m)×梁間１間(1.61m)、

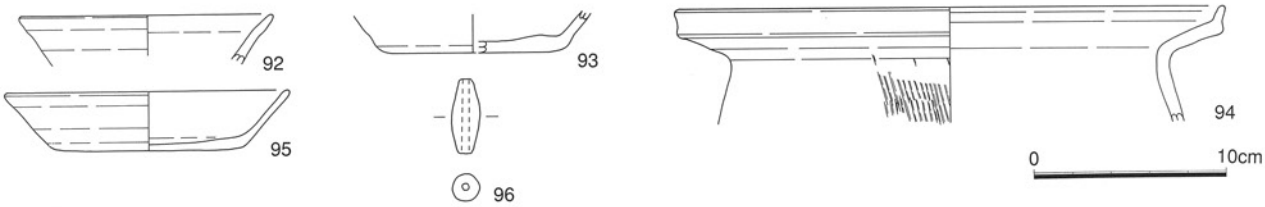
床面積4.51mを測る小規模なものであり、棟方向はN－5°－Eである。柱穴は、直径0.18～0.82m，深さ0.18～0.36mを測り、埋土は黄褐色粘質土であり、土師器等が出土している。

出土遺物（第20図）

92～94はSP2073からの出土である。92，93は土師器杯である。92は口縁端部が直線的に伸び端部を丸く収め、内外面に赤色塗彩を施している。93は底部回転ヘラ切り後に丁寧なナデを施している。94は土師器甕である。口縁部を「く」の字に折り曲げ、端部を上方に拡張している。内面はナデ、外面は口縁部ナデ，体部タテハケである。

95はSP2075出土の土師器杯A9類である。口縁端部が直線的に伸び端部を丸く収めるもので、底部外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデを施している。内外面に赤色塗彩している。

96はSP2072出土の土師質の環状土錘である。

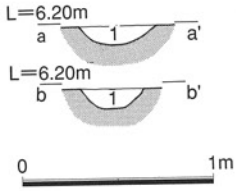


第20図　SA2005各柱穴出土遺物実測図

溝

溝SD1001（第21図）

第1調査区の第1遺構面北東隅に位置する、南北方向の溝である。両端とも調査区外にかかるが、残存長3.98m，幅0.38～0.49m，深さ0.09～0.10mを測り、断面はレンズ状であり、主軸方位はN－10°－Wである。底部の標高よりごく僅かに北方から南方に傾斜している。埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土1層であり、出土遺物は少量の土師器等のみであり、第2遺構面出土のものと時期的に差がなく明確な時代は特定できない。

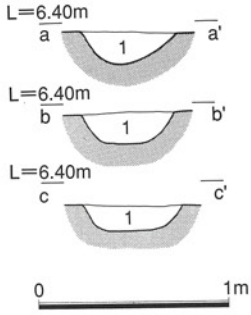


1．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土　炭化物を含む

第21図　SD1001断面実測図

出土遺物（第23図104～107）

104は土師器皿A11類である。口縁端部が外反し、底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施している。105は土師器杯である。口縁端部を外反させ丸く仕上げ、内側に沈線を廻らせている。内外面に赤色塗彩を施している。106は土師器甕である。口縁端部を上方に拡張させる器形であり、調整は、内面は口縁部ヨコハケ，体部ナナメ方向のハケのち横方向のハケ、外面は口縁部タタキ，体部タタキのち上半にナナメ方向のハケ調整である。



1．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土　炭化物を含む

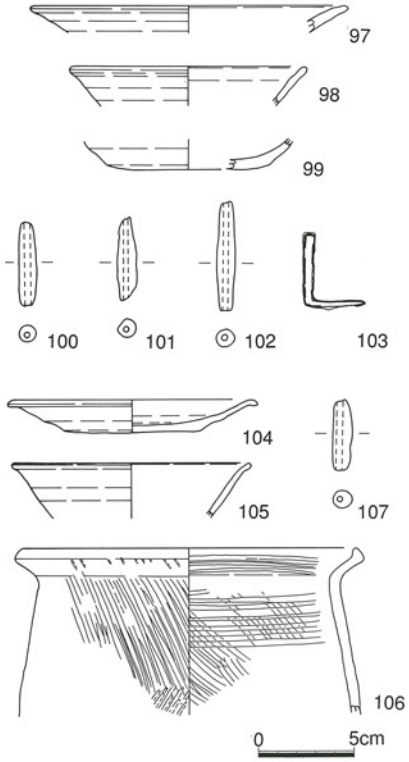
第22図　SD1002断面実測図

溝 SD1002（第22図）

第１調査区の第１遺構面北部を東西に貫く溝である。残存長20.10m，幅0.41～0.69m，深さ0.12～0.16mを測り、主軸方位はN－84°－Eであり、SD1001に対しほぼ直角方向に構築されている。また第１調査区南端のSD1003及び第２調査区のSD1004とは平行であり、相互の関連性が考えられる。断面はレンズ状であり、溝底はほぼ水平であり傾斜はない。覆土は炭化物を含む黄褐色粘質土１層であり、少量の土師器等が出土している。

出土遺物（第23図97～103）

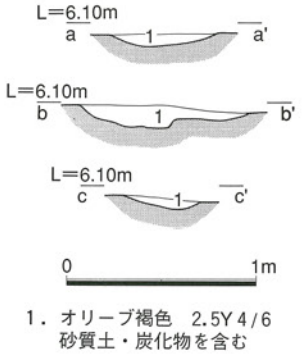
97は土師器皿、98，99は土師器杯である。97は口縁端部内側に沈線を廻らせている。98は口縁端部を僅かに外反させ端部を丸く収めている。いずれも回転ナデ調整であり、99は底部回転ヘラ切りのちナデを施している。100～102は土師質の環状土錘である。103は金属製品である。Ｌ字型を呈し、基部は断面0.44cm角の方形であり先細状となり先端は尖っている。



第23図　SD1001，SD1002 出土遺物実測図

溝 SD2001（第24図）

第１調査区の第２遺構面北東隅に位置し、Ｌ字型を呈し北端は調査区外にかかり、東端は撹乱に切られている。残存長5.82m，幅0.33～0.88m，深さ0.06～0.22mを測り、断面は浅いレンズ状を呈する。覆土は炭化物を含むオリーブ褐色砂質土である。掘立柱建物SA2001と東側地区とを区画する溝と位置づけられ、出土遺物は、赤色塗彩を施したものを含む土師器，黒色土器，緑釉陶器等がある。



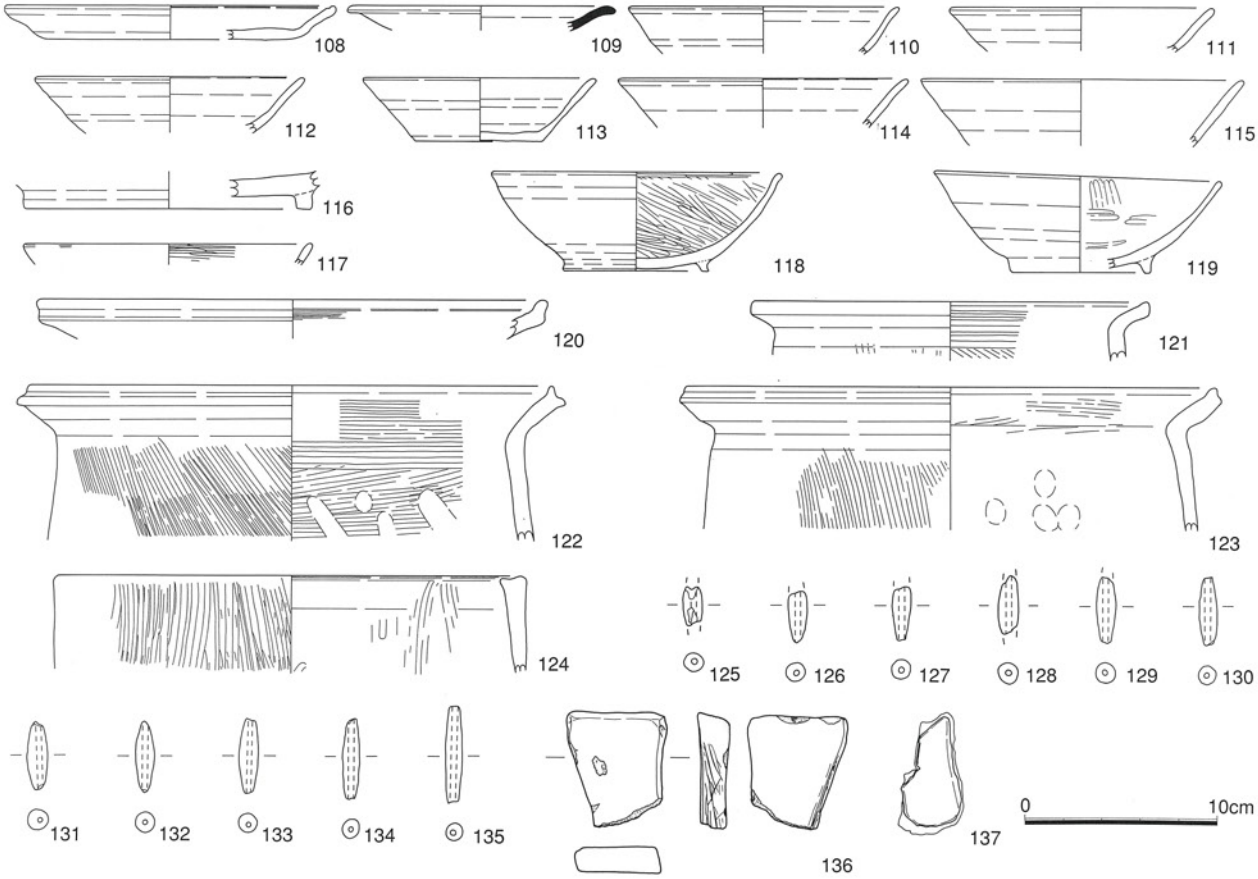
第24図　SD2001断面実測図

出土遺物（第25図）

108は土師器皿Ａ２類である。口縁端部内側に沈線を廻らせ、底部は回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を施す。全面に赤色塗彩を施す。

109は緑釉陶器皿である。口縁端部を外反させ丸く収めており、剥離が激しいがにぶい黄緑色の釉薬を掛け、焼成は軟質である。

110～116は土師器杯である。113は杯Ａ９類に比定され口径11.9cm，器高3.4cmを測るもので、口縁端部内外面が黒色を呈し、底部に回転ヘラ切り痕を明瞭に残すナデ調整を施している。110～112は口径13.6～14.1cm、114は15.0cmであり、115は口径16.7cmを測るやや大型のものである。器形から分類すると、口縁端部を外反させ丸く収める110，114と、口縁端部が直立する111～113、115に分けられる。110～112は内外面に赤色塗彩を施している。116は底径14.8cmを測る特大タイ



第25図　SD2001出土遺物実測図

プであり、底部に回転切り離し痕を認めない程度の丁寧なナデを施し、断面方形の高台を貼付けている。

117～119は黒色土器A類椀である。118は黒色土器A類椀1類、119は同4類である。117は口縁端部が直立し端部を丸く収める。118，119は底部回転ヘラ切りのちナデ調整であり、断面方形の低い高台を貼り付けている。いずれも内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ調整であり、結晶片岩を含む在地産であると考えられる。

120～123は土師器甕である。口縁端部を上方に拡張する120，121と上下に拡張する122，123に分類できる。調整は内面が口縁部ヨコハケ，体部ハケまたはのちナデ、外面が口縁部ヨコナデ，体部ナナメハケである。

124は土師器竈である。内面ケズリのち荒いハケ、外面ハケである。125～135は土師質の環状土錘である。総じて長さ3.5～5㎝、管径0.3㎝程度である。136は砥石である。使用面は表裏2面であり凹状になっている。137は金属製品である。腐食が激しいが、エックス線写真によれば、平面台形状、断面弓形状で厚さは0.3㎝である。

溝 SD2002（第26図）

第1調査区東部に位置する、南北方向に延びる溝である。中央部において土坑SK2002及びSK

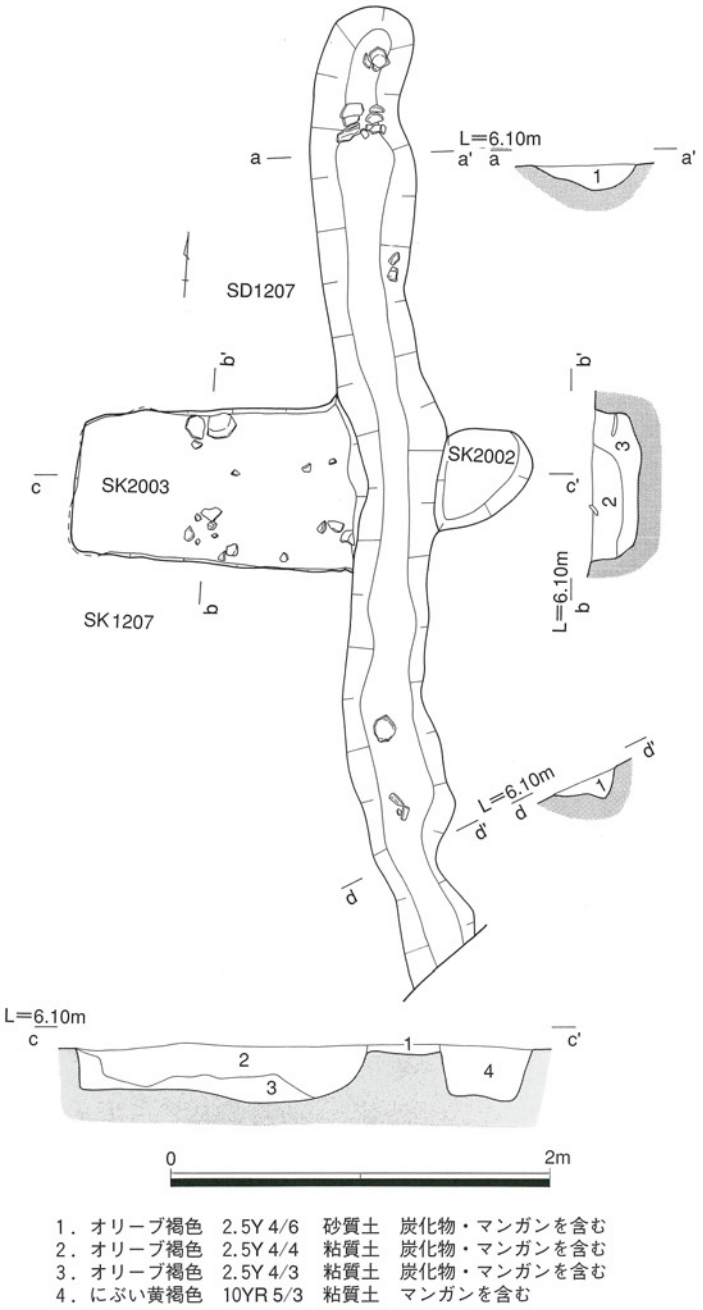
2003を切り、南方は調査区外にかかるが、残存長5.07m，幅0.26～0.54m，深さ0.05～0.15mを測り、主軸方位はN－7°－Wである。断面は浅いU字型であり、底面標高は北端5.86mに対し南端5.98mと、南から北へ緩やかに傾斜している。覆土は炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色砂質土1層であり、少量の土師器が出土している。

出土遺物（第27図）

138は土師器皿である。口縁端部を外反させ端部を丸く収めている。

139～141は土師器杯である。139は杯A6類、140は杯A9類、141は杯A3類にそれぞれ比定できる。139は底部回転ヘラ切り後丁寧なナデを施しているが、140，141はヘラ切り離し痕を明瞭に留める程度のナデである。141は内外面とも黒斑部分の面積が大きい。

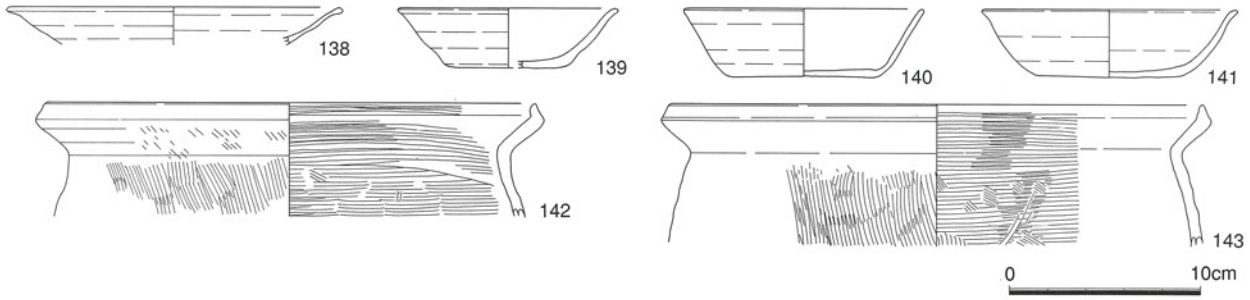
142，143は土師器甕である。口縁部を「く」の字状に折り曲げ、端部は上方に拡張している。内面ヨコハケ、外面体部ナナメハケ調整である。



第26図　SD2002，SK2003実測図

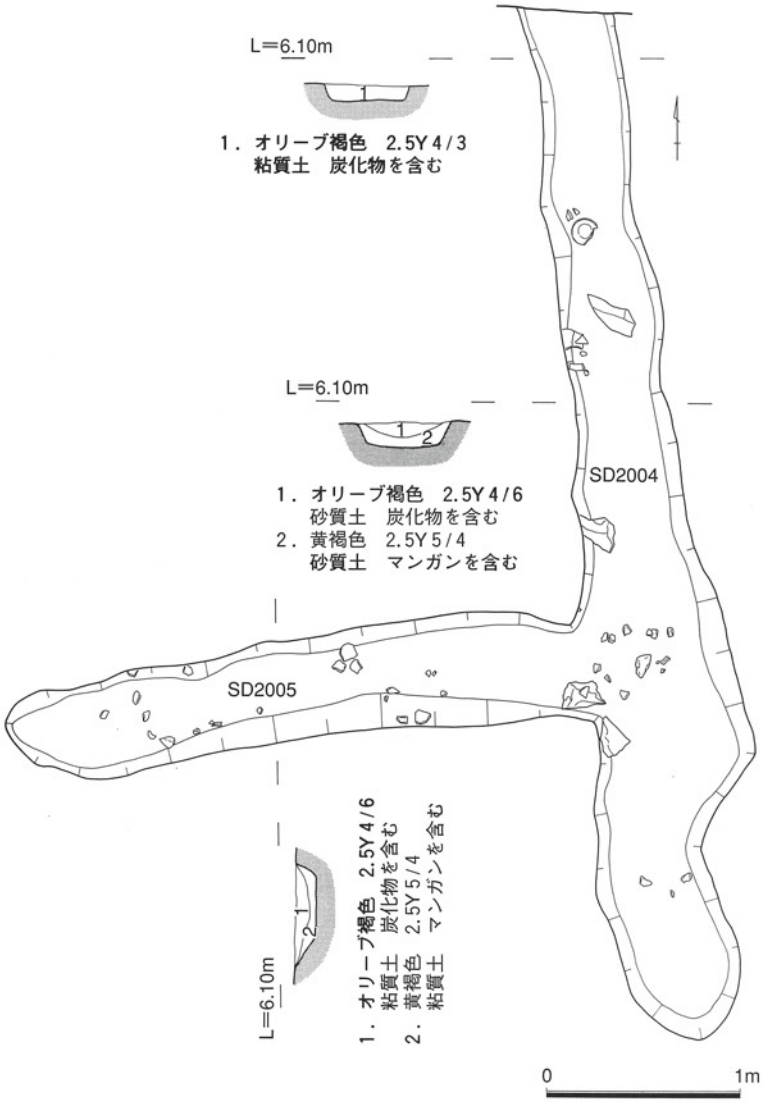
溝 SD2004（第28図）

第1調査区西部北端に位置する、南北



第27図　SD2002出土遺物実測図

方向の溝であり、南部ではSD2005が直交して西側へ分岐し、北部は調査区外に延びている。残存長5.30m，幅0.44～0.78m，深さ0.07～0.13mを測り、主軸方位はN－7°－Eであり、断面は浅い台形を呈し、底部は平坦で傾斜はない。覆土は第1層である炭化物を含むオリーブ褐色砂質土と第2層のマンガンを含む黄褐色砂質土からなり、第1層の北中部から土師器，黒色土器が出土している。SD2009と共に西側の掘立柱建物SA2002を区画する溝と据えられる。



第28図　SD2004，SD2005実測図

出土遺物（第29図144～152）

144，145は土師器皿である。ともに口縁端部が外反するが、145は皿A6類に比定できる、特に口縁部の器壁が薄く器高が低いタイプである。底部回転ヘラ切りのちナデ調整し、内外面に赤色塗彩を施している。

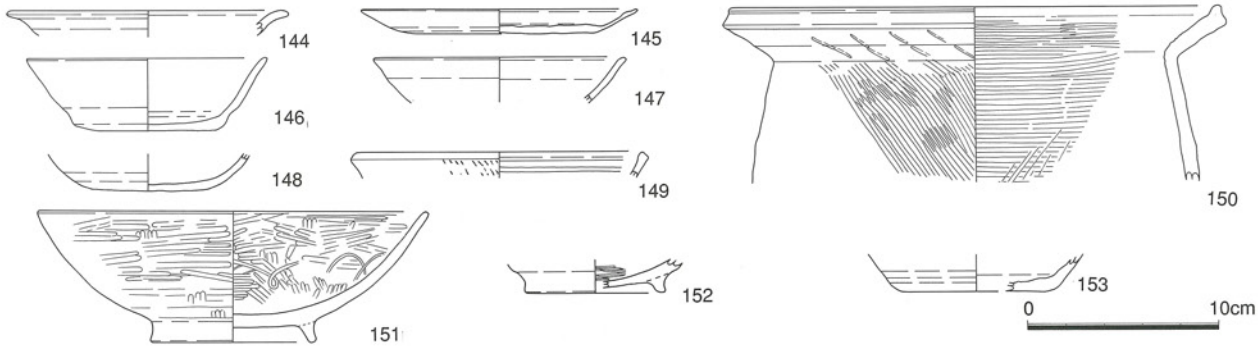
146～148は土師器杯である。146は口縁端部が直立し、体部下方に明瞭な稜を持ち、底部は回転ヘラ切りのち丁寧なナデ調整を施している。147は口縁端部が外反し、内外面に赤色塗彩を施している。148は底部の切り離し痕が認められない程度の非常に丁寧なナデである。

149，150は土師器甕である。口縁端部が上方に拡張し、内面ヨコハケ、外面口縁部タタキのちナデ，体部ナナメハケである。

151，152は黒色土器A類椀である。151は黒色土器A類椀2類に比定でき、内面横方向のヘラミガキのち螺旋状のヘラミガキ、外面横方向中心のヘラミガキを施しているが、内面のみ黒色であり、細身の高台を貼り付けている。152は内黒で、調整は内面ミガキ外面ヨコナデであり、低い高台を貼付け内側から強いナデを施している。共に結晶片岩を含む在地産と考えられる。

溝 SD2005（第28図）

第1調査区北西部に位置する、東西方向の溝であり、東端はSD2004と直交して合流している。



第29図　SD2004，SD2005出土遺物実測図

延長3.10m，幅0.48～0.60m，深さ0.09mを測り、主軸方位はN－83°－Eであり、断面は浅い台形状を呈し、底部は平坦であり傾斜はない。覆土はSD2004と同様、第1層オリーブ褐色砂質土、第2層黄褐色砂質土から構成され、第1層から少量の土師器が出土している。掘立柱建物SA2002に伴うものと考えられる。

出土遺物（第29図153）

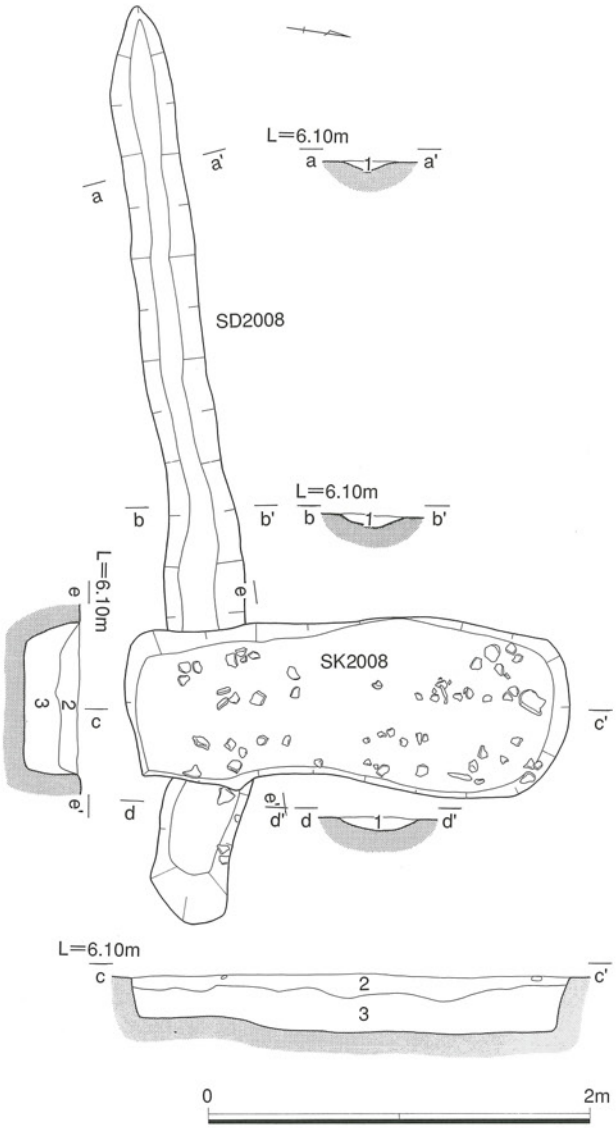
153は土師器杯である。底部回転ヘラ切りのち丁寧なナデを施している。

溝 SD2008（第30図）

第1調査区中央部東側に位置する東西方向の溝であり、一部が土坑SK2008に切られている。規模は、延長4.92m，幅0.28～0.42m，深さ0.05～0.07mであり、形状は断面レンズ型のごく浅い、底面に傾斜のないものである。主軸方位はN－76°－Eを示し、覆土はオリーブ褐色砂質土1層であり、少量の土師器を出土した。北側の柵列SG2001に伴うものであり、東側の溝SD2002及び西側のSD2003により区画される空間が、住居SA2001に関連したものと考えられる。

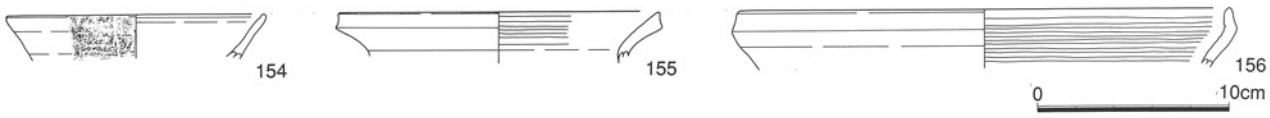
出土遺物（第31図）

154は土師器杯A2類である。口縁端部内側に浅い沈線を廻らせ、外面に赤色塗彩の痕



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　砂質土
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　砂質土　多量の炭化物を含む
3．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　砂質土　多量の炭化物を含む

第30図　SD2008，SK2008実測図

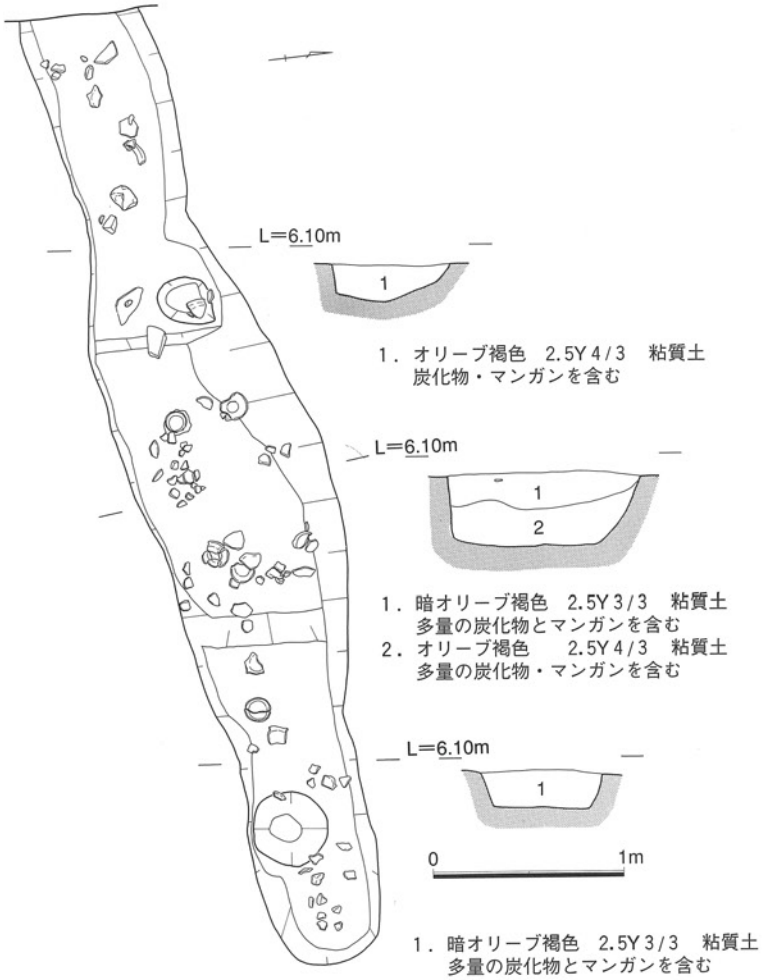


第31図　SD2008出土遺物実測図

跡が認められ、口縁部に記号もしくは絵画「凹」が線刻されている。155，156は土師器甕である。155は口縁端部が断面方形状を呈し、156は上方に拡張している。ともに内面が横方向のハケ、外面口縁部がヨコナデ調整である。

溝 SD2009（第32図，図版１－３）

第１調査区西端部に位置する東西方向の溝であり、東部は収束するが、西部は調査区外に延伸している。規模は、延長5.23m，幅0.54～1.04m であり、深さ0.14～0.68mを測り、主軸方位はN－79°－Eであり、形状は、断面は台形を呈し、中央やや東に落ち込みがある。覆土は炭化物，マンガンを含む暗オリーブ褐色粘質土と同じくオリーブ褐色粘質土の２層からなり、両層から多量の土師器，黒色土器，須恵器，銅製品等が出土している。この溝は建物 SA2002若しくは SA2003に伴うものと据えられる。

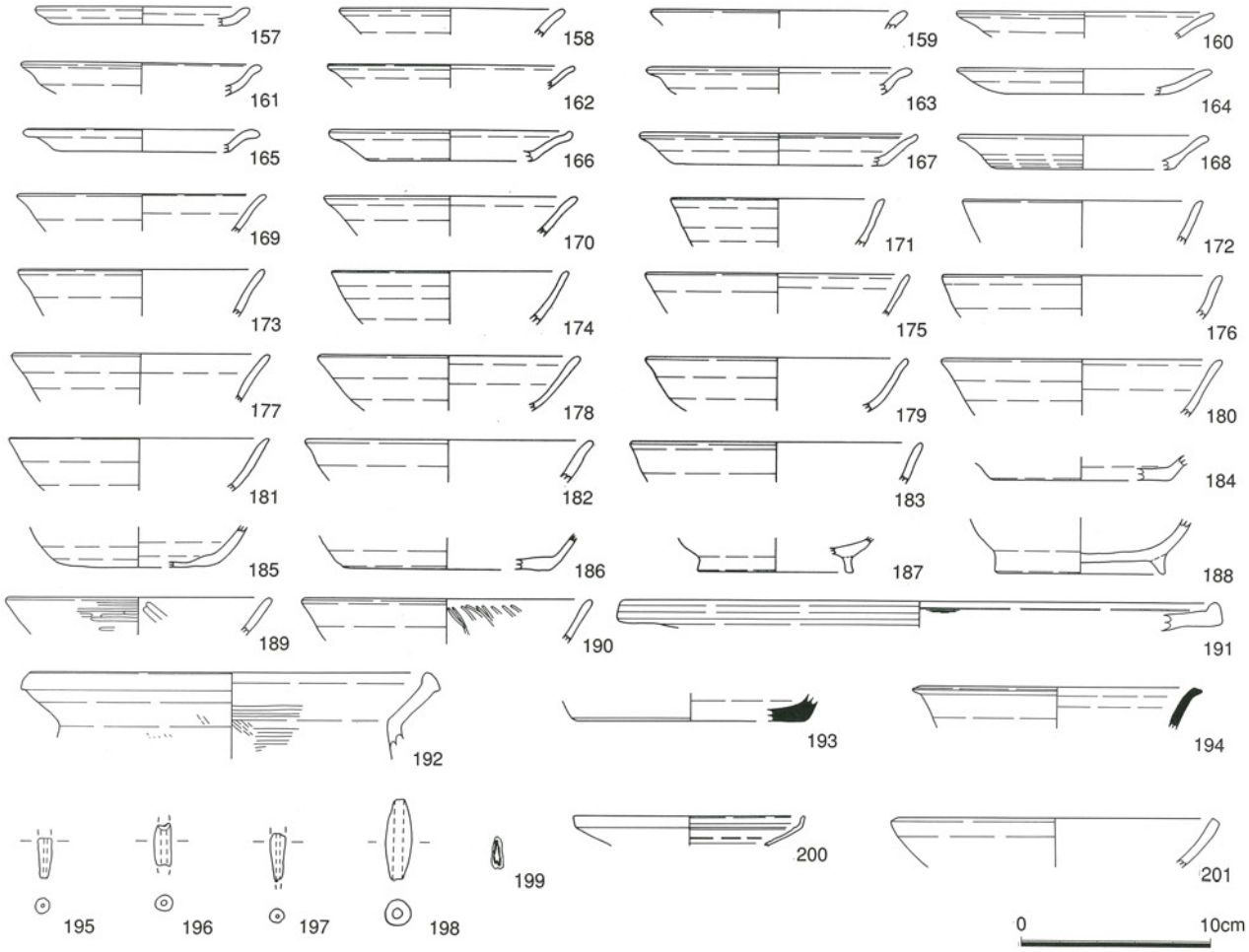


第32図　SD2009実測図

出土遺物（第33図）

157～168は土師器皿である。157は土師器皿 A14類である。口径10.2cm，器高1.0cmを測り、短く直立する口縁部が付き、端部は肥厚し丸く収める。内外面回転ナデ調整である。160，166，167は皿Ａ２類、161，163，165は皿Ａ３類、168は皿Ａ６類、164は皿Ａ９類にそれぞれ比定できる。いずれも口径12.0～14.6cm，器高1.2～1.8cmを測る小型のものである。160，166，167は内外面に赤色塗彩が施されている。

169～188は土師器杯である。法量的には口径11.4cmの171と、口径12.6～13.3cmの169，170，172



第33図　SD2009出土遺物実測図

～174，177，13.7～14.6cmの175，178～181，14.8～15.4cmの176，182，183とに分類できる。器形からは口縁端部が外反する169，170，173，176，178～183と、口縁端部が直立する171，172，174，175，177とに分類できる。184は底部回転ヘラ切り痕が観られない非常に丁寧なナデであるのに対し、185，186はヘラ切り痕が残る程度のナデである。187は細身の高い高台であり、188は断面三角形の短めの高台を貼り付けている。178，180，183，184，188は内外面に赤色塗彩を施している。

189，190は黒色土器椀である。189は内黒であり、内面ヘラミガキ、外面も部分的にヨコヘラミガキを施している。結晶片岩を含む在地産と考えられる。190は両黒であるが、内面のみヘラミガキが施され、外面は回転ナデ調整のみ観られる。

191は土師器壺、192は土師器甕である。ともに口縁端部を上方に拡張する器形であり、内面口縁部は横方向のハケ調整である。

193は須恵器杯である。内外面とも回転ナデ調整であり、底部は切り離し痕が認められない非常に丁寧なナデ調整を施している。

194は須恵器壺である。口縁端部を外反させ尖り気味に仕上げている。

195～198は土師質の環状土錘である。

199は金属製品である。腐食激しく欠損している可能性が強いが、根元部の直径0.4cmで先細であり、釘状のものと考えられる。

200は銅製であり皿状を呈する。口縁部を折り曲げ、端部は上方に屈曲している。口縁部内側に２条の突帯線を廻らせている。

201は鉢型土器である。内外面にナデを施している。古墳時代初頭のものであるがこの時代のものは１点のみの出土である。

溝 SD2010 （第34図）

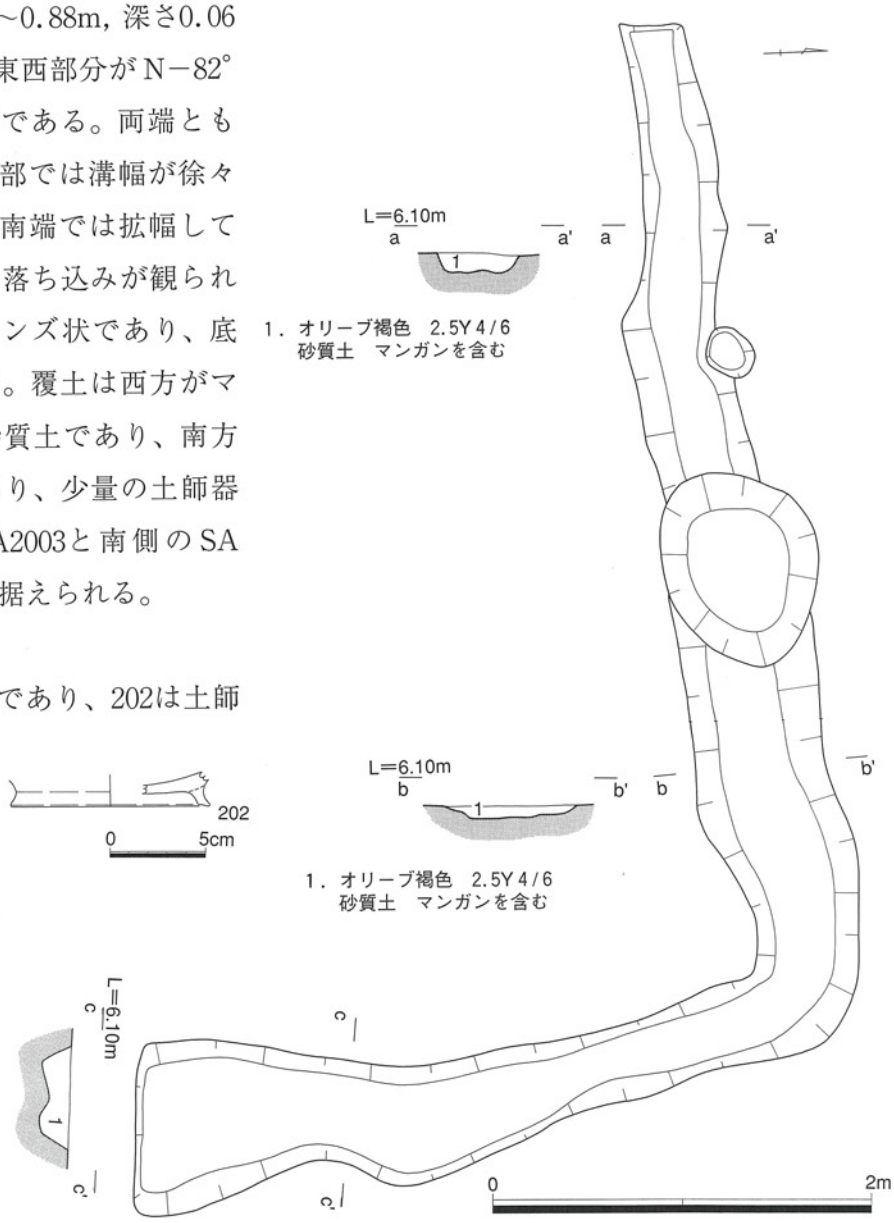
第１調査区中央部に位置し、直角に屈折するＬ字型の溝であり、一部が土坑，柱穴に切られるものの、延長8.66m，幅0.32～0.88m，深さ0.06～0.24m を測り、主軸方位は東西部分がＮ－82°－E、南北部分がＮ－８°－Ｗである。両端とも方形状に収束しているが、西部では溝幅が徐々に細くなっているのに対し、南端では拡幅しており、断面c－c'部分において落ち込みが観られるが、その他の断面は浅いレンズ状であり、底面に軸方向の傾斜は殆どない。覆土は西方がマンガンを含むオリーブ褐色砂質土であり、南方が炭に近い灰黄色粘質土であり、少量の土師器が出土した。北側の建物SA2003と南側のSA2004，SA2005を区画する溝と据えられる。

出土遺物（第34図）

図示し得たものは１点のみであり、202は土師器杯Ｂ類である。外に開く高台を貼付け、高台際に特に強いナデを加えている。

その他の溝状遺構出土遺物（第35図）

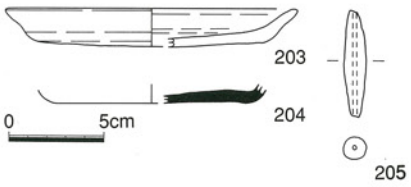
第１調査区のその他の溝状遺構から出土した遺物をここで一括して紹介する。



第34図 SD2010実測図，出土遺物実測図

203は第１調査区北西隅に位置する狭小な溝SD2006出土の土師器皿である。底部回転ヘラ切り後ナデであり、内外面に赤色塗彩を施している。

204，205は第１調査区南部SD2012から出土した。この溝は建物SA2004，SA2005を西側のSD2011，北側のSD2010と共に区画するものである。204は須恵器皿である。結晶片岩を含む胎質であり、底部回転ヘラ切り後ナデである。205は土師質の環状土錘である。



第35図　SD2006，SD2012 出土遺物実測図

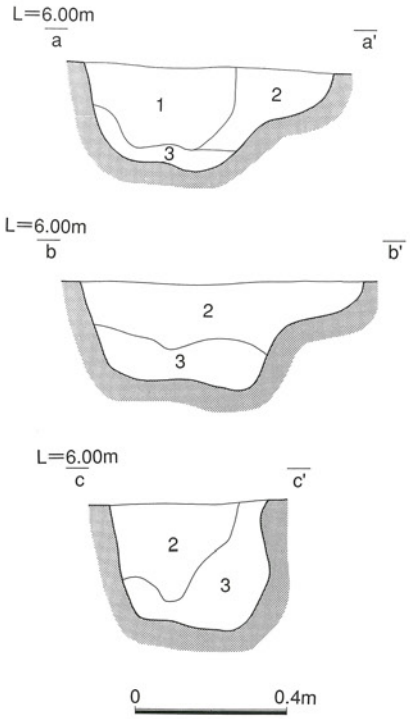
溝 SD2013（第36図）

第２調査区第２遺構面に位置する南北方向の溝である。不明遺構SX2001を切っており、その北部はSK2022に切られ、南端はプラン不明瞭であるが、残存長6.40m，幅1.50m，深さ0.33mを測り、主軸方位はN－８°－Wであり、断面U字型を呈している。覆土は３層からなり、北端部から緑釉陶器等が少量出土した。西側の溝SD2014と平行であり関連性が考えられる。

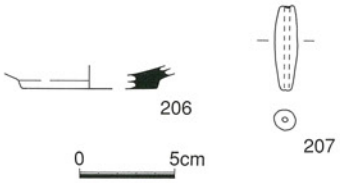
出土遺物（第36図）

206は緑釉陶器皿である。京都系の軟質のものであり、底径７cmを測り円盤状の高台を有する。SP2030出土の44と同型の底部である。

207は土師質の環状土錘である。



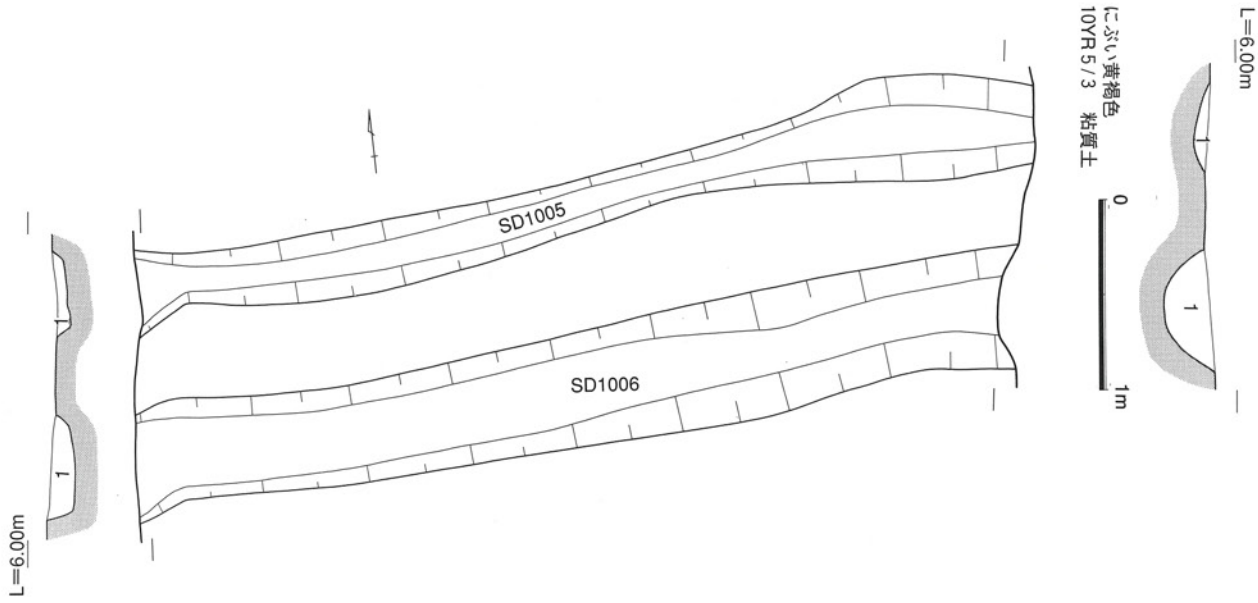
1．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘質土
　マンガンを含む
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　粘質土
　マンガンを含む
3．にぶい黄褐色　10YR 5/3　粘性砂質土



第36図　SD2013断面実測図，出土遺物実測図

溝 SD1005，SD1006（第37図）

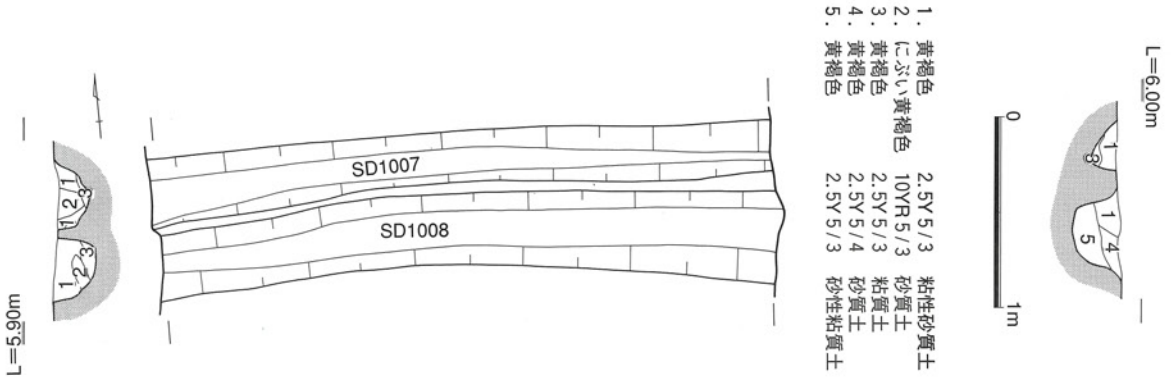
第３調査区北端部を東西方向に貫く平行な２条の溝である。北側の溝SD1005は残存長4.77m，幅0.23～0.56m，深さ0.05～0.06mであり、南側の溝SD1006は残存長4.60m，幅0.51～0.66m，深さ0.08～0.18mを測る。西側の第４調査区では撹乱のため検出できなかったが、南側のSD1007，SD1008同様に延長していくものと考えられる。共に主軸方位はN－84°－Eであり、２本の溝の間隔は0.50mを測る。断面はレンズ状を呈し、底面の主軸方向の傾斜は殆どないものである。覆土はにぶい黄褐色粘質土１層であり、出土遺物はない。後述するが、南側の第３調査区内の溝SD1007，SD1008及び、第４調査区の溝SD1013，SD1014も２本１組で東西の同じ主軸方位に構築された同種のものである。いずれも出土遺物はない。



第37図　SD1005，SD1006実測図

溝 SD1007，SD1008（第38図）

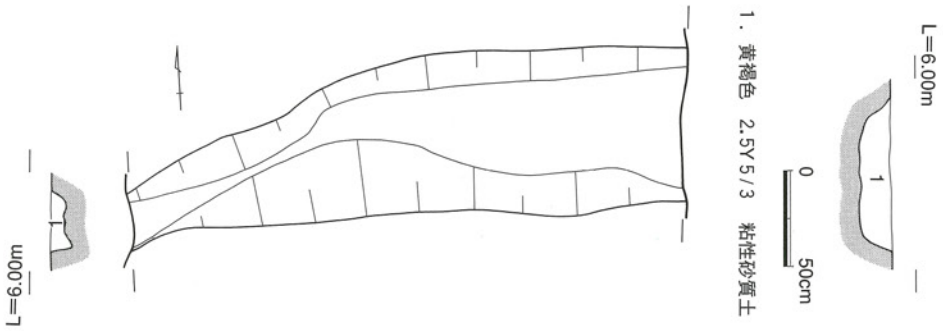
第３調査区中央部を東西方向に貫く平行な２条の溝であり、西側の第４調査区では撹乱により僅かに西端部のみしか検出できなかったが、第３区のものと同一である。両調査区を含めた規模は、北側の SD1007が残存長12.30m，幅0.26～0.46m，深さ0.05～0.22m であり、南側の SD1008が残存長12.30m，幅0.34～0.48m，深さ0.17～0.32m を測る。共に主軸方位は北側の溝 SD1006、SD1007と同様にＮ－84°－Ｅであるが、やや南側凹状の弓形を呈しており、２本の間隔は0.05mと極めて狭いものである。断面はＵ字型であり、底面標高は第３調査区東端部の方が第４調査区西端部よりも0.10m ほど高く、東から西へ緩やかに傾斜していることを示している。覆土は両溝とも黄褐色系の３～４層で構成されているが、上層より下層の方が粘性の高いものである。出土遺物はない。



第38図　SD1007，SD1008実測図（第３調査区）

溝 SD1009（第39図）

第３調査区中央部を東西に貫く溝であり、西側に続く第４調査区では撹乱のため西端部のみしか検出できなかったが同一のものである。両調査区を含めた規模は、残存長12.30m，幅0.27～0.67m，深さ0.01～0.44m を測る。主軸方位はN－84°－E であるが、これは北側の２組の溝 SD1005，SD1006と SD1007，SD1008と同じ値である。断面は浅い台形状であり、底面標高は第３調査区東端部に対し、第４調査区西端部が0.42m 低くなっており、東から西に傾斜していることを示している。覆土は黄褐色粘性砂質土１層であり、出土遺物はない。



第39図　SD1009実測図（第３調査区）

溝 SD1013，SD1014（第40図）

第４調査区中央を東西に貫くほぼ平行な２条の溝である。南部が一部撹乱にかかり、北部が土坑 SK2116に切られているが、その規模は、北側の SD1013が残存長9.14m，幅0.50～0.93m，深さ0.35～0.62m，主軸方位 N－89°－E であり、南側の SD1014が残存長9.24m，幅0.58～0.90m，深さ0.15～0.43m，主軸区方位 N－89°－W を測る。２本の間隔は1.28～1.60m であり、僅かに西方が拡張している。断面はＵ字型を呈し、底面標高は共に東端に比べ西端が0.2m 低くなっている。覆土は黄褐色及びオリーブ褐色系のもの４～７層に分層でき、下層の方が上層に比べ粘性が高いものであり、順次堆積していったことを示している。遺物は SD1013東部より土師器杯，甕が１点ずつ出土している。

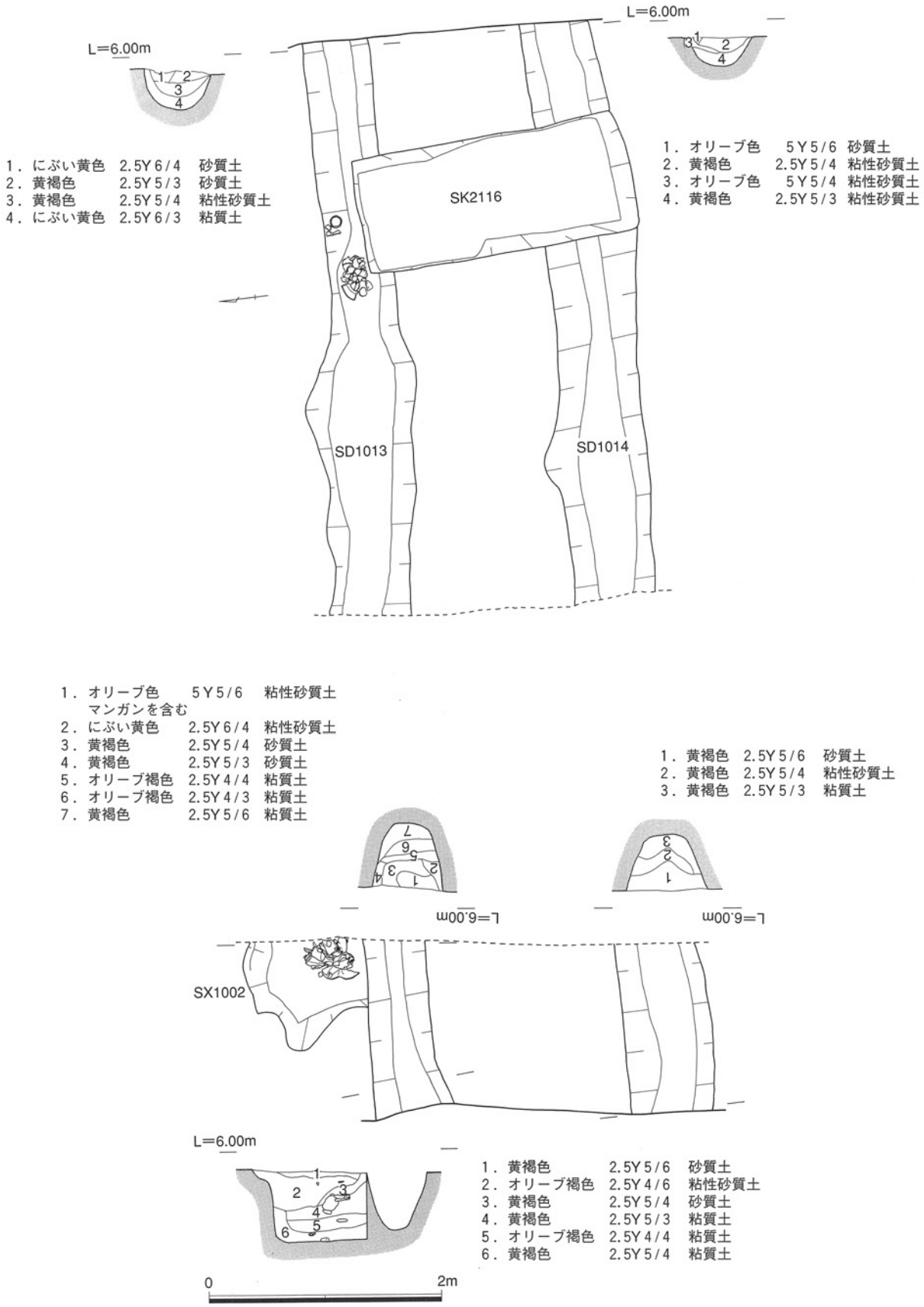
出土遺物（第41図）

208，209は SD1013より出土したものである。208は土師器杯Ａ９類である。口縁端部が直立し、底部は回転ヘラ切り痕が明瞭に残る程度のナデである。内外面に赤色塗彩の跡が観られるが内面全体にタール状の炭化物の付着が顕著である。209は土師器甕である。長胴型で口径が胴部最大径より大きい器形であり、口縁部の屈曲が小さく、端部は上方に拡張して丸く収めている。調整は内面が胴部上位ヨコハケ，下位指オサエ、外面が胴部縦または斜め方向のハケである。

土坑

土坑 SK2003（第26図）

第１調査区東北部に位置し、東端が溝 SD2002と接する。主軸方位はN－88°－E であり、規模は長軸1.56m，短軸0.90m，深さ0.35m を測り、平面隅丸長方形，断面長方形を呈する。覆土は炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色系粘質土上下２層からなり、上層より赤彩したものを含



第40図　SD1013，SD1014，SX1002実測図

む土師器，黒色土器等が多量に出土した。

出土遺物（第42図）

210～221は土師器皿である。皿A３類210～213，219，220、皿Ａ７類214，217、皿Ａ４類216、皿Ａ２類221がある。法量からは、口径11.8～13.5cmの210～214，216，217と、口径14.2～14.6cmの215，218～220、口径17cmの221に区分できる。いずれも底部回転ヘラ切り後ナデを施している。210，219は内外面に赤色塗彩を施している。

第41図　SD1013出土遺物実測図

222～241は土師器杯である。杯Ａ５類228，234、杯Ａ３類235、杯Ａ６類238がある。また222，230，237は口縁端部が真っ直ぐ伸びて丸く収め、231はやや尖り気味であり、223～229，232，233，236は口縁端部が外反して丸く収める。法量から分類すると口径12.3～13.0cmの222，223，225～229，232，234、口径13.7～14.5cmの224，230，231，233、口径15.2～16.7cmの235～238に分けられる。いずれも内外面ヨコナデ調整であり、228，234は底部回転ヘラ切り後ナデであるが、238は底部回転ヘラ切り後にナデ調整を施していない。239～241は底部回転ヘラ切り後ナデを施し高台を貼り付けている。高台の形状は、239が断面台形、240は高台際に強いナデを加えたもの、241は細身の高いものである。222，223，226～230，234，235，238は内外面に赤色塗彩を施している。

242～245は黒色土器Ａ類椀である。いずれも胎土中に結晶片岩を含有し、口径15.4～16.9cmを測り、口縁端部を外反させ丸く収める。245は「八」の字状に高台を貼り付けている。いずれも内面ヨコヘラミガキ、外面ヨコナデ調整である。

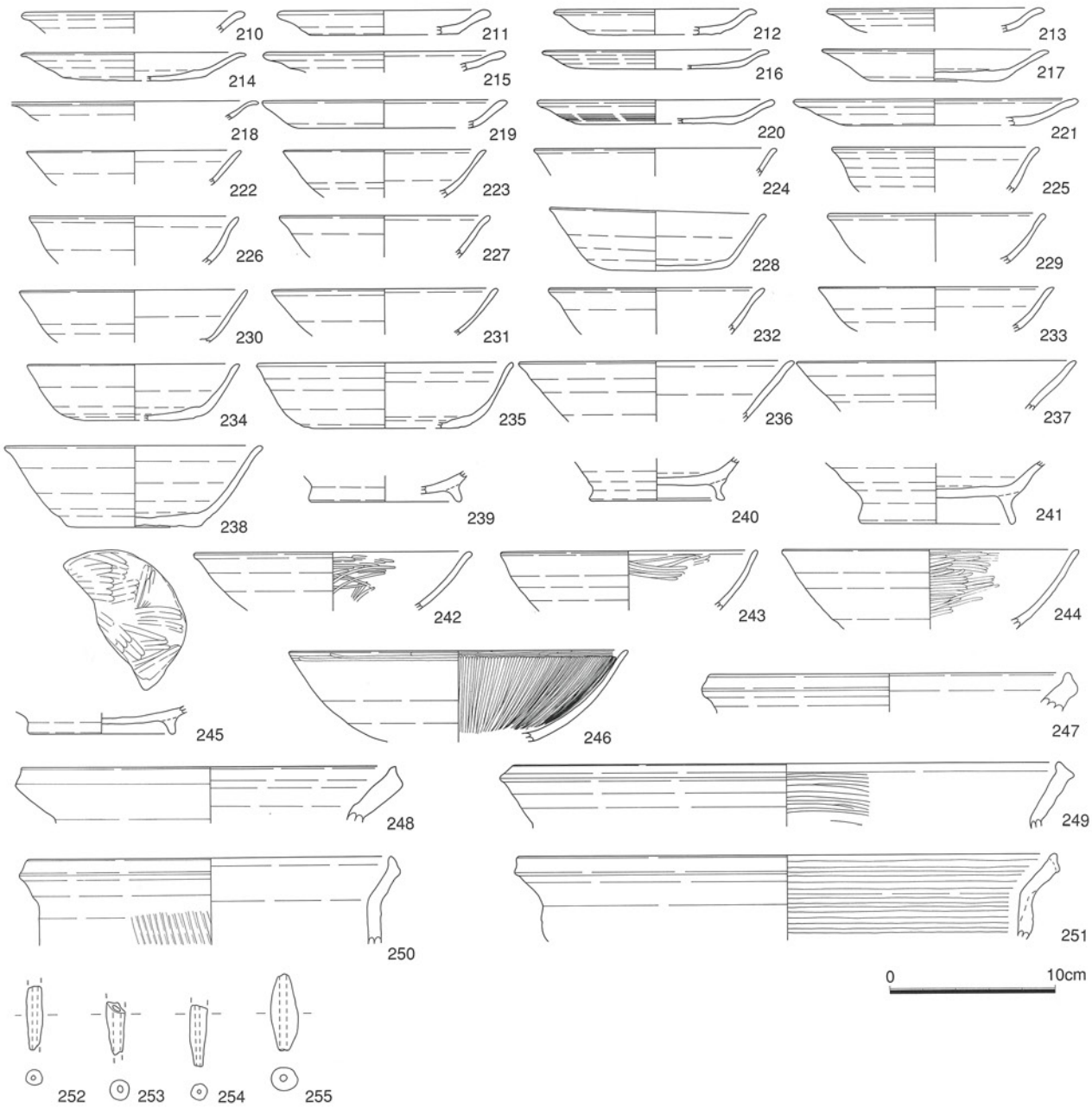
246は土師器杯Ｂ３類である。口径20.4cmを測るものであり、口縁端部を外反させやや尖り気味に収めている。内面タテヘラミガキ、外面ヨコナデで、口縁端部は内外面ともヨコヘラミガキ調整である。内外面に赤色塗彩を施している。

247～251は土師器甕である。248は口縁端部を上方に拡張したもの、247，249～251は上下に拡張したものである。口縁部内面が247，248，250はヨコナデ、249，251はヨコハケであり、口縁部外面はいずれもヨコナデ、250は体部タテハケである。

252～255は土師質の環状土錘である。

土坑 SK2004（第43図）

第１調査区北部中央に位置する、平面隅丸長方形，断面台形状の土坑である。規模は長軸1.89m，短軸0.99m，深さ0.30m を測り、主軸方位はＮ－74°－Ｅである。覆土はオリーブ褐色系，黄褐色系粘質土の４層に分層でき、第２層から土師器，黒色土器Ａ類，土師質瓦が出土している。



第42図　SK2003出土遺物実測図

出土遺物（第44図）

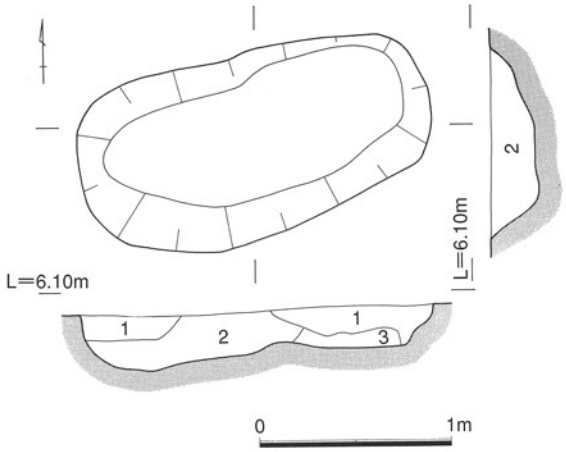
256～258は土師器皿である。皿Ａ３類256と皿Ａ４類258があり、257は口縁端部を外反させ丸く収める。いずれもヨコナデ調整を内外面に施し、底部に回転ヘラ切り離し痕を残す程度のナデを施している。256は完形での出土である。

259～269は土師器杯である。杯Ａ３類260～262，265、杯Ａ４類263、杯Ｂ１類269がある。法量からは、口径11.4cmの260、口径12.6～13.4cmの259，261，262，264，265、口径14.3cmの263，口径16.5cmの269、口径18.2cmの266に分類できる。いずれも内外面ヨコナデ調整である。261，262は底部に回転ヘラ切り痕を明瞭に残す程度の僅かなナデであるのに対し、267はヘラ切り痕を強くナデ消している。268は細みの高台を貼り付け、内外面に赤色塗彩を施している。

270は黒色土器A類椀である。結晶片岩を含むものであり、口径23.9cmを測り、口縁端部が強く外反し丸く収める。内面はヨコヘラミガキ、外面ヨコナデ調整である。

271，272は土師器甕である。ともに口縁端部を上方に拡張している。271は内面ヨコハケ、外面ヨコナデ調整であるのに対し、272は内面にヨコヘラミガキ、外面胴部にタテハケ調整を施し内面は灰黄褐色を呈している。

273，274は土師質の平瓦である。ともに凹面に布目痕、凸面に縄蓆文タタキを施し274はユビオサエ跡がある。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　粘質土　炭化物
　マンガンを含む
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　粘質土　炭化物
　マンガンを含む
3．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土　炭化物
　マンガンを含む

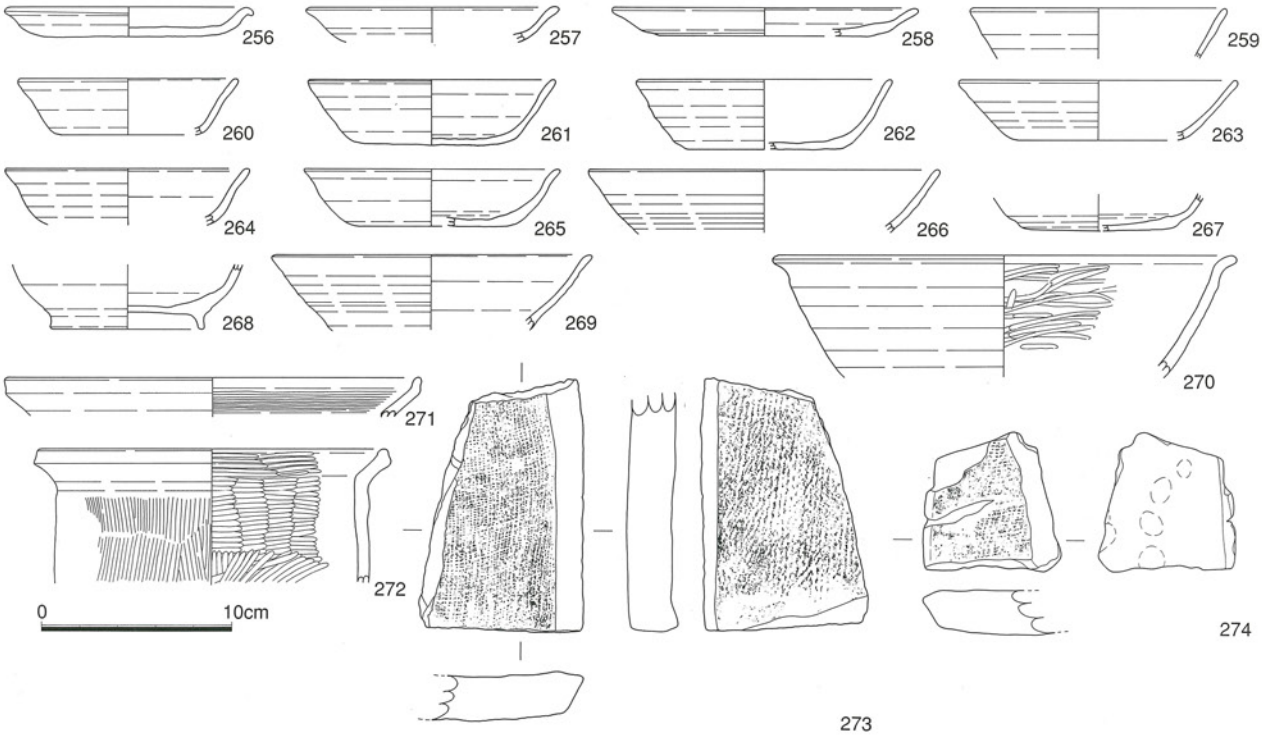
第43図　SK2004実測図

土坑 SK2005（第45図）

第1調査区北西隅に位置する、平面不定形，断面浅い台形状で一部落ち込みのある土坑である。西側が調査区外にかかるが、残存部の長軸1.45m，落ち込み部の深さは0.13mである。覆土は黄褐色と褐色の粘質土2層からなり、多量の土師器，黒色土器A・B類，須恵器が出土している。

出土遺物（第46図）

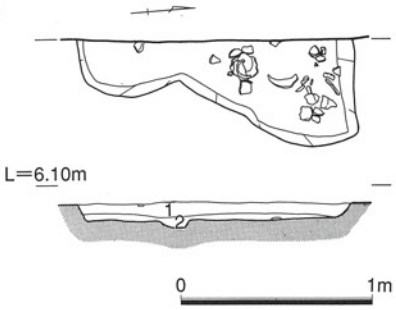
275～294は土師器皿である。皿A 2類275、皿A 8類276、皿A 3類278～280，282，286，288～



第44図　SK2004出土遺物実測図

293がある。さらに皿Ａ３類は口径12.2cmの278，12.8～13.5cmの279，280，282、口径14.2～14.8cmの286，288～293の３種類がある。皿類全体でも278と294を除いて全て口径12.5～14.8cmに集中している。いずれも内外面回転ナデ調整であり、底部回転ヘラ切り後ナデを施している。277，279～281，286は内外面に赤色塗彩を施している。

295は須恵器杯である。内外面ともヨコナデ調整であり底部回転ヘラ切り後ナデを施している。

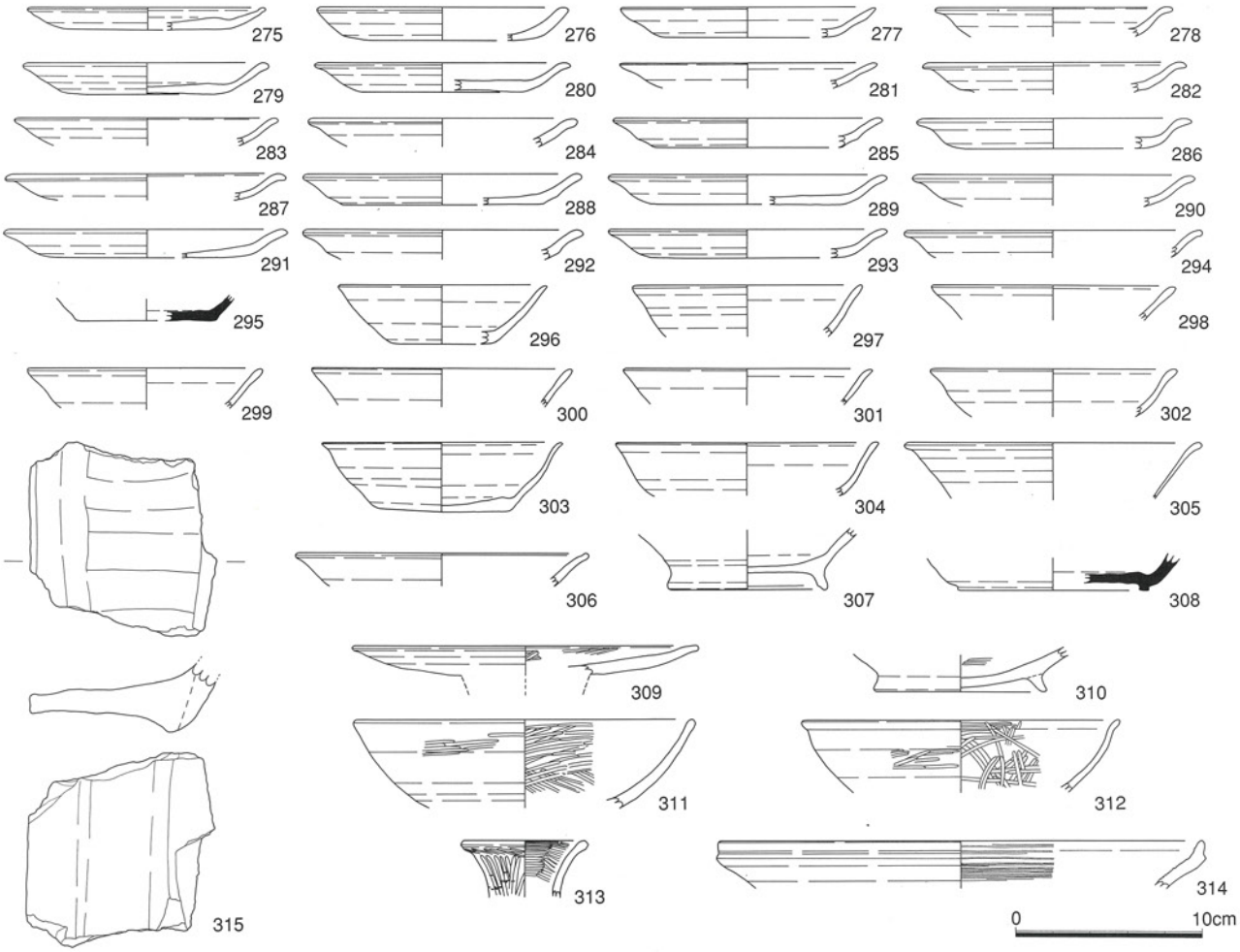


1．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土
2．褐色　10YR 4/4　粘質土

第45図　SK2005実測図

296～307は土師器杯である。杯Ａ９類296、杯Ａ６類303、杯Ａ２類306がある。法量からは口径12.2cmの297、12.5～13.2cmの298，299，301～303、14.0cmの300，304、15.6cmの305，306がある。いずれも内外面ヨコナデ調整であり、303の底部は回転ヘラ切り痕を残す程度のナデである。307は内側を面取りする高台を貼り付けており、内外面に炭化物の付着が観られる。299～301，306は内外面に赤色塗彩を施すものである。

308は須恵器杯である。断面方形の高台を削り出し、内外面とも回転ナデ調整である。



第46図　SK2005出土遺物実測図

309は黒色土器A類高杯である。結晶片岩を含み、口縁端部を外反させ丸く収めるものであり、内面を黒色処理しヘラミガキ、外面はヨコナデ調整である。

310～312は黒色土器A類椀である。結晶片岩を含み、311，312は口縁端部を外反させ丸く収めるものであり、内面はヘラミガキ、外面にも一部ヨコヘラミガキが認められるが、黒色処理は内面のみである。

313は黒色土器B類壺である。口縁端部外側に明瞭な稜を持つものであり、両面を黒色処理し、内面と口縁端部外面は横方向，頸部外面は縦方向のそれぞれ綿密なヘラミガキ調整を施している。

314は土師器甕である。口縁端部を上方に拡張し外側に1条の沈線を廻らせるものであり、口縁部内面に細密なヨコハケ、外面はヨコナデ調整を施している。

315は土師質竈の廂部である。端部を上方に拡張するものであり、上面は縦方向の板ナデ、下面は横方向のナデ調整である。上面に煤の付着が顕著である。

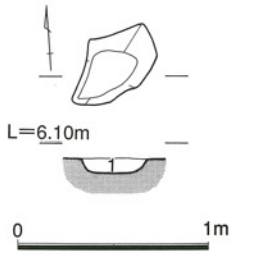
土坑 SK2007（第47図）

第1調査区北西隅に位置し、平面不定形，断面浅い台形状の土坑である。長軸0.55m，短軸0.35m，深さ0.07mを測り、覆土はオリーブ黄色粘質土1層から構成され、土師器，土師質の土錘が出土している。

出土遺物（第48図）

316は土師器皿である。内外面ヨコナデ調整であり底部回転ヘラ切り後ナデを施す。

317～321は土師器杯である。杯A3類318、杯A7類319がある。法量からは口径13.0～13.4cmの317～319と口径17.7cmの320に分類できる。いずれも口縁端部を外反させるものであり、内外面ともヨコナデ調整である。318，319は底部回転ヘラ切り痕を明瞭に残す程度の僅かなナデを施している。321は高く細身の高台を貼り付けている。



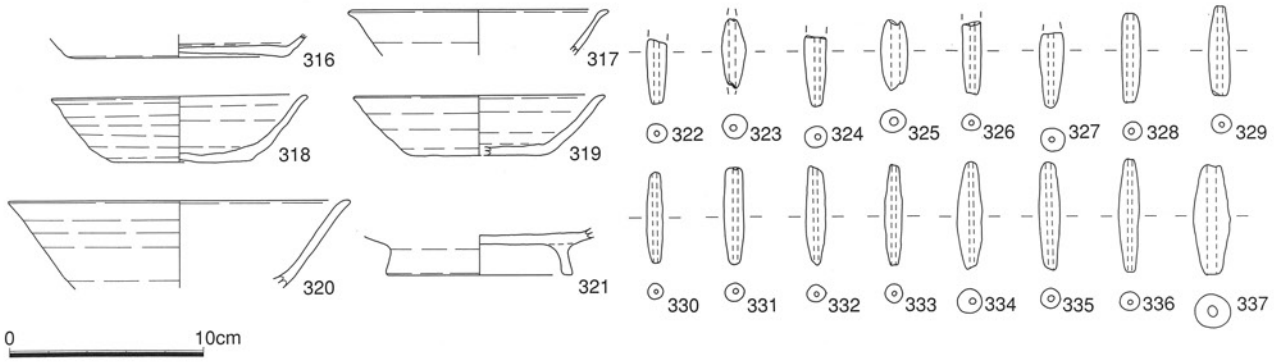
1．オリーブ黄色　5Y6/3　粘質土

第47図　SK2007実測図

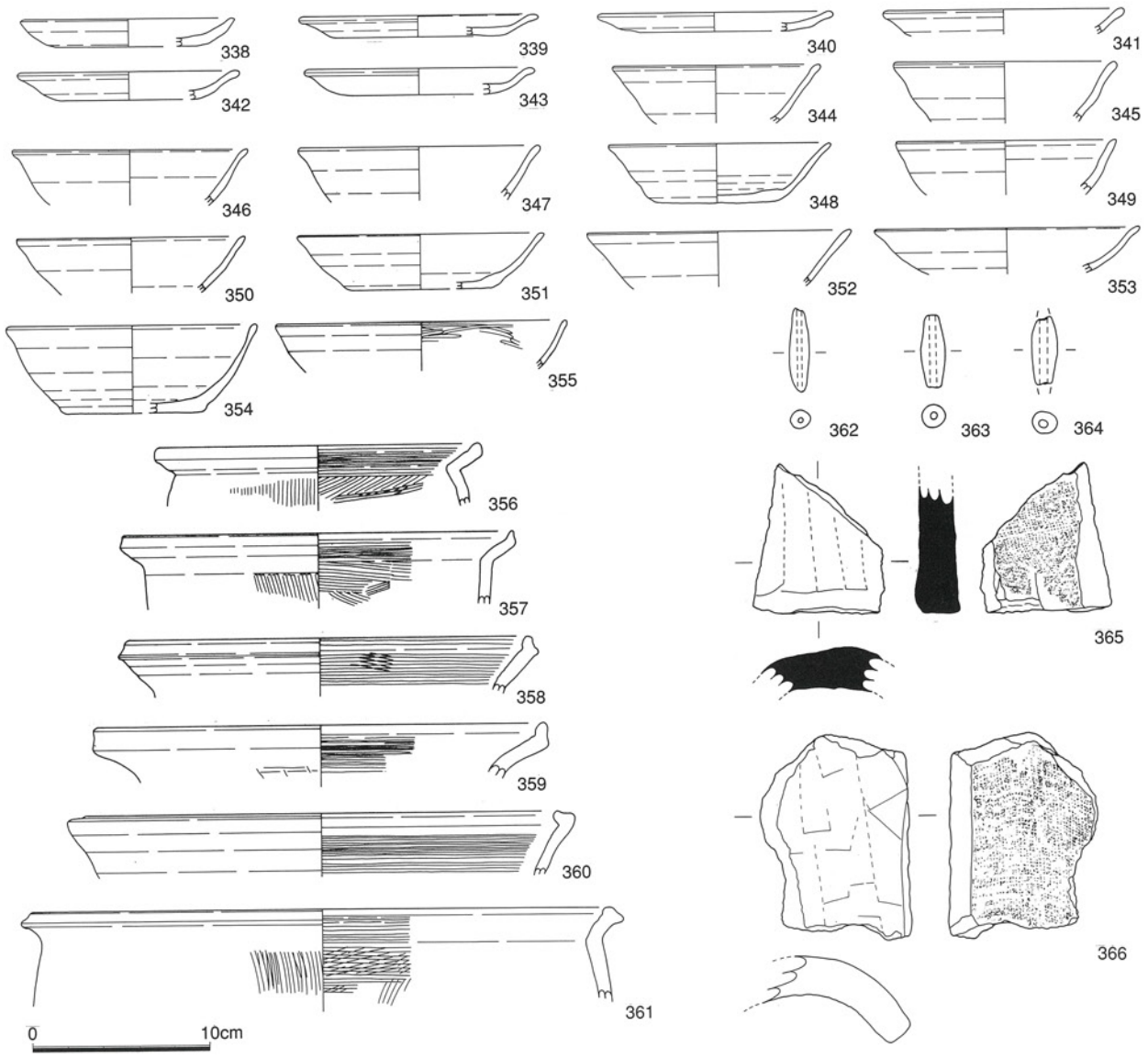
322～337は土師質の環状土錘である。長さ5～6cm，胴径1cm前後の322～336と長さ6cm，胴径1.9cmの337に分類できる。

土坑 SK2008（第30図，図版1－4）

第1調査区中央東端に位置する平面隅丸長方形，断面長方形の南北方向に構築された土坑であり、長軸2.31m，短軸0.94m，深さ0.26mを測る。溝SD2008東部を直交する形で切り、主軸方位はN－14°－Wである。覆土は多量の炭化物を含むオリーブ褐色系の砂質土2層で構成され、その上層から、土師器，黒色土器A類，須恵質瓦等を出土した。



第48図　SK2007出土遺物実測図



第49図　SK2008出土遺物実測図

出土遺物（第49図）

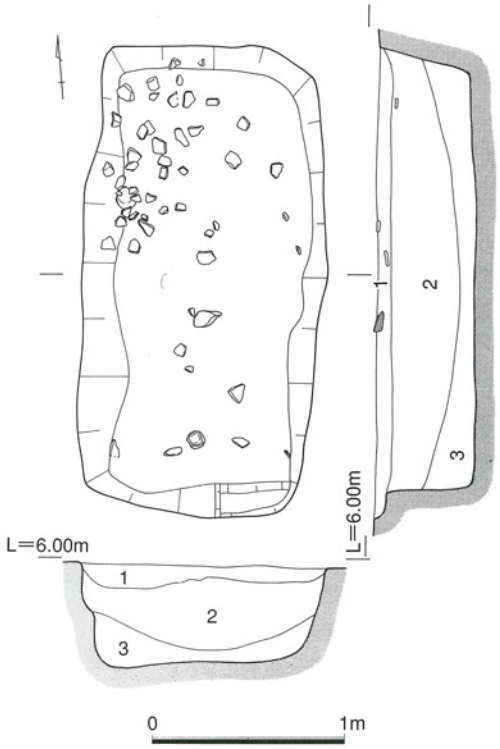
338～343は土師器皿である。皿A15類338、皿A4類339，340、皿A3類342，343がある。皿類全体で口径11.6～13.4cmの小型のものに限られている。338は口縁端部が直立し平坦な面を残すものであり、内外面に赤色塗彩を施している。

344～354は土師器杯である。杯A3類348，351、杯A12類354がある。法量からは、口径11.8～14.0cmの344～351,354と口径14.9～15.0cmの352,353に分類できる。いずれも内外面回転ナデであり、348，351，354の底部は回転ヘラ切り後ナデ調整である。353，354は内外面に赤色塗彩を施している。

355は黒色土器A類椀である。結晶片岩を含み、口縁端部を外反させ丸く収めるものである。内面を黒色処理しヨコヘラミガキ、外面ヨコナデ調整である。

356～361は土師器甕である。356，361は口縁端部を上下に拡張するものであり、357～360は口縁端部を上方に拡張するものである。いずれも内面口縁部ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ調整である。

362～364は土師質の環状土錘である。



1．オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土
炭化物、マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y5/8　粘質土
炭化物、マンガンを含む
3．にぶい黄色　2.5Y6/3　粘質土
炭化物、マンガンを含む

第50図　SK2009実測図

365，366は丸瓦であり、365は須恵質、366は土師質のものである。ともに凹面は布目痕、凸面は縦方向の板ナデ調整である。

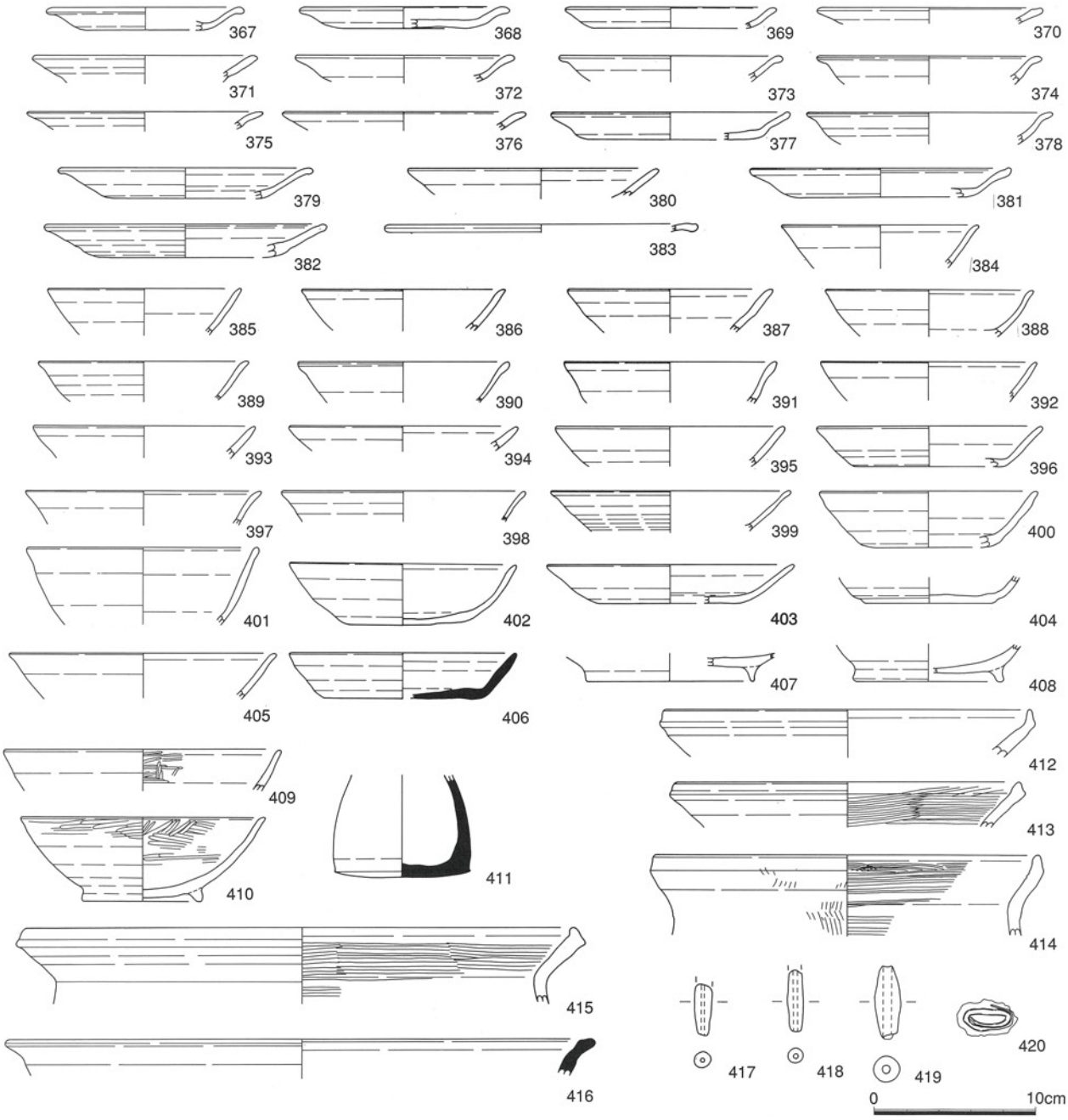
土坑SK2009（第50図，図版1－5）

第1調査区中央部に位置する、平面隅丸長方形，断面台形の南北方向に構築された土坑であり、長軸2.48m，短軸1.30m，深さ0.54mを測り、主軸方位は真北を示す。その覆土は平行堆積であり、炭化物，マンガンを含む、オリーブ褐色，黄褐色，にぶい黄色の3層の粘質土からなる。赤色塗彩を施したものを多量に含む土師器，黒色土器A類，須恵器等が出土している。

出土遺物（第51図）

367～383は土師器皿である。皿A3類367～369，379、皿A2類370，377，381，382がある。法量からみれば、口径11.6～12.6cmの367～369、13.4～13.7cmの370～374、14.3～14.5cmの375～377、15.0～15.9cmの378～381、17.2cmの382、19.0cmの383の6種類に分類できることから、かなりの法量分化が認められる。いずれも内外面ヨコナデ調整であり底部回転ヘラ切り後ナデを施している。370～372，380～383は内外面に赤色塗彩を施している。

384～405，407，408は土師器杯である。杯A3類388，400、杯A4類396，403、杯A8類402



第51図　SK2009出土遺物実測図

がある。法量からみれば、口径11.8cmの385、12.5～13.5cmの386～393，400、13.8～14.6cmの394～397，399，401，402、口径15.0～16.2cmの398，403，405の５種類に分類でき、皿同様法量分化が大きい。407は細身の高台、408は断面方形の高台を貼り付けている。いずれも内外面ヨコナデ調整で底部回転ヘラ切り後ナデである。391，393～396，400，403は内外面に赤色塗彩を施している。

406は須恵器杯である。口径13.9cm，器高2.8cmを測り、口縁端部を尖り気味に仕上げる。底部回転ヘラ切り後ナデである。

409，410は黒色土器Ａ類椀である。409は口径16.8cm、410は口径14.9cm，器高5.2cmを測る。ともに結晶片岩を含み、409は内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ調整であり、410は内面及び外面口縁部上位がヘラミガキ、下位がヨコナデ調整であり、黒色土器Ａ類椀２類に比定できる。

411は須恵器壺である。内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ切り後ナデであり、自然釉が掛かる。

412～415は土師器甕である。412～414は口縁端部を上方に拡張し、415は上下に拡張する。いずれも内面ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。412は外面口縁部に１条の凹線を廻らせる。

416は須恵器甕である。口縁端部を外反させ丸く収める。

417～419は土師質の環状土錘である。

420は金属製品である。腐食が激しいが、エックス線撮影によれば楕円状に１周半巻きついた紐状のものである。

土坑 SK2011，SK2012（第52図，図版１－７）

第１調査区中央部西端に位置し、SK2011が平面隅丸長方形，断面台形であり、それに切られるSK2012が平面正方形，断面浅い台形である。SK2011は長軸1.25m，短軸0.82m，深さ0.22mを測り、主軸方位Ｎ－23°－Ｗである。覆土は主に炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色粘質土と、黄褐色粘質土からなり、多量の土師器，黒色土器Ａ類，土師質の瓦等が出土した。SK2012は残存部の長軸2.32m，短軸2.20m，深さ0.08mを測り、主軸方位はＮ－５°－Ｅである。

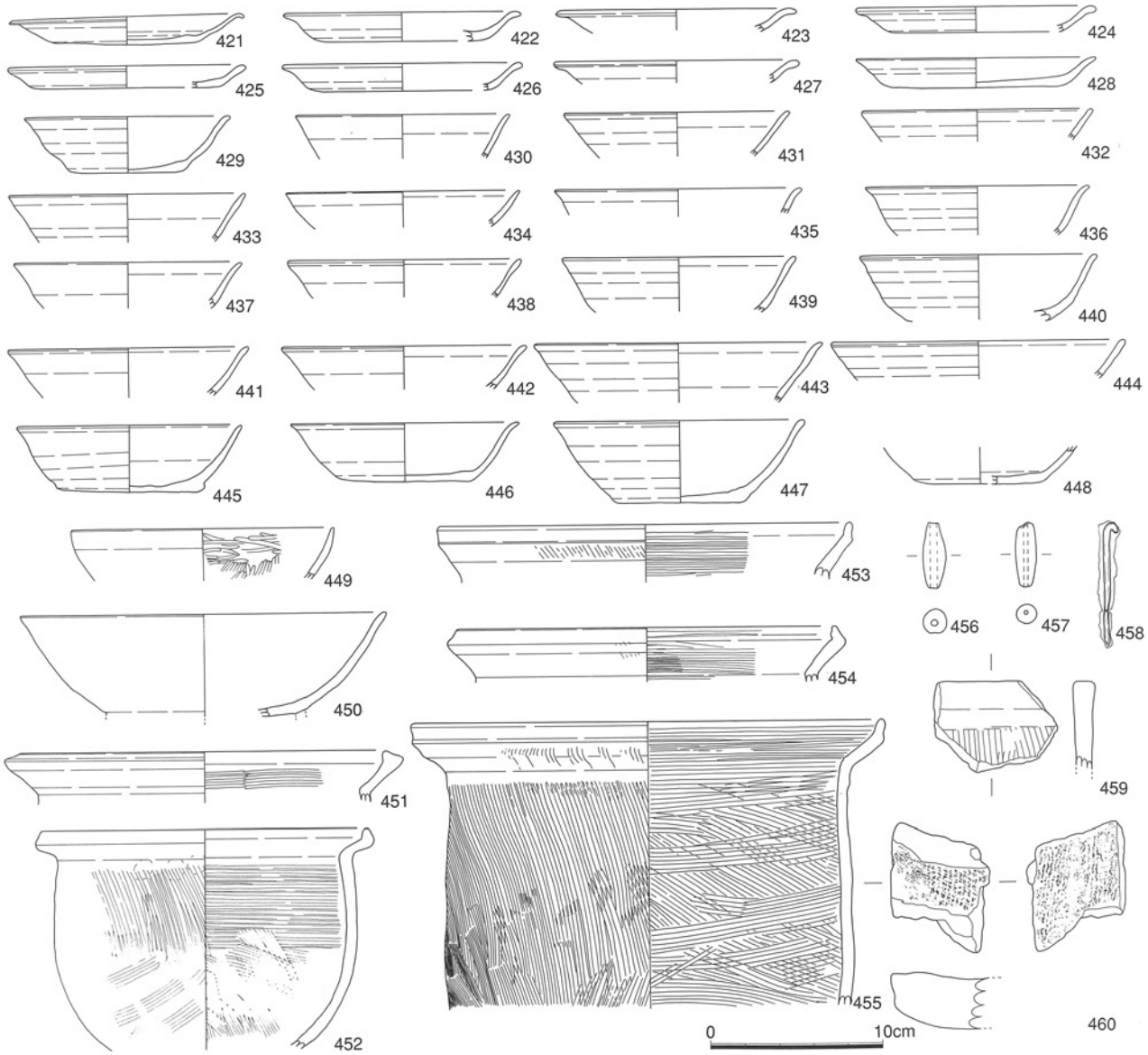
SK2011出土遺物（第53図）

421～428は土師器皿である。皿Ａ12類421、皿Ａ３類422～424，426，427、皿Ａ４類425、皿A13類428がある。法量からはいずれも口径13.2～14.1cm，器高1.3～1.7cmに集約される。全て内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り離し後ナデである。

429～448は土師器杯である。杯Ａ６類429，445，447、杯Ａ

1．オリーブ褐色　2.5Y４/４　粘質土　炭化物　マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y５/４　粘質土　炭化物　マンガンを含む
3．黄褐色　2.5Y５/３　粘質土　炭化物　マンガンを含む
4．オリーブ褐色　2.5Y４/３　粘質土　マンガンを含む
5．オリーブ褐色　2.5Y４/６　粘質土　マンガンを含む
6．にぶい黄色　2.5Y６/３　砂質土　炭化物　マンガンを含む
7．灰黄色　2.5Y６/２　粘質土　マンガンを含む

第52図　SK2011，SK2012実測図



第53図　SK2011出土遺物実測図

3類446がある。また430，431，434～443は口縁端部が外反し、432，433，444は口縁端部が真っ直ぐ伸びる。法量からみれば、口径11.6～12.3cmの429，430、12.9～14.4cmの431～442，445～447、16.6～17.0cmの443，444に分類できる。いずれも内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ切り後ナデである。432，441は内外面に赤色塗彩を施している。

449は黒色土器A類椀である。結晶片岩を含み、内面ヘラミガキで黒色処理し、外面ヨコナデである。

450は土師器杯B4類である。口径21.0cmを測り、内外面ヨコナデであり、内面に炭化物の付着が顕著である。

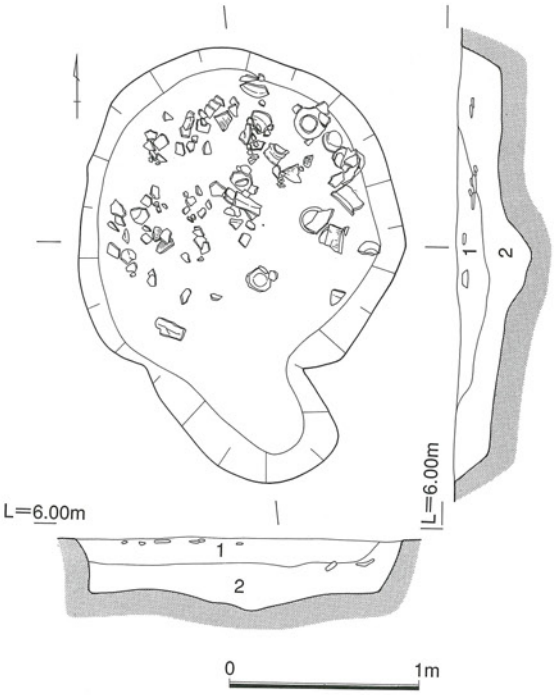
451～455は土師器甕である。いずれも口縁端部を上方に拡張するものであり、内面口縁部がヨコハケまたはヨコハケのちヨコナデ，胴部ナナメハケ、外面口縁部ヨコナデまたはナナメハケの

ちヨコナデ，胴部ナナメハケである。

456，457は土師質の環状土錘である。458は金属製品の釘である。459は土師器竈である。内面ヨコナデ、外面タテハケである。460は土師質の平瓦である。凹面荒い布目痕、凸面縄席文タタキである。

土坑 SK2014（第54図，図版１－６）

第１調査区南部に位置する、平面不定形，断面台形で中央部に落ち込みのある土坑であり、長軸2.32m，短軸1.72m，深さ0.38m を測る。覆土は炭化物，マンガンを含む黄褐色粘質土とオリーブ褐色粘質土の２層からなり、第１調査区中最大量の土師器，黒色土器Ａ類等が出土した。



1．黄褐色　2.5Ｙ5/3　粘質土　化合物マンガンを含む
2．オリーブ褐色　2.5Ｙ4/4　粘質土　炭化物マンガンを含む

第54図　SK2014実測図

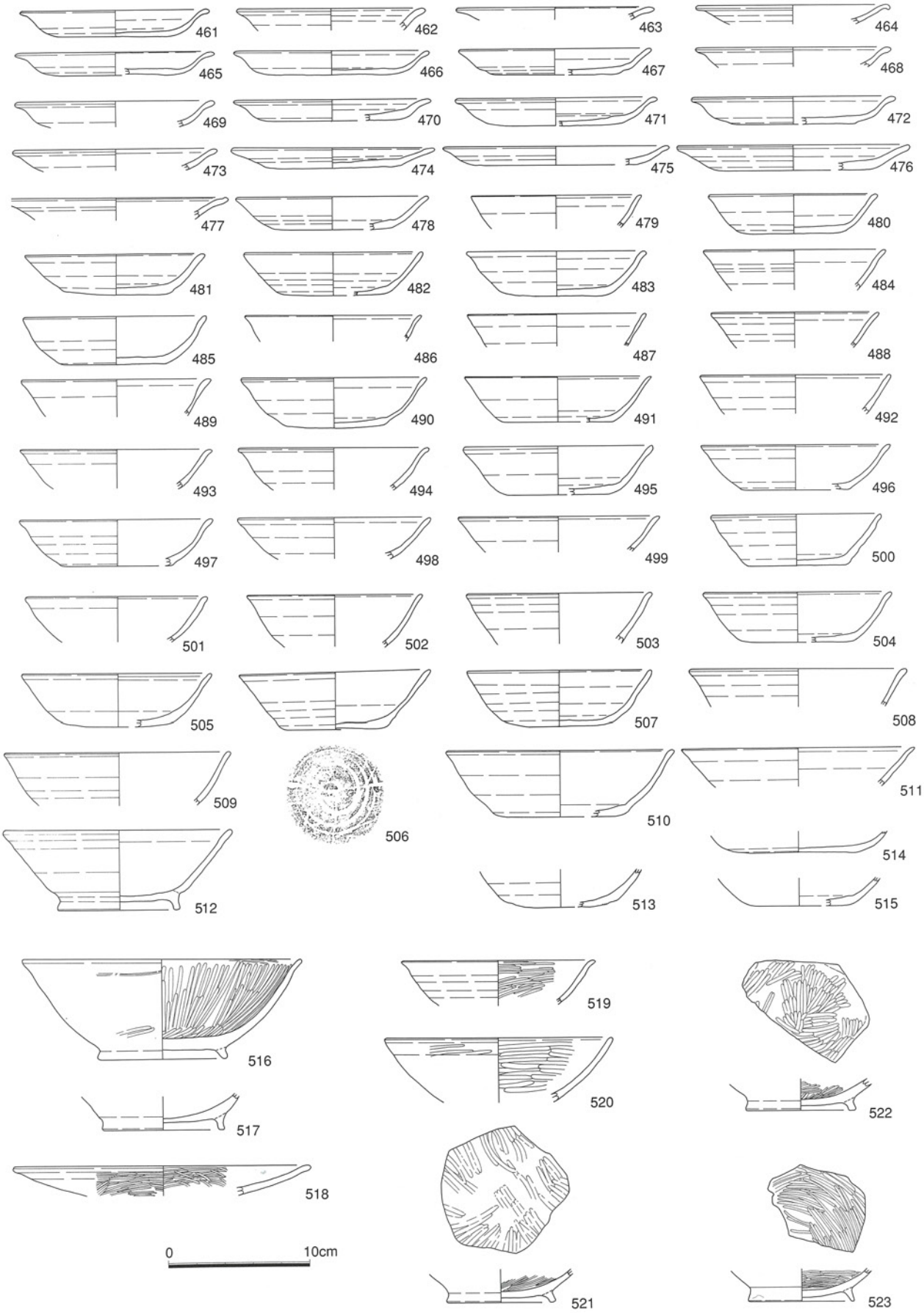
出土遺物（第55図）

461～477は土師器皿である。皿Ａ５類461、皿Ａ３類465～467，469～472，475，476、皿Ａ４類474、皿Ａ２類477がある。法量からは口径13.0～14.3cmの461～474、16.0～16.4cmの475，476に分類できることから中大型の器種に集約されている。いずれも内外面ヨコナデ調整であり、461，465，470が底部回転ヘラ切り痕を留めない丁寧なナデを施すのに対し、466，467，471，472，474～476は底部ヘラ切り痕を残す程度のナデである。468，473，474は内外面に赤色塗彩を施している。

478～517は土師器杯である。杯Ａ４類478、杯Ａ３類480～483，485，491，495～497，504、杯Ａ５類490，505、杯Ａ２類492、杯Ａ９類500，506、杯Ａ８類507、杯Ａ６類510、杯Ｂ１類512、杯Ｂ３類516があり、多様な構成である。法量からは11.7～12.3cmの479，480，488，500，502、12.5～13.5cmの481～487，489～497，501，503～505，507、13.6～14.4cmの478，498，499，506、15.3～16.5cmの508～512、19.8cmの516の５種類に分類できる。516は結晶片岩を含有する在地産のものと考えられ、小さな高台を貼り付け、口縁端部は外反して丸く収める。内面は2.5mm 幅のタテヘラミガキ、外面はヨコナデのち一部ヘラミガキ痕が認められる。517は底部にヘラ切り痕を残す程度のナデを施し、細身の高台を貼り付けている。底部の調整は、480，516が底部に回転ヘラ切り痕を留めない丁寧なナデを施し、506が回転ヘラ切り後のナデを施していない。それら以外はいずれも回転ヘラ切り離し痕を留める程度のナデ調整である。480，483，486，508，516は内外面に赤色塗彩を施している。

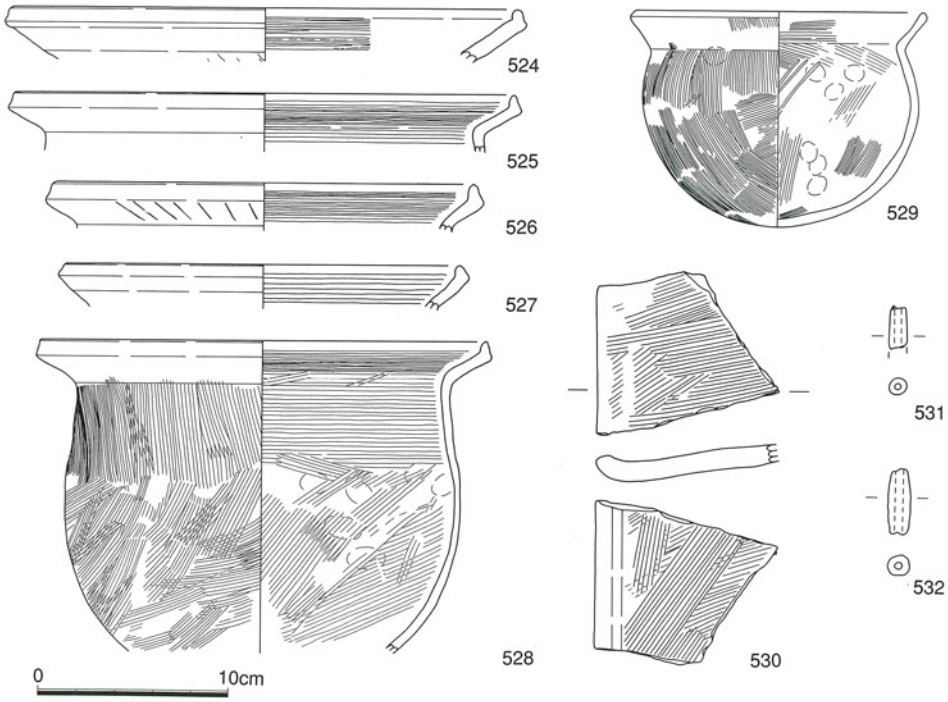
518は土師器高杯である。口縁端部を外反させ丸く収め、内外面に綿密なヨコヘラミガキを施している。内外面に赤色塗彩をしている。

519～523は黒色土器Ａ類椀である。いずれも結晶片岩を含むものである。



第55図　SK2014出土遺物実測図(1)

519は口縁端部が外反し、内面ヨコヘラケズリ、外面ヨコナデである。520は口縁端部が直立し内面と外面の口縁部上位にヨコヘラミガキ、外面口縁部下位はヨコナデ調整である。521，522は断面方形の高台であるのに対し、523は細身の高台である。



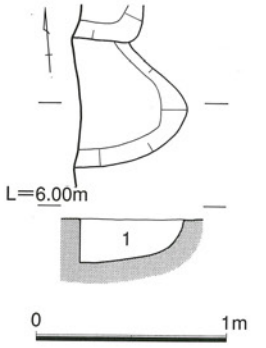
第56図　SK2014出土遺物実測図(2)

（第56図）

524～529は土師器甕である。529は丸底で球形の胴部から口縁部を「く」の字に屈曲し端部は面をなし上方に僅かに拡張する。内面は口縁部ヨコハケ，胴部指オサエ、外面は口縁端部ヨコナデ，胴部タテハケ調整である。524～528は口縁端部が上方に拡張し、内面ヨコハケ、外面は526がタタキのちヨコナデ、それ以外はヨコナデである。528は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部を丸く収める。内面口縁部から体部上位がヨコハケ，下位が指オサエのち不定方向のハケ、外面口縁部ヨコナデ，体部上位タテハケ，下位不定方向のハケである。

530は土師器竈である。内外面ともハケ調整である。

531，532は土師質の環状土錘である。



1．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土

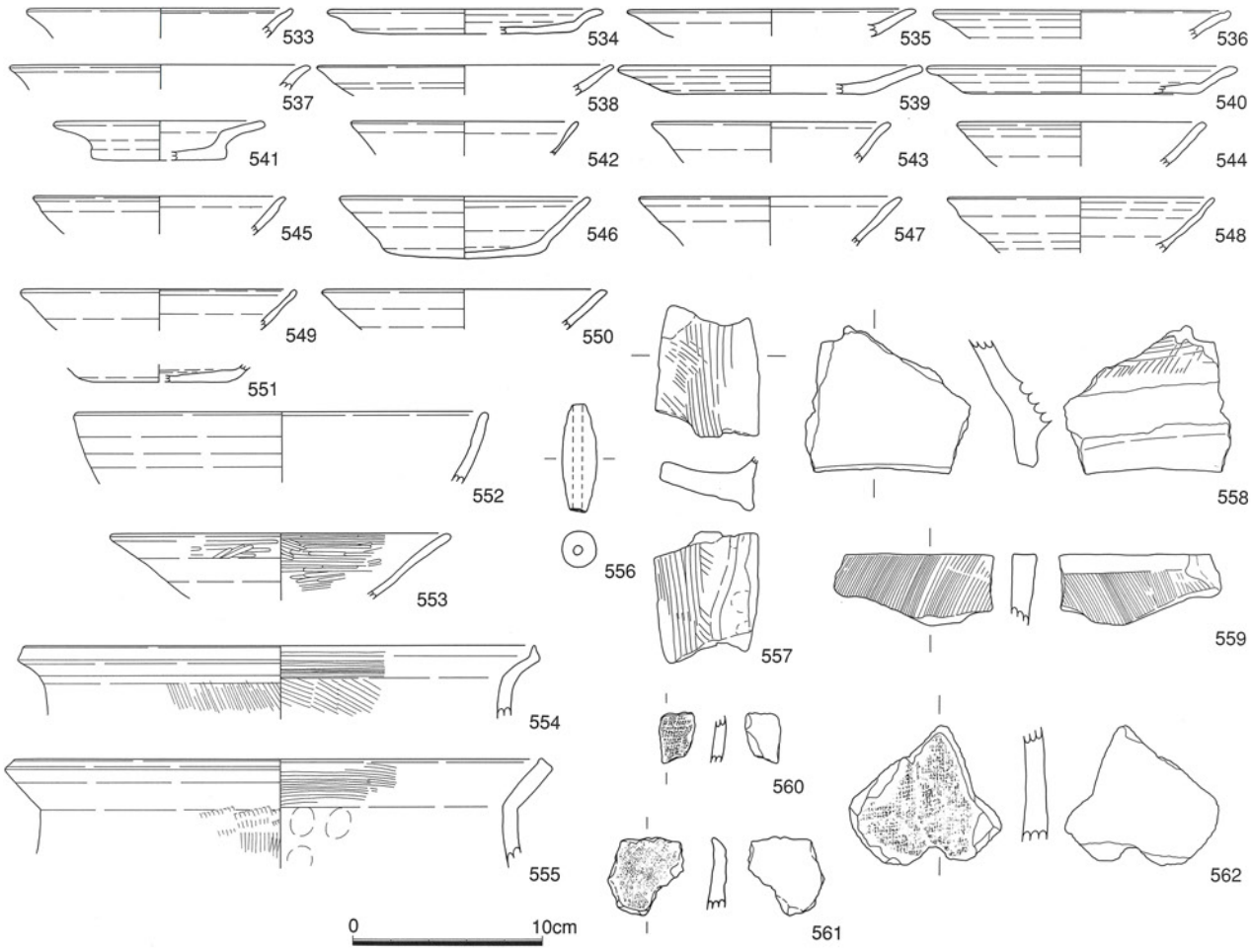
第57図　SK2017実測図

土坑 SK2017（第57図）

第１調査区南部西端に位置し、北側がSK2016に切られ、西側が調査区外にかかる土坑である。残存部の長軸0.74m，短軸0.56m，深さ0.22mを測り、断面浅いＵ字型を呈する。覆土は黄褐色粘質土であり、赤色塗彩を施したものを含む土師器，黒色土器Ａ類，土師質の製塩土器，竈等が出土した。

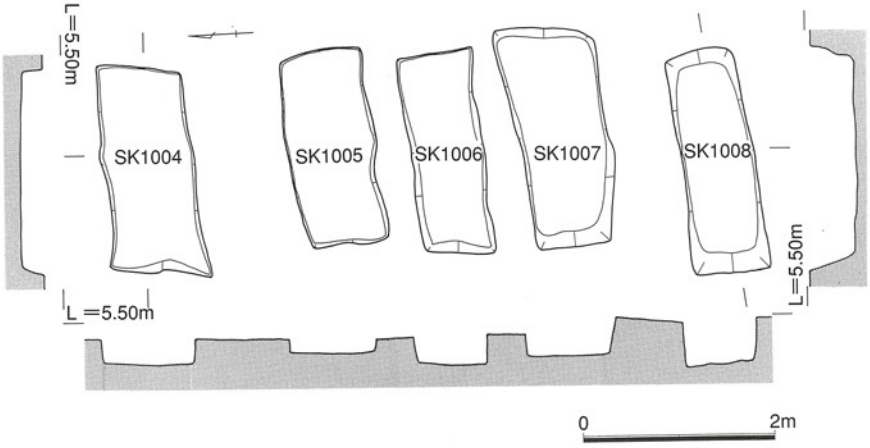
出土遺物（第58図）

533～541は土師器皿である。皿Ａ２類533，536、皿Ａ４類534、皿Ａ９類539、皿Ａ３類540、



第58図　SK2017出土遺物実測図

Ⅲ C 類541がある。法量からは口径10.8cmの541、13.9～14.3cmの533，534、15.1～15.9cmの535～540に分類できる。541は他の遺物同様に結晶片岩を含む精良な淡橙色の胎土である。534，539～541は底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整である。535～538は内外面に赤色塗彩を施している。



第59図　SK1004～SK1008実測図

542～551は土師器杯である。杯 A 2 類549、杯 A10類546がある。また542は口縁端部が肥厚し、543～545は口縁端部が外反し、547，548，550は口縁端部が真っ直ぐ伸びている。法量からは、口径11.9～12.4cmの542，543、12.8～13.2cmの544～546、13.8～14.7cmの547～550に分類できる。

548は口縁部上位内外面が黒色を呈している。いずれも内外面ヨコナデ調整であり、546，551は、底部回転ヘラ切り痕を留める程度のナデであり、内外面に赤色塗彩を施している。

552は鉢形土器である。内面，外面口縁部上位が黒色を呈しており、内外面ともヨコナデ調整である。古墳時代の遺物はこれ１点のみである。

553は黒色土器Ａ類杯である。内面と外面口縁部上位がヘラミガキ、下位がヨコナデ調整である。

554，555は土師器甕である。554は口縁端部が上方に拡張し、内面口縁部ヨコハケ，胴部ナナメハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。555は口縁端部が断面方形であり、内面口縁部ヨコハケ，胴部指オサエのちヨコナデ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。

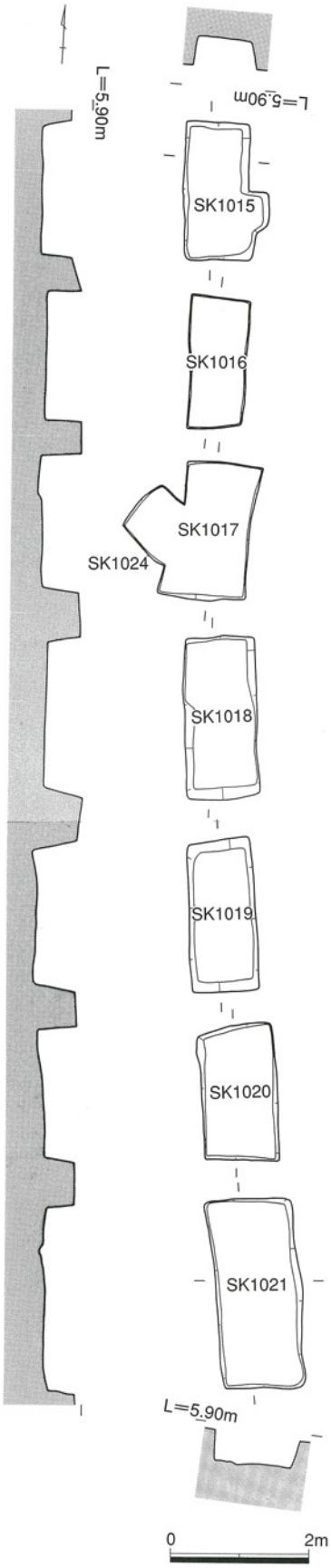
556は土師質の環状土錘である。

557～559は土師器竈である。557は両面粗いハケ、558は内面ナデ，外面粗いハケ、559は内外面とも細かいハケ，外面端部ナデである。

560～562は製塩土器である。いずれも結晶片岩を含み、561，562は胎土中に砂粒を多く含んでいる。560，562は内面布目痕、561は内面非常に細かい布目痕であり、560の内面が黒色を呈している。

土坑 SK1004～SK1008（第59図）

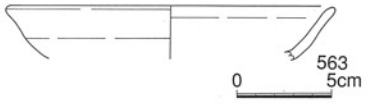
第４調査区北部東側に、南北方向に長辺側を背中合わせで並ぶ、平面長方形の５基の土坑群である。個々の土坑は、主軸方位はいずれもＮ－85°－Ｅを示し、長軸2.07～2.39m，短軸０.77～0.98m，深さ0.27～0.49mを測り、ほぼ垂直に掘り込み底部平坦な、断面長方形を呈している。中央３基が0.32mの間隔で並ぶのに対し、両端の２基はそれよりやや離れ、北端のSK1004がSK1005と0.96m、南端のSK1008がSK1007と0.72mの間隔をそれぞれ開けている。覆土はいずれも１層であり、SK1004が明黄褐色砂質土、SK1005がオリーブ褐色粘性砂質土、SK1006，SK1007，SK1008が黄褐色砂質土である。いずれからも出土遺物はなかった。



第60図　SK1015～SK1021実測図

土坑 SK1015～SK1021（第60図）

第４調査区中央部東側に、南北方向に短辺側を背中合わせで並ぶ、平面長方形の７基の土坑群である。主軸方位は北端のSK1015のN－３°－Wから、南端のSK1021のN－８°－Wまで緩やかな弓形状に７基は配置されており、間隔は全て０.50mと一定している。個々の土坑は、SK1015～SK1020が長軸1.96m～2.37m，短軸0.88～1.11m，深さ0.44～0.68mであるのに対し、南端のSK1021は長軸2.75m，短軸1.25mとやや規模が大きいものである。いずれも垂直に掘り込まれ底部が平坦な断面長方形を呈している。覆土は黄褐色及びオリーブ褐色系の粘性砂質土２～５層からなりいずれも水平堆積である。SK1015とSK1022、SK1017とSK1024の切合は不明瞭であるが、SK1018は溝SD1013及びSD1014を切っている。遺物は唯一SK1018から土師器杯が出土したのみである。



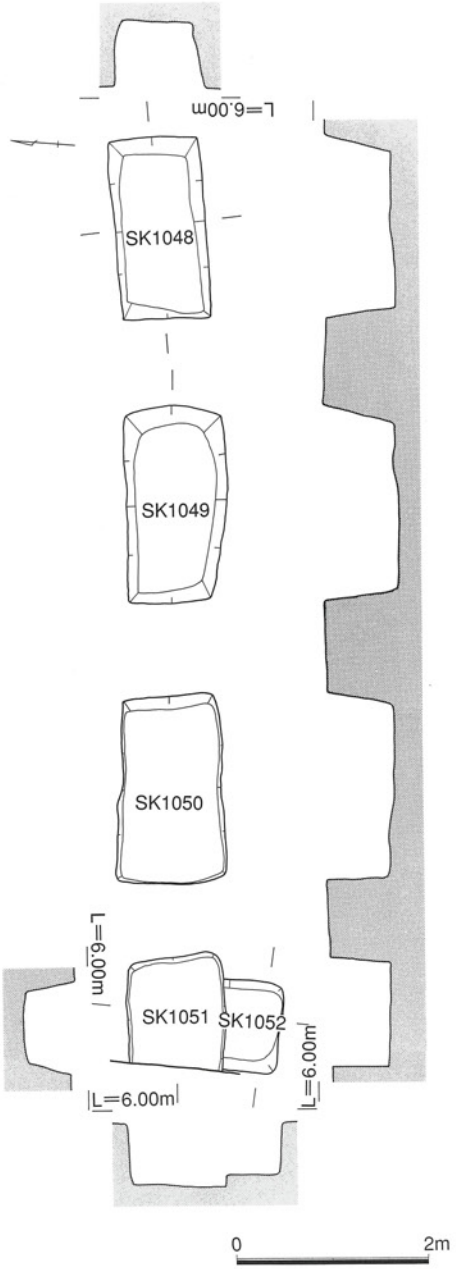
第61図　SK1018出土遺物実測図

SK1018出土遺物（第61図）

563は土師器杯である。口径17.1cmを測り、口縁端部を外反させ丸く収める。回転ナデ調整であり、内外面に赤色塗彩を施している。

土坑 SK1048～SK1051（第62図）

第４調査区南部に、東西方向に短辺側を背中合わせで並ぶ、平面長方形の４基の土坑である。主軸方位は西側の３基SK1049～SK1051が真東を示すのに対し、東端のSK1048は僅かに北側に折れるN－84°－Eを示している。個々の土坑は長軸1.91～2.05m，短軸0.96～1.13m，深さ0.65～0.81mを測り、土坑の間隔は全て0.88mと一定している。覆土は黄褐色及びオリーブ褐色系粘質土からなる２～４層の水平堆積であり、いずれからも遺物の出土はなかった。西端のSK1051は調査区外にかかっており、さらに西側に同様の土坑が連なることが考えられる。



第62図　SK1048～SK1052実測図

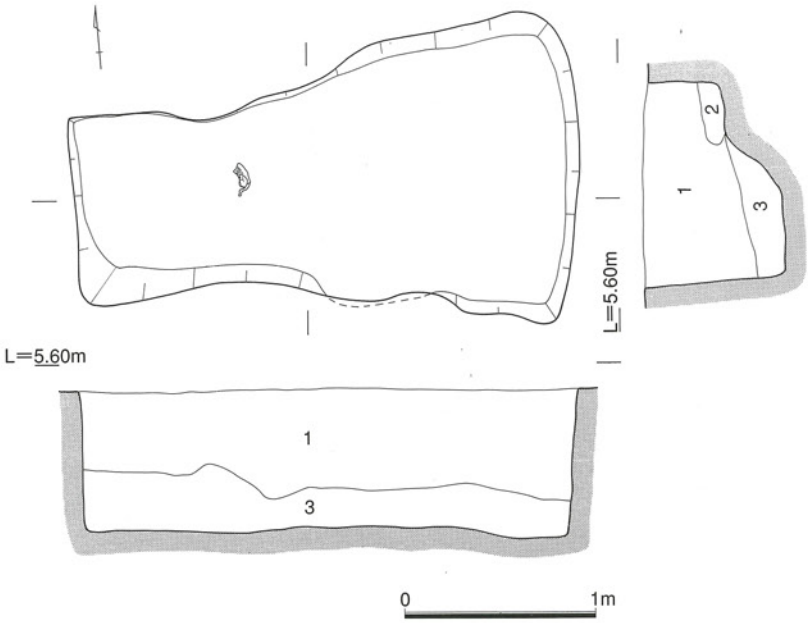
土坑 SK1023（第63図）

第４調査区中央部に東西方向に位置する土坑であり、長軸2.67m，短軸1.63m，深さ0.78mを測り、主軸方位はN－85°－Wである。形状は平面台形，断面長方形を呈し、北東部にテラス状の一段上がった平坦な床部がある。覆土は黄褐色系の粘質土２層と北東部の同じく１層からなる。

土師器甕が出土した。

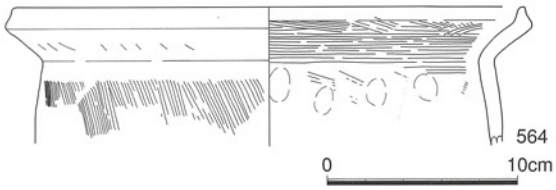
出土遺物（第64図）

564は土師器甕である。口縁部を「く」の字に折り曲げ、端部は面をなし上方に拡張している。内面口縁部ナナメハケのちヨコハケ，胴部指オサエのちナデ、外面口縁部タタキのちヨコナデ，胴部タテハケ調整である。



1．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土
2．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土、マンガンを含む
3．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土

第63図　SK1023実測図



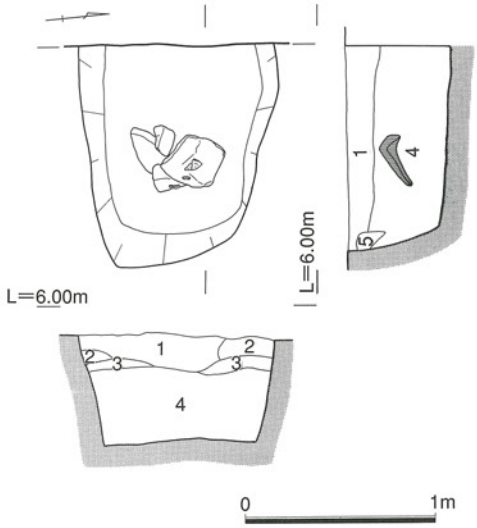
第64図　SK1023出土遺物実測図

土坑 SK1027（第65図）

第４調査区中央部西端に東西方向に位置する土坑であり、一部が調査区外にかかるが、残存部の長軸1.17m，短軸1.05m，深さ0.57mを測り、主軸方位はN－85°－Wである。形状は平面隅丸長方形，断面台形を呈し、覆土は下層のオリーブ褐色粘質土と、その上位の４層に分層できる黄褐色，オリーブ褐色系の砂質土及び粘性砂質土とからなる。下層には16～32㎝の砂岩礫が４個集まって検出し、上層から土師器杯１点が出土した。

出土遺物（第66図）

565は土師器杯である。口径14.5㎝を測り、口縁端部が直立してやや尖り気味に収めている。回転ナデ調整であり、内外面に赤色塗彩を施している。



1．黄褐色　2.5Y 5/4　砂質土
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘性砂質土
3．黄褐色　2.5Y 5/3　粘性砂質土　鉄分を含む
4．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　粘質土
5．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　砂質土

第65図　SK1027実測図

土坑 SK1028（第67図）

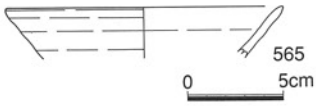
第４調査区中央部東端に東西方向に位置する土坑であり、一部が調査区外にかかるが、残存部の長軸0.85m，短軸1.11m，深さ0.41mを測る。平面楕円形，断面台形であるが、底部歪である。覆土は６層からなるが、主に下層がにぶい黄色の粘性砂質土及び砂質土，上層がオリーブ色系の粘性砂質土で占め

られ、それらの中に鉄分を含む灰オリーブ色粘性砂質土が混入した様態である。土師器皿，杯等が少量出土した。

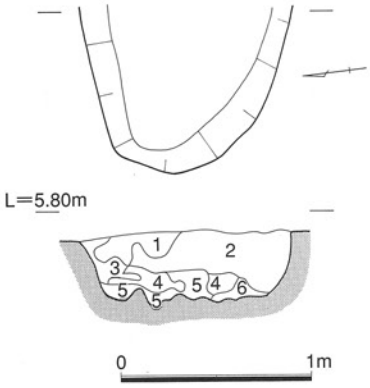
出土遺物（第68図）

566は土師器皿である。口縁端部が肥厚し内側に沈線を廻らせている。内外面とも回転ナデである。

567は土師器杯である。底部回転ヘラ切りのちナデであり、内外面に赤色塗彩を施している。

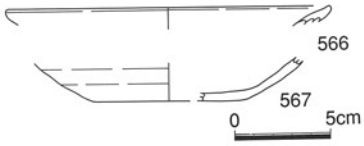


第66図　SK1027出土遺物実測図



1．オリーブ黄色　5Y6/4　粘性砂質土
2．オリーブ色　5Y5/4　粘性砂質土
3．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土
4．灰オリーブ色　5Y6/2　粘性砂質土
　鉄分を含む
5．にぶい黄色　2.5Y6/8　砂質土
6．にぶい黄色　2.5Y6/8　粘性砂質土

第67図　SK1028実測図



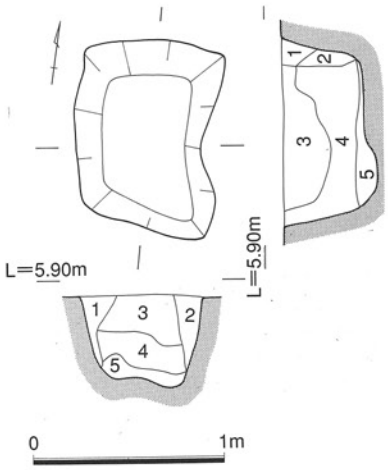
第68図　SK1028出土遺物実測図

土坑 SK1037（第69図）

第４調査区中央部に南北方向に位置する土坑であり、長軸1.03m，短軸0.74m，深さ0.53mを測る。主軸方位はN－8°－Wを示し、平面は東部が括れた長方形、断面は台形を呈している。覆土は粘質土５層からなり、土師器甕が１点出土している。

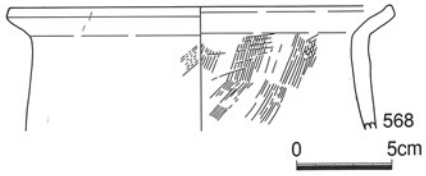
出土遺物（第70図）

568は土師器甕である。口縁部「く」の字に折り曲げ端部は面をなし上方に拡張している。内面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケ、外面口縁部ヨコナデである。



1．オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土
2．黄褐色　2.5Y5/3　粘質土
　マンガンを多量に含む
3．オリーブ褐色　2.5Y4/6　粘質土
4．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土
5．にぶい黄色　2.5Y6/4　粘質土

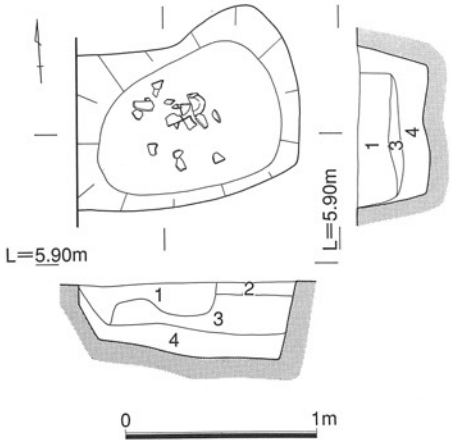
第69図　SK1037実測図



第70図　SK1037出土遺物実測図

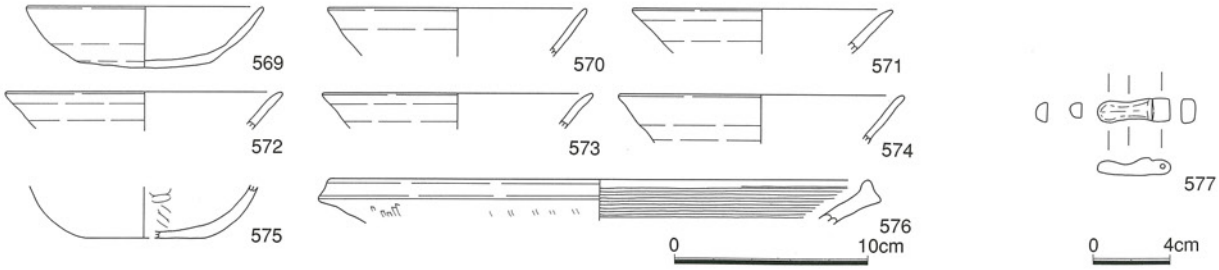
土坑 SK1039（第71図）

第４調査区中央部西端に位置する東西方向に構築された土坑で、西端部が撹乱に切られるが、平面隅丸長方形，断面台形を呈し、残存部の長軸1.17m，短軸0.97m，深さ0.39mを測り、主軸方位N－85°－Eを示している。覆土は４層からなり、赤色塗彩したものを含む土師器杯，黒色土器Ａ類，帯金具等が出土している。



1．黄褐色　2.5Y5/4　粘質土
　マンガンを含む
2．にぶい黄色　2.5Y6/3　砂質土
3．オリーブ褐色　2.5Y4/4　粘質土
　マンガンを含む
4．オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘質土

第71図　SK1039実測図



第72図　SK1039出土遺物実測図

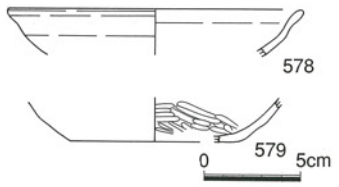
出土遺物（第72図）

569～574は土師器杯である。569は口径12.4cm，器高3.2cmを測るもので、口縁端部が直立し、内外面ヨコナデ調整、底部回転ヘラ切り後丁寧なナデである。内外面に赤色塗彩を施している。570，571は口径13.6cm、572～574は14.5cm前後を測り、いずれも口縁端部が直立している。570，571は赤色塗彩を施している。

575は黒色土器A類杯である。内面黒色処理されており、磨耗激しく詳細不明であるものの、僅かにヘラミガキ痕が認められ、外面底部は丁寧なナデを施している。胎土中に結晶片岩を含むものである。

576は土師器甕である。口縁端部が面をなして上下に拡張し、端部はヨコナデ、内面は強いヨコハケ、外面はタタキのちヨコナデ調整である。

577は帯金具における鉸具刺金部分である。基部に径1.5mmの穿孔が有り、軸棒を通して外枠と連結していたと考えられる。



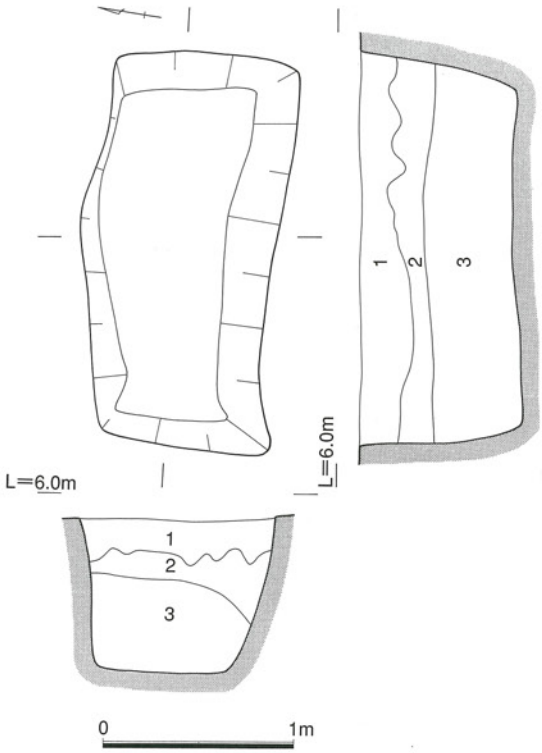
第73図　SK1042出土遺物実測図

土坑SK1042出土遺物（第73図）

土坑SK1042は第4調査区中央部西端に位置し、SD1015及びSD1016に切られ全容は不明であるが、残存部の長軸，短軸ともに0.78m、深さ0.12mを測り、断面レンズ状を呈する。ここでは出土遺物のみ紹介する。

578は内外面に赤色塗彩を施した土師器杯である。口径15.3cmを測り、口縁端部を外反させ丸く収める器形であり、内外面ともにヨコナデ調整である。

579は黒色土器A類杯である。胎土中に結晶片岩を含むもので、内面に綿密なヘラミガキを施し、外面はヨコナデ、底部は丁寧なナデである。



1．黄褐色　2.5Y 5/3　砂質土
2．黄褐色　2.5Y 5/4　粘性砂質土
3．暗オリーブ色　5Y 4/4　粘性砂質土

第74図　SK1046実測図

土坑 SK1046（第74図）

第４調査区南部東側に位置する平面長方形の土坑であり、断面は台形を呈している。長軸2.09m，短軸1.05m，深さ0.82m を測り、主軸方位はＮ－86°－Ｅである。遺構内の覆土は水平堆積の３層からなり下層はやや粘性が強い。赤彩を施した土師器甕等が出土している。

出土遺物（第75図）

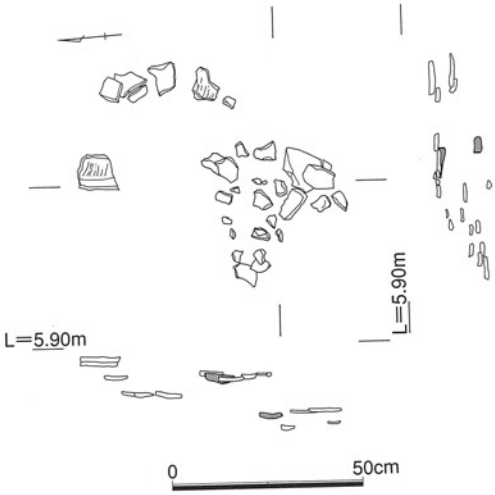
580は土師器甕である。口径28.7cmを測るもので、口縁端部は面を形成し、内面は強いヨコハケ及びヨコナデ、外面はヨコナデ調整である。内外面に赤色塗彩を施している。砂粒多く結晶片岩を含むものである。

第75図　SK1046出土遺物実測図

土器溜り

土器溜り SZ2001（第76図）

第１調査区第２遺構面における北東部に位置する土器溜りである。平面プランは検出できなかったが、長軸0.7m 程の範囲に、径３～５cmの礫と混在した土師器片等が深さ0.21m 程度にわたり堆積している。土師器のほとんどに赤色塗彩を施している。



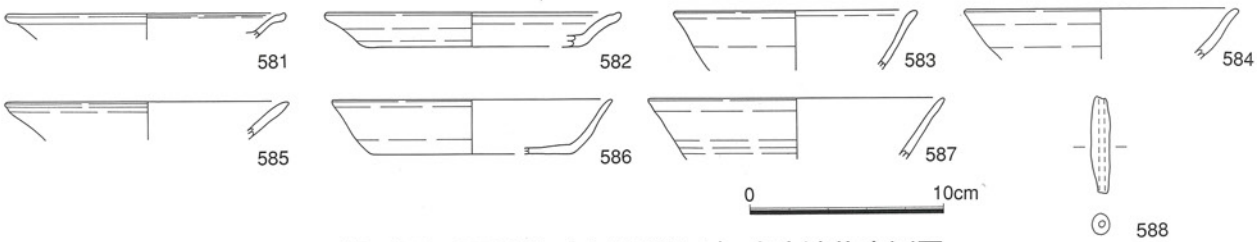
第76図　SZ2001（土器溜り１）実測図

出土遺物（第77図）

581，582は土師器皿Ａ２類である。581は口径14.3cm、582は口径15.3cm，器高1.8cmを測るものであり、ともに口縁端部内側に１条の沈線を廻らせ、内外面ヨコナデ調整であって、内外面に赤色塗彩を施している。

583～587は土師器杯である。586は杯 A13類であり、583，584は口縁端部が外反し、585，587は口縁端部が真っ直ぐ伸びる。法量からは口径12.7cmの583と14.2～14.5cmの584～586に分類できる。586は底部回転ヘラ切り離し後丁寧なナデ調整である。584～587は内外面に赤色塗彩を施している。

588は土師質の環状土錘である。



第77図　SZ2001（土器溜り１）出土遺物実測図

不明遺構

不明遺構 SX1002（第40図，図版２－５）

第４調査区中央部西側に位置する平面不整形の遺構であり、南側がSD1013に，東側が撹乱に切られ全容は不明であるが、残存部の長軸1.06m，短軸0.87m，深さ0.61mを測る。北側及び西側では、縁辺部が僅かに断面レンズ状に下った後垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。

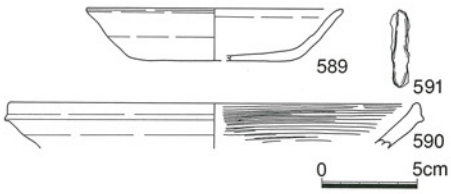
覆土は黄褐色系及びオリーブ褐色系の６層に分層できるが、下層ほど粘性が高くなっている。遺構底面に長径15cmの円盤状の砂岩を１個置き、それを覆い隠すように５～30cmの不整形な９個の緑色片岩を不規則に重ねている。礫間及び周辺には土師器片が散在している。

出土遺物（第78図）

589は土師器杯Ａ３類である。口径13.3cm，器高2.8cmを測り、口縁端部は僅かに外反し丸く収めている。内外面ヨコナデ調整で底部回転ヘラ切り後丁寧なナデで仕上げ、内外面に赤色塗彩を施している。

590は土師器甕である。口径21.5cmを測り、口縁端部は面をなして上下に拡張する。内面強いヨコハケ、外面ヨコナデである。

591は金属製品である。腐食激しく詳細不明であるが、断面長方形である。



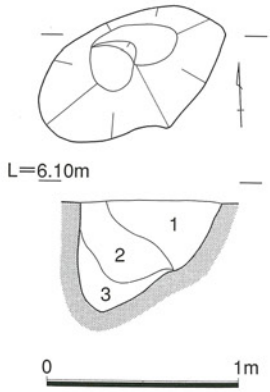
第78図　SX1002出土遺物実測図

小穴・柱穴

ここでは、第１～４調査区における建物及び柵列を構成するもの以外の柱穴及び小穴またそれらの出土遺物について紹介する。

小穴 SP2001（第79図）

第１調査区北東隅に位置し、長軸1.05m，短軸0.63m，深さ0.64mを測る、平面楕円形，断面Ｖ字型の小穴である。覆土は３層の粘質土に分層でき、各層より土師器，黒色土器Ａ類等が出土している。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　粘質土
　炭化物、マンガンを含む
2．褐色　10YR 4/4　粘質土
　炭化物、マンガンを含む
3．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土
　炭化物を含む

第79図　SP2001実測図

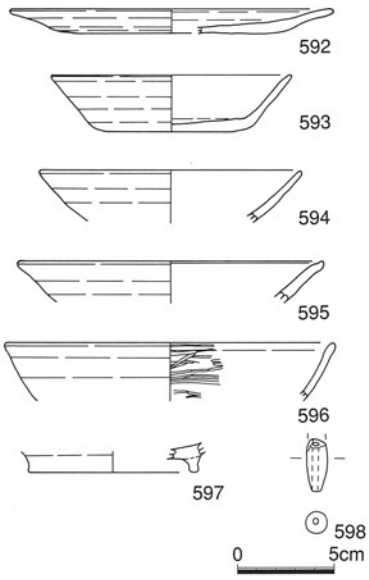
出土遺物（第80図）

592は土師器皿Ａ４類である。口径16.6cm，器高1.8cmを測り、口縁部が低く立ち上がり内面の底部と口縁部の境がない円盤状を呈し、口縁端部内側に弱い沈線を廻らせている。底部回転ヘラ切り後丁寧なナデである。

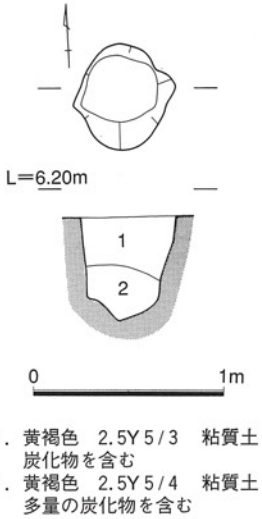
593～595は土師器杯である。593は口径12.6cm，器高3.0cmを測り、口縁端部が直立し、底部回転ヘラ切り後丁寧なナデである。594は口径13.6cmを測り口縁端部は直立する。595は口径15.9cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせており、赤色塗彩を施している。593は杯A10類、595は杯Ａ２類に比定できる。

596, 597は黒色土器A類椀である。共に結晶片岩を含み、596は口縁端部が僅かに外反する器形であり、597は断面方形の高台を付けている。内面ヨコヘラミガキ、外面ヨコナデである。

598は土師質の環状土錘である。



第80図　SP2001出土遺物実測図



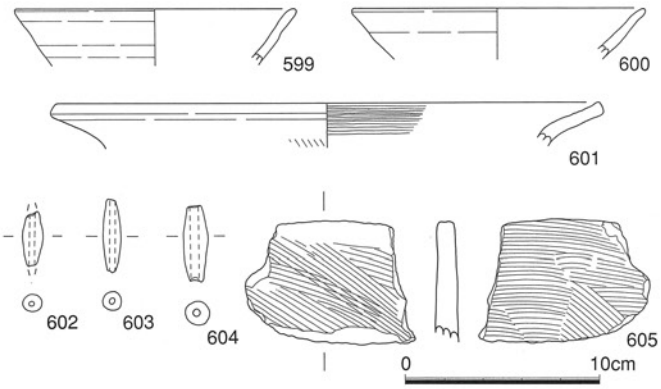
第81図　SP2003実測図

小穴 SP2003（第81図）

第1調査区北東隅に位置し、長軸0.56m，短軸0.50m，深さ0.56mを測る、平面隅丸方形，断面U字型の小穴である。覆土は炭化物を含む黄褐色系の粘質土2層からなり、第1層から土師器，黒色土器A類等が出土している。

出土遺物（第82図）

599は土師器杯である。口径14.7cmを測り、口縁端部が直立し、内外面に赤色塗彩を施す。



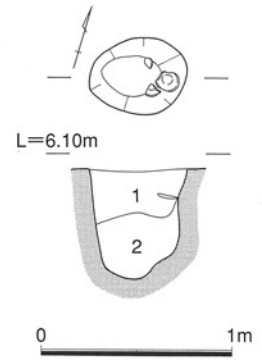
第82図　SP2003出土遺物実測図

600は黒色土器A類椀である。結晶片岩を含むものであり、口径15.1cmを測り、内面は黒色処理され磨耗激しいがヘラミガキ痕が認められ、外面はヨコナデ調整である。

601は土師器甕である。口縁端部は面をなして僅かに下方に拡張し、内面ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。

602～604は土師質の環状土錘である。

605は土師器竈である。端部は面をなしヨコナデ、内外面ハケである。



第83図　SP2015実測図

小穴 SP2015（第83図）

第1調査区北部中央に位置し、長軸0.53m，短軸0.42m，深さ0.51mを測る、平面楕円形，断面U字型の小穴である。覆土は炭化物，マンガンを含む暗灰黄色及びオリーブ褐色の粘質土2層からなり、土師器杯が出土している。

出土遺物（第84図）

606～609は土師器杯である。606は口径12.6cmを測り内外面に赤色塗彩を施す。607は口径12.6cmであるが器高3.6cmと深めのタイプである。共に口縁端部が外反する。608は口径13.3cm，器高3.2cm、609は口径14.8cm，器高3.3cmを測る。ともに口縁端部が僅かに外反している。607～609は底部回転ヘラ切り後ナデである。607は杯Ａ７類、608は杯Ａ３類、609は杯A10類に比定できる。

第84図　SP2015出土遺物実測図

小穴 SP2041（第85図）

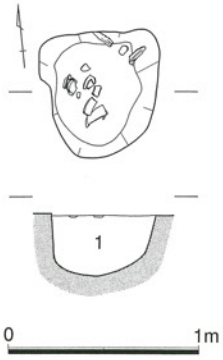
第１調査区北西部に位置し、長軸0.66m，短軸0.64m，深さ0.32m を測る、平面隅丸台形，断面Ｕ字型の小穴である。覆土は炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色粘質土１層であり、土師器類が出土している。

出土遺物（第86図）

610，611は土師器皿である。610は口径16cm，器高1.5cmを測り、口縁端部は外反するものであり、内外面に赤色塗彩を施している。611は口径17.5cm，器高1.9cmを測り、口縁部は低く立ち上がり端部内側に弱い沈線を廻らせており、内面に底部と口縁部の境がなく円盤状を呈するタイプである。底部回転ヘラ切り後ナデである。610は皿Ａ３類、611は皿Ａ４類である。

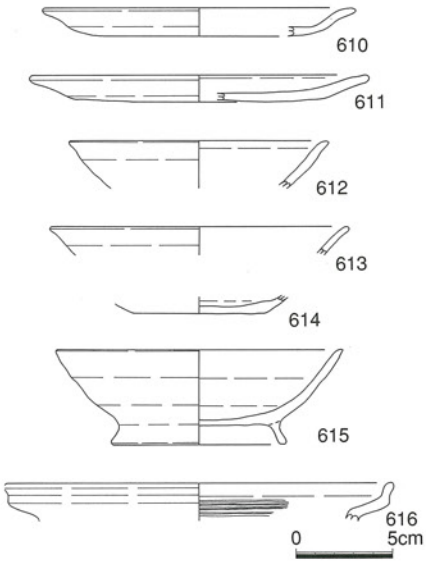
612～615は土師器杯である。612は口径13.5cm、613は15.5cmを測り、共に口縁部が外反する。614は底部回転ヘラ切り後ナデである。615は土師器杯Ｂ５類である。口径14.9cm，器高５cmを測り、内外面ヨコナデ、底部回転ヘラ切り後丁寧なナデであり、細身の高台を断面「八」の字状に貼り付けている。

616は土師器甕である。口縁部が上方に大きく屈曲し、内面ヨコハケ、外面ヨコナデである。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘質土
炭化物、マンガンを含む

第85図　SP2041実測図



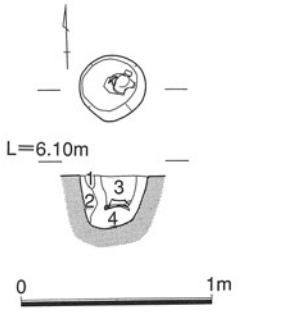
第86図　SP2041出土遺物実測図

柱穴 SP2042（第87図）

第１調査区北西部に位置し、直径0.35m，深さ0.28m を測る、平面円形，断面Ｕ字型の柱穴である。覆土は粘質土４層に分層でき、第３層から土師器類が出土している。

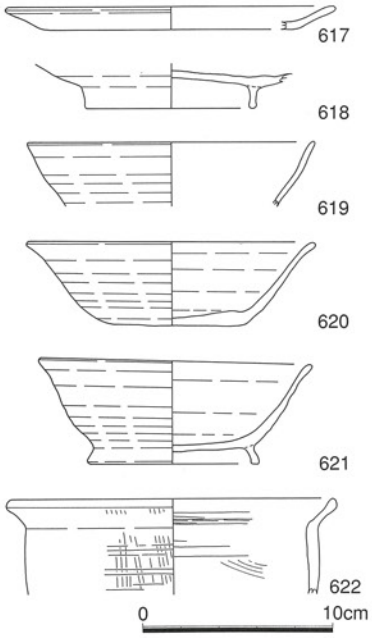
出土遺物（第88図）

617は土師器皿Ａ４類、618は足高高台気味の土師器皿Ｂ類である。617は口径17cm，器高1.2cmを測り、口縁端部が直立している。618は底部回転ヘラ切り後ナデであり、細身の高台を貼り付けている。



1．褐色　10YR 4/4　粘質土
マンガンを含む
2．黄褐色　10YR 5/6　粘質土
マンガンを含む
3．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　粘質土
炭化物、マンガンを含む
4．黄褐色　2.5Y 5/4　粘質土
炭化物、マンガンを含む

第87図　SP2042実測図



第88図　SP2042出土遺物実測図

619～621は土師器杯である。620は杯Ａ７類、621は杯Ｂ１類である。619は口径15cm、620は口径15cm，器高4.4cmを測り、共に口縁端部が外反し、620は底部回転ヘラ切り後ナデ調整である。621は口径14.1cm，器高5.5cmを測り、口縁端部は外反し、細身の高台を断面「八」の字状に貼り付けている。

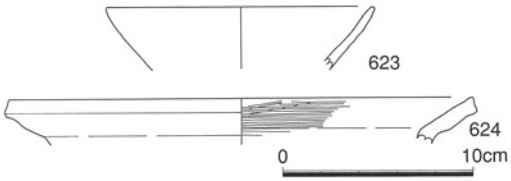
622は土師器甕である。口縁部「く」の字に屈折し端部は肥厚する。内面ヨコハケ、外面口縁部タテハケ後ヨコナデ，胴部タテハケ後ヨコハケを施している。

小穴 SP1006内出土遺物（第89図）

第４調査区中央部に位置する柱穴であり、土師器数点が出土している。

623は土師器杯である。口径14cmを測り、口縁端部は直立している。

624は土師器甕である。口縁端部が面をなし上下に拡張するものであり、内面ヨコハケ，外面ヨコナデ調整である。

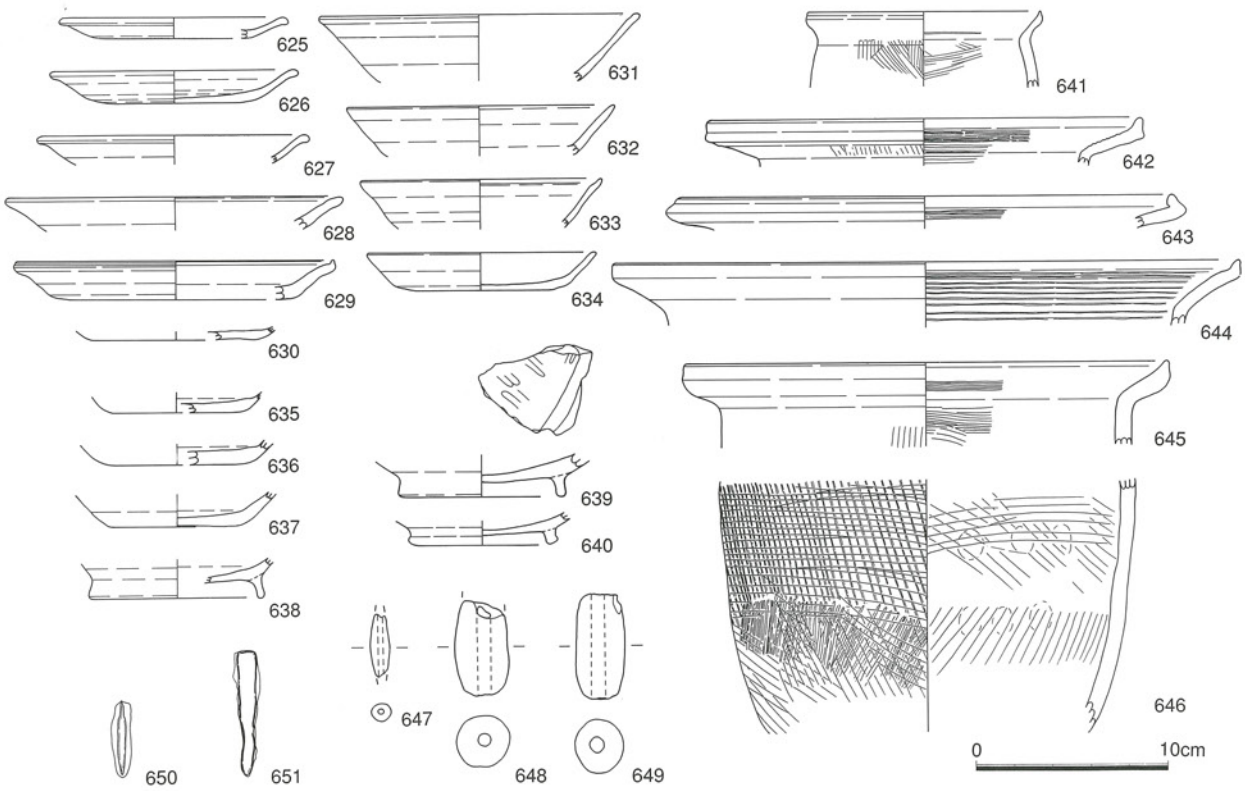


第89図　SP1006出土遺物実測図

第１調査区柱穴・小穴内出土遺物（第90図）

第１調査区における今まで紹介した以外の柱穴からの出土遺物を一括して紹介する。出土遺構は観察表を参照されたい。

625～630は土師器皿である。625，626は皿Ａ３類、628，629は皿Ａ２類である。625は口径11.4cm、626は12.4cm、627は13.8cmを測り、いずれも口縁端部が肥厚して外反し、626は底部回転ヘラ切り後丁寧なナデを施す。628は口径17.4cmを測り、口縁端部内側に弱い沈線を廻らせている。629は口径16.5cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせており、内外面に赤色塗彩を施す。630は底部回転ヘラ切り後ナデであり、内外面に赤色塗彩を施している。



第90図　第１，４調査区柱穴出土遺物実測図

631～638は土師器杯である。631は口径16.6cmを測り、口縁端部は外反している。632は口径13.9cmを測り、口縁端部は直立している。633は口径12.6cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせており、内外面に赤色塗彩を施している。634は口径12cm，器高２cmを測り、口縁端部は直立し、底部回転ヘラ切り痕を留めない丁寧なナデである。杯Ａ４類に比定できる。635～637は底部回転ヘラ切り後丁寧なナデである。638は土師器杯Ｂ類である。底部回転ヘラ切り後ナデであり、「八」の字に開く細身の高台を貼り付けている。

639，640は黒色土器Ａ類椀である。639はやや細身の高台を貼り付け、内面ヘラミガキである。640は断面方形の「八」の字に開く高台を貼り付け、内面を黒色処理し、磨耗激しいがヘラミガキ痕が認められる。

641～646は土師器甕である。641は口縁端部を摘み上げ断面三角形を呈しており、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヨコハケ、胴部外面タテハケである。642は口縁端部を上方に拡張し、外面口縁部にタテハケのちヨコナデ調整を加えている。643は口縁端部を「く」の字に上方に屈曲させ、644は口縁端部を上方に拡張させ、共に内面ヨコハケ、外面ヨコナデである。645は口縁端部が上方に僅かに拡張し、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。646は長胴型であり、内面ナナメハケ上位はのちヨコハケ、外面タタキのち上位ヨコハケ，下位ナナメハケである。

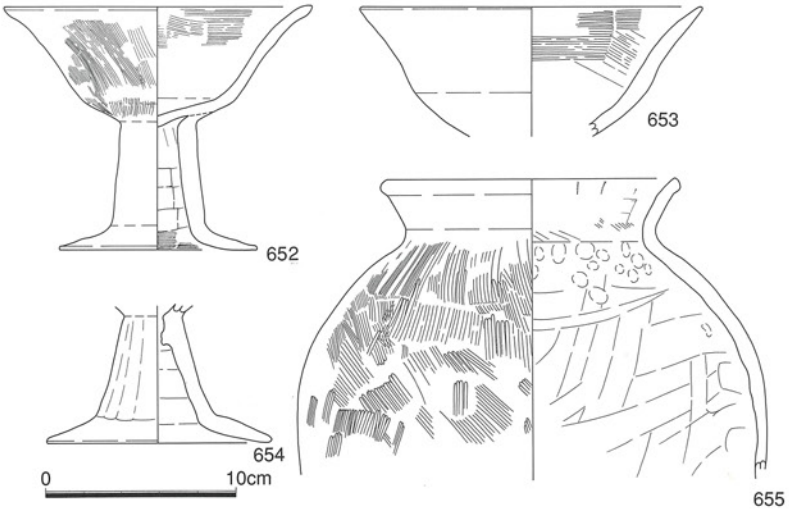
647～649は土師質の環状土錘である。650，651は釘状の金属製品である。

(2) 遺構外出土の遺物

古墳時代包含層出土遺物（第91図）

第４調査区最南端のF36, G36グリッドにおいて第４層及び第５層から、古代の遺物に混じり、古墳時代の土師器高杯，壺が少量出土している。この地区は現在の渡内川北岸低湿地にあたり、遺構は確認されなかったが、南岸の第５～第10調査区には当該期の遺構が広がっている。図化し得たもの４点中３点が高杯である。

いずれも結晶片岩を含む在地産である。652～654は土師質の高杯である。652は口縁部が大きく発達し端部を丸く収める。杯部内面ヨコハケ、外面タテハケである。柱状部内面横方向のヘラケズリ、裾部内面ヨコハケである。



第91図　第４調査区遺構外出土遺物実測図

第６層出土遺物（第92図）

第１，２調査区の第６層中遺構以外からの出土遺物を紹介する。

656～664は土師器皿である。皿Ａ３類656～662、皿Ａ８類663、皿Ｂ４類664がある。法量からは口径13.9～14.6cmの656～660，662、15.0～15.8cmの661，663，664がある。いずれも底部回転ヘラ切り離し後ナデを施している。664は「八」の字状に細身の高台を貼り付けている。662は内外面に赤色塗彩を施している。

665～671は土師器杯である。杯A13類665，666，671、杯A10類667、杯Ａ５類668、杯Ａ３類669，670がある。法量からは口径12.4～13.3cmの667～670、14.0～14.7cmの665，666，671がある。いずれも底部回転ヘラ切り痕を留める程度のナデである。665～667，671は内外面に赤色塗彩を施している。

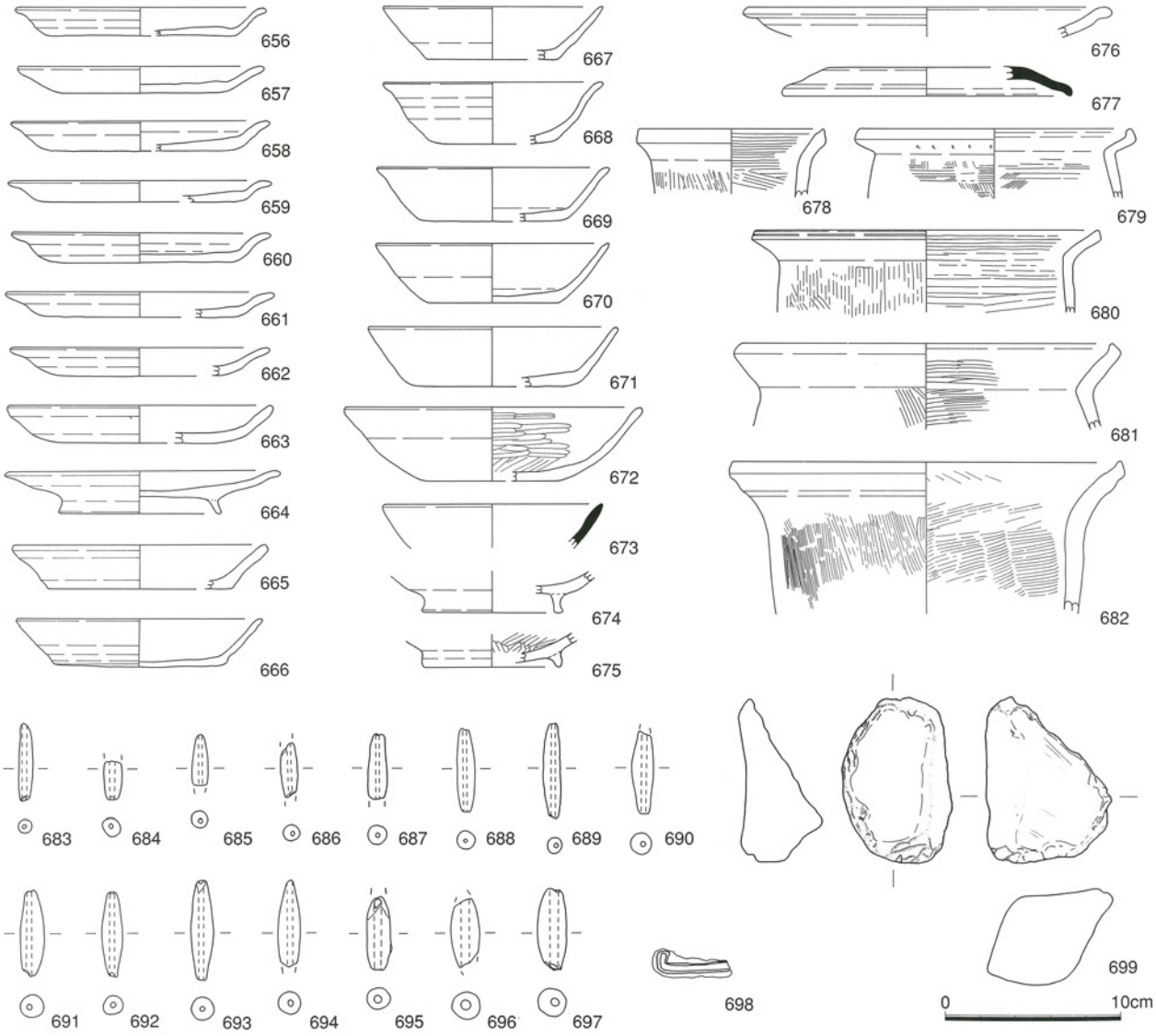
672は黒色土器Ａ類杯である。口径16.8cm，器高4.2cmを測り、内面に黒色処理が一部不十分でありながらもヘラミガキを施し、外面ヨコナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ調整である。

673は須恵器杯である。口径12.5cmを測り、口縁端部が直立している。

674は土師器杯Ｂ類である。細身の高台を貼り付けている。

675は黒色土器Ａ類椀である。「八」の字に開く高台を貼り付けており、内面ヘラケズリ、底部丁寧なナデである。

676は土師器高杯である。口径20.4cmを測り、口縁端部を強く外側へ屈曲させており、内外面ヨコナデ調整で、赤色塗彩を施している。



第92図　第１，２調査区第６層出土遺物実測図

677は須恵器蓋である。口径16.4cmを測り、口縁端部を下方に拡張している。

678～682は土師器甕である。678，682は口縁部を緩やかに外反させ端部は面をなし、682は端部を上下に拡張している。678は内面口縁部ヨコハケ，胴部ナナメハケ、682は口縁部ナナメハケのちヨコナデ，胴部ヨコハケであり、外面はともに口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。679～681は口縁部を「く」の字に屈曲させて端部は面をなし、679，681は上方に拡張している。679は比較的砂粒が少なく、口縁部ヨコナデ、胴部内面ヨコハケ、胴部外面縦のち横方向のハケである。680，681は砂粒を多く含み、内面ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。

683～697は土師質の環状土錘である。胴径0.8cm，長さ4.5cm，穴径0.3cmの683、胴径1.1cm前後，長さ５cm，穴径0.3cm前後の684～694、胴径1.7cm，長さ5.2cm，穴径0.5cmの695～697に分類できる。

698は金属製の釘である。腐食が激しいがエックス線撮影によれば、先端部が直角に屈曲して

いる。

699は砥石である。砂岩製で隣接した2平面を使用している。

第5層出土遺物（第93図）

ここでは第1～2調査区の第5層から出土の遺物を紹介する。

700～712は土師器皿である。皿A14類700、皿A16類701、皿A4類702、皿A5類703、皿A8類704，706、皿A3類707，708、皿A17類710、皿A2類711，712がある。712は高杯の可能性もある。法量から口径9.8～10.0cmの700，701、13.4cmの702，703、14.5～14.8cmの704～708、15.5cmの709、17.2～17.6cmの710，711、19.8cmの712がある。いずれも底部回転ヘラ切り離し後ナデを施す。710，711は内外面に赤色塗彩を施している。

713～715は土師器杯である。713は杯A3類、714は杯A4類に比定される。713は口径13.4cm，器高3.3cm、714は口径13.3cm，器高2.7cmを測り、共に口縁端部が外反し、底部回転ヘラ切り後ナデである。715は断面方形の高台が付き、内外面に赤色塗彩を施している。

716～718は黒色土器A類椀である。716は口径16.8cmを測り、口縁端部を外反させ丸く収めている。718は細身の「八」の字に開く高台を貼り付け、717も貼り付け痕が認められる。いずれも結晶片岩を含み、内面ヘラミガキ、外面ヨコナデである。

719は土師器蓋である。中央が凹型の擬宝珠様摘みが付され、内面はヘラミガキが施され黒色を呈している。

720は黒色土器A類高杯である。結晶片岩を含むものであり、口縁端部を外反させ、内面ヘラミガキが施されている。

721は土師器高杯である。脚柱部不整な十角形に面取りし、赤色塗彩を施している。

722は緑釉陶器皿である。京都系の軟質なものであり円盤高台を有し、あさい緑12G 5 S7.5を呈する緑釉を内外面に掛けている。

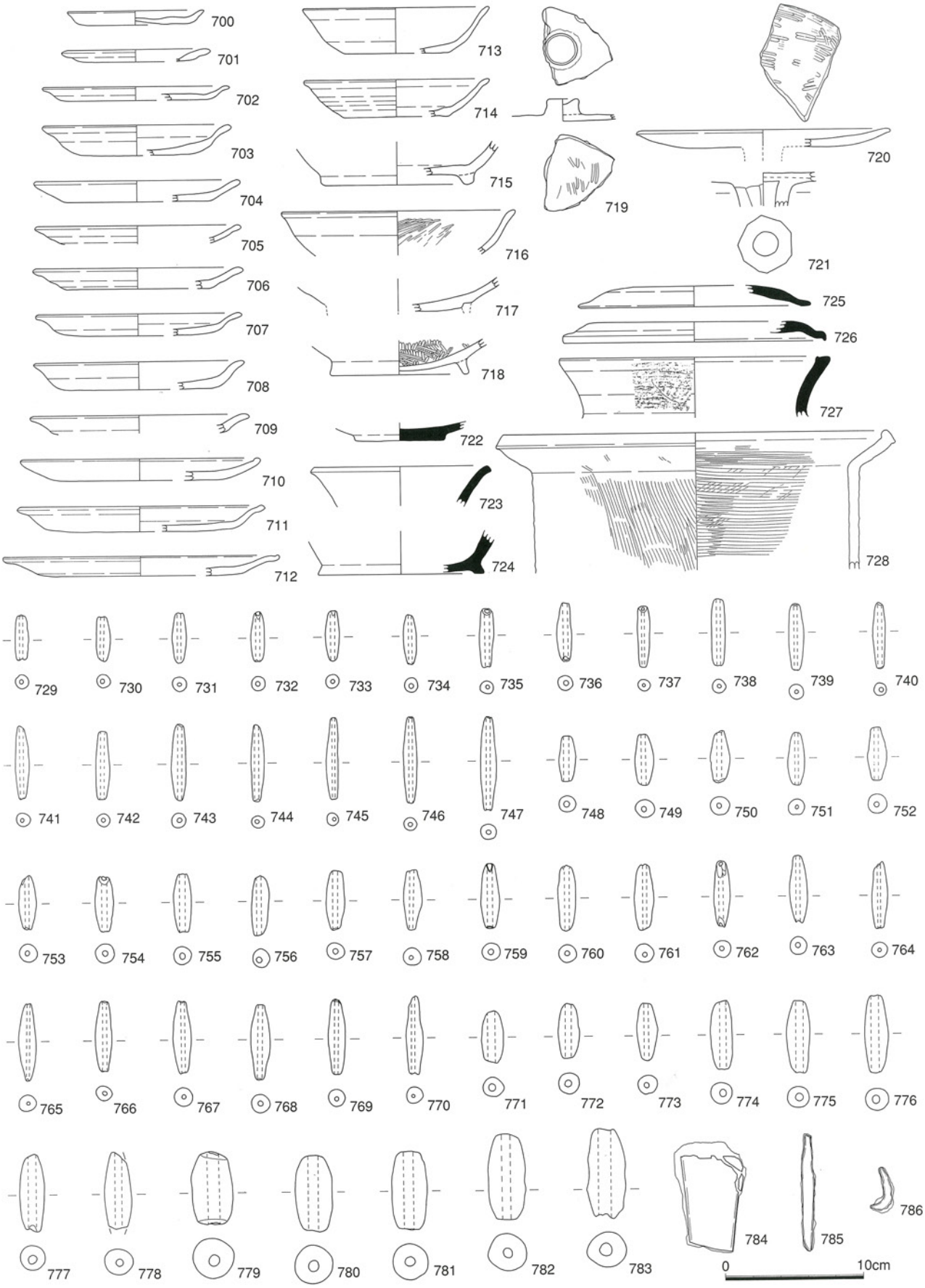
723，724は須恵器壺である。723は口縁端部が面をなし外側へ拡張しており、内外面回転ナデで、外面には自然釉が掛かる。724は底部端に「八」の字状に開く断面方形の低い高台を付けている。外面はヨコナデ、内面と底部は特に粗なナデである。

725，726は須恵器蓋である。

727は須恵器甕である。口縁端部は面をなし内側へ拡張しており、内外面回転ナデであるが、口頸部外面には平行タタキの痕跡が観られる。

728は土師器甕である。口縁端部が面をなし上方に拡張し外側に沈線を有するものであり、内面ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ、胴部強いタテハケであり口縁部にその工具痕が観られる。

729～783は土師質の環状土錘である。第5層においては特に高い割合で出土している。729～747は胴径1.0cm前後，穴径0.3cm、748～770は胴径1.4cm前後，穴径0.4cm、771～774は胴径1.7cm前後，穴径0.5cm、775～778は胴径1.8cm前後，穴径0.6cm、779～783は胴径2.8cm前後，穴径0.7cmを測る。741，747は黒色を呈し、777は硬質のものである。



第93図　第１，２調査区第５層出土遺物実測図

784～786は金属製品である。いずれも腐食が激しいがエックス線撮影による外形から、784は鉄斧の可能性がある。

第４層出土遺物（第94図）

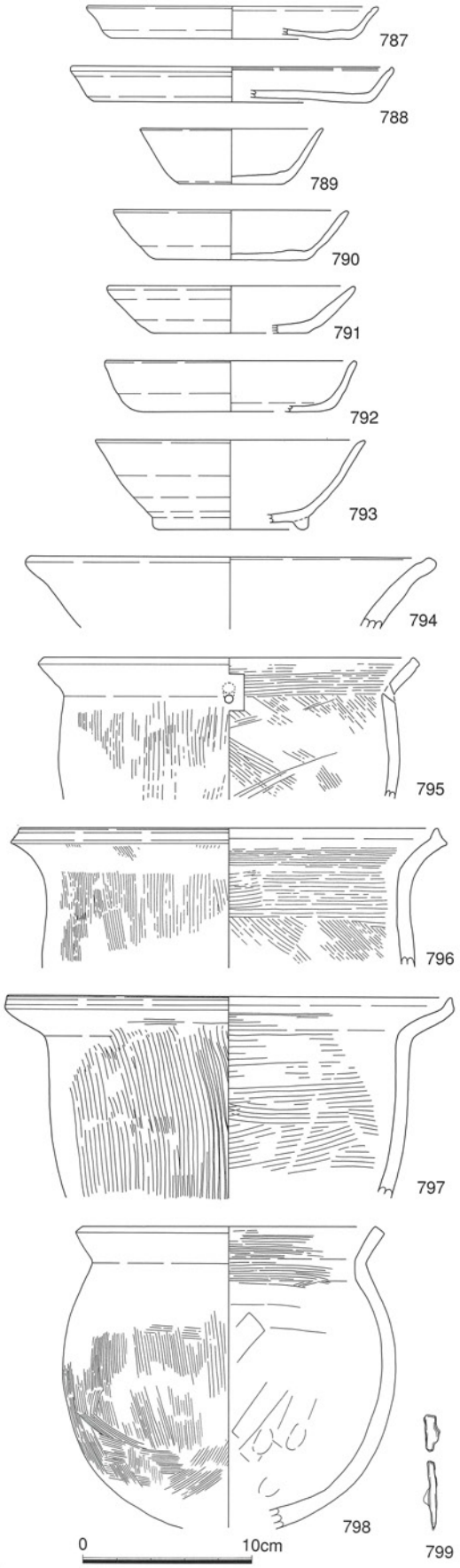
ここでは第４調査区第４層から出土の遺物について紹介する。

787，788は土師器皿Ａ１類である。結晶片岩を含み、回転台成形によるものであり、口縁端部内側に沈線を廻らせ、内外面には赤色塗彩を施している。787は口径17.3cm，器高1.9cmを測り、内外面ヨコナデのち口縁部内面にナナメナデが観られ、底部は回転ヘラ切り痕を明瞭に留める粗なナデである。788は口径19cm，器高2.1cmを測り、内外面ヨコナデで、底部回転ヘラ切り痕を僅かに残す程度のナデである。

789～793は土師器杯である。杯Ａ７類789、杯Ａ10類790，791、杯Ａ11類792、杯Ｂ２類793がある。789～792は内外面に赤色塗彩を施しており、いずれも口縁端部が直立し、底部回転ヘラ切り後ナデ調整である。789は口径10.8cm，器高3.3cm、790～792は口径13.8～14.9cmを測る。793は口径15.9、器高5.3cmを測り、低めの「八」の字に開き端部を丸く面取りした高台を付している。

794は土師器壺である。口径23.6cmを測り、口縁端部を丸く仕上げ、内外面ヨコナデである。

795～798は土師器甕である。795～797は口縁部を「く」の字に曲げ、端部は面をなし、796は上下に、797は上方にそれぞれ拡張している。いずれも内面口縁部ヨコハケ，胴部ヨコまたはナナメハケ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。795は焼成前に口縁屈曲部の１ヶ所に内側からの穿孔があり、内外面には赤色塗彩を施している。798は口縁端部が平面をなし、内面口縁部ヨコハケ，胴部ヘラケズリのちナデ、外面口縁部ナデ，胴部中下位タテハケ



第94図　第４調査区第４層出土遺物実測図

である。

799は金属製の釘である。口径0.7cmを測り断面円形である。

第３層出土遺物（第95図）

ここでは第４調査区第３層から出土の遺物を紹介する。年代幅が大きく、特に調査区南部つまり渡内川北岸近くでは流れ込みと考えられるものがある。

800は土師器高杯である。調査区南部Ｇ－27グリッドからの出土である。内外面に縦方向のヘラミガキが認められる。

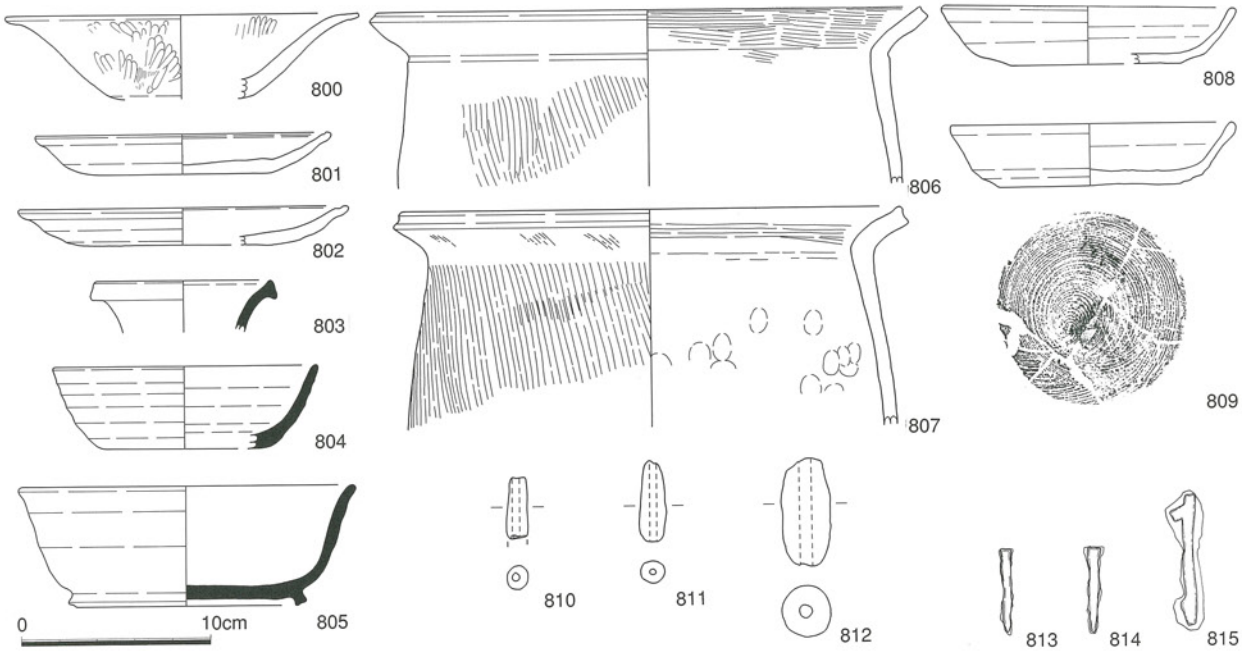
801，802は土師器皿Ａ２類である。口縁端部内側に沈線を廻らせ、底部回転ヘラ切り後ナデであり、内外面に赤色塗彩を施している。

803は須恵器壺である。口縁端部が面をなし上下に拡張しており、内外面回転ナデである。

804，805は須恵器杯Ａ，Ｂ類である。804は口径13.8cm，器高4.4cmを測り、内外面回転ナデであり、内面は底部と口縁部の境が曖昧である。805は口径17.6cm，器高6.3cmを測り、口縁端部は外反し、底端部に「八」の字に開く断面方形の高台を付し、内端面で接地している。内外面ヨコナデで、底部回転ヘラ切り後ナデを加え、工人の爪跡が輪状に残る。内外面に一部黒色斑が観られる。

806，807は土師器甕である。胎土中に砂粒を多く含むもので、口縁端部が凹面をなしており、内面口縁部ヨコハケ、胴部ユビオサエのちナデ、外面口縁部ヨコナデ，胴部タテハケである。

808，809は底部回転糸切り未調整の土師器杯である。調査区南端近くのＦ－32，33グリッドからの出土であり、808は口径14.8cm，器高3.3cm、809は口径15.5cm，器高3.1cmを測り、共に口縁



第95図　第４調査区第３層出土遺物実測図

端部が直立して丸く収めている。

810～812は土師質の環状土錘である。811は比較的硬質のものである。

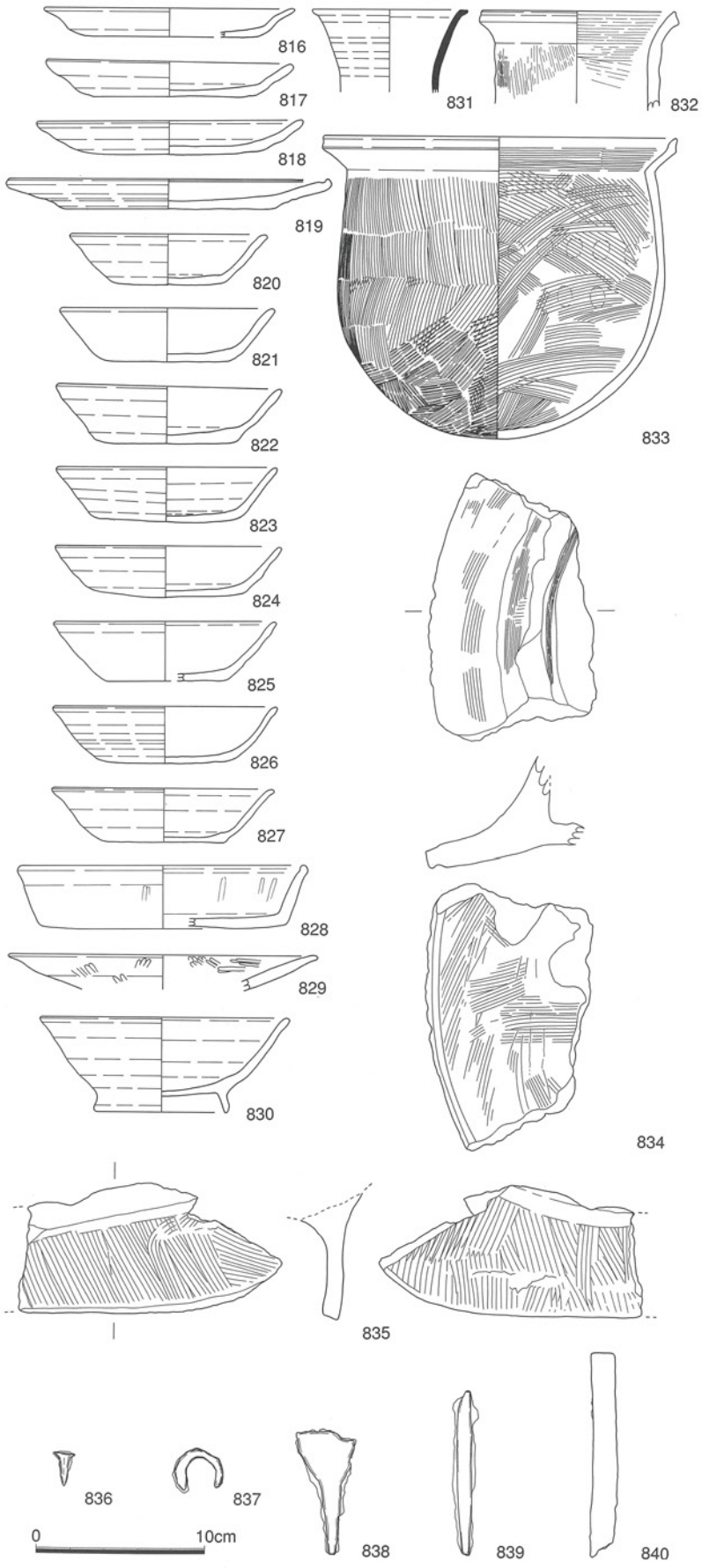
813～815は金属製品であり、813，814は釘である。

遺構外出土遺物（第96図）

ここでは第１，第４調査区の遺構以外から出土した遺物のうち層位不明のものを紹介している。

816～819は土師器皿である。皿Ａ３類816、皿Ａ８類817，818、皿Ａ２類819がある。816～818は口径14.5～15.8cm，器高1.7～２cmを測る。817は内外面に赤色塗彩を施し、818は口縁端部内側に弱い沈線を廻らせている。共に底部回転ヘラ切り後ナデであり、完形での出土である。819は口径19cm，器高1.8cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせ、内面は口縁部・底部一体である。

820～828は土師器杯である。杯Ａ７類820，821，823、杯Ａ13類822，824、杯Ａ９類825、杯Ａ３類826，827、杯Ａ１類828、杯Ｂ２類830がある。820は口径11.6cm，器高３cm、821～827は口径13cm前後，器高3.1～3.6cmを測るものである。820～825は内外面に赤色塗彩を施しており、827は硬質のものである。828は口径16.8cm，器高3.8cmを測り、口縁端部内側に沈線を廻らせるものであり、ヨ



第96図　第１，４調査区遺構外出土遺物実測図

コナデ後内外面にヘラミガキを施され、赤色塗彩されている。いずれも底部回転ヘラ切りのちナデであるが、822，827はヘラ切り痕を明瞭に残す粗なものである。823は完形での出土である。

829は黒色土器Ａ類高杯である。口径18.0cmを測るもので、内面を黒色処理し内外面にヘラミガキを施している。

830は土師器杯Ｂ２類である。口径14.7cm，器高5.7cmを測り、細身の「八」の字に開く高台を付すものであり、底部回転ヘラ切り後中心部以外にナデを施している。

831は須恵器長頸壺である。口径9.3cmを測るものであり、口縁端部を外側へ折り曲げ上面を平坦面としさらに僅かに上方へ拡張している。

832，833は土師器甕である。832は口縁端部が平坦な面をなし、内面ヨコハケ、外面口縁部ヨコナデ、胴部タテハケである。833は口径20.8cm、器高13.1cmを測り、口縁端部が上方に拡張し外面に凹線を有する。内面口縁部ヨコハケ、体部不定方向のハケで粘土接合部にユビオサエ痕をとどめ、外面口縁部ヨコナデ，体部上位タテハケ，下位は上位と同じ工具をタタキ的に用いた調整である。

834，835は土師質の竈である。胎土中に砂粒が多く、内外面に強いハケ調整が施されている。

836～840は金属製品である。836は釘、839，840は刀子である。

(3) 小　結

第１～４調査区は現地標高5.8～6.0mの渡内川北岸の微高地上に広がり、いずれも土層堆積は安定したほぼ平坦なものである。調査区は南北180m，東西15m間に細長く点在するものであるが、４ヶ所の調査区を通して同じ遺構面と捉えられる古代の遺構面１面を検出した。しかし、同時期の隣接するエリアでありながら、北部の第１，２調査区と南部の第３，４調査区とでは土地利用が全く異なっている点に注目できる。

第１調査区は本遺跡北端に位置し、第２遺構面は「く」の字状の調査区全面に遺構が分布し、明らかに第２～４調査区よりも遺構密度の高いもので、掘立柱建物や柵列それらを区画する溝等の検出から古代の集落形成が明白な地区である。整理段階で復元できた掘立柱建物は５棟であるが、調査区は集落空間のごく一部であり、さらに遺構密度の高さから北西部から北東部にかけて広がっていくものと想定できる。建物は柱穴から出土した円盤状高台の緑釉陶器や黒色土器Ａ類，土師器皿及び杯の年代観からいずれも９世紀後半～10世紀前半に比定できる。建物はSA2001が桁行２間で北側が調査区外にかかり、SA2002も１×３間の廂付きでさらに北方向に伸びる可能性があるが、これら以外のSA2003，SA2004，SA2005はいずれも１×１間の規模の小さいものである。また建物の棟方向若しくはこれに正対する方向が５棟いずれも真北から５～８°西偏するものであり、また建物を区画する同時期の溝も直線的であり、南北方向の溝は５～８°西偏し、東西方向の溝はこれに直交する方位を示す。この方位傾向は同じ吉野川下流域であり阿讃山脈南側の旧河川の微高地上に広がる黒谷川宮ノ前遺跡第１遺構面においても認められ、９～10世紀の集落が同様に展開している。

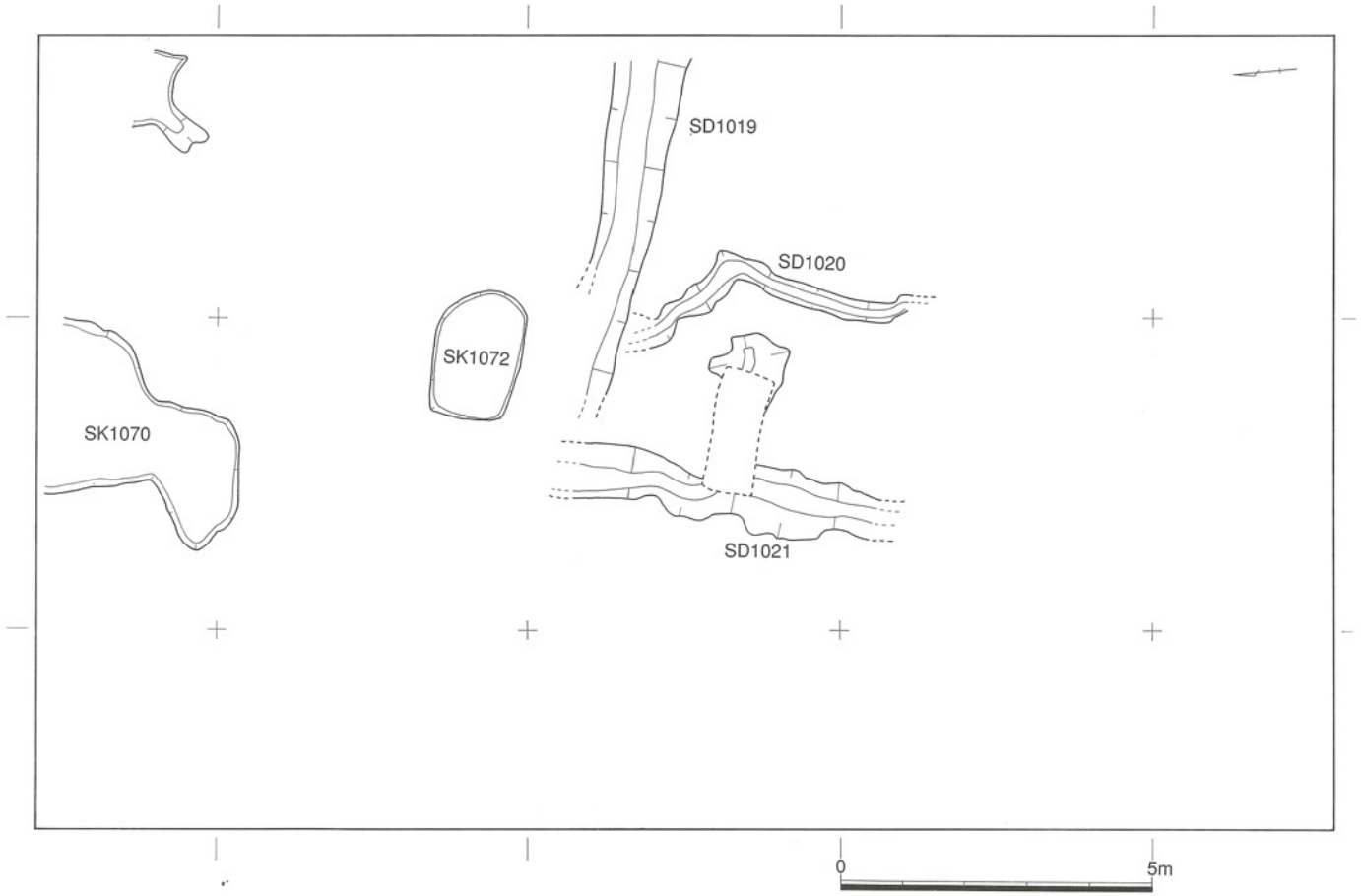
遺構からの出土遺物に内外面に赤色塗彩を施した土師器皿，杯類等が全体の約１／４程度含まれる[2]こと及び、平安京Ⅱ期古若しくは中段階の京都系の緑釉陶器皿が検出されたこと、さらに南側の第４調査区から検出の帯金具等から、当然畿内を意識した供膳形態であること、当遺跡が官衙関連の集落であると捉えられる。

また第１調査区第１遺構面は遺物・遺構に乏しいが、少量検出された遺物の年代は第２遺構面のものと大差ない。しかも溝の位置・方向が第２遺構面と同様でありながら、建物，土坑等が全く認められないことから、土地利用の転換が窺われる。

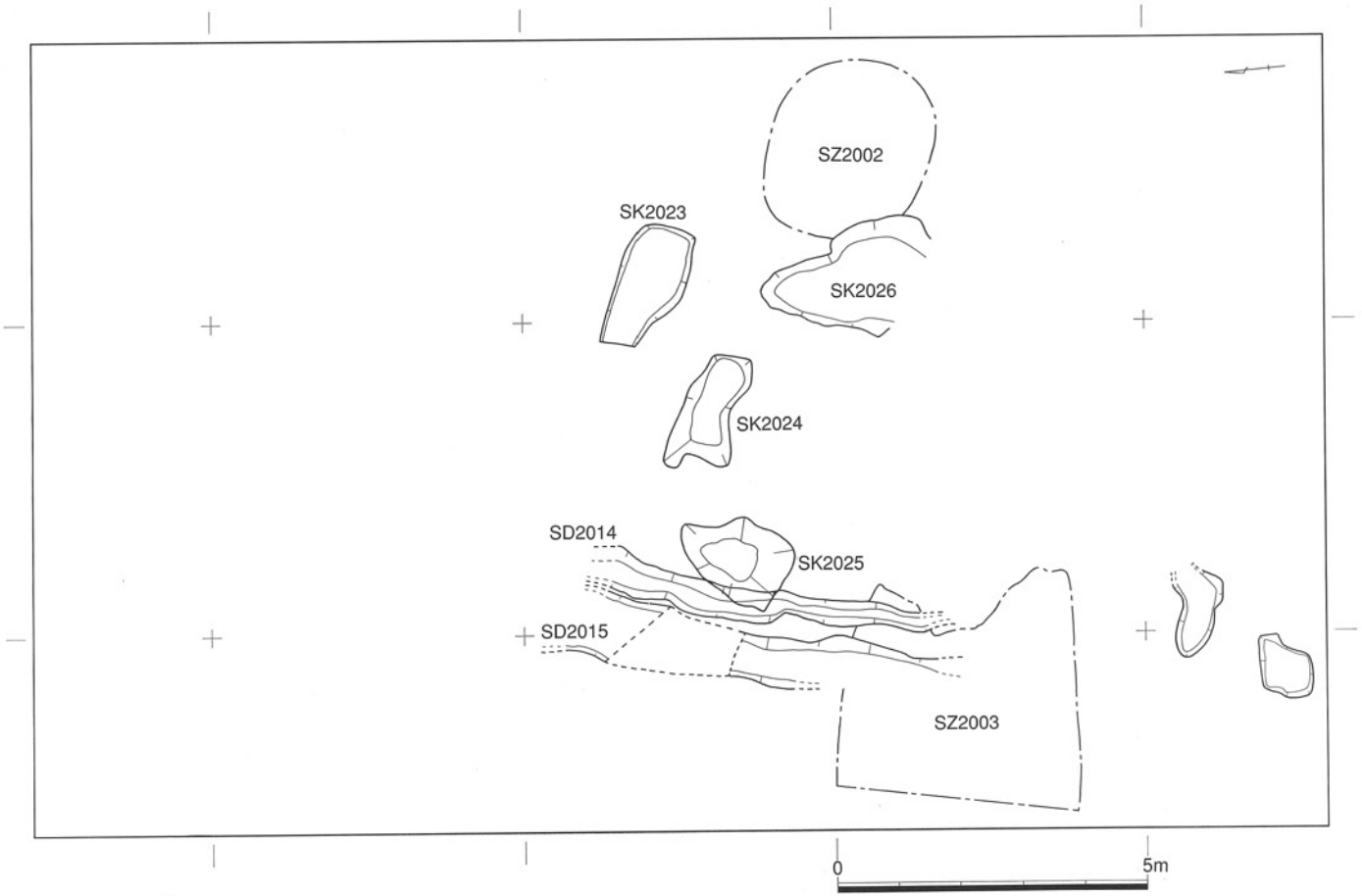
一方、現在の用水路を挟み、第１調査区南側に位置する第３，４調査区は東西10m，南北100mを越える細長い調査区であるが、傾斜はほとんど認められず、土層も安定した平行堆積を示している。しかし、共に同一の遺構面と捉えられる第１，２調査区の第２遺構面と第３，４調査区の第１遺構面とではその標高に差があり、第１，２調査区よりも第３，４調査区の方が0.25m低くなっている。またその遺構配置も全く異なっている。即ち第１，２調査区に多数みられた掘立柱建物が第３，４調査区では全くみられず、その代りに、平面２×１mの長方形，断面は深さ１mの長方形という土坑が大量に認められる。土坑は単独で存在するものもあるが、多くは長辺側あるいは短辺側を揃えて３～７基が１列若しくは複数列並ぶという特徴ある遺構配置が認められる。土坑内から遺物が認められるのは希である。土坑列の方向は南北方向のものでは、N－３°－W～N－８°－W、東西方向のものはN－84°－E～真東を示している。土坑列の形態には、①１列に並ぶものでは、①－１長辺を揃えて並ぶものと、①－２短辺を揃えて並ぶものがある。①－１はSK1004～SK1008に代表される南北方向に並ぶものがある。中央３基が0.32m間隔、両端の２基は中央３基からやや離れて0.72～0.96mの間隔をとる。列はやや弓形を呈し、方向はN－３°－W～N－８°－Wを示している。①－２は南北方向に７基連なるSK1015～SK1021と東西方向に４基以上連なるSK1048～SK1052等がある。SK1015～SK1021はN－３°－W～N－８°－Wに緩やかな弓形に並び、その間隔は0.5mと一定している。SK1048～SK1052は調査区外にかかるが４基以上が連なり、真東からN－84°－Eの方位に緩やかな弓形状を示すものであり、その間隔はいずれも0.88mである。次に②複数列並ぶものでは、SK1058～SK1063とSK1064～SK1067がある。SK1058～SK1063は東西方向に長辺側を揃え２列に計６基が、SK1064～SK1067は短辺側を揃え２列に計４基以上が連なるものであり、その方位及び間隔は１列に並ぶものとほぼ同様である。またSK1058～SK1067はＬ字型の１群として捉えることもできよう。

一方、第３，４調査区に設けられた南北１条、東西10条の溝も南北及び東西の土坑列とほぼ同方向に設けられている。すなわち、東西方向ではN－84°－E～N－89°－W、南北方向ではN－１°－E～N－６°－Wを示す。溝は幅0.22～0.93m，深さ0.05～0.62mを測り、断面Ｕ字状を呈する。東西方向の溝は、SD1005とSD1006，SD1007とSD1008，SD1013とSD1014がそれぞれ２条セットで設けられており、その間隔は0.05～1.60mとばらつきはあるが、溝間は土手状に盛り固められ、遺物・遺構等はない。

以上より第３，４調査区においては土坑群と溝がその方向に規則性を持ち、真北よりも１～９°



第97図　第５調査区第１遺構面遺構配置図



第98図　第５調査区第２遺構面遺構配置図

西に偏る傾向が認められる。遺構時期については遺物が少なく詳細な特定は難しいが、概ね9世紀後半～10世紀前半という、第1調査区の集落と同時期に比定できる。したがって、第3，4調査区は方向性を極めて規格された地割であり、集落に付随する土坑墓地区とも想定できよう。

---

1 徳島県埋蔵文化財センター　1994　『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9　黒谷川宮ノ前遺跡』

2 第Ⅳ章考察2に詳しいので参照されたい。

3　第5調査区

本調査区は渡内川南岸に位置し、現在は水田として利用されているが、調査区の北半分は旧河道内にあたる。土層は複雑な様相をみせるが、現地標高6.0mを測り、耕作土の下、第6層上面（標高5.5～5.7m）を第1遺構面とした。第1遺構面では溝3条，土坑4基を検出した。第8層上面（標高4.6～5.5m）を第2遺構面としたが、遺構は南側のみで検出され、北側の落ち込み部では認められなかった。溝2条，土坑6基，土器溜り2基を検出した。出土した遺物は、第2遺構面では弥生時代終末期のものであり、また第1遺構面では弥生時代終末期～古墳時代初頭と9世紀後半～10世紀前半のものが混在している。さらに第9層においても遺物包含層が認められたが、明確な遺構は検出できず、遺物のみ取上げた。

(1)　各遺構と弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物

ここでは、弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構及び遺物を紹介するが、第5調査区における各遺構及び遺構出土の遺物のうち、第2遺構面のもの全てと第1遺構面の一部が該当する。

土器の形式分類についてはⅣ－1章に分類基準を、観察表に分類器種名を示した。

溝

溝 SD2014（第99図）

調査区中央部第2遺構面F44～45グリッドに位置する、南北方向の溝であり、南北端が撹乱に切られるため全容は不明であるが、最大幅0.74m，深さ0.54mを測り、中央部付近で緩やかに屈曲し、主軸方位は北部がN-32°-E，南部がN-10°-Eである。西側のSD2015とは平行であり、0.02～0.45mの間隔を置いている。2本の溝は土層状況及び出土遺物等からも同時期のものであり相互に関連するものと捉えられる。少量の土器片を検出している。

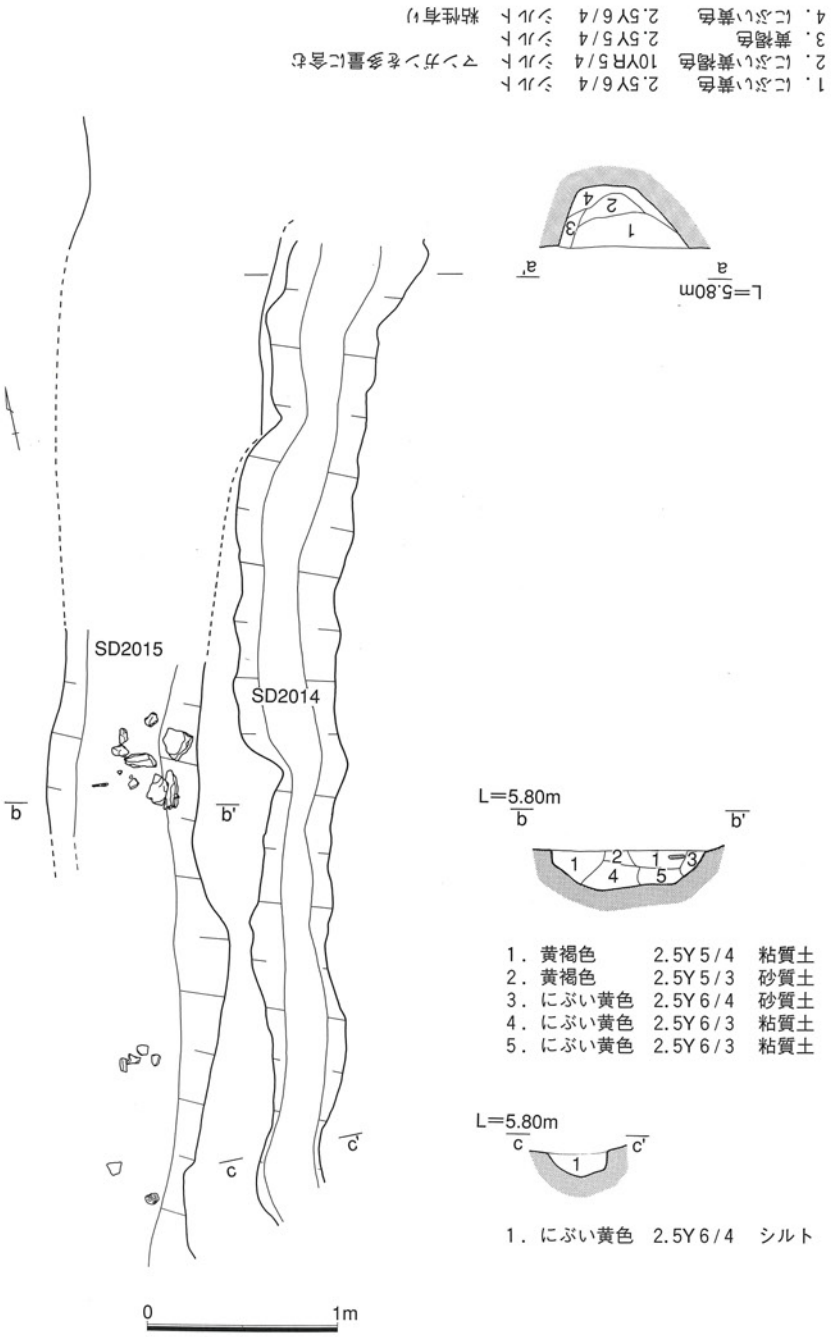
出土遺物（第100図）

841～844は甕形土器である。いずれもにぶい橙色を呈し胎土中に結晶片岩を含むもので、口縁端部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ擬凹線をとどめる。843，844は口縁部が薄手であり

丁寧なヨコナデを施し器形が整えられているのに対し、841，842は体部及び口縁部の器壁が厚くヨコナデが不十分であるため歪な器形を呈している。844は全体に器壁が極めて薄く、やや突出気味の平底で体部中程より少し上に最大径部を有し、体部内面上半ユビオサエ，下半ヘラケズリで、体部外面に細密なハケを施し全くタタキ目をとどめない。

溝 SD2015（第99図）

調査区中央部第２遺構面F～G－44～45グリッドに位置する、南北方向の溝であり、南北端が撹乱に切られるため全容は不明であるが、最大幅1.09m，深さ0.20mを測る。東側のSD2014とほぼ平行であり、0.02～0.45mの間隔を置いている。埋土中より多量の土器片を検出している。



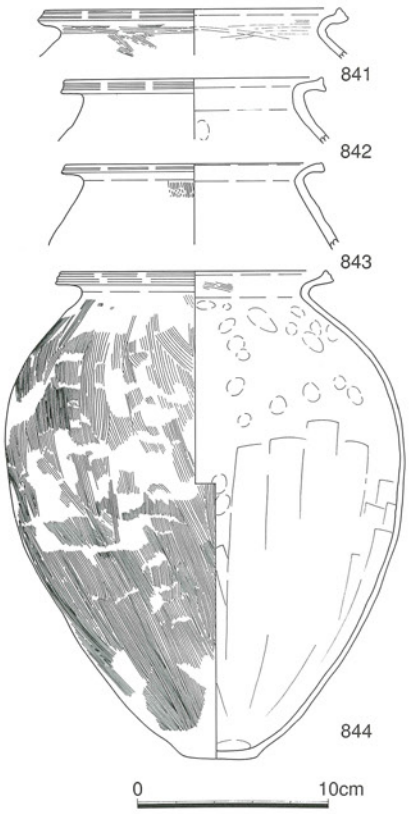
第99図　SD2014，SD2015実測図

出土遺物（第101図）

図化可能な遺物のうち掲載し得たものは72点に上るが、内訳は高杯形土器４％，鉢形土器35％，壺形土器20％，甕形土器42％である。このうち完形のものは鉢形土器１点のみである。

845，846は高杯形土器である。中空の脚部で裾部が緩やかに開くもので846は透かし穴を内面から穿孔している。

847～865は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含み体部外面に縦しわ痕をとどめるものである。847は胎土橙色を呈し焼成の甘いものであり、口縁部が屈曲し端部を方形に仕上げるが歪である。口縁部内面はヨコハケのちナデである。848は口縁端部がやや尖り気味であり、体部外面

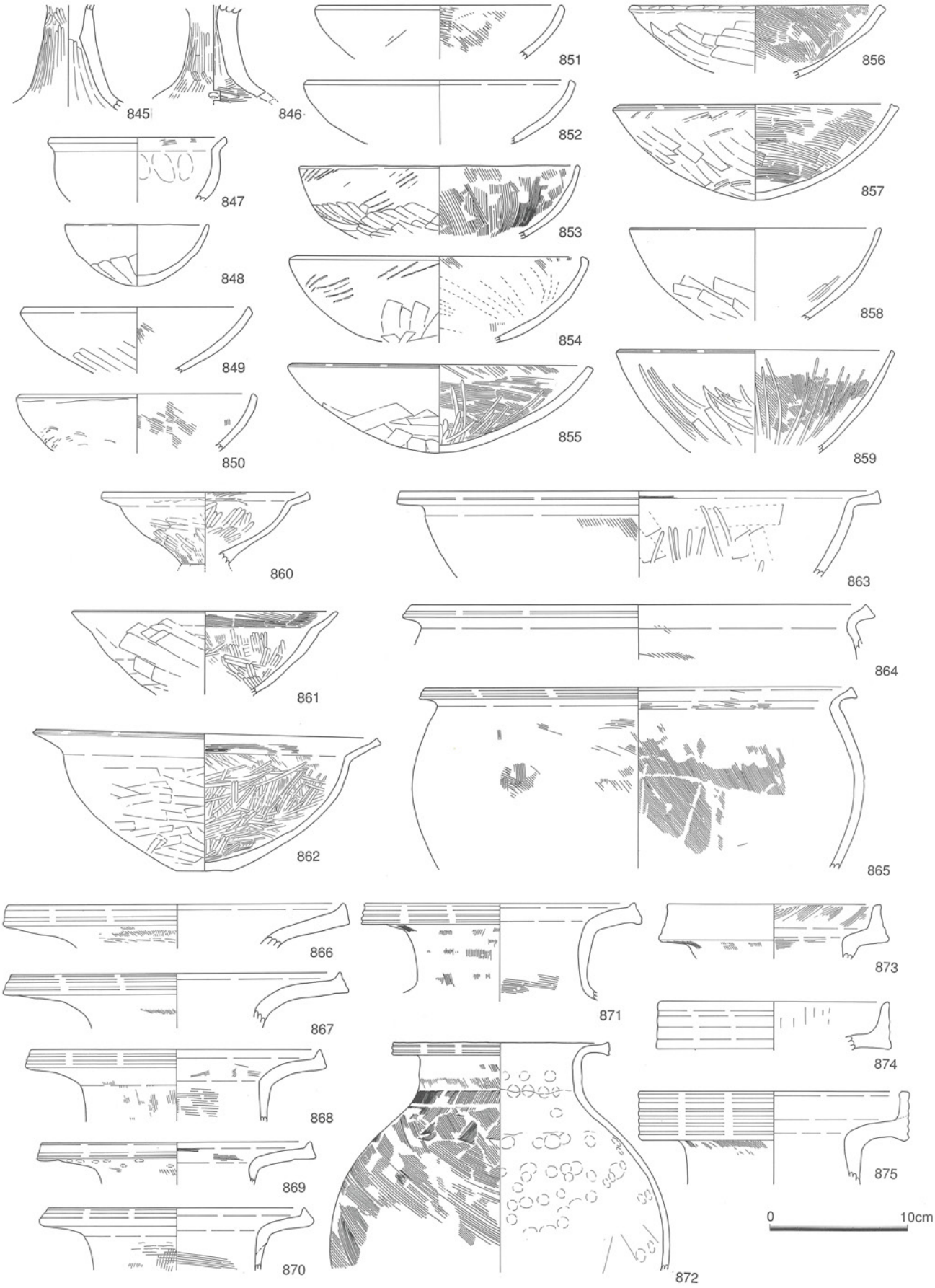


第100図　SD2014出土遺物実測図

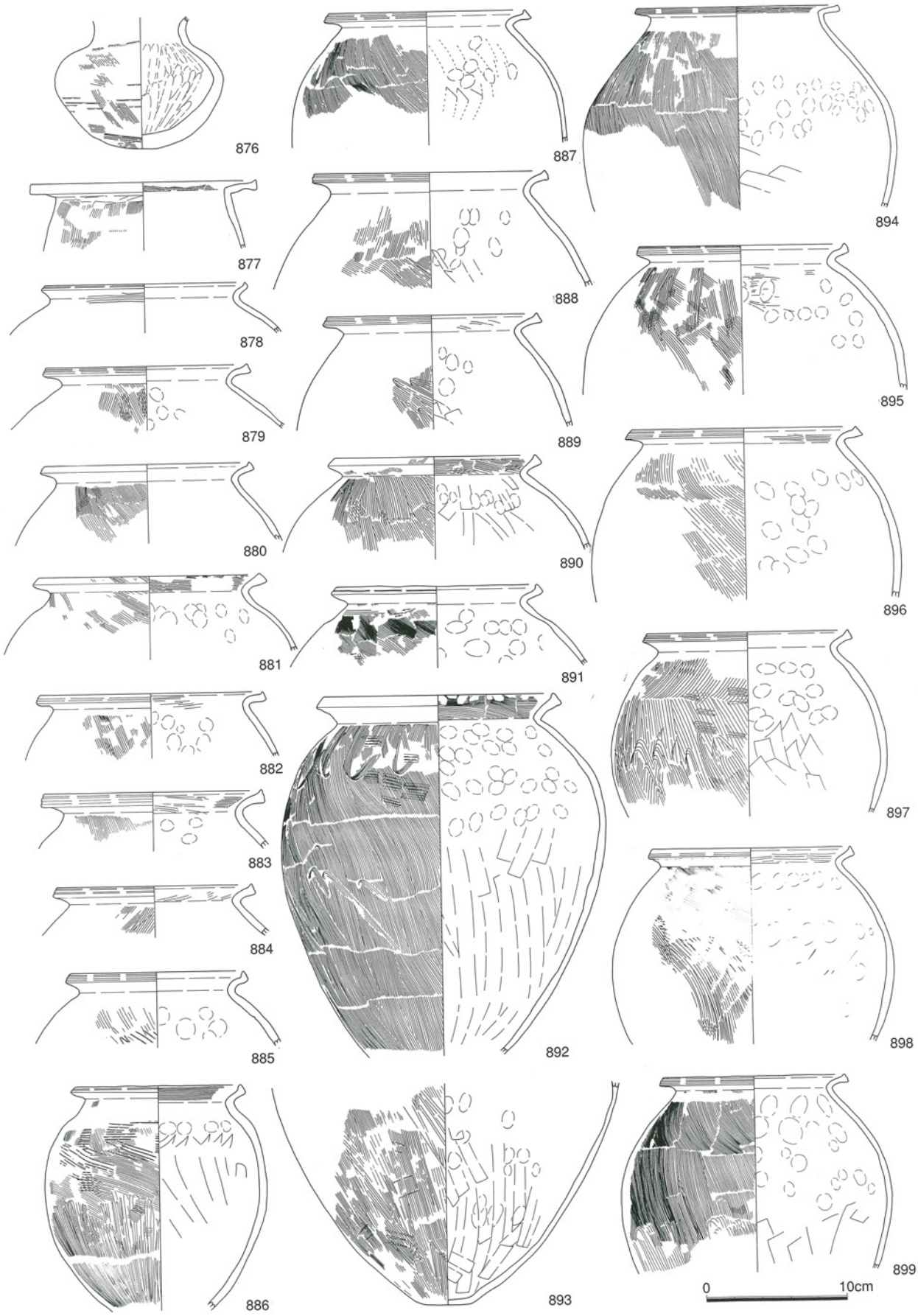
上位は丁寧なナデを加えているのに対し、下位は粗いヘラケズリのみであり、また内面は丁寧なナデ若しくはヘラミガキにより仕上げられている。849，857は口縁端部が方形状であり、内面はナナメハケのちナデである。851は口縁端部が丸く、内面はナナメハケである。852，854は口縁端部が内灣して方形であり、内面を丁寧なナデにより整えるが、854の外面上位には僅かにタタキの痕跡をとどめる。857は尖り気味の丸底で口縁端部を方形状に仕上げるが端部の処理は不十分であるため内外に粘土がはみ出し歪な口縁である。内面はヨコハケののちナデを加えず、外面はタタキのち口縁部はナデ、体部はヘラケズリさらにナデである。855は浅い立ち上がりの体部で口縁端部は方形状であり、内面にハケ後ヘラミガキを施す。内面には水銀朱の付着が顕著であり、体部外面は炭化物が多量に付着している。856も同様であり、853も口縁端部が丸く体部の立ち上がりが深いものの内面にハケを残す手法は同じである。858，859はやや深手のタイプで口縁端部が方形状である。859は口縁部に丁寧なヨコナデを加えて成形し、その後内面はナナメハケのち放射状のヘラミガキ、外面にもヘラミガキを施す。860は台付鉢形土器である。脚台部は欠損するが、口縁部が屈曲し端部を上方に拡張し方形に仕上げ弱い３条の擬凹線を廻らせるもので、体部内外面ヘラミガキ、口縁部内面ハケである。861は口縁部が僅かに屈曲し端部を丸く収めるものであり、外面は体部の極めて粗いヘラケズリが口縁部までかかりその後口縁部にのみナデが施される。内面は口縁部に粗いハケ、体部にタテハケ後のヘラミガキが施される。862は完形である。平底で口縁部屈曲して端部を上方に拡張して方形に仕上げ１条の擬凹線をとどめる。体部内面にナナメハケのちヘラミガキを施し、体部外面はヘラケズリのちナデである。863は口縁端部を屈曲して端部を摘み上げ擬凹線をとどめるもので、体部内面にヘラミガキを施す。865は口縁端部を屈曲し端部を上下に拡張し２条の擬凹線をとどめるもので、内外面に細密なナナメハケを施す。864も同様の器形であり、口縁端部から体部内面にかけて水銀朱の付着が認められる。

866～872は広口壺形土器である。結晶片岩を含むものである。866～870は口縁端部を上方に拡張し、871は上下に拡張する違いはあるが、いずれも直立する頸部から口縁部が屈曲して端面に擬凹線をとどめ、口縁部内面ナナメハケのちヨコナデ、頸部内面ヨコハケ、口縁部外面ヨコナデ、頸部外面タテハケのちナデである。872は肩の張らない体部から頸部が直立し口縁部屈曲して水平気味に開き端部を上下に拡張して擬凹線をとどめる。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面ハケである。

873～875は二重口縁壺形土器である。一次口縁が水平に開き上端部に二次口縁を接合し、口縁



第101図　SD2015出土遺物実測図(1)



第102図　SD2015出土遺物実測図(2)

端部は873，874が尖り気味、875が方形状であり、いずれも口縁部外面に数条の擬凹線をとどめる。

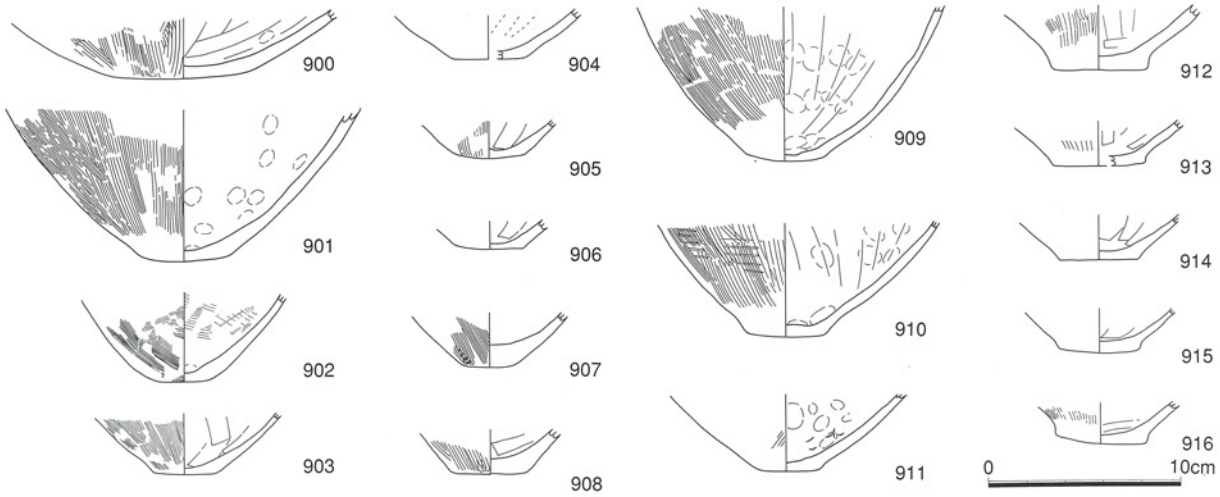
（第102図）

876は広口壺形土器である。口縁部を欠損するが頸部より下位は完形である。結晶片岩を含み、丸底で最大径部を体部上位に有し、体部内面強いユビナデ、体部外面は下位のタタキを不定方向の細かいハケで消している。

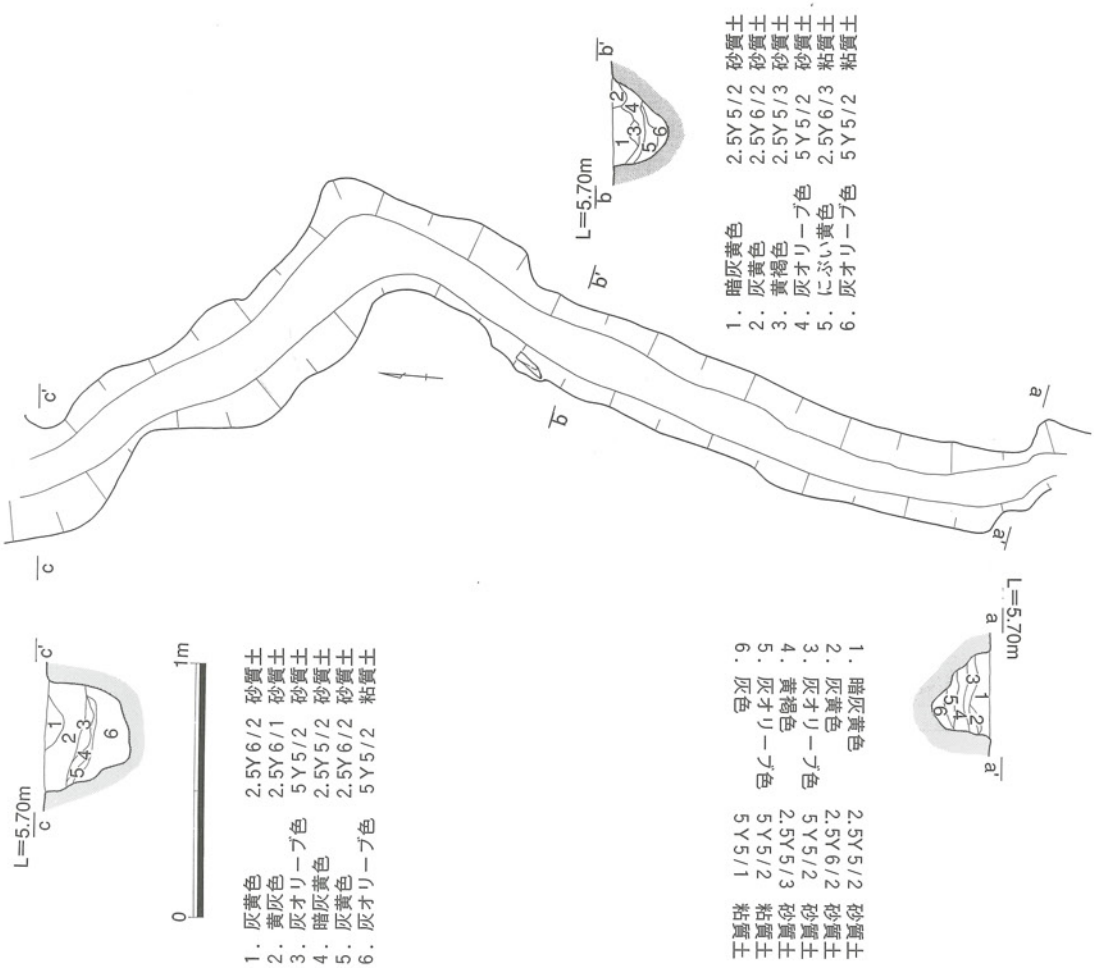
877～899は甕形土器である。894を除きいずれも胎土中に結晶片岩を含むものである。877は口縁部を強く屈曲し端部を摘み上げるもので、ヨコナデを施さない不整な口縁で、口縁部内面ナナメハケ、体部外面タテハケである。878～891，895～899は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を摘み上げ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、外面細密なハケであることは共通するが、器壁の厚さ，口縁部の成形等により分類できる。すなわち薄手のものは丁寧なヨコナデにより口縁部の器形が整えられ端面に擬凹線をとどめることが多いのに対し、厚手のものは口縁部のヨコナデが不十分なため不整であり、内面に粗いヨコハケを残すことが多い。前者に属するものが、878～880，882，887～889，898，899であり、後者が881，883～886，890～892，895～897である。878は橙色を呈し、特に器壁が薄く口縁部が短いタイプである。886は体部内面のヘラケズリが上位まで及び、体部外面にハケを施すが横位のタタキの痕跡が認められる。892は体部内面下位及び外面の体部及び口縁部に炭化物が付着するが、外面の付着は特に顕著でありタール状を呈する。893は突出しない平底である。894は胎土中に結晶片岩を含まず多量の角閃石を含有し明赤褐色を呈するもので、肩の張らない体部から口縁部が屈曲し端部を摘み上げ擬凹線をとどめ、口縁部から体部上端を丁寧なヨコナデにより整えられ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なタテハケである。体部外面下位に炭化物の付着が顕著である。讃岐産の下川津Ｂ類土器と理解できる[1]。

（第103図）

900～908は突出しない平底であり、そのうち906は座りの悪いもの、907，908は底部が肥厚す



第103図　SD2015出土遺物実測図(3)



第104図　SD1020実測図

るタイプである。909～911は突出気味の平底、912～916は突出する平底である。いずれの種類も底部外面にハケを施すものがほとんどである。

溝 SD1020（第104図）

調査区中央部第１遺構面E～F－44～45グリッドに位置し、溝幅は均一であるものの中央で強く屈曲しさらに南端部及び北端部では緩やかに湾曲している。両端が攪乱に切られるため全容は不明であるが、最大幅0.52m，深さ0.27m を測る。遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器類に加え古代の土師器，瓦等も出土している。内面に水銀朱の付着した鉢形土器の体部片を含む土器類が出土している。

出土遺物（第105図）

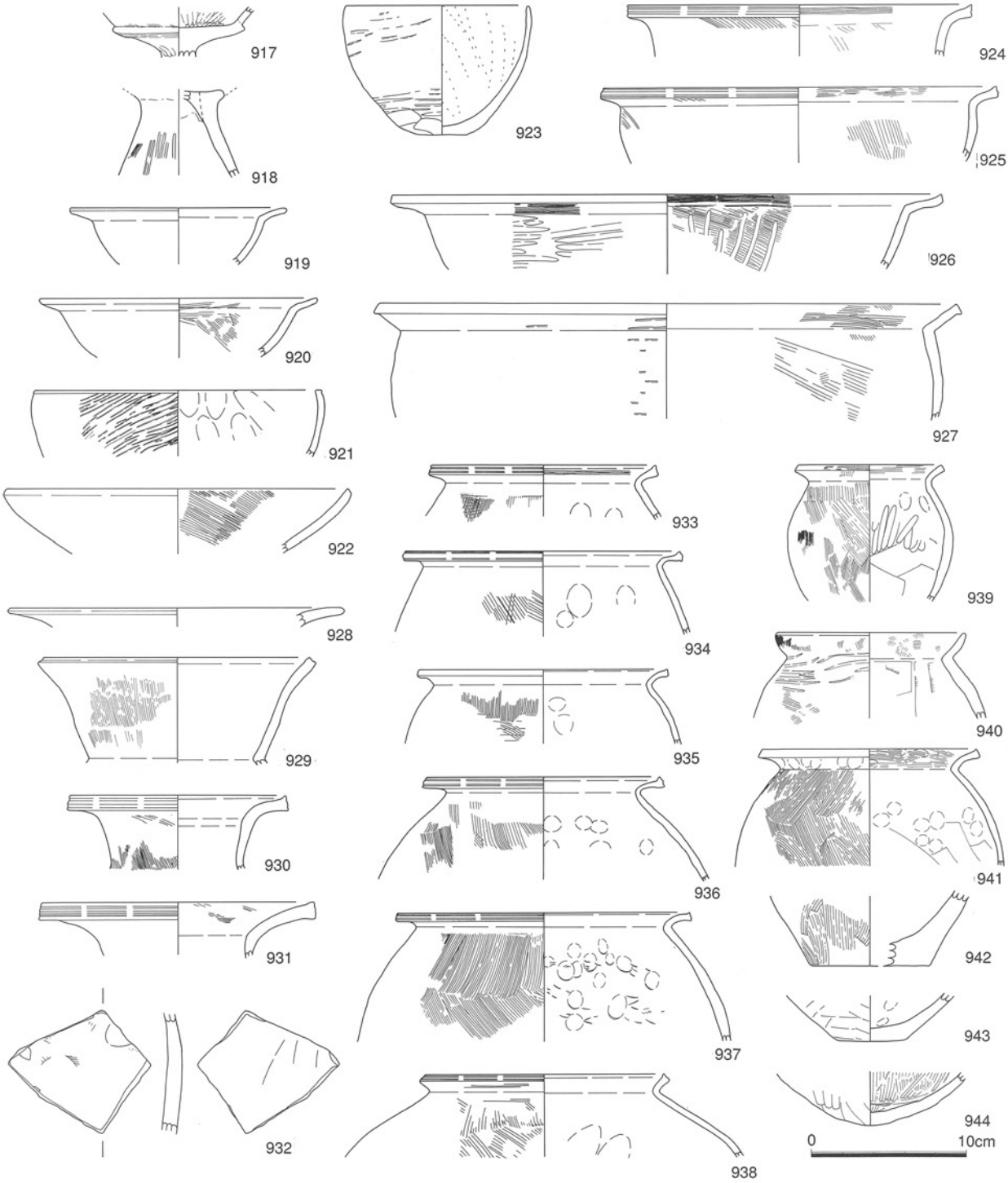
ここでは弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物を紹介するものであり、古代のものについては第122図に示し後述する。

917，918は高杯形土器である。917は内外面にヘラミガキを施し、918は橙色を呈し焼成甘い。

919～927は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。919は橙色を呈し器壁薄く口縁端部は尖り気味である。921は外面に非常に細かいタタキ痕をとどめる。924は平底で口縁端

部が尖り気味であり体部外面に縦しわ痕をとどめ、中位以上はタタキ、下位はヘラケズリである。924，925は口縁端部を摘み上げ2条の擬凹線をとどめ、体部内面にハケを施す。926は口縁端部を僅かに摘み上げ、927は下方に拡張するものであり、共に体部外面に横位のタタキ後の縦しわ痕をとどめ、体部内面ヨコハケのちタテヘラミガキを施す。

928～931は広口壺形土器である。929は広口長頸壺形土器である。口縁端部方形状であり、外



第105図　SD1020出土遺物実測図(1)

面タテハケのちヨコナデである。930，931は口縁端部を上下に拡張し２条の擬凹線をとどめる。

932は鉢形土器と考えられる体部である。内面に朱の付着が認められる。

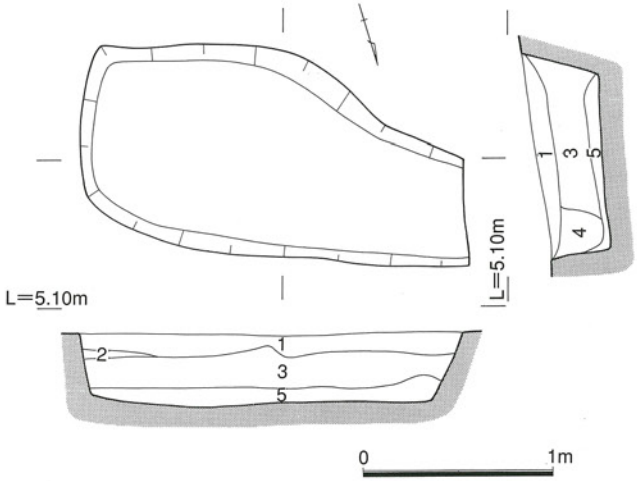
933～941は甕形土器である。933～938，941は胎土中に結晶片岩を含み、口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げそのほとんどが擬凹線をとどめる。体部内面上位ユビオサエ、下位ヘラケズリ、体部外面に細密なハケを施すが、器壁の厚い933，937と、薄い934～936，938，941とに分類できる。そのうち938は口縁部の特に短いタイプであり、941は他のものが口縁部に丁寧なヨコナデを加えているのに対し、口縁部の内面にヨコハケ、外面に指頭圧痕をとどめ歪な形状の口縁部を有する粗製タイプである。939は結晶片岩を含むが、口縁端部の摘み上げを行わず、ハケ痕をとどめる歪な形状の口縁部を有し、体部内面上位にヘラミガキを施す。940は結晶片岩を含まず赤色斑粒及び微砂粒を多量に含有して灰白色を呈し焼成は極めて硬いものである。体部は器壁厚く、口縁は内灣し端部は方形状であるが形状は歪である。体部内面は横位のヘラケズリ、口縁部外面に粘土付加の痕跡が明瞭でさらにタテハケを加え、体部外面上位に粗いタタキ痕をとどめる。搬入土器である。

942～944は底部である。942は外面タテハケ、943は外面ヘラケズリ，内面ナデ、944は内面ヘラミガキである。

土坑

土坑 SK2023（第106図）

調査区中央部第２遺構面Ｅ～Ｆ－44グリッドに位置する平面不整隅丸長方形、断面台形を呈する土坑であり、西端が撹乱に切られるため全容は不明であるが、西部が狭小となり、規模は長軸2.08m 以上，短軸1.09m，深さ0.40m を測り、主軸方位はＮ－26°－Ｅである。埋土中から大量の土器類が検出されている。



1．オリーブ黄色　5Y6/3　粘性砂質土　マンガンを含む
2．浅黄色　5Y7/4　粘性砂質土　マンガンを多量に含む
3．浅黄色　5Y7/4　粘性砂質土　マンガンを少量含む
4．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土　マンガンを少量含む
5．にぶい黄色　2.5Y6/4　粘性砂質土　マンガンを少量含む

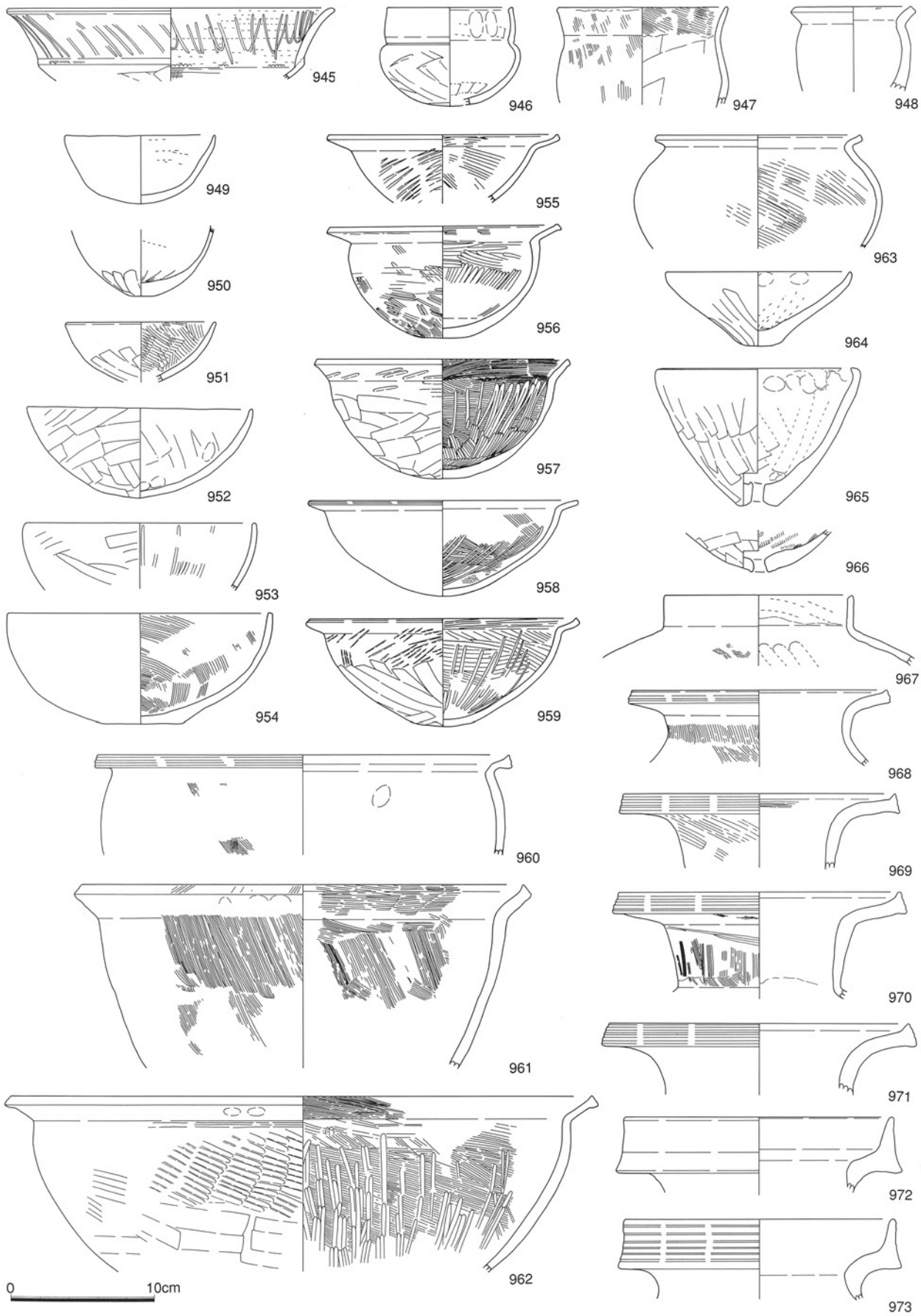
第106図　SK2023実測図

出土遺物（第107図）

出土遺物のうち図化掲載し得たものは55点であるが、内訳は高杯形土器２％，鉢形土器44％，壺形土器15％，甕形土器40％である。この中には完形の鉢形土器３点が含まれる。

945は高杯形土器である。焼成硬くにぶい黄橙色を呈し体部上端部に口縁部を接合し端部を丸く収めるものであり、口縁部の内外面にヘラミガキを施す。

946は小型丸底鉢形土器である。偏平な体部最大径部が口径を上回り、口縁部は内灣し端部を丸く収めるもので、口縁部内外面及び体部内面に丁寧なナデを加え、体部外面にヘラケズリをとどめる。



第107図　SK2023出土遺物実測図(1)

947～966は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含み、947～959，962～965は外面に縦しわ痕をとどめるものである。947は口縁部が緩やかに屈曲し端部は尖り気味であり口縁部内外面及び体部外面にハケを施す。948は器壁厚く口縁部は屈曲し端部は方形状である。949は口縁部が尖り気味である。951は口縁端部が丸く内面に粗いハケを施す。953は口縁端部を丸く収め内面にヘラミガキを施す。954はほぼ完形で、950と共に平底であり、口縁端部が方形状を呈し内面に渦巻状のハケを施す。955は焼成硬く口縁部屈曲して端部を上方に拡張し、体部外面に右上がりのタタキ目を残す。956は完形であり平底で口縁端部が方形状であり内外面にヘラミガキを施す。957～959は丸底で口縁端部が方形状若しくは僅かに摘み上げ、体部内面ヨコハケのちヘラミガキを施し、体部外面上位にタタキ目を残すものもある。960は器壁厚く口縁部が屈曲して端部を摘み上げるもので、体部内面上位ユビオサエ、体部外面ナナメハケである。961は口縁端部を摘み上げ、体部内外面に細密なナナメハケを施す。962は口縁端部を下方に拡張し、体部内面にヨコハケのちヘラミガキ、体部外面上位にタタキをとどめる。963は焼成甘く橙色を呈するが、器壁が薄く口縁端部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げるもので、体部内外面に粗い右下がりのハケを施す。964は座りの悪い平底で口縁端部は直立し丸く収めるもので体部外面はヘラケズリのちナデ、体部内面も丁寧な板ナデである。965は粗い厚手のつくりで，口縁端部は方形状であるが成形は歪で内側に粘土を付加した痕跡が明瞭であり、底部には外からの穿孔を有し、体部内面粗い板ナデ、体部外面粗いヘラケズリである。966は内面からの穿孔を有し、内面に粗いハケをとどめる。

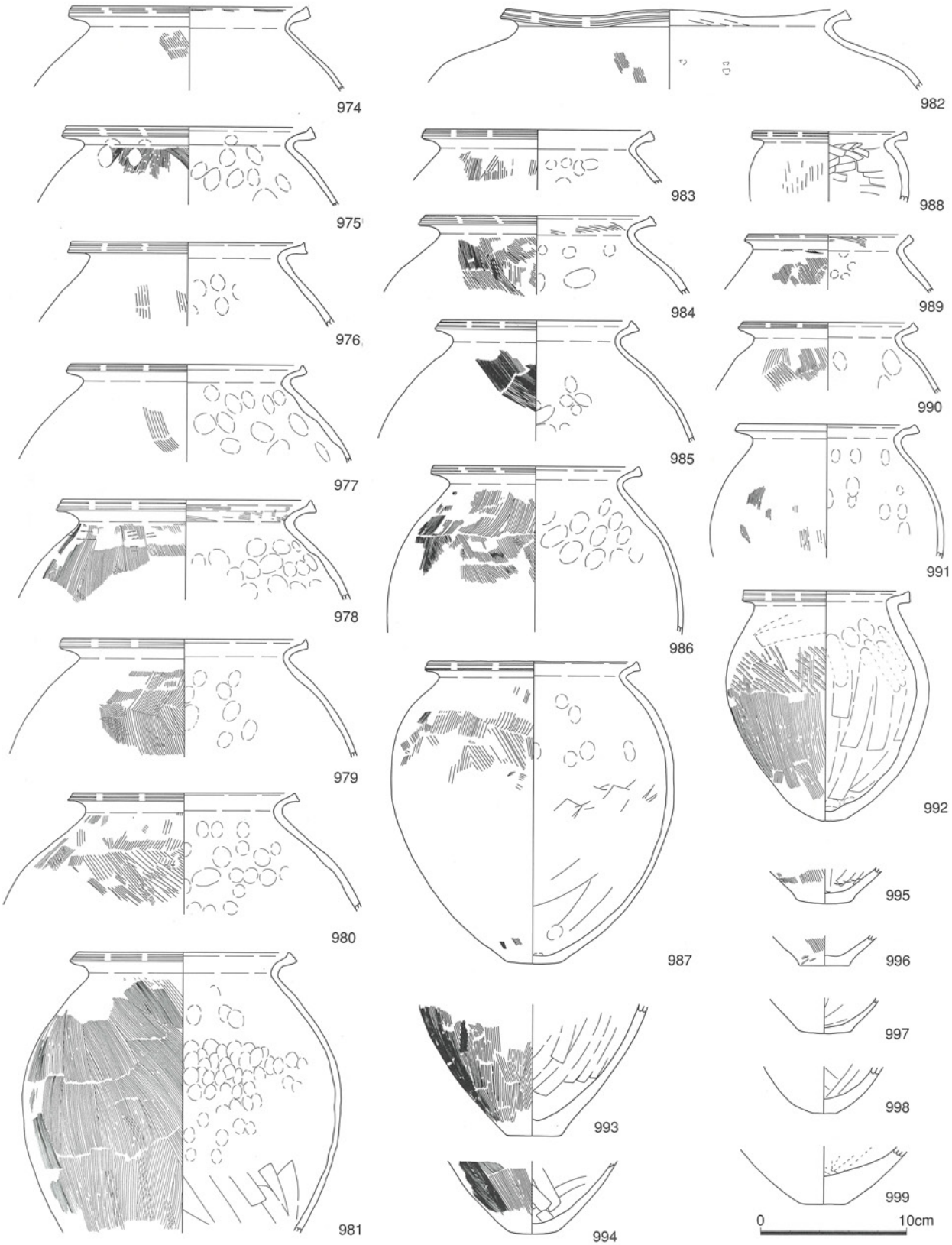
967は短頸壺形土器である。外面にスリップを塗布し、体部にナナメハケを施す。

968～971は広口壺形土器、972，973は二重口縁壺形土器である。968～971は口縁端部を上下に拡張し擬凹線をとどめるもので、969，970，973は胎土橙色を呈し焼成が甘めである。

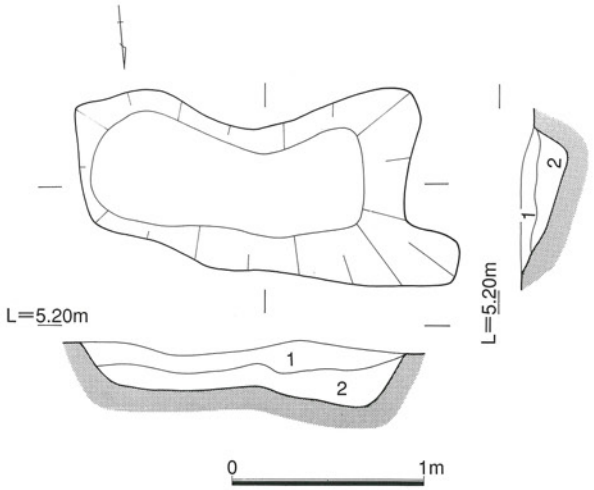
（第108図）

974～992は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含み口縁端部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げるもので、975～987，989～992は体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なハケであるが、色調，焼成状態，器壁の厚さ，口縁部の形状等から細分可能である。974は橙色を呈し焼成甘く、薄手であり丁寧なヨコナデにより口縁部が整えられている。975～981，983～987，990はにぶい橙色系を呈し、丁寧なヨコナデにより口縁部の器形が整えられ端面に擬凹線をとどめるものがほとんどである。そのうち979，983，985，986，990は特に体部の器壁が薄くつくられている。988は口縁部に丁寧なヨコナデを施すが、体部内面のヘラケズリが上位にまで及ぶ。989は口縁部が短くヨコナデが不十分であるため歪な形状を呈する。991は器壁が薄く焼成甘く橙色を呈し、口縁部の形状が歪である。992は座りの悪い平底で体部倒卵型を呈し器壁は極めて厚く、短い口縁部は屈曲して端部を摘み上げる。体部外面中位にタタキ痕をとどめ、上位は横位の板ナデ、下位はタテハケであり、外面全体に炭化物の付着が顕著である。

993～999は底部である。993，994，997は突出しない平底である。995，996は突出する平底であり底部内面に螺旋状の爪痕をとどめる。998は丸底である。999は浅黄橙色を呈し、肥厚する平底で、炭化物の付着が認められない。

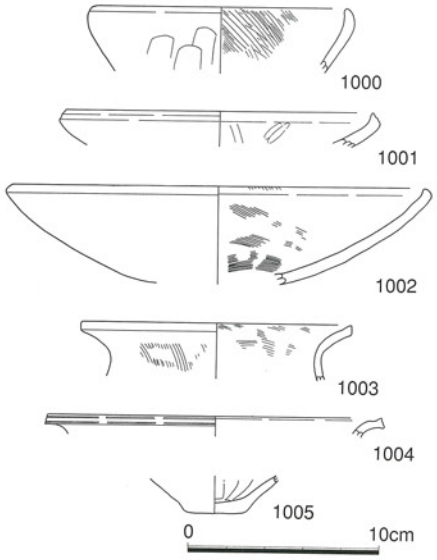


第108図　SK2023出土遺物実測図(2)



1．灰オリーブ色　5Y5/2　砂質土
2．黄褐色　2.5Y5/3　粘性砂質土

第109図　SK2024実測図



第110図　SK2024出土遺物実測図

土坑 SK2024（第109図）

調査区中央部第２遺構面 F44グリッドに位置する、平面不整隅丸長方形，断面台形状の土坑であるが、北西側では掘り込みが緩やかになっている。長軸1.98m，短軸1.02m，深さ0.34m を測り、主軸方位はN－26°－E を示すが、これは本遺構の北東側に位置する同じ形状の SK2023と同じ方位であり規模も近似している。埋土は平行な２層に分層でき、少量の土器類が出土している。

出土遺物（第110図）

1000～1002は鉢形土器である。いずれも口縁端部が内側に拡張し、1001は内面にハケのちヘラミガキを施す。1003は広口壺形土器である。口縁端部を上方に拡張し、内外面にハケを施す。1004は甕形土器である。口縁端部に２条の擬凹線をとどめる。1005はやや突出気味の底部である。

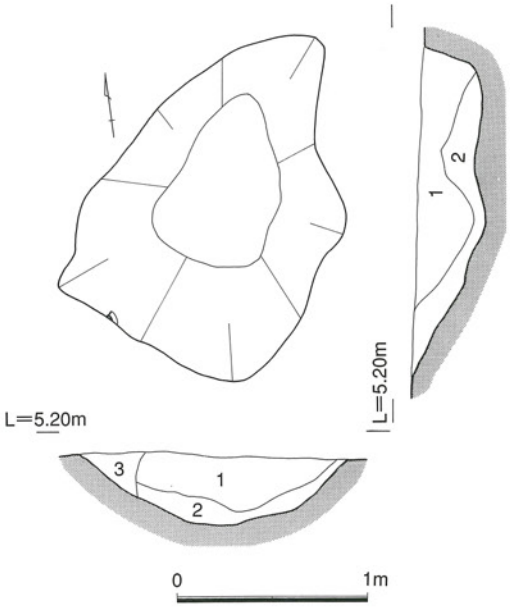
土坑 SK2025（第111図）

調査区中央部第２遺構面 F44グリッドに位置する、平面不整形，断面レンズ形を呈する土坑である。長軸1.86m，短軸1.30m，深さ0.37m を測り、埋土中から土器，石器が検出されている。

出土遺物（第112図）

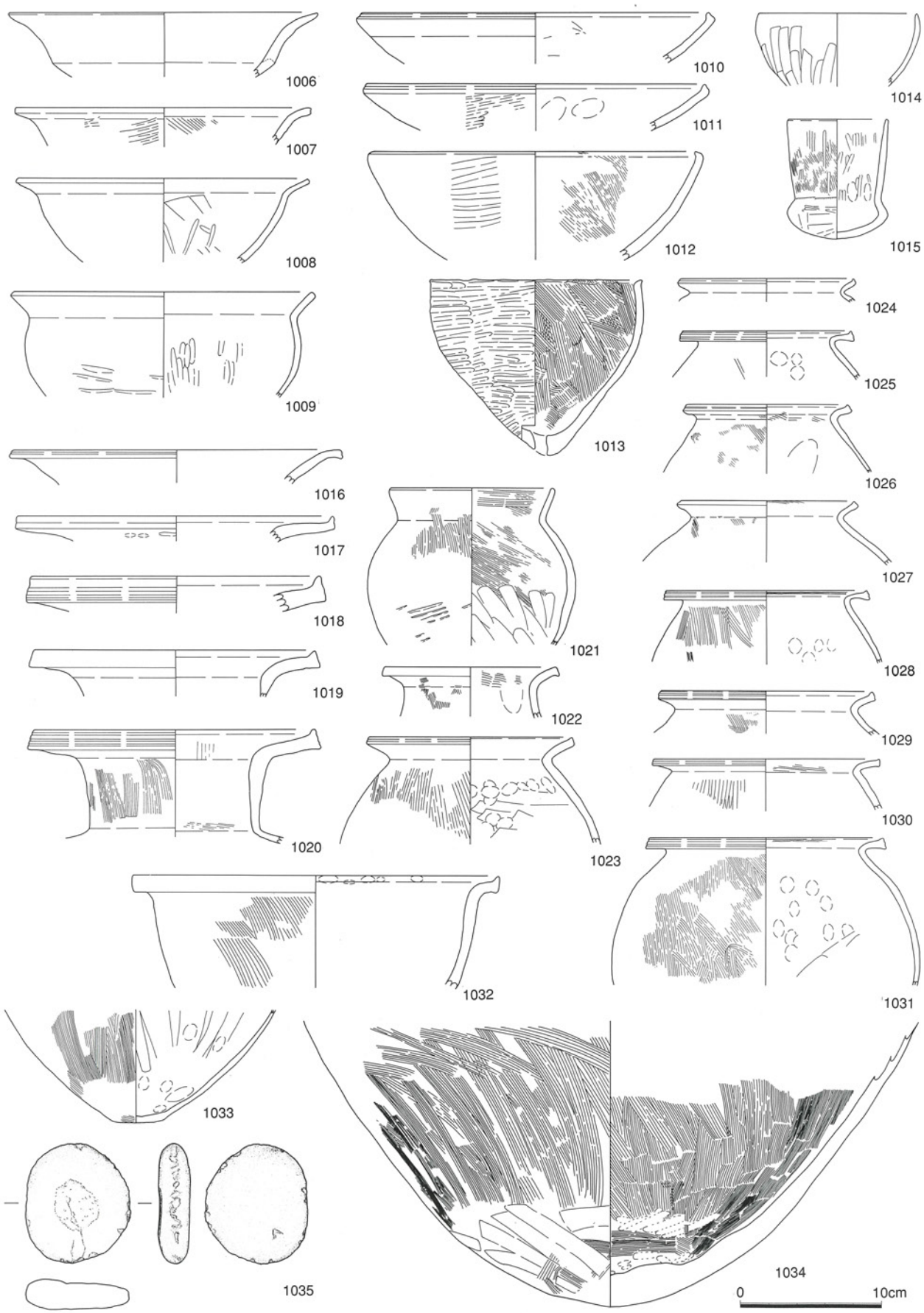
1006は高杯形土器である。口縁部が大きく外反し端部を尖り気味に仕上げる。

1007～1014は鉢形土器である。口縁端部の形状は1007



1．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土
2．灰オリーブ色　5Y5/2　粘質土
3．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土

第111図　SK2025実測図

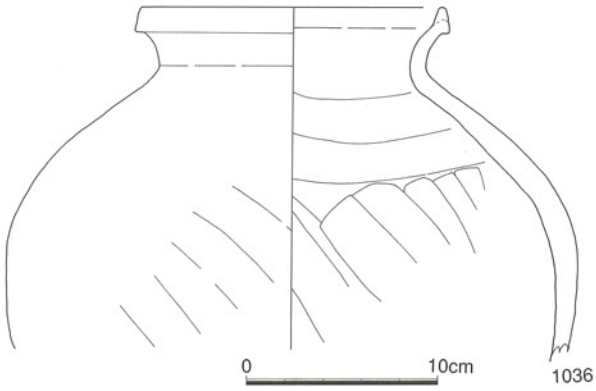


第112図　SK2025出土遺物実測図(1)

～1009が方形状、1010～1012が摘み上げるタイプ、1014は尖り気味である。1008～1012，1014は体部外面に縦しわ痕をとどめ、また1007，1009，1011，1012は体部外面に横位のタタキをとどめる。1013は有孔鉢である。口縁端部は方形状ながら歪であり、内側からの穿孔を有し、外面に横位のタタキをとどめ、内面はハケを施す。

1015は小型丸底鉢形土器である。偏平な体部を有し、口縁部が直線的に立ち上がり端部を尖り気味に仕上げ、体部最大径部が口径と同値を示すものであり、口縁部内外面にタテヘラミガキを施す。

1016～1020，1022は広口壺形土器である。1017～1020は口縁端部が上方に拡張し擬凹線をとどめる。1022は口縁端部を下方に拡張し、内外面にハケを施す。



第113図　SK2025出土遺物実測図(2)

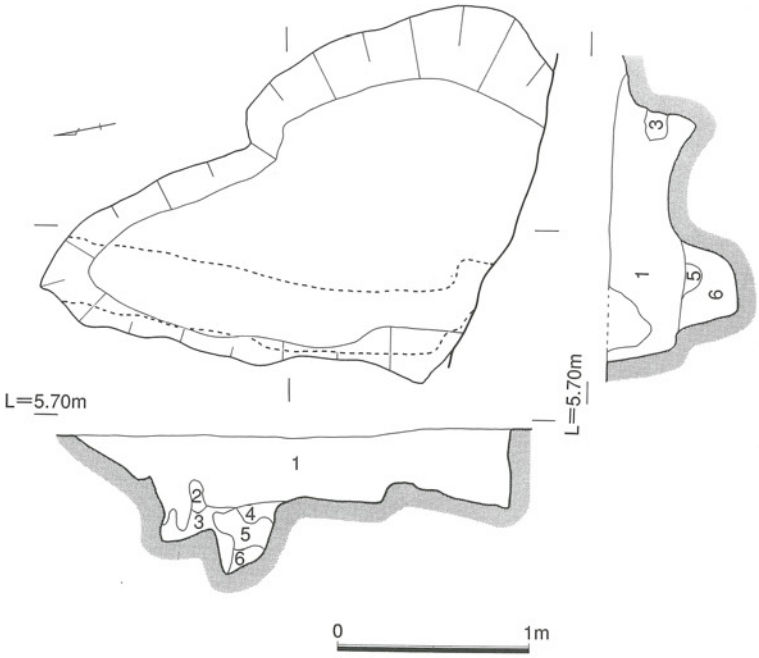
1021，1023～1031は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1021は口縁部が屈曲して端部を丸く収め、体部外面中位に縦しわ痕、下位に横位のタタキをとどめ、体部外面上位タテハケ、体部内面上位ナナメハケ，下位ヘラケズリである。1023～1030は口縁部が「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ擬凹線をとどめるが、そのうち1024～1029，1031は体部の器壁が薄いタイプ、1023，1030は器壁が厚いタイプである。

1034は丸底を呈し、炭化物の付着等は認められない。

1035は叩石である。砂岩製で片面中央部と外縁部に敲打痕が認められる。

（第113図）

1036は広口壺形土器である。結晶片岩及び暗赤色を呈する大粒の鉱物を多量に含有する灰白色の胎土であり、器壁厚く口縁部外反し端部は断面三角形である。口縁部内外面及び体部外面上位がヨコナデ、体部内面上位は横方向のヘラケズリ、体部内外面下位は縦方向のヘラケズリである。



1．灰オリーブ色　5Y5/3　砂質土
2．オリーブ黄色　5Y6/3　砂質土
3．灰オリーブ色　5Y6/2　砂質土
4．オリーブ黄色　5Y6/3　砂質土
5．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土
6．灰オリーブ色　5Y5/2　砂質土

第114図　SK2026実測図

土坑 SK2026（第114図）

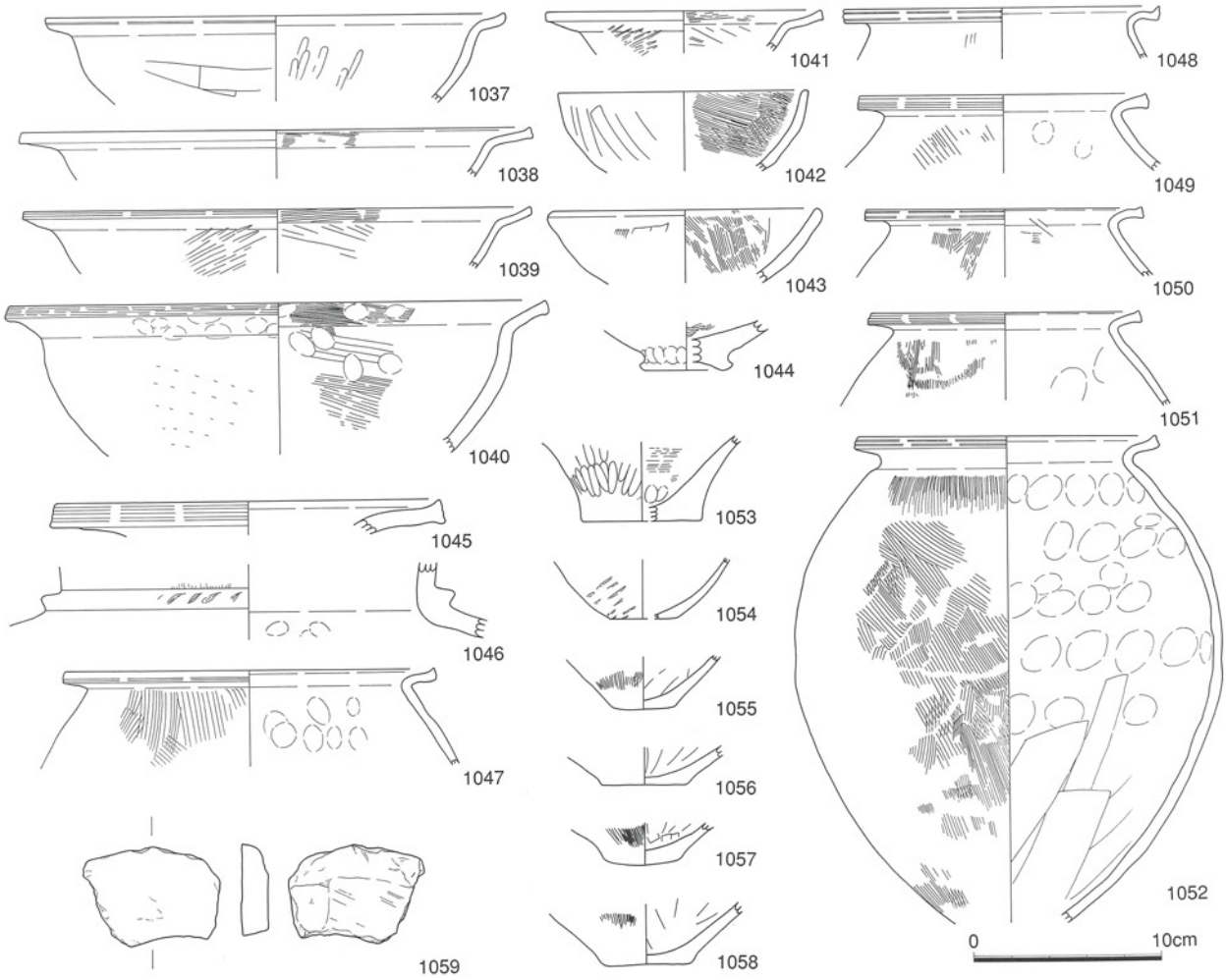
調査区中央部第２遺構面Ｅ～Ｆ－44～45グリッドに位置する、平面不整形の土坑であり、西側がSD1020に切られ、南部が攪乱にかかるため全容は不明であるが、長軸2.87m 以上，短軸1.82m，深さ0.72m を測る。埋土中から土器類等が検出されている。

出土遺物（第115図）

1037～1044は鉢形土器である。1037は体部外面に縦しわ痕をとどめ体部内面にヘラミガキを施す。1038は結晶片岩を含有するものの胎土は非常に精良であり、口縁端部は上下に拡張するシャープなものである。1039，1041は口縁端部がシャープな方形状で擬凹線を廻らすが、体部外面に明瞭なタタキ痕及びその後の縦しわ痕をとどめる。1040は口縁端部を下方に拡張するが歪な形状であり、口縁部内面に細密なヨコハケ、体部内面にヨコハケを施す。1043は口縁端部が丸く、1042は方形状であり、共に体部外面に縦しわ痕をとどめる。1044は台付鉢である。刳り底の台部を有する。

1045，1046は広口壺形土器である。1046は肩部に刻目突帯文を有する。

1047～1052は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含み口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げて２条の擬凹線をとどめ、口縁部ヨコナデ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、



第115図　SK2026出土遺物実測図

体部外面ハケである。

1053～1058は底部である。1053は突出した平底で外面にヘラミガキを施し、1054，1055は突出しない平底、1056～1058は座りの悪い突出気味の平底である。

1059は砥石である。方形の使用面１面のみの残存である。

土器溜り

土器溜り SZ2002（第116図，図版３－１）

第２遺構面 E44～45グリッドに位置し、調査区南東部微高地斜面上に広がる土器溜りである。直径2.80m の円形の範囲に、最大深さ0.80m 程度に大量の土器片が充填されている。本遺構から出土した遺物のうち図化し掲載できたものは41点であり、内訳は高杯形土器７％，鉢形土器43％，壺形土器10％，甕形土器40％であるが、完形のものは１点もない。組成の点でも本調査区の該期の一般的な器種比率に近似し、祭祀行為等特殊な形態は見受けられず、一括性の高い廃棄と理解できる。

出土遺物（第117図）

1060，1061は高杯形土器である。1060は内面黄灰色を呈し、口縁端部を丸く収める。1061は焼成硬く、体部内外面にハケのち放射状のヘラミガキを施す。

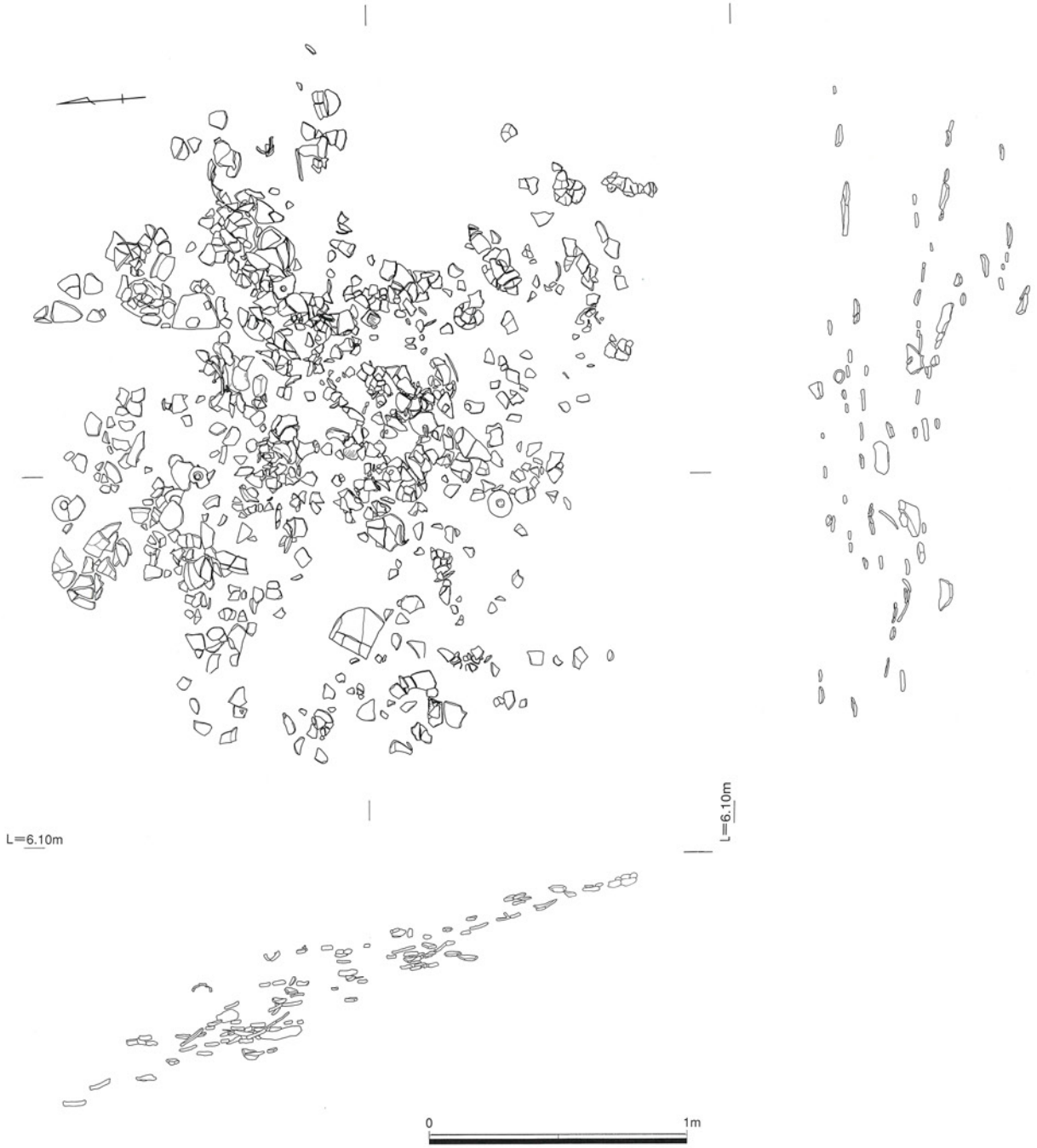
1062～1074は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含み、底部が確認できた1067，1069，1072は全て平底であり、また大半が外面に縦しわ痕をとどめる。口縁部が内灣する1062、浅手で口縁部が強く屈曲する1063，1064、浅手で口縁部が緩やかに屈曲する1067～1071、深手で口縁部が内灣する1072，1073、深手で口縁部が屈曲する1065，1066，1074に分類できる。1062～1065，1069，1073，1074は外面に横位または右上がりのタタキをとどめる。1066，1071は褐色または橙色を呈し焼成の甘いタイプである。1070は口縁端部が尖り気味に外反し、外面に縦しわ痕をとどめない。

1075～1077は壺形土器である。1075は口縁端部を外反して丸く収め、内外面に化粧土を塗布する。1076，1077は口縁端部を上下に拡張して３条の擬凹線をとどめる。

1078～1089は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1078は口縁端部を上方に拡張するが器形が歪であり外面に粗いタタキ痕をとどめる粗製タイプである。1079～1085，1087～1089は口縁端部を摘み上げて擬凹線をとどめ口縁部にヨコナデを施す器形の整ったもので、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリで、体部外面には細密なハケを施しタタキ目をとどめない。そのうち1087～1089は器壁が薄いタイプである。1086は焼成硬く、肩の張らない体部から口縁部が屈曲して直線的に開き端部を上下に拡張するもので、体部内面上位にユビオサエのち丁寧なヨコナデを加える。

（第118図）

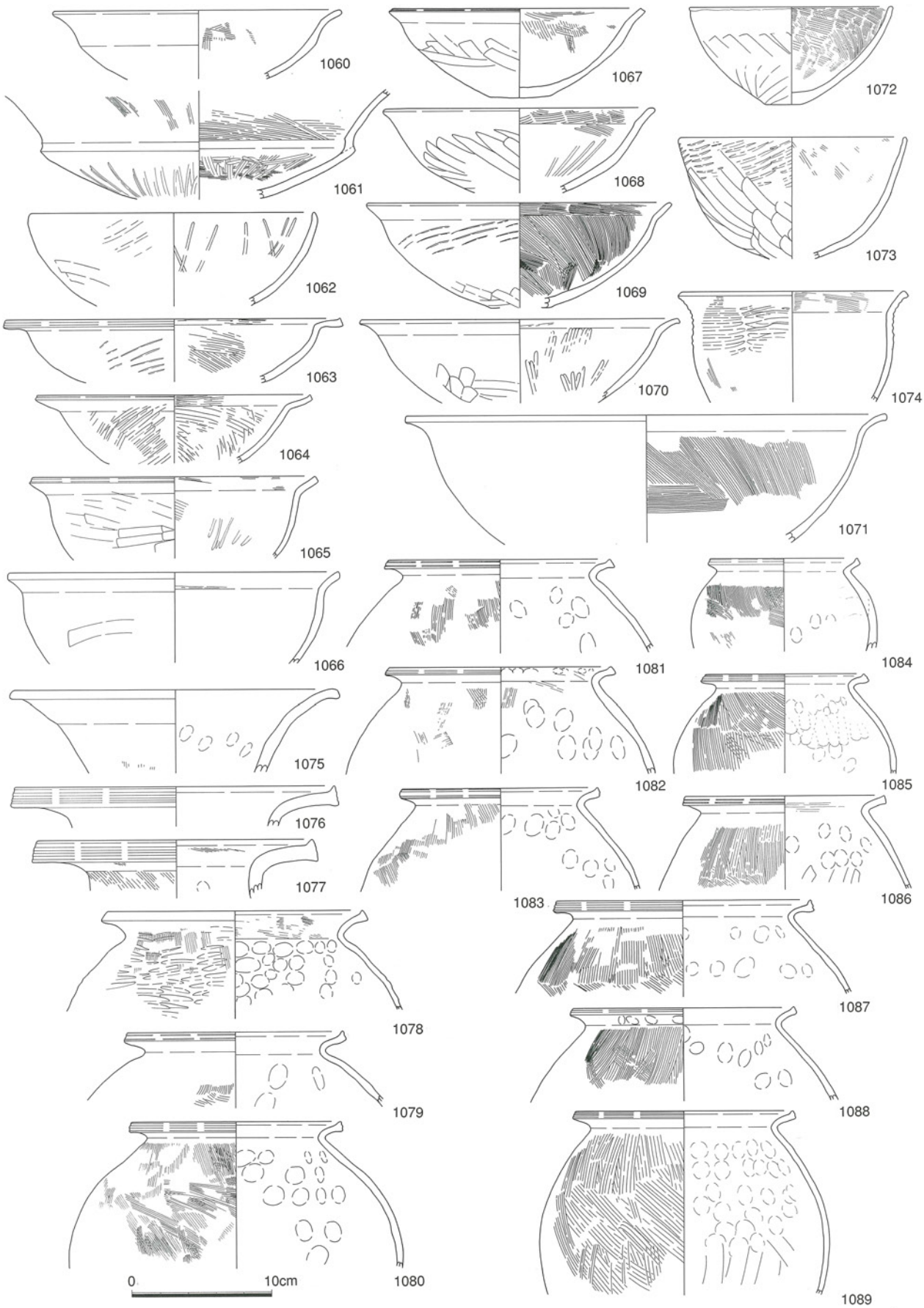
1090～1100は底部である。1092，1093は体部外面に横位のタタキを明瞭にとどめるのに対し、それ以外は体部外面に細密なハケを施しタタキ目をとどめない。1090～1092，1094は突出気味または突出する平底、1093，1095はドーナツ底，1096～1100は突出しない平底である。



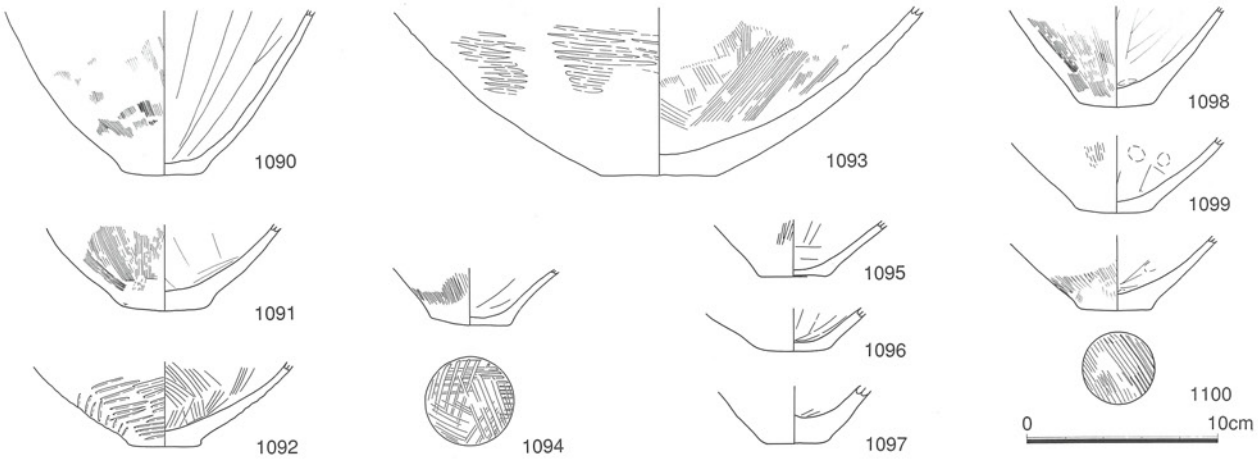
第116図　SZ2002（土器溜り２）実測図

土器溜り SZ2003（第119図，図版２－７）

第２遺構面F～G－45グリッドに位置する、調査区南西部の微高地上の土器溜りである。東西3.5m，南北3.8mの不定形の範囲に最大深さ0.5m程度の土器の充填が観られ西側は調査区境界にまで及ぶものである。出土した遺物のうち図化掲載し得たものは38点であり、内訳は高杯形土器10%，器台形土器３%，鉢形土器34%，壺形土器７%，甕形土器45%である。組成の点からも本調査区の該期の一般的な器種比率に近似し、祭祀行為等の特別な形態は見受けられず、一括性の高い廃棄と理解できる。



第117図　SZ2002（土器溜り２）出土遺物実測図(1)



第118図　SZ2002（土器溜り２）出土遺物実測図(2)

出土遺物（第120図）

1101～1103は高杯形土器である。1102は発達した口縁部が大きく外反し端部を尖り気味に仕上げ脚部に明瞭な稜を持たず緩やかに開き端部を尖り気味に仕上げる。杯部内面にハケのちヘラミガキを施し、脚部には２連の透かし穴を３方向に穿孔している。

1104は器台形土器である。脚部外面には化粧土を塗布している。

1105～1114は鉢形土器である。1105は杯状を呈し器壁厚いが、外面に縦しわ痕及びケズリ痕をとどめず、内面も丁寧にナデを施している。1106～1111はほとんどが外面に縦しわ痕をとどめるものであるが、器形，法量にはバラエティーがある。口縁端部の形状では尖り気味または尖る1106，1111、丸く収める1108、方形状の1107，1109，1110に分類できる。また内面にヘラミガキを施す精製タイプ1108，1110、外面にタタキ痕をとどめ内面は粗いハケである粗製タイプ1107がある。1112～1114は有孔鉢形土器である。外面にタタキ目及び縦しわ痕をとどめ内面にハケを施すが、尖り底の1112，1114と平底の1113に分類できる。また1112は２穴、1113は１穴、1114は貫通する１穴と貫通しない１穴を有する。

1115は鉢形土器と考えられる体部片である。外面に明瞭なタタキをとどめ、内面にハケを施し水銀朱の付着が認められる。

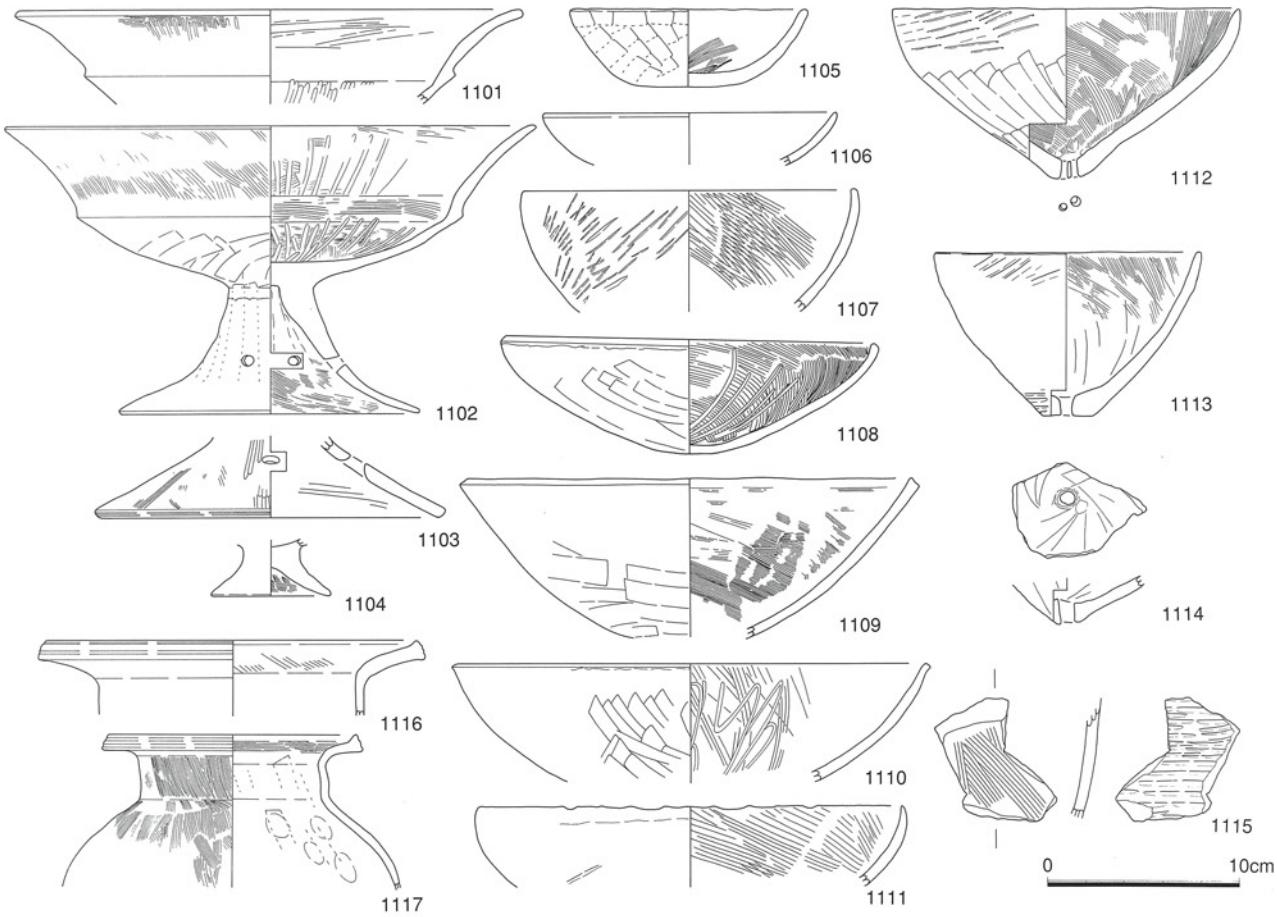
1116，1117は広口壺形土器である。頸部直立して口縁部が水平気味に開き端部を上下に拡張して擬凹線をとどめるものであり、1117は体部内面上位ユビオサエ、体部外面上位ハケである。

（第121図）

1118～1130は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1118は口縁端部を方形状に仕上げるが口縁部が歪な器形であり体部の器壁が厚く、体部内面上位粗いハケ，下位ヘラケズリ、体部外面上位縦位のハケ，下位タタキのちナデである。1119～1130は口縁部が「く」の字状に屈曲して端部を摘み上げ擬凹線をとどめ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面にハケであり、確認できたものはいずれも平底であるが、体部の器形に差異がある。すなわち長胴型で最大径部を体部中程に有する1119，1121，1122，1129と、やや肩が張り最大径部を上位

第119図　SZ2003（土器溜り３）実測図

に有する1120，1123，1127，1128，1130がある。1120は胎土橙色を呈し焼成甘く、上げ底で全体に器壁厚く口縁部内面に粗いヨコハケ及び工具痕をとどめた歪な器形の口縁部であり、体部内面上位には工具圧痕が認められ、体部外面は上位下位で刷毛の単位が異なる。同様に1119は器壁厚く、1127は口縁部のヨコナデが不十分で端部も歪で擬凹線とどめない粗製タイプである。これに対し1128は器壁薄く口縁部に丁寧なヨコナデを施した精製タイプである。1121～1123も同様に薄手である。1130は座りの悪い平底であり、体部外面上位に僅かにタタキ痕をとどめるが細密なハケを施し器壁を薄く仕上げている。



第120図　SZ2003（土器溜り３）出土遺物実測図(1)

1131～1138は底部である。1131～1133，1137，1138は座りの悪い突出気味の平底、1134は尖り気味の丸底、1135，1136は平底である。

(2)　奈良・平安時代の遺構と遺物

ここでは第１遺構面から検出された遺構と遺物のうち、平安時代のものを紹介するが、弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物が混在する遺構については、３－(1)で遺構を説明しており、遺物のみ紹介する。

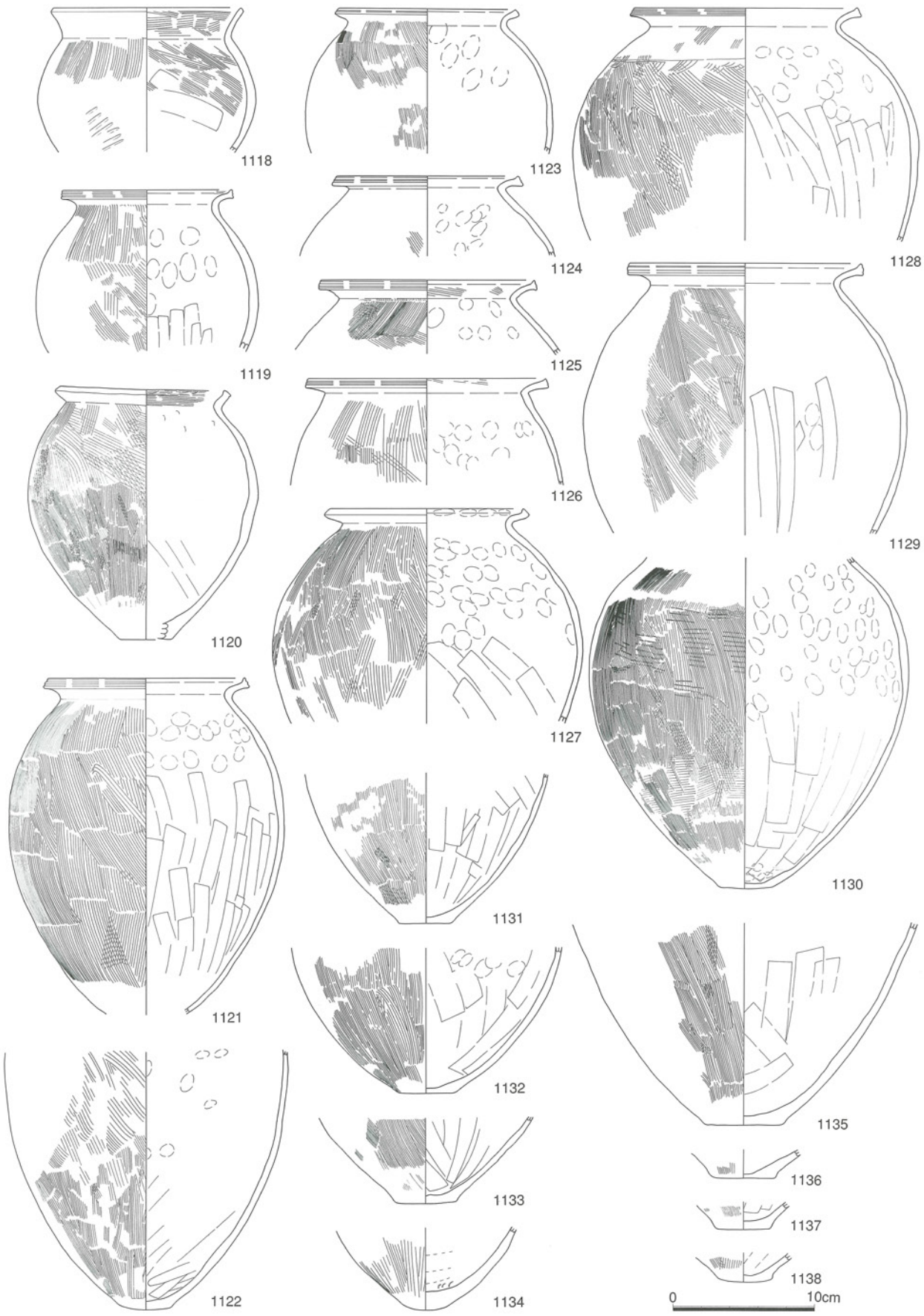
溝

溝 SD1020出土遺物（第122図）

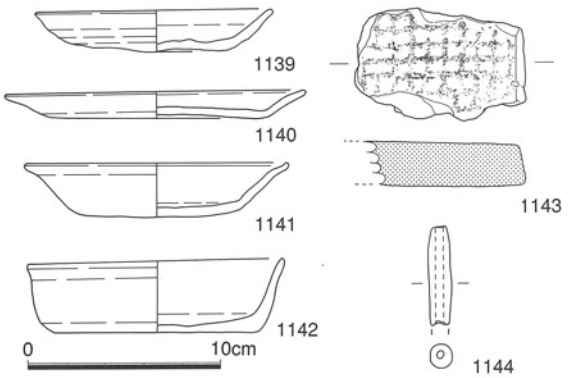
第１遺構面E～F－44～45グリッドに位置する南北方向の溝であり、規模，形態等及び出土遺物のうち弥生時代終末期～古墳時代初頭のものについては先述しており、ここでは出土遺物のうち古代の土師器及び瓦等について説明する。

1139，1140は土師器皿である。共に完形での出土であり、1139はにぶい橙色を呈し、口縁端部は僅かに外反し底部は粗い板ナデにより回転切り離し痕をとどめない。1140は口縁端部内側に沈線を廻らせ底部は回転篦切り痕を殆どとどめない丁寧なナデであり、外面に赤色塗彩が認められる。

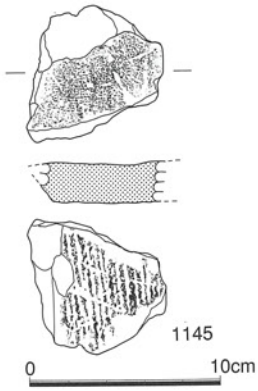
1141，1142は土師器杯である。共にほぼ完形での出土である。1141は口縁端部内側に沈線を廻ら



第121図　SZ2003（土器溜り３）出土遺物実測図(2)



第122図　SD1020出土遺物実測図(2)



第123図　SD1021出土遺物実測図

せ底部は回転ヘラ切り痕を僅かにとどめる程度の丁寧なナデであり、内外面に回転台使用による赤色塗彩が明瞭に認められる。1142は口縁部深く立ち上がり端部外反しやや尖り気味である。底部は回転ヘラ切りのちナデであり、内外面に赤色塗彩を施すが、二次的な被熱の痕跡が観られる。

1143は須恵質の平瓦である。凹面は板ナデ、凸面に格子目タタキを施す。

1144は土師質の環状土錘である。

溝 SD1021（第97図）

第１遺構面中央部 F44～45グリッドに位置する南北方向の溝である。南北端が撹乱に切られるが、最大幅1.18m，最大深さ0.54m を測る、断面台形状を呈する溝である。主軸方位は N－12°－E を示す。

出土遺物（第123図）

1145は須恵質の平瓦である。凹面は布目痕、凸面は縄席文タタキである。

土坑

土坑 SK1070（第124図）

調査区最北端の低地部、第１遺構面 F42～43グリッドに位置する平面不定形，断面浅い台形状を呈し底部平坦な土坑である。北側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、長軸3.48m以上，短軸2.72m，深さ0.26m を測る。埋土はほぼ平行堆積を示すものであり、出土遺物には古墳時代初頭の土器及び古代の須恵器，瓦等がある。

出土遺物（第125図）

1146は広口壺形土器である。口縁端部を上方に拡張し３条の擬凹線をとどめる。1147は須恵器の口縁部であり端部を上方に屈曲して丸く仕上げる。上端部の磨耗が認められる。1148は須恵質の平瓦片である。凹面に布目痕をとどめる。1149は金属製品である。

土坑 SK1072（第97図）

調査区北部第１遺構面E～F - 43グリッドに位置する平面隅丸長方形、断面台形を呈する土坑で

あり、長軸2.11m，短軸1.43m，深さ1.24mを測る。埋土中から平瓦片及び土師質の土錘を検出している。

出土遺物（第126図）

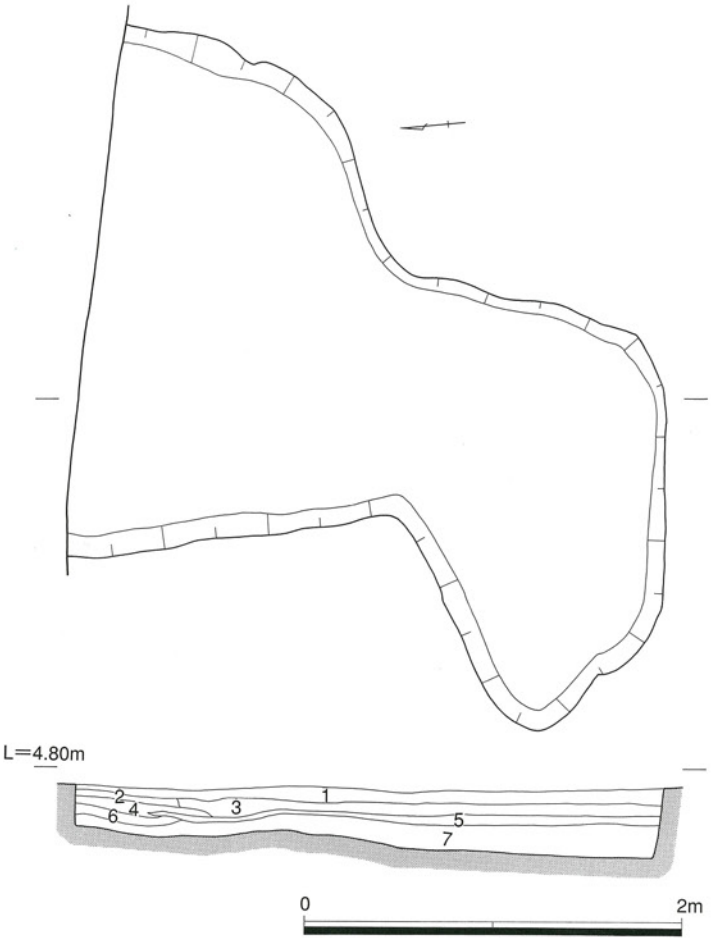
1150は土師質の平瓦である。凹面は布目痕、凸面は縄蓆文タタキ痕をとどめる。1151は土師質の環状土錘である。

(3) 遺構外出土の遺物

第９層出土遺物（第127図）

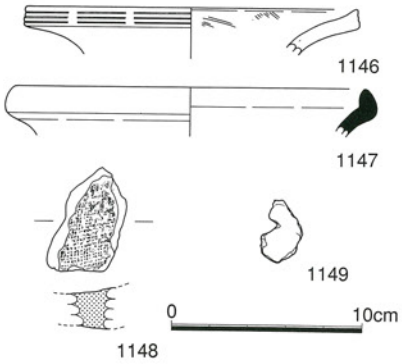
調査区南側の微高地西部分つまりF～G－44～45グリッドにおいて、遺構は検出できなかったが、最下層である第９層からまとまって大量の土器が出土している。

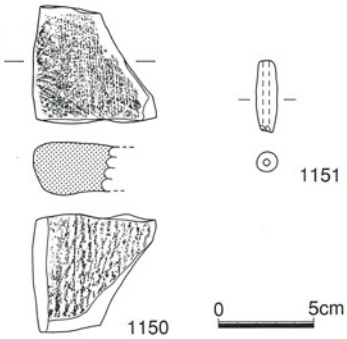
1152～1160は高杯形土器である。1152は結晶片岩を含むものであり、杯部は強く屈曲して上半が外反するが口縁部で外反度を増してその部分の内外面に一層強く凹線状のヨコナデを施す。下川津Ⅰ式古層にみられる讃岐地方の影響を強く受けたものと理解できる[2]。1153は完形の杯部である。体部上端に口縁部を接合して方形状の体部先端下半を露胎するもので、口縁端部は方形であり１条の擬凹線をとどめる。1157は杯部が屈曲して口縁部が大きく外反し端部内側に沈線を廻らせる。脚部には明瞭な稜線を持たず緩やかに開き裾端部は方形で擬凹線をとどめ端部外面に１条の沈線を廻らせる。ほぼ完形近くにまで復元できた。1158，1159の脚部も同様の器形であるのに対し、1160は脚柱部と裾部間に明瞭な稜を持つタイプである。



1．暗灰黄色	2.5Y5/2	砂質土	マンガンを含む
2．暗オリーブ色	5Y4/3	砂質土	
3．灰オリーブ色	5Y5/3	砂質土	マンガンを含む
4．オリーブ色	5Y5/4	砂質土	鉄分を含む
5．灰オリーブ色	5Y5/2	砂質土	鉄分を含む
6．灰色	5Y4/1	砂質土	
7．灰色	5Y5/1	粘質土	

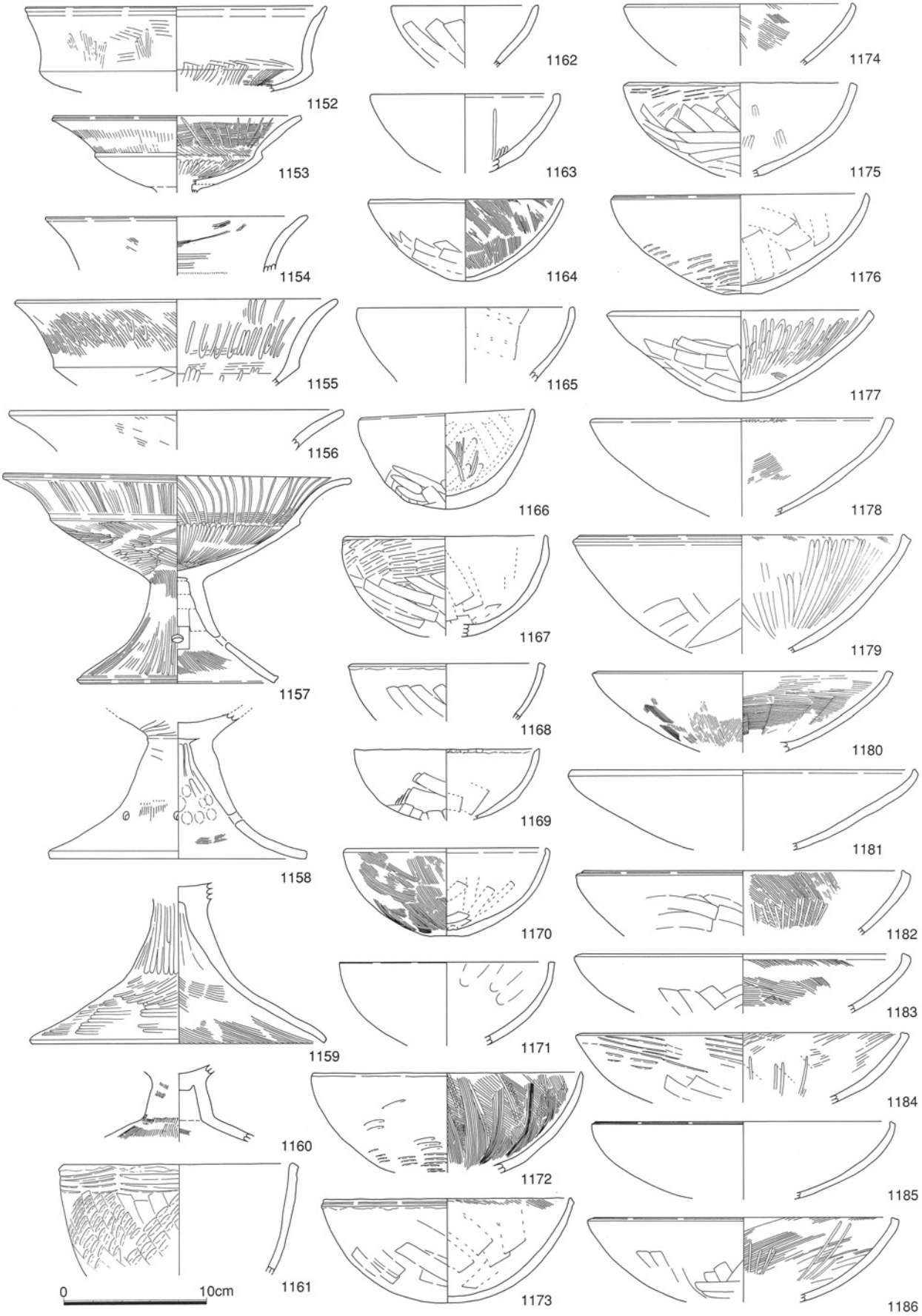
第124図　SK1070実測図





1161～1186は鉢形土器

第125図　SK1070出土遺物実測図　第126図　SK1072出土遺物実測図



第127図　第５調査区第９層出土遺物実測図(1)

である。いずれも体部が内灣し口縁部が屈曲しないものであるが、さらに法量，器形から細分可能である。すなわち、体部内灣し口径13～19cm，器高６～7.5cmであるⅡＡ２類の1168～1173、体部内灣し浅手（口径21～23cm，器高６cm程度）であるＩＡ３類の1182～1186、体部内灣し深手（口径12.5～14cm，器高７cm程度）であるⅢＡ１，ⅡＡ１類の1166，1167、体部尖り気味で小型（口径10～15cm，器高５～６cm）であるⅢＡ５，ⅡＡ５類の1162～1165、体部尖り気味で大型（口径16～23cm，器高6.5～９cm）であるⅡＡ５，ＩＡ５類の1174～1179、体部尖り気味で浅手（口径21～23cm，器高６cm程度）であるＩＡ６類の1180，1181、砲弾形であるⅡＡ９類の1161に分類できる。底部は丸底，平底が混在するが、口縁端部の形状はⅡＡ１類が尖り気味、ＩＡ５，ⅡＡ５，ⅢＡ５，ＩＡ６類，ⅡＡ９が方形状である。ほとんどが外面に縦しわ痕をとどめ下位ヘラケズリであるが、1167，1172，1175，1176，1184は横位のタタキ痕とその後生じた縦しわ痕を同時にとどめるものである。内面は放射状のヘラミガキ若しくは丁寧なナデを施した精製品が大部分であるが、例外的に1164，1174，1180等は粗いハケをとどめ本調査区における粗製な部類に入る。

（第128図）

1187は小型丸底鉢形土器である。口縁部弱く屈曲して端部は方形状であり、体部外面に縦しわ痕をとどめる。

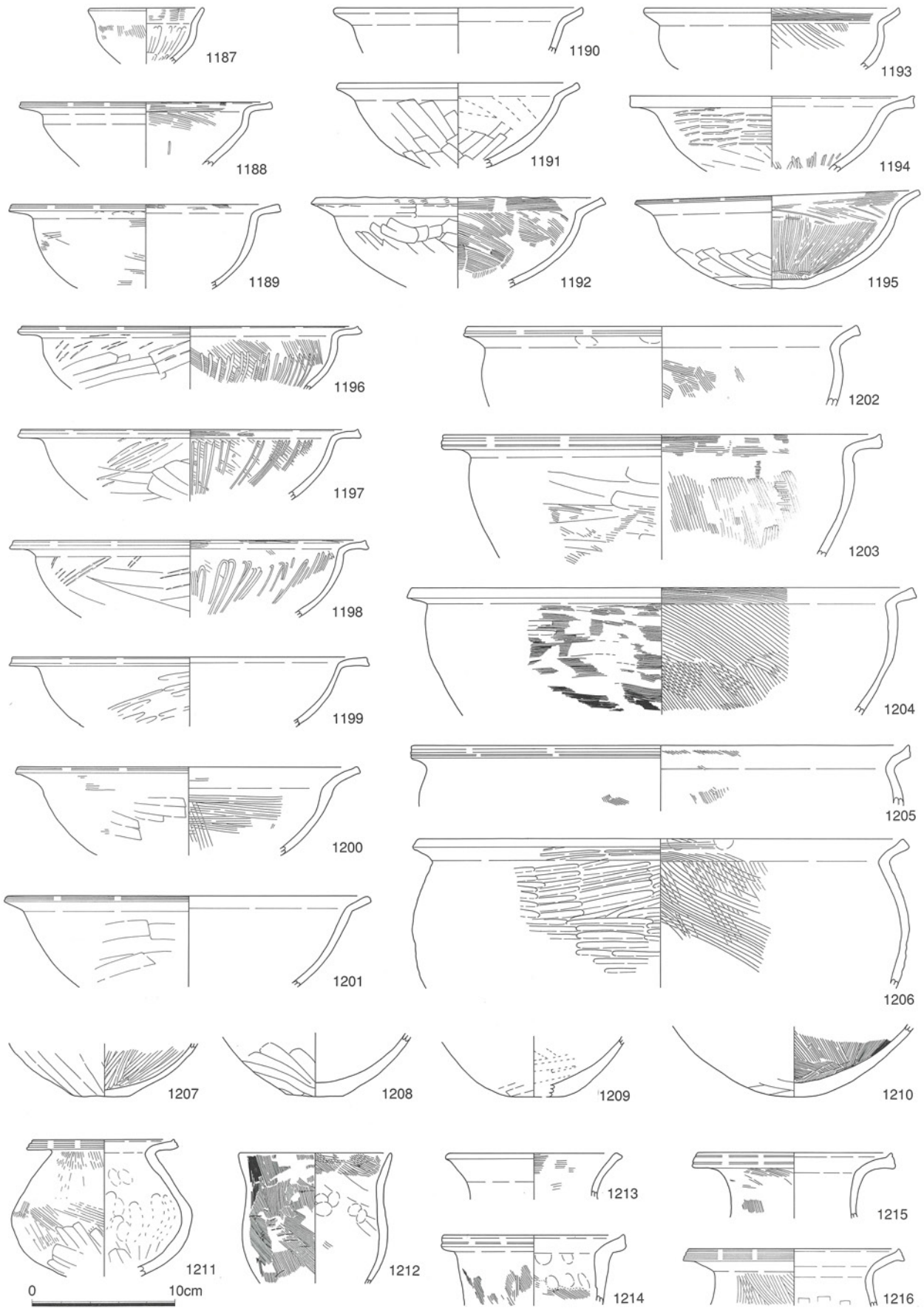
1188～1210は鉢形土器及びその底部である。器形から細分すると、口縁部を水平近くにまで強く屈曲する1188，1189，1196～1199，1203，1204、口縁部の屈曲が緩やな1190～1192，1194，1195，1200，1201、頸部径が体部最大径より小さい1193，1202、体部最大径が口径より大きい1205，1206に分類できる。口縁端部はいずれも方形状であるが、1188，1189，1196～1203，1205は擬凹線をとどめる。完形の1195及び底部1207～1210から大部分が平底であると理解できる。体部内面はヘラミガキを施すものが多いが、1192，1195，1204等は内面に粗いハケをとどめ粗製な印象を与えるものである。また体部外面縦しわ痕をとどめ、下位ヘラケズリであるものが一般的であるが、外面にタタキ痕を僅かにとどめる1197～1199も一定量含まれ、タタキを明瞭にとどめ縦しわ痕を有しない1194，1196もある。1211は器壁厚く算盤玉形の体部で口縁部が屈曲して端部を摘み上げ２条の擬凹線をとどめる。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面は下位ヘラケズリであるが上位はヨコナデ，中位にユビナデを施している。体部外面は上位がハケのち丁寧なナデ、下位がヘラケズリのち細密なハケである。

1212は無頸壺形土器である。結晶片岩を含み口縁端部は尖り気味であり、口縁部内面粗いハケ、体部内面ケズリのちユビオサエで、体部外面は横位のタタキのち細密なハケを施す。

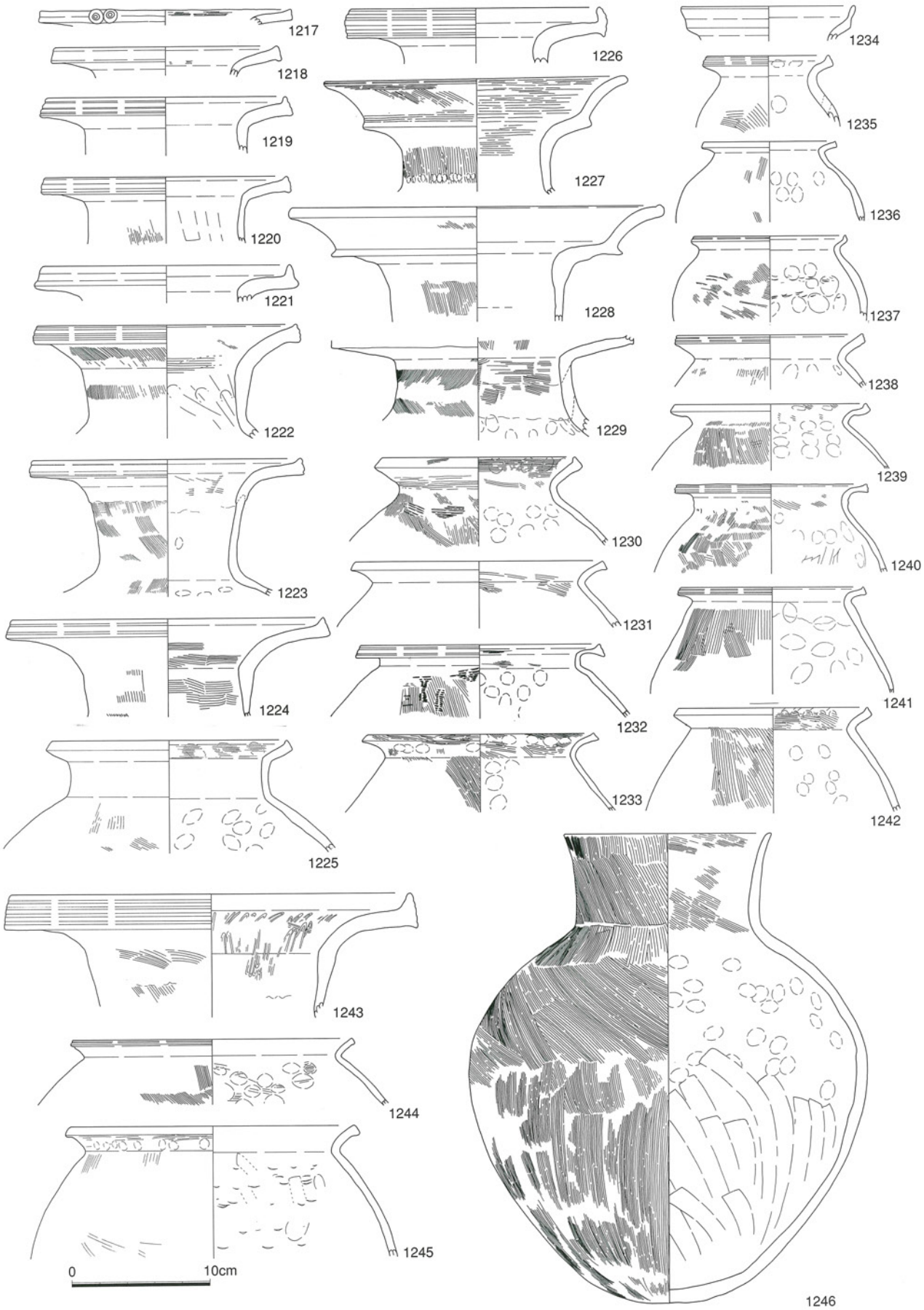
1213～1216は広口壺形土器である。1214は口縁部が短く端部を上方に拡張して擬凹線をとどめる。1215，1216は口縁端部が拡張して擬凹線をとどめる。

（第128図）

1217～1225，1230，1240，1243は広口壺形土器である。1217は口縁部が水平気味に開き、方形状の端部に１条の擬凹線をとどめ２連の円形浮文を貼り付けている。1218～1224，1243は直立若しくは外傾する頸部から口縁部が開き、口縁部内外面に強いヨコナデを加え、口縁端部は上下ま



第128図　第５調査区第９層出土遺物実測図(2)



第129図　第５調査区第９層出土遺物実測図(3)

たは上方に拡張し擬凹線をとどめるものである。頸部内外面には細密なハケを施すものが多く、体部内面上位にはユビオサエを加えている。1225は焼成甘く口縁端部が上方に拡張するが端面に擬凹線をとどめず口縁部の器形が歪である。1230は口縁部が大きく外反し端部を摘み上げるものの、ヨコナデが不十分なため口縁部が肥厚して歪であり擬凹線をとどめない。1240は焼成が硬質であり口縁部が水平に大きく開いて端部を摘み上げ2条の擬凹線をとどめるもので、口縁部内外面丁寧なヨコナデ、体部内面上位は上端にナナメハケが観られるがユビオサエ後ヨコナデを施し、外面上位は細密なハケである。

1226～1229は二重口縁壺形土器である。1226は短く直立する二次口縁外面に4条の擬凹線をとどめる。1227～1229は直立する頸部から水平気味に開く一次口縁上端部に二次口縁を接合して大きく外反するもので、方形状の擬口縁下半を露胎している。

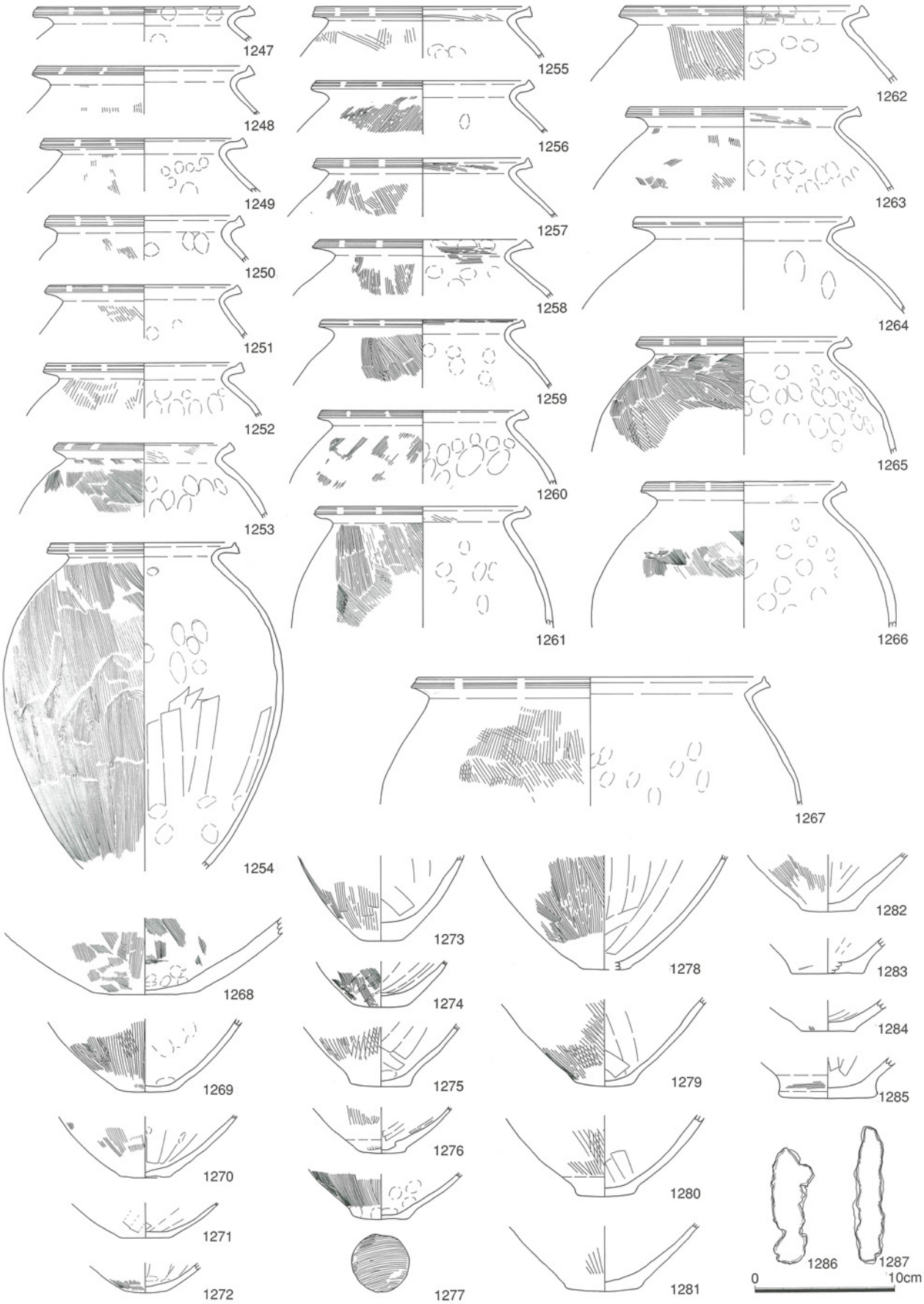
1234は二重口縁甕形土器である。胎土が浅黄橙色を呈し結晶片岩を含まない搬入品である。一次口縁に比して器壁の薄い二次口縁が外反して端部を丸く収めるもので、内外面ともに丁寧なヨコナデである。

1231～1233，1235～1239，1241，1242，1244，1245は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1231，1242，1245は口縁部が「く」の字状に屈曲し端部は拡張して方形状を呈するが、口縁部内外面にヨコナデが不十分であるためタタキ目をとどめる傾向がある。1244も類似するが口縁部の器壁は薄く端部が拡張しないものである。1232は口縁部の屈曲が強く端部を摘み上げて断面三角形を呈し、口縁部のヨコナデは強く2条の明瞭な擬凹線をとどめる。1233は口縁端部を拡張して方形に仕上げるが器形は歪であり、非常に器壁の薄い体部は内面ユビオサエ、外面細密なハケである。1235は器壁厚く口縁部が大きく外反して端部を摘み上げ擬凹線をとどめるもので、口縁部内外面ヨコナデ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面ハケである。1236は焼成甘く口縁端部は方形状で摘み上げはみられない。1237は短い口縁部が屈曲して端部を摘み上げ、内外面には丁寧なヨコナデを施して器壁を薄くし端面に擬凹線をとどめる。体部外面には細密なハケを施すがタタキ目をとどめる。1238は口縁端部が方形で口縁部内外面に丁寧なヨコナデを施して端面に擬凹線をとどめる。1241も同様であるが僅かに口縁端部を摘み上げている。1239は口縁部が屈曲して端部を摘み上げるがヨコナデが不十分なため器形が歪である。

1246は直口壺形土器である。胎土中に結晶片岩を含有するもので、丸底で体部2／3位に最大径部を有し、口縁部が直立して端部は尖り気味である。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面ハケであり、口縁部内外面にナナメハケを施す。

（第130図）

1247～1267は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1254は最大径部を体部高2／3位に有する倒卵型であり、口縁部の屈曲が強く端部を摘み上げ、口縁部内外面に丁寧なヨコナデを施し端面には2条の擬凹線をとどめる。体部内面上位ユビオサエ、下位ヘラケズリであり、体部外面に細密なハケを施す。後期Ⅲ-2型式[3]に比定される東阿波型土器である。他も同様であるが、口縁部の屈曲の程度にばらつきがみられ，1248，1250，1259，1265，1266等はこれよ



第130図　第５調査区第９層出土遺物実測図(4)

り屈曲の程度が弱い。

1268～1285は底部である。いずれも平底であるが、突出気味の1275，1278～1284、突出気味で薄手の1276，1277、突出する1285、突出せず肥厚しない1268～1272、突出せず肥厚する1273，1274に細分できる。

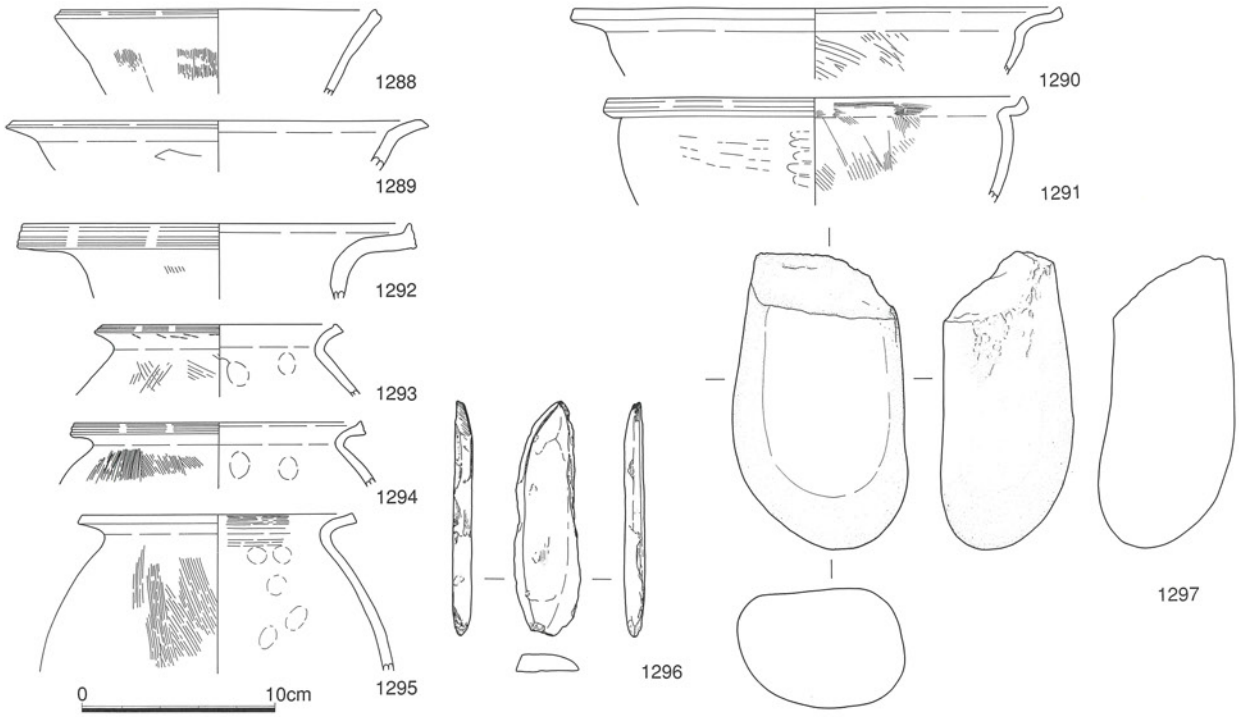
1286，1287は金属製品であるが、錆の付着が顕著であり、エックス線写真により外形を示した。

第７層出土遺物（第131図）

1288は広口長頸壺形土器である。1289～1291は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1289は口縁部が弱く屈曲し端部方形を呈し１条の擬凹線をとどめる。1291は口縁部が鋭く屈曲し端部を摘み上げるがヨコナデが不十分で器形は歪である。1292は広口壺形土器である。口縁端部を上下に拡張し３条の擬凹線をとどめる。1293～1295は甕形土器である。いずれも口縁部「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げるが、1293が口縁部の器壁が厚くタタキ目を一部残すのに対し、1294は口縁部のヨコナデが強く器壁は薄くタタキ目をとどめない。1296は柱状片刃石斧である。結晶片岩製である。1297は砂岩製の砥石である。残存するのは中央部から１／２であるが使用面１面が認められる。

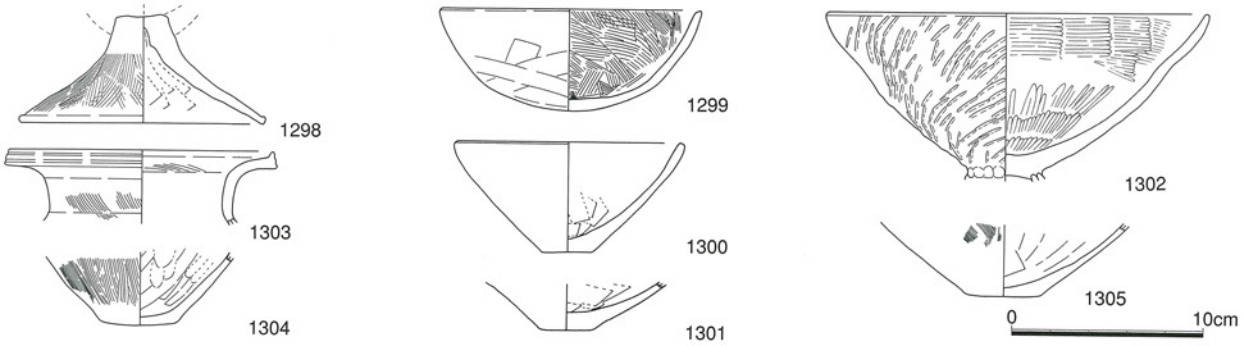
第５層出土遺物（第132図）

1298は高杯形土器の脚部若しくは甕形土器の蓋である。裾端部は方形状を呈し脚柱部には粘土充填の痕跡をとどめる。1299～1302は鉢形土器である。1299は丸底で器壁薄く口縁端部が方形状



第131図　第５調査区第７層出土遺物実測図

を呈し内面にはハケ目をとどめる。1300は平底で口縁端部を丸く収める。1302は胎土橙色を呈する台付鉢であり、口縁部僅かに屈曲して端部を丸く収める。外面は粗い放射状のタタキをとどめるのに対し、内面は上位が横方向、下位が縦方向のヘラミガキを施す。1303は広口壺形土器である。直立気味の頸部から口縁部大きく外反し端部を摘み上げ2条の擬凹線をとどめる。1304，1305は突出気味の底部である。



第132図　第5調査区第5層出土遺物実測図

層位不明遺構外出土遺物（第133図）

1306～1310は高杯形土器である。1307，1308は口縁端部内側に1条の沈線を廻らせる。

1311は台付鉢形土器である。裾端部が上方に拡張する方形状を呈し3方向に2連の透かし穴を有する。

1312～1341は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。口縁部が屈曲しないA類1312～1335、口縁部が屈曲して最大径部が口縁部にあるE類1336～1340、最大径部が体部にあるF類1341がある。

（第134図）

1342～1344は小型丸底鉢形土器である。1342，1343は尖り気味の体部を有し口径が体部最大径より大きく端部を尖り気味に仕上げる。

1345は細頸壺形土器である。内面に接合痕を明瞭にとどめる。

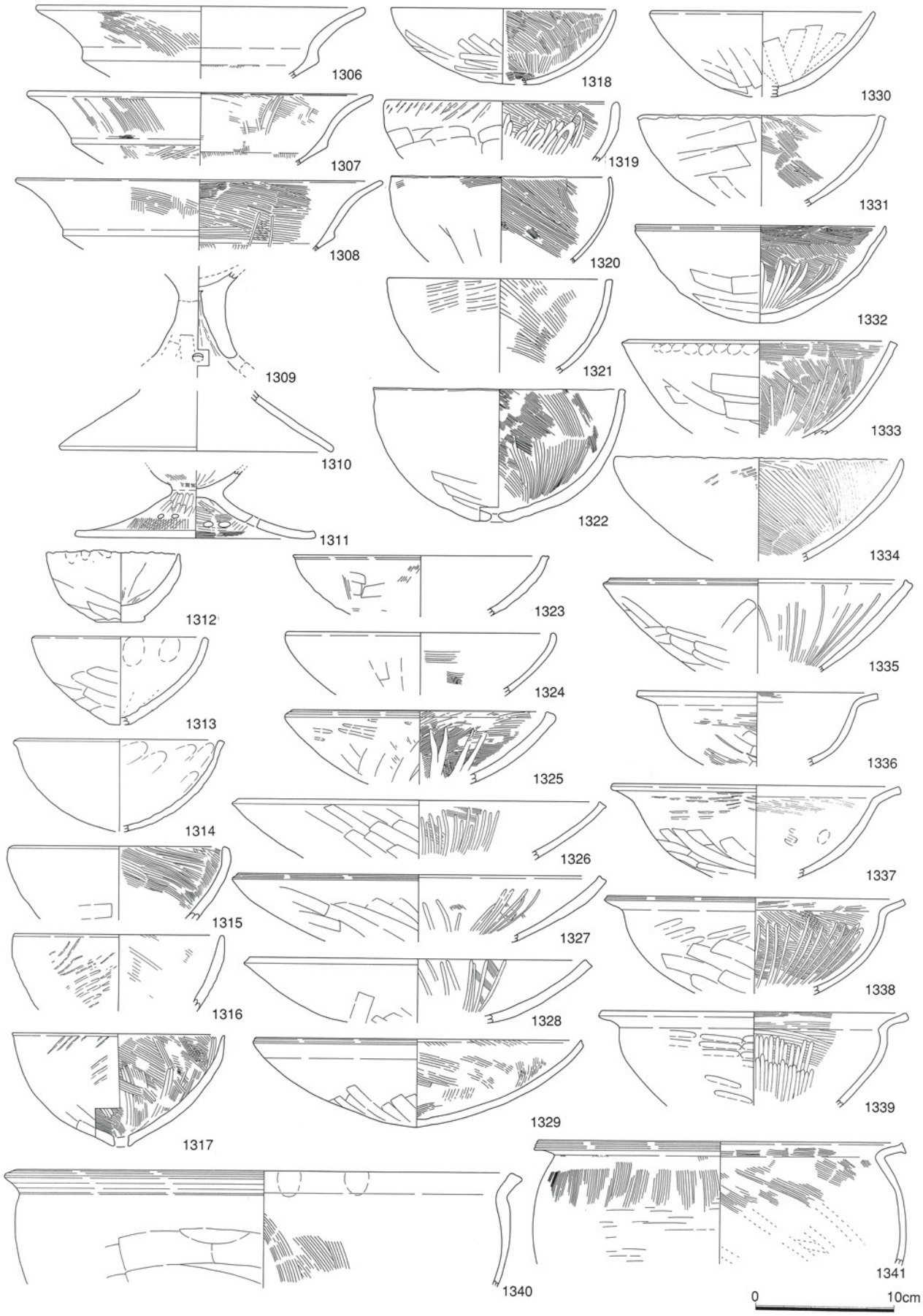
1346～1364は広口壺形土器である。全て結晶片岩を含有する。1358は口縁端部に円形浮文を、1359は口縁部内面に格子文を有する。

1365～1368は二重口縁壺形土器である。

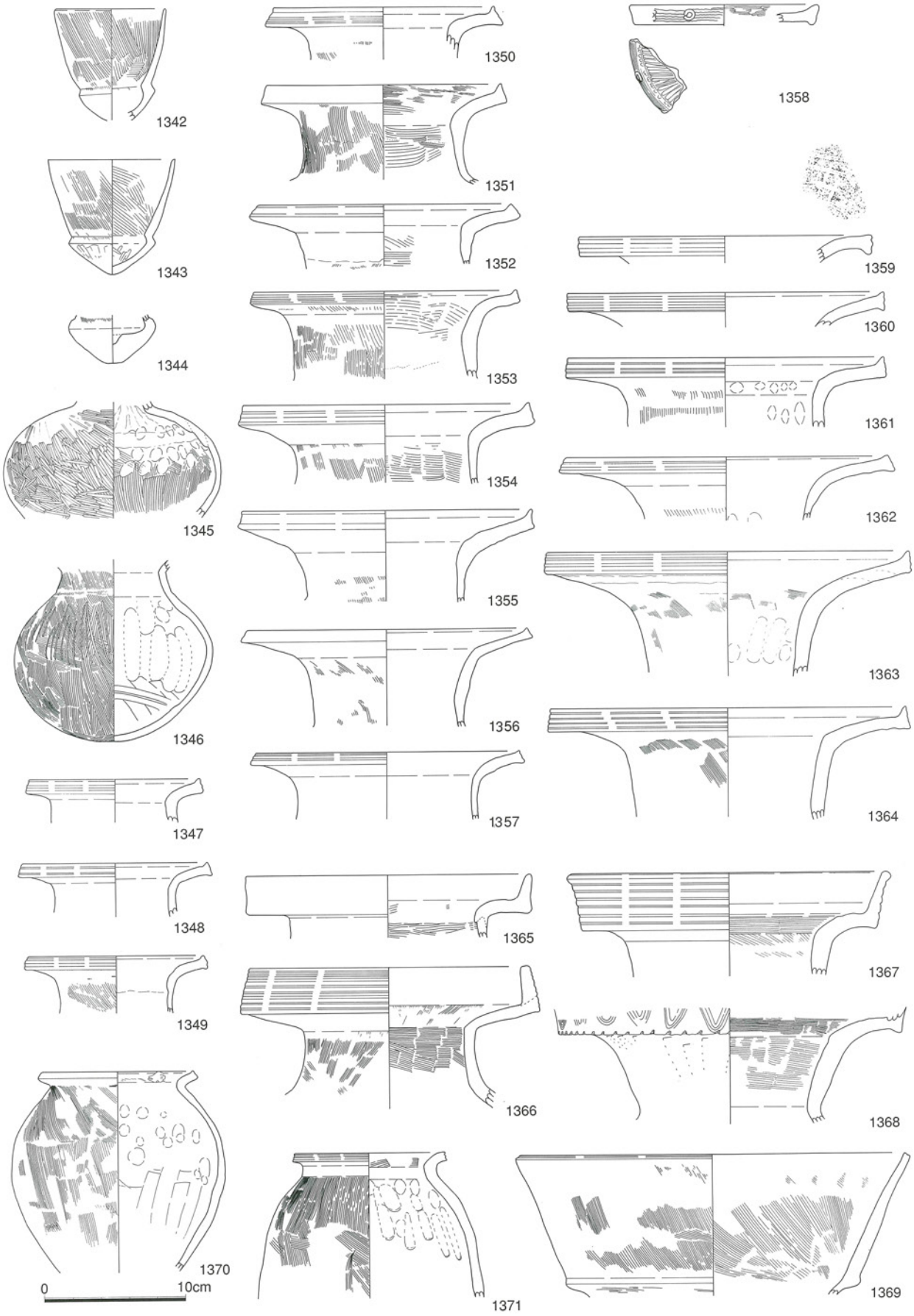
1369は二重口縁甕形土器である。結晶片岩を有し口縁端部及び擬口縁端部下半がともに方形状を呈する。内外面ナナメハケのち強いヨコナデを加えている。

1370，1371は甕形土器である。共に結晶片岩を含有するものである。1370は口縁部屈曲して端部を摘み上げ、内面ハケのちナデであるが、さらに粘土を付加しハケを施している。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、外面ハケである。1371は器壁全体に厚く、口縁部緩やかに屈曲して端部を方形に仕上げる。長胴型である。

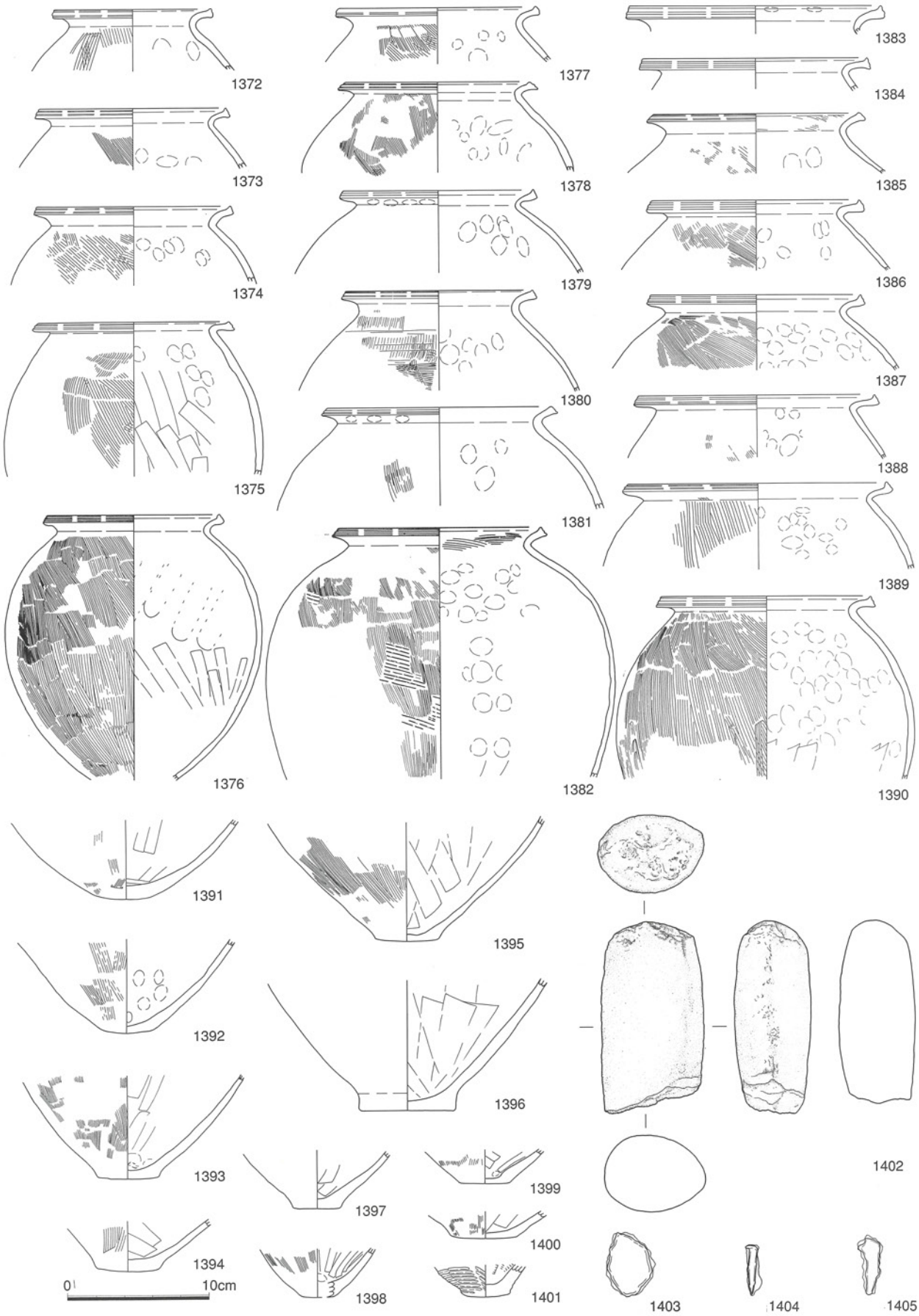
（第135図）



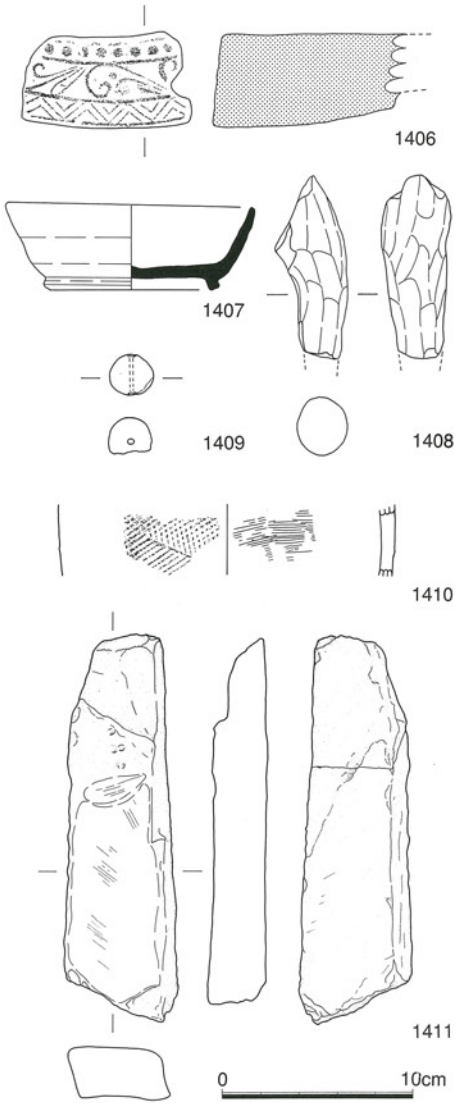
第133図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(1)



第134図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(2)



第135図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(3)



第136図　第５調査区遺構外出土遺物実測図(4)

1372～1390は甕形土器である。いずれも胎土中に結晶片岩を含む在地産のものである。体部形状には差違はあるが、いずれも口縁端部を摘み上げ、数条の擬凹線をとどめる。体部内面上位ユビオサエ、中位以下にヘラケズリを施し、口縁部内外面ヨコナデである。体部外面には細かなハケが施され、1382のように横位のタタキ痕をとどめるものは僅かである。

1391～1401は底部である。いずれも結晶片岩を含む在地産である。1391，1392，1401は座りの悪い平底、1393～1397は突出若しくは突出気味の平底、1398～1400は平底である。1391，1393～1400は内面にヘラケズリが施され、外面ハケのものがほとんどであるが、1401は内面ハケ、外面横位のタタキ痕をとどめる。

1402は太型蛤刃石斧である。輝緑岩製であり、基端部に剥離を伴う打撃痕が観られる。

1403～1405は金属製品である。錆の付着が顕著であり、エックス線写真から外形を示した。

（第136図）

1406は須恵質の均整唐草文軒平瓦である。凹面，凸面ともにナデを施す。

1407は須恵器杯である。断面方形の高台を有する。

1408は土師質の脚部である。縦位の粗いケズリを伴う。

1409は土師質の土玉である。中心部に径２㎜の穿孔を有する。

1410は東播系須恵器甕体部である。外面に綾杉文のタタキ痕をとどめる。

1411は結晶片岩製の砥石である。長平面２面を使用している。

(4)　小結

第５調査区は渡内川南岸に立地し、南半分は微高地であるが、北部は旧河川内にあたり、北方に向かって急激な落ち込みが観られる。土層堆積も非常に複雑である。第１遺構面においては、遺構は土坑４基と溝３基を検出した。そのうち東西方向の溝SD1019とそれに直交する南北方向のSD1021はその交点付近が不明瞭であり先後関係が不明であるが、SD1021の主軸方位がN－12°－E、SD1019がほぼそれに直交している。第２遺構面では２条の南北方向の溝を検出し、緩やかに湾曲するが、第１遺構面の溝とはほぼ同方位を示す。また溝東側に平面不整長方形の土坑２基があるが、主軸方位が溝とほぼ直交する。出土遺物は弥生時代終末期～古墳時代初頭の年代から

黒谷川Ⅱ式段階からⅢ式段階に比定できる。[4]そのほとんどを在地産のものが占めるが、SD2015出土の甕894は、明赤褐色を呈し、結晶片岩を含有せず、多量の角閃石を含む讃岐産のものである。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器の中で、内面に赤色物質が付着したものが数点ある。そのうち、蛍光エックス線分析により水銀朱と認められたものは、SD2015出土の855と864の鉢２点及び、SZ2003出土の1115体部片１点がある。いずれも内面に付着し、855の鉢は外面に炭化物の付着が顕著であった。

---

[1] 大久保徹也 1990 『下川津遺跡』香川県教育委員会

[2] 註１に同じ

[3] 近藤　玲 1996 「阿波」『古代学協会四国支部第10回松山大会資料　弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部

[4] 大西浩正1990『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』徳島県教育委員会
遺物の詳細な分類、遺構の年代区分はⅣ章を参照されたい。

4　第６～12調査区

第６～12調査区は現在の渡内川南岸に広がる微高地である。そのうち第６～10調査区においていずれからも弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構面２枚を検出したが、年代差は僅かである。一方第11，12調査区は旧河道を埋立てたものであり、遺構・遺物とも存在しなかった。遺構の内訳は掘立柱建物２棟，溝31条，土坑33基，不明遺構６基である。ここでは、遺構面２枚について一括して遺構・遺物の説明をする。第137～144図に遺構配置図を示す。

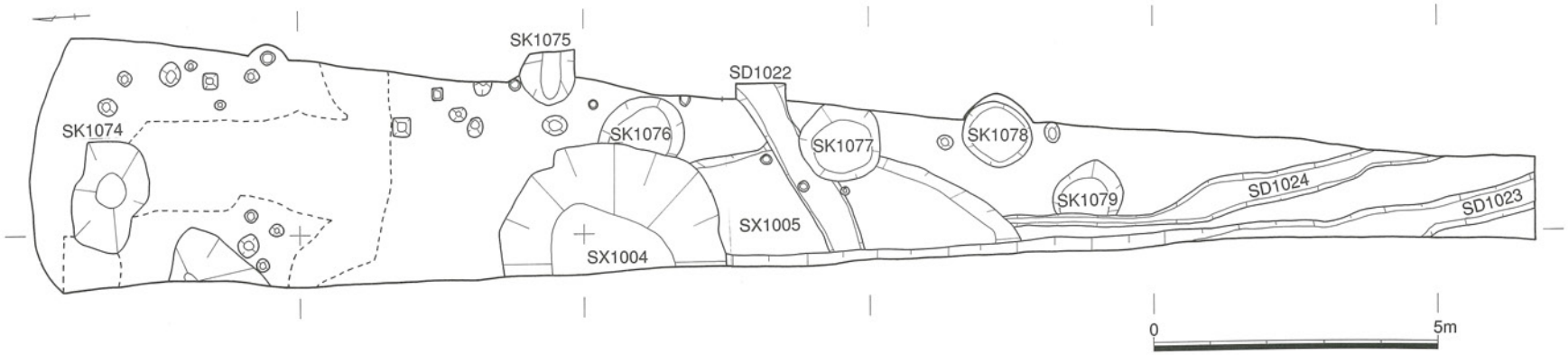
(1)　弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構と遺物

土器の形式分類についてはⅣ－１章に示しており、遺物個々の詳細な分類器種名については観察表を参照されたい。

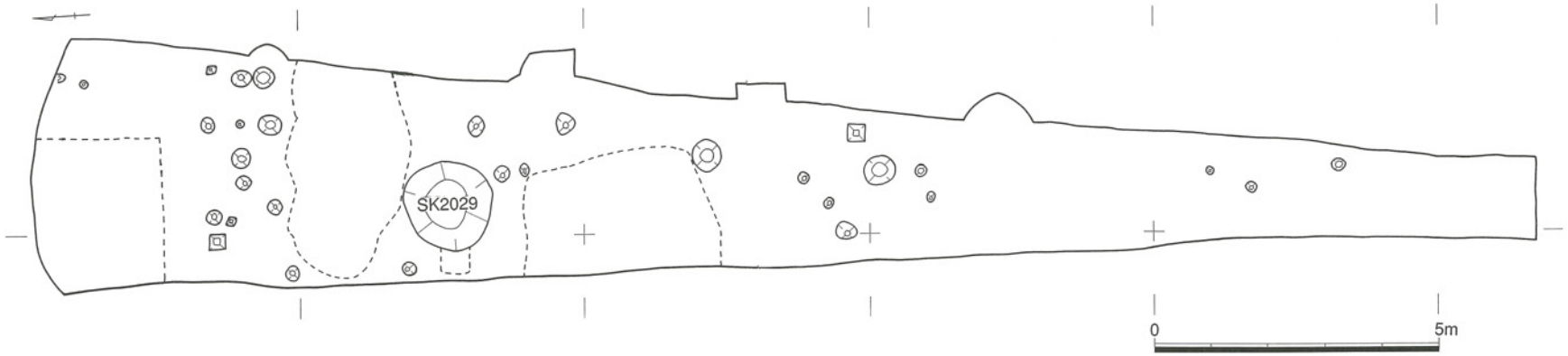
掘立柱建物

掘立柱建物 SA2007（第145図）

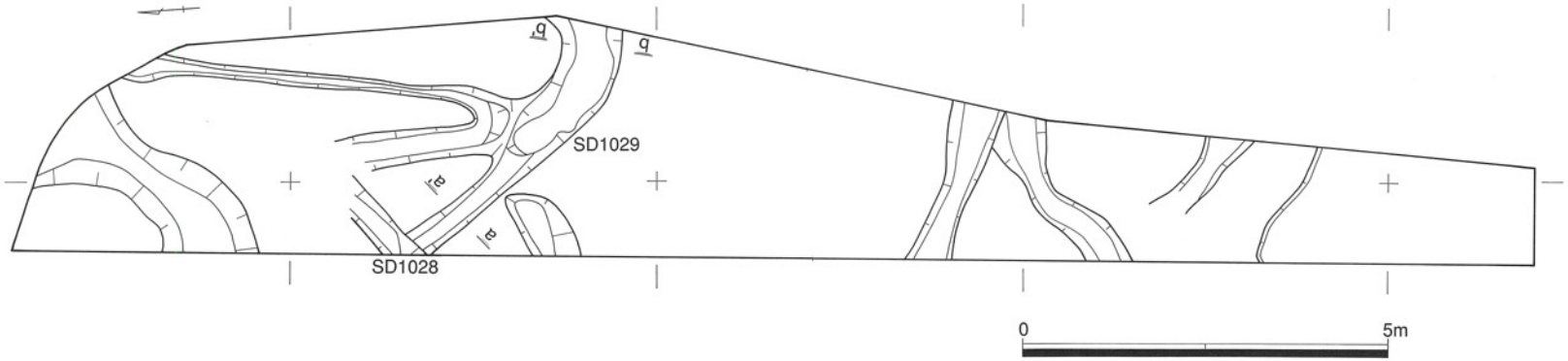
第10調査区北端において検出した建物であり、柱穴８基から構成される。桁行３間（4.40m）×梁間１間（2.40m），床面積10.56m²を測り、柱間は桁間1.47mであり、棟方向はN－65°－Wである。柱穴は平面円形を呈し、直径0.19～0.29m、深さ0.17～0.45mを測る規模のもので、埋土は鉄分，マンガンを含む灰オリーブ色系の粘質土である。SP2131，SP2132，SP2134からは図化していないが土器の小片を検出した。また建物内に位置するSP2136は後述するが規模，形態，土層の状態等が近似することから建物との関連が濃厚であり、遺構実測図を第217図に、出土遺物を第218図にそれぞれ掲載し柱穴の項で説明する。



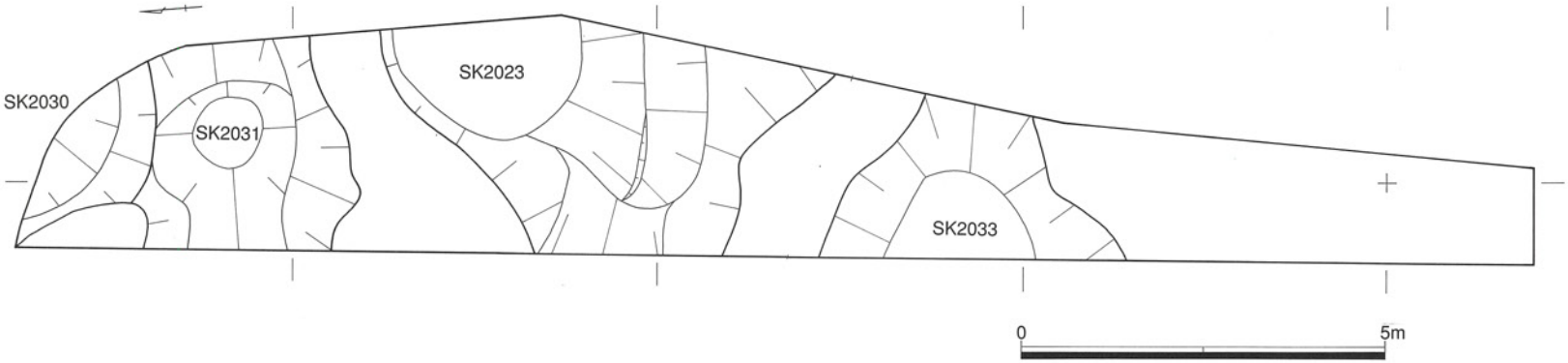
第137図　第６調査区　第１遺構面　遺構配置図



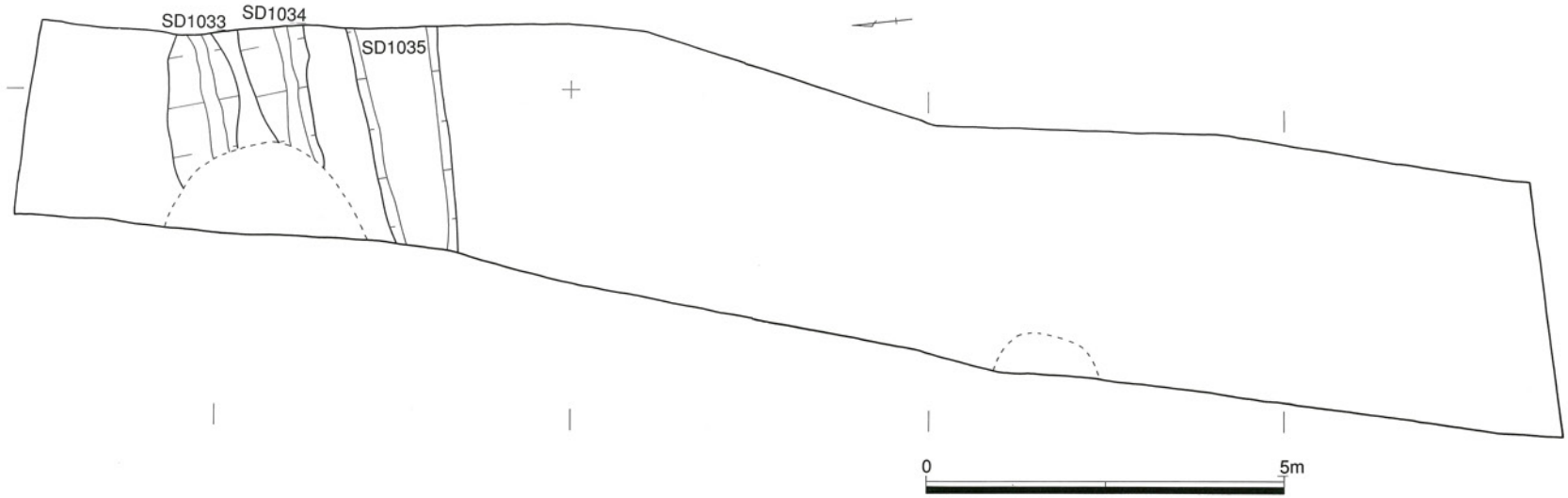
第138図　第６調査区　第２遺構面　遺構配置図



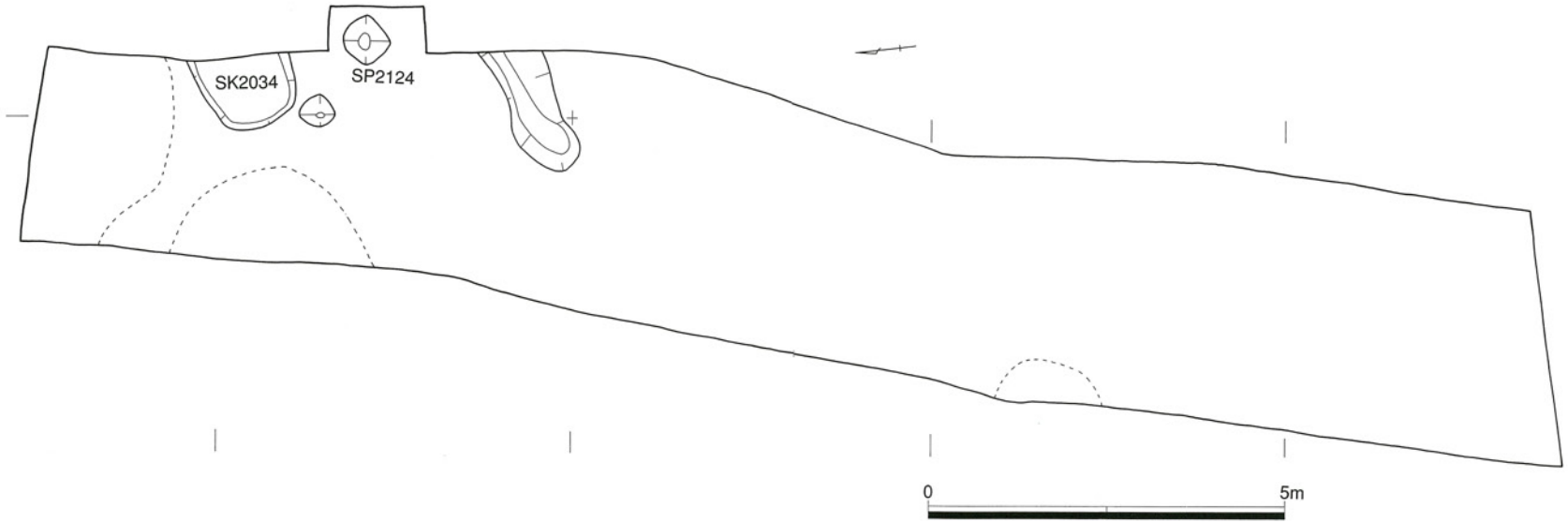
第139図　第７調査区　第１遺構面　遺構配置図



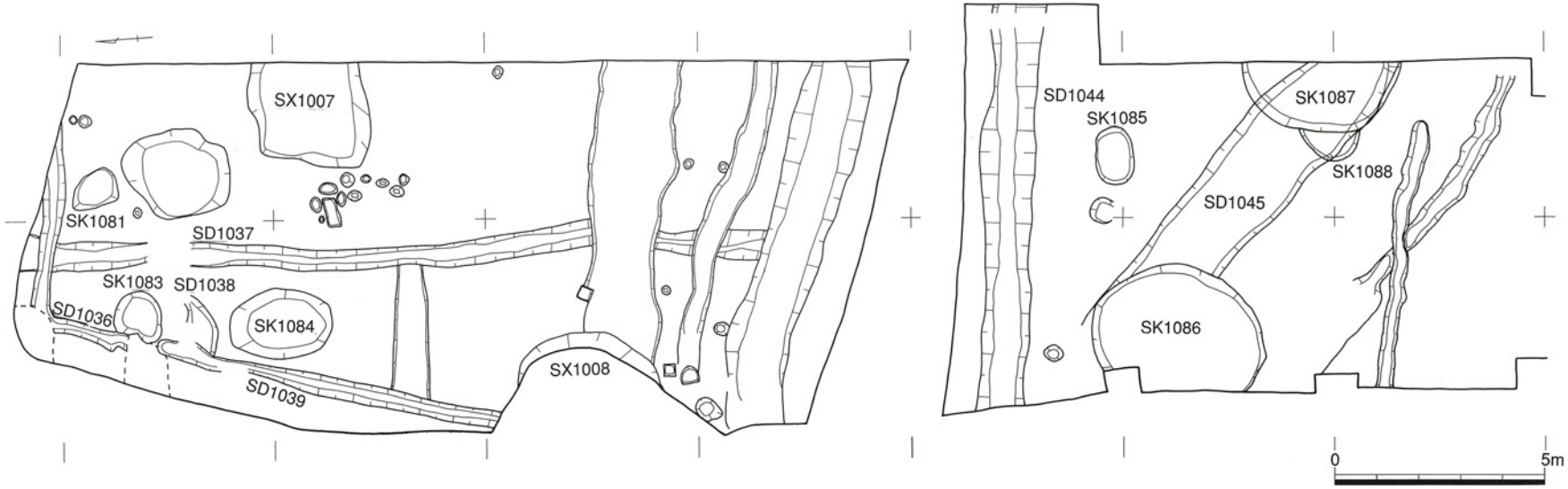
第140図　第７調査区　第２遺構面　遺構配置図



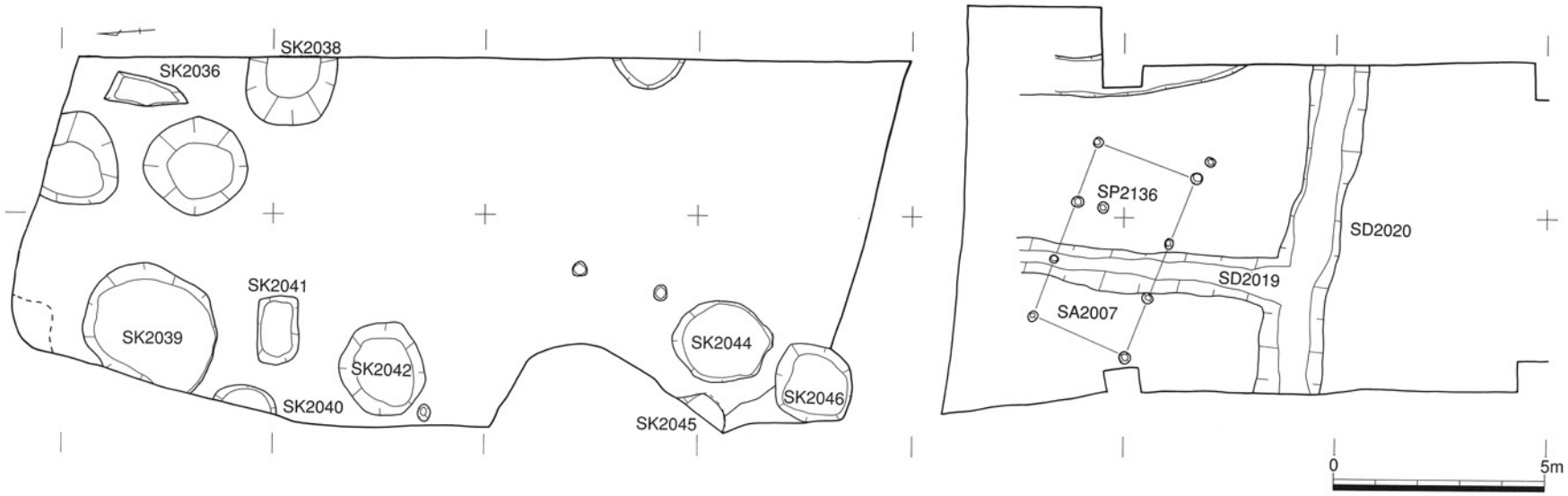
第141図　第８調査区　第１遺構面　遺構配置図



第142図　第８調査区　第２遺構面　遺構配置図



第143図　第９，10調査区　第１遺構面　遺構配置図



第144図　第９，10調査区　第２遺構面　遺構配置図

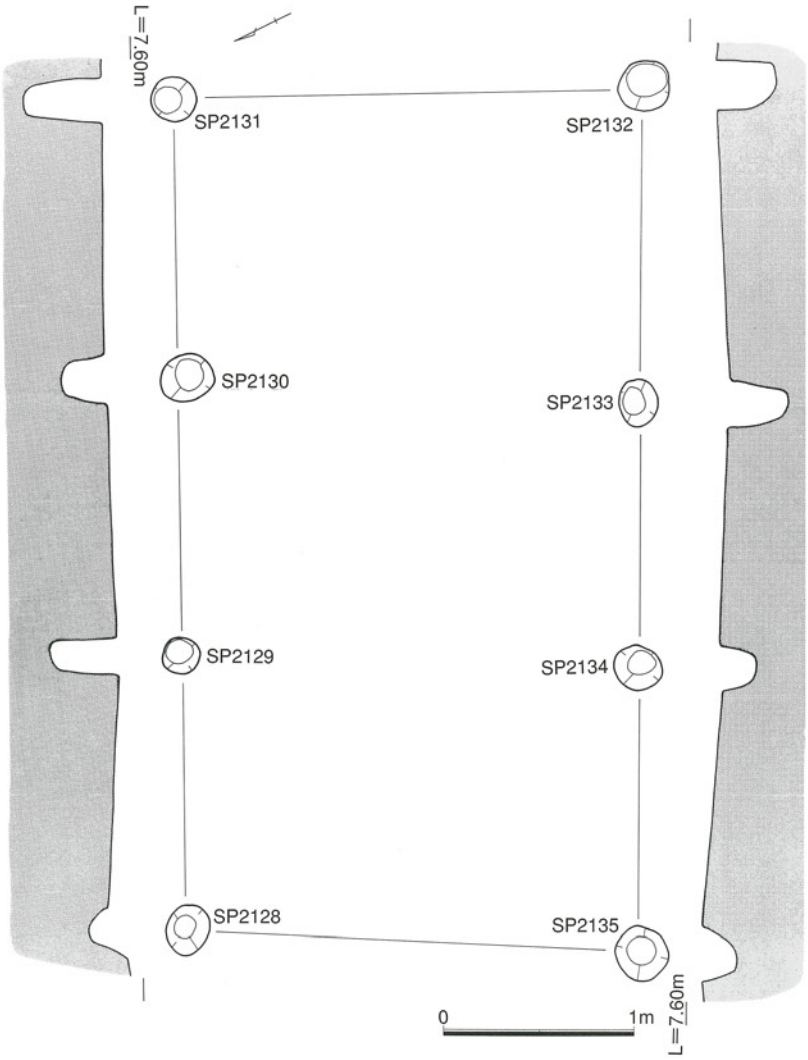
溝

溝 SD1022（第146図）

第６調査区第１遺構面中央部を東西に貫く溝である。幅0.60～0.70m，深さ０.10～0.21ｍを測り、主軸方位はN－66°－Eである。切合関係から不明遺構SX1005よりは新しく、溝SD1023及び土坑SK1077よりは古い。埋土は黄褐色系の粘性砂質土及び粘質土からなる。

出土遺物（第147図）

1412，1413は高杯形土器である。1413は内面ナナメハケのちナデ、外面板ナデ調整であり、脚端部に１条の擬凹線を施し、裾部に円形の透かし穴を有する。1412は内面脚柱部に絞り痕が認められる。

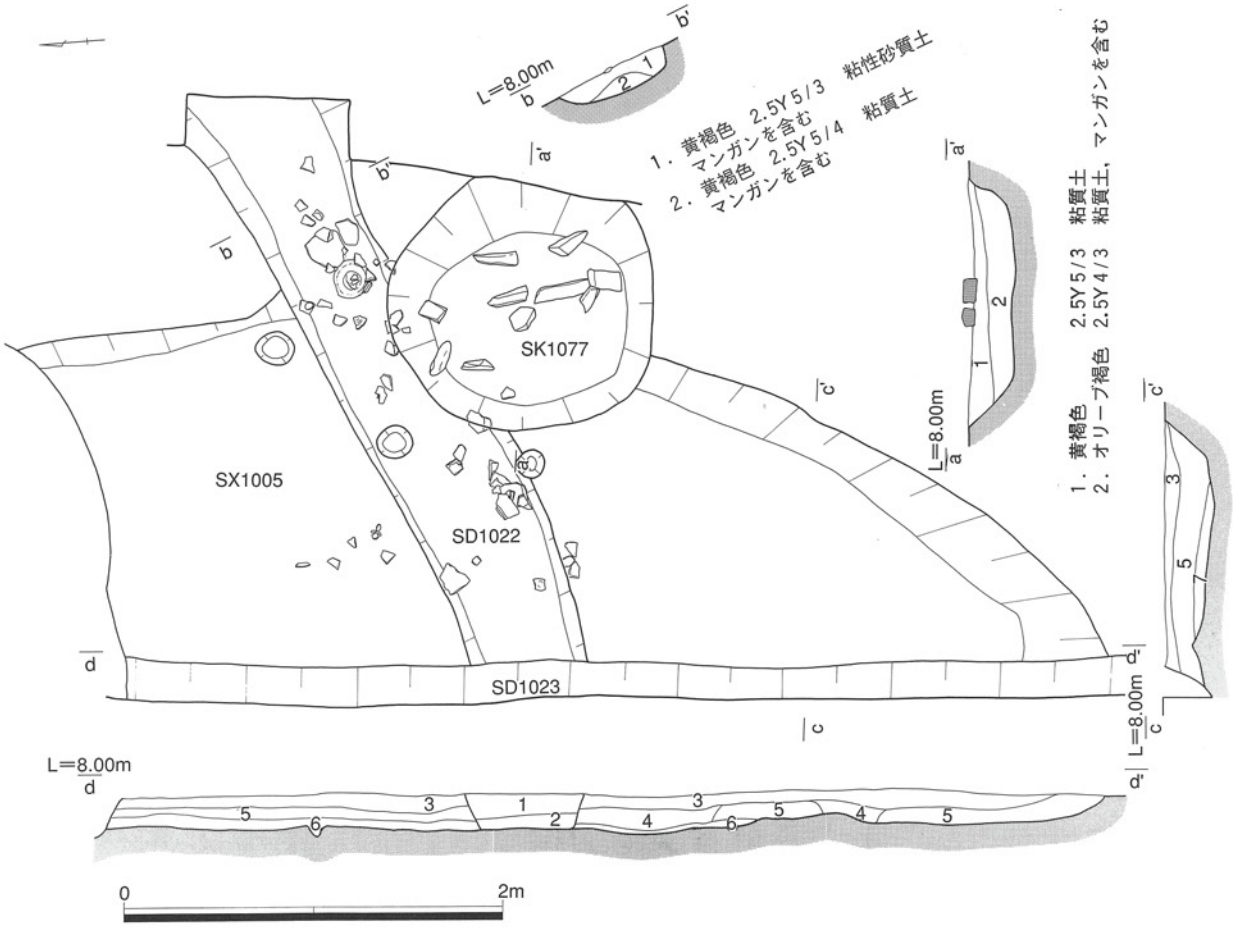


第145図　SA2007実測図

1414～1420は鉢形土器及びそのミニチュアである。1414～1417は体部内灣しながら立ち上がり、口縁端部は1414～1416が尖り気味であるのに対し、1417は断面方形に収める。調整は内面がナデ若しくは板ナデで、外面が1415，1416は板ナデ、1417は体部下位ヘラケズリである。1414～1417はいずれも外面に縦しわ痕が観られ1414は特に顕著である。1418は断面台形の高台を貼り付け、体部外面にタテハケを施す。1419，1420は体部最大径部が口径を凌ぎ、口縁部は「く」の字に屈曲して内灣し端部を摘み上げている。1419は内面が口縁部ヨコハケ，体部ナナメハケ、外面が体部ヨコハケのち上位部にナナメハケ調整である。口縁部内外面に赤色塗彩を施している。1420も同様の調整である。

1422は広口壺形土器である。口縁部を大きく外反させ、端部を上下に拡張し２条の弱い擬凹線を施している。外面にナナメハケ調整を施している。

1423は二重口縁壺形土器である。頸部は僅かに外反しながら立ち上がり、口縁部は屈曲してやや外反しながら上方に伸び、端部を丸く仕上げるものである。屈曲部外面は尖り気味に収め、口縁部外面に３条の擬凹線を廻らせている。内面は体部ユビオサエ、外面は頸部ナナメハケのちヨコナデ，体部ナナメハケである。



1．黄褐色	2.5Y 5/3	粘性砂質土	マンガンを含む
2．黄褐色	2.5Y 5/4	粘質土	マンガンを含む
3．暗灰黄色	2.5Y 4/2	シルト	炭化物，マンガンを含む
4．オリーブ褐色	2.5Y 4/3	粘質土	マンガンを含む
5．暗灰黄色	2.5Y 4/2	シルト	多量の炭化物とマンガンを含む
6．オリーブ褐色	2.5Y 4/4	粘質土	マンガンを含む
7．黄褐色	2.5Y 5/3	粘質土	マンガンを含む

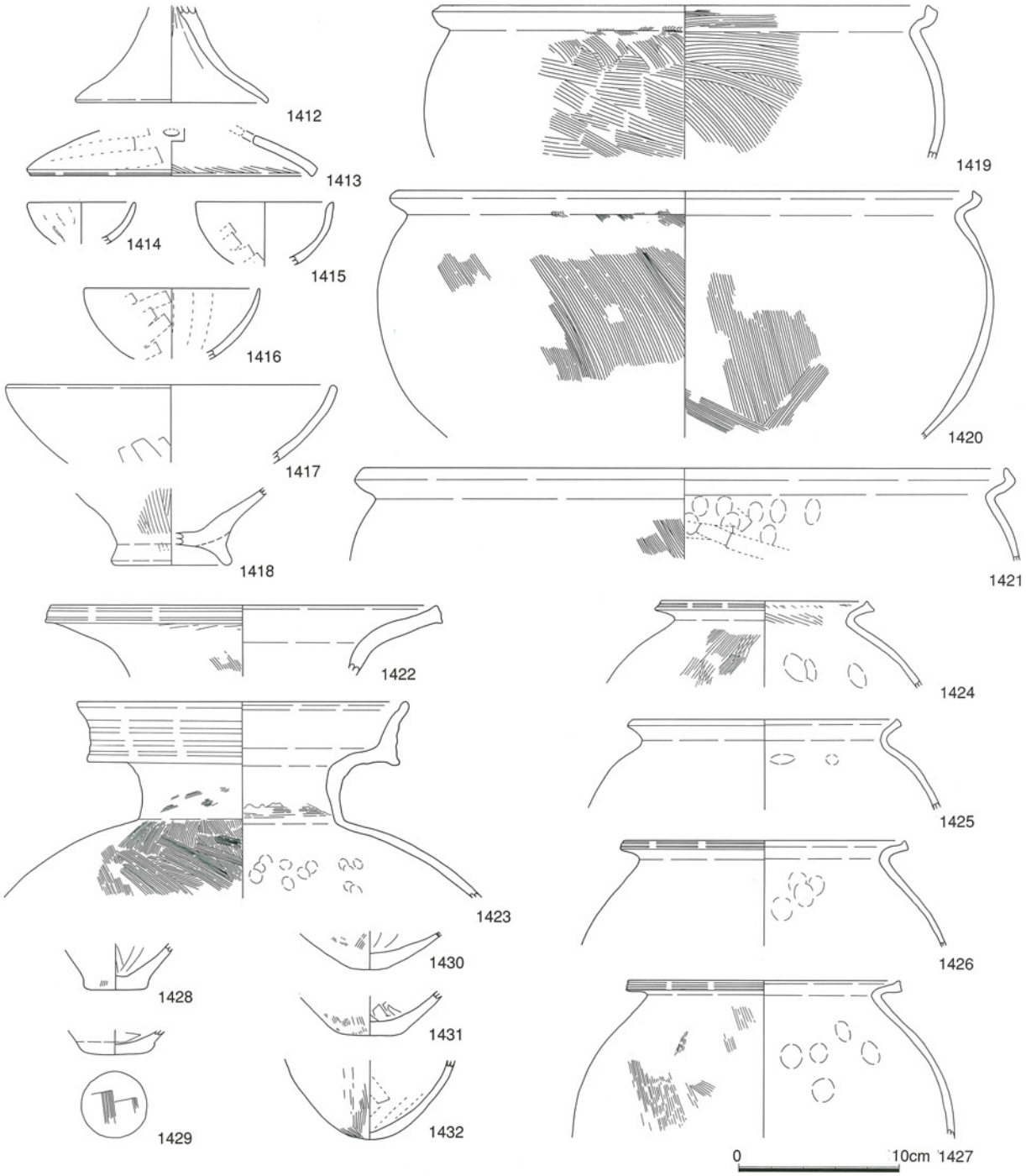
第146図　SD1022，SK1077，SX1005実測図

1421，1424～1427は甕形土器である。1421は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を大きく摘み上げている。体部内面ユビオサエのち板ナデ、外面ナナメハケである。1424，1426，1427は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を上下に拡張しており、２条の擬凹線を廻らせている。いずれも体部内面上位ユビオサエであり、1424，1427は体部外面にナナメハケを施している。1425は口縁部が大きく外反して端部を方形に収める。体部内面上位にユビオサエを施している。

1428～1432は底部である。1428～1431は平底であり、そのうち1428は突出するものである。1429～1431は内面ヘラケズリ、1429，1431は底部外面にハケ調整を施す。1432は丸底で、内面板ナデ、外面ヘラケズリのちタテハケのちナデである。

溝 SD1028（第148図）

第７調査区北部西端60Gグリッド第１遺構面の溝である。南西部は調査区外に延び、北東端部はプラン不明瞭である。幅0.41m，深さ0.38mを測り、主軸方位はN－53°－Eであり、断面形



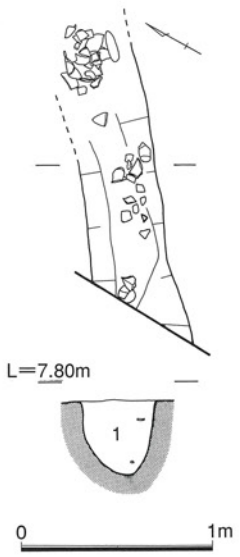
第147図　SD1022出土遺物実測図

状はＵ字状を呈する。埋土は黄褐色粘質土１層である。

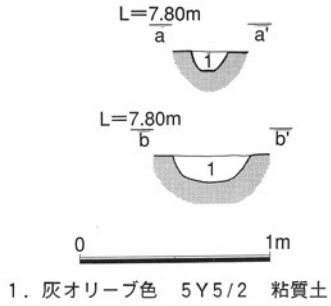
出土遺物（第150図1433～1442）

1433は高杯形土器である。裾部内面にヨコハケの痕跡が観られる。

1434～1438は鉢形土器である。いずれも外面に縦しわ痕を有する。1434～1436は体部内灣し、口縁端部を摘み上げる。1436は完形であり、口縁端部に１条の弱い擬凹線を廻らせる。内面は口縁部と底部に丁寧なナデを施すが体部中位に粗いナナメハケが残り、底部外面に焼成前の粘土欠



第148図　SD1028実測図



第149図　SD1029断面実測図

落部分が大きく広がっている。1437は焼成甘く磨耗激しいが、口縁部外反し端部が尖る。1438は体部内灣し、口縁端部を尖り気味に仕上げる。外面の口縁部から体部上位にかけて、長軸３㎝程度の楕円形状の粘土剥離箇所が多数認められ外型使用を強く想起させる。

1439は体部片である。内面はユビオサエのちナデ、外面はヨコハケのち3.5㎜幅のヘラミガキが施されている。

1440～1442は甕形土器である。1440，1441は体部内面ユビオサエのちナデ、外面ナナメハケである。1442は口縁部「く」の字に屈曲し、端部を上下に拡張し２条の擬凹線を廻らせ、体部外面にナナメハケを施す。

溝 SD1029（第149図）

第７調査区第１遺構面を南東－北西方向に貫く溝である。北西端をSD1028に切られ南東部は東側に湾曲し調査区外に達している。北西部では幅0.18m，深さ0.10mであるのに対し、南東部では幅0.38m，深さ0.14mであり、断面Ｕ字形を呈する。埋土は灰オリーブ色粘質土１層からなる。遺物は少ないが、黒谷川Ⅳ式段階以降の様相を呈している。

出土遺物（第150図1443，1444）

1443は甕形土器である。体部球形状を呈し、口縁部を「く」の字に屈曲して端部を上方に摘み上げ断面三角形を呈し、弱い１条の擬凹線をとどめている。体部内面上位ユビオサエ、下位ヘラケズリ、体部外面上位にナナメハケ，下位に細かなナナメハケを施している。

1444は広口壺形土器である。球形の体部を有し、頸部から口縁部にかけて大きく外反し端部は上下に拡張している。体部内面上位ユビオサエ，下位左上がりのヘラケズリであり、体部外面上位にナナメハケを施している。

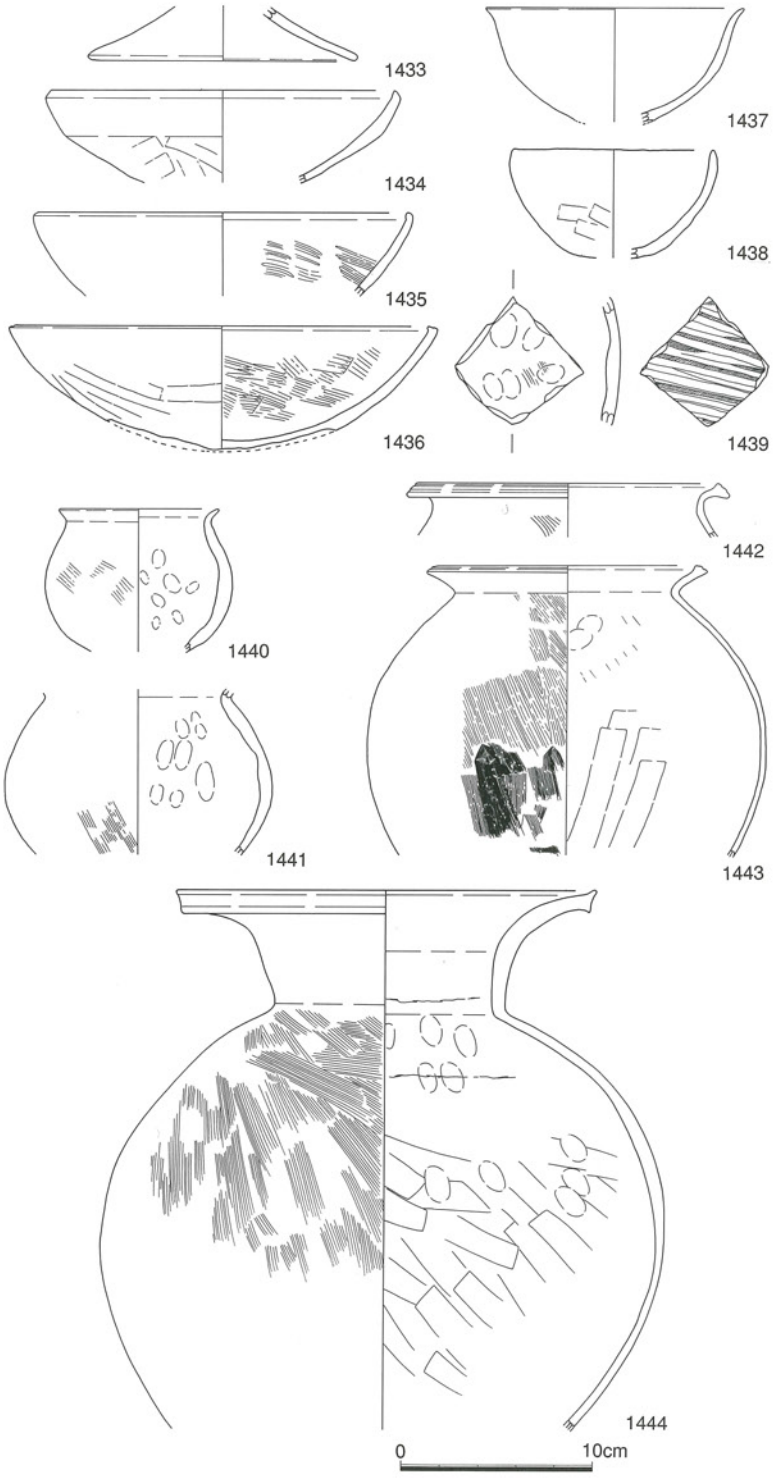
溝 SD1037（第151図，図版３－５，６）

第９調査区中央部において南北方向に位置する溝である。幅0.40～0.70m，深さ0.10～0.23mを測るが、上部削平を受けている。断面形状は北側でＵ字形、南側でＶ字形を呈するものであり、主軸方位はＮ－３°－Ｅを示している。４本の東西方向の溝SD1036，SD1041，SD1042，SD1043に切られ北側は調査区外に延伸している。埋土は鉄分，マンガンを含む灰黄色及び、にぶい黄色の砂質土の２層から構成されている。北部では完形２個を含む数個体の甕が溝中央に横向きに置かれている。

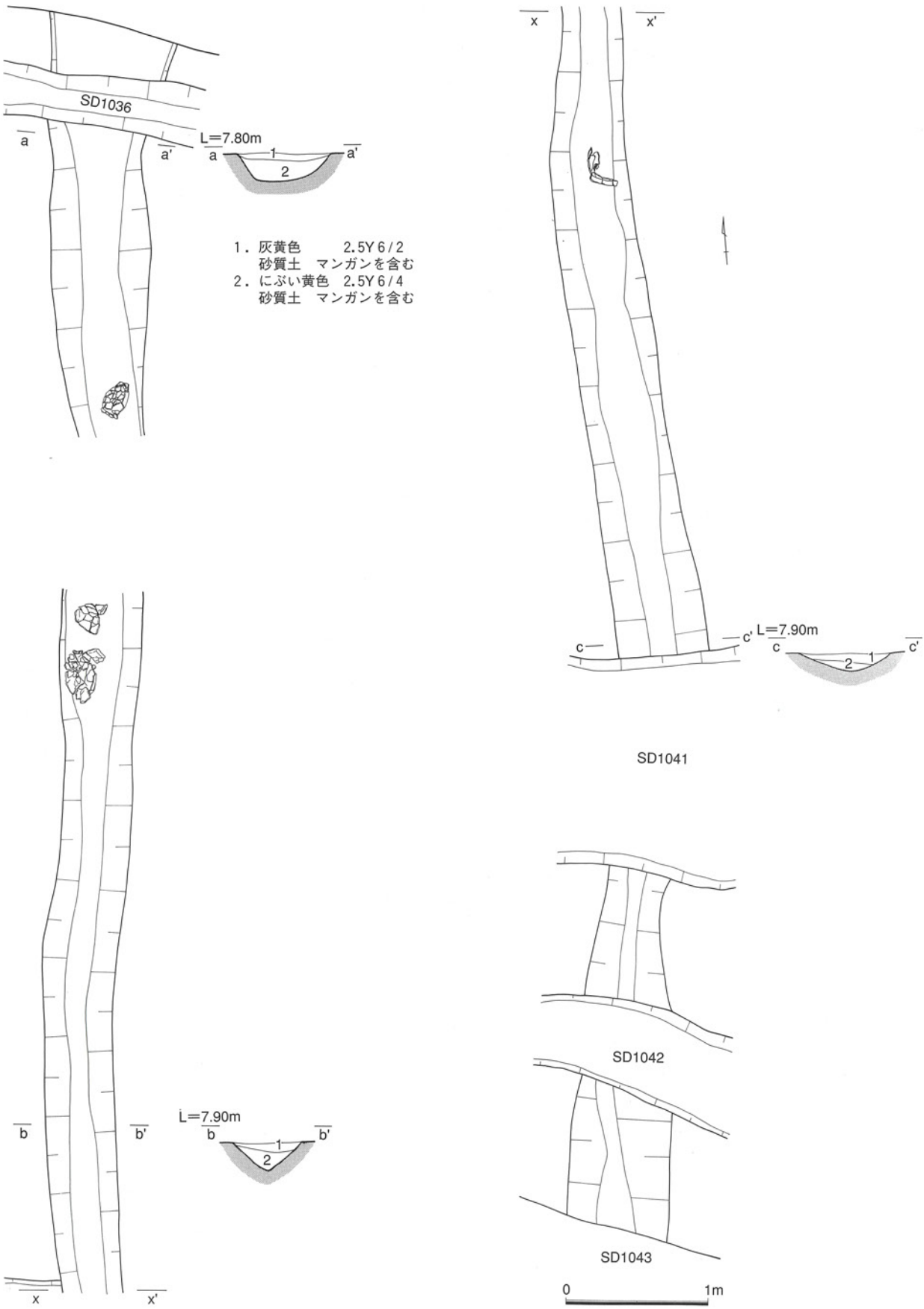
出土遺物（第152図）

1445は広口壺形土器である。頸部から口縁部にかけて大きく開き、端部を丸く収めている。内外面ともヨコナデである。

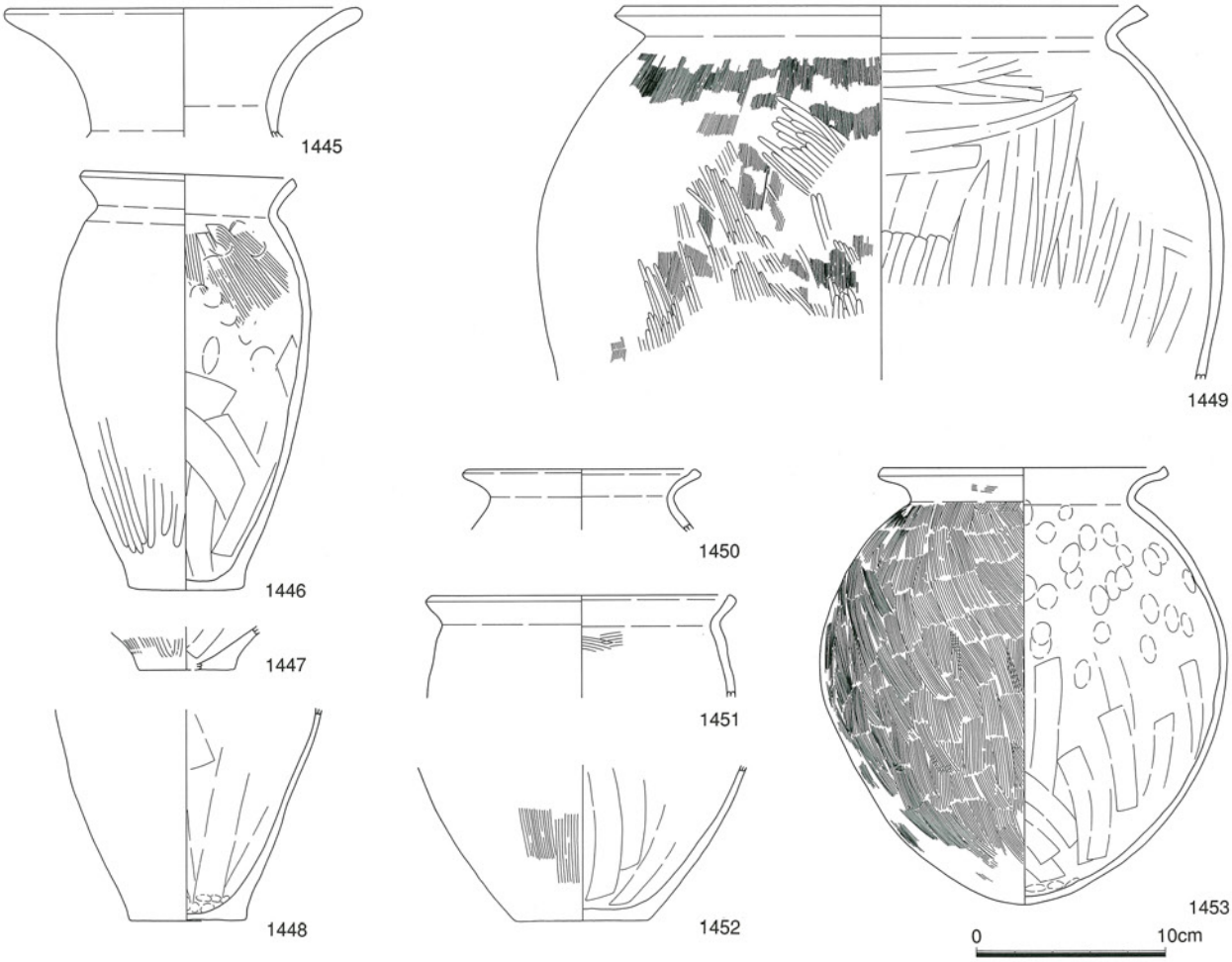
1446～1453は甕形土器である。1446は完形であり、突出気味の平底で体部上位に最大径部を有し、口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を方形に仕上げる。内面はヘラケズリが体部下半にとどまり、体部上半はユビオサエのちナナメハケである。外面は剥離激しいが体部下位にタテヘラミガキが観られ、上位にタテハケの痕跡が僅かに認められる。1448体部下半も同様の調整である。1447は底部外面に粗いハケを施している。1449は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部が肥厚して方形に仕上げている。体部内面上位がヨコヘラケズリ、中位がタテヘラケズリ、体部外面タテハケのちナナメヘラミガキであり、頸部内外面に強いヨコナデを施している。1450，1451は口縁部内側に１条の弱い凹線を廻らせ、端部を方形に仕上げている。1452は体部内面下位ヘラケズリ、外面タテハケのち一部にヘラミガキの痕跡を留める。1451と同一個体か。1453は完形であり、体部球形を呈し、口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方に僅かに摘み上げている。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、口縁部外面ナナメハケのちヨコナデ、体部外面細密なナナメハケである。



第150図　SD1028，SD1029出土遺物実測図



第151図　SD1037実測図



第152図　SD1037出土遺物実測図

溝 SD1039（第143図）

第９調査区西部に南北方向に位置する溝である。南部は調査区外に達し、北部は収束しているが、延長線上を同形態のSD1036が北側に伸びており、関連するものと考えられる。主軸方位N－18°－Eを示し、幅0.25～0.52m，深さ最大0.15mを測る。若干の土器を検出している。

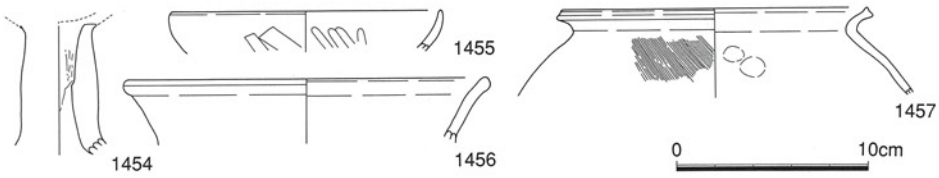
出土遺物（第153図）

1454は高杯形土器の脚部であり直立している。1455は鉢形土器である。口縁端部を丸く収める。1456は広口壺形土器である。口縁端部僅かに外反して丸く収める。1457は甕形土器である。口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を上方に摘み上げ、体部内面ユビオサエ、体部外面ナナメハケである。

溝 SD1044（第154図，図版４－４）

第10調査区北端を東西に貫く溝である。主軸方位N－82°－Wを示し、幅0.99～1.31m，深さ0.22～0.48mを測るものであり、断面形状は西部ではU字状を呈し、東部では浅い皿形の下に台形状の落ち込みが観られる。後世の削平を受けているため遺存状況が悪いが、多量の破損した土器

が溝中央に層位を同じくして人為的に置かれていることから多分に祭祀的様相が窺える。



第153図　SD1038出土遺物実測図

出土遺物（第155図）

出土遺物中図化し掲載できたものは40点であるが、器種組成は高杯形土器36%，鉢形土器21%，壺形土器８%，甕形土器36%である。この比率は溝状遺構の一部分の地点におけるものであることを考慮しても、該期の一般的組成よりも、高杯形土器の占める割合がはるかに高いものである。

1458～1471は高杯形土器である。1458は脚柱部が僅かに内灣気味に立ち上がり、杯部が屈曲し外反しながら立ち上がり、端部を丸く収める。杯部内面に左上がりの放射状ヘラミガキを施し、外面下位にハケ調整を施す。1459も同様の器形，調整の杯部を有し、1460も同様の器形である。1461は短い脚柱部を有するものであり、接合部上方から挿入した粘土が脚部にはみ出している。1464は脚部が緩やかに開くもので、1462，1463は脚部が途中で屈曲する。1466は筒型の脚柱部を有し裾部が強く屈曲し、1465も同様の器形と考えられる。1467，1468は内面上位ヘラケズリ、外面ハケであるのに対し、1470は内面黒褐色を呈しヨコハケを施す。1471は裾端部外反して丸く収める器形であり、裾部内面上位ヘラケズリ，下位ヨコナデ、裾部外面ヘラミガキを施す。

1472～1479は鉢形土器である。1472～1478は口縁部が屈曲しないタイプであり、口縁端部の形状からは、丸く収める1472，1473、方形に仕上げる1474～1477、口縁端部を摘み上げる1478に分類できる。いずれも体部内面ナデのちヘラミガキ、外面は口縁部から体部上位に縦しわ痕をとどめ、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリである。1479は口縁部を外側に屈曲させ端部方形に仕上げるもので、内外面に細密なヨコハケ痕が認められる。

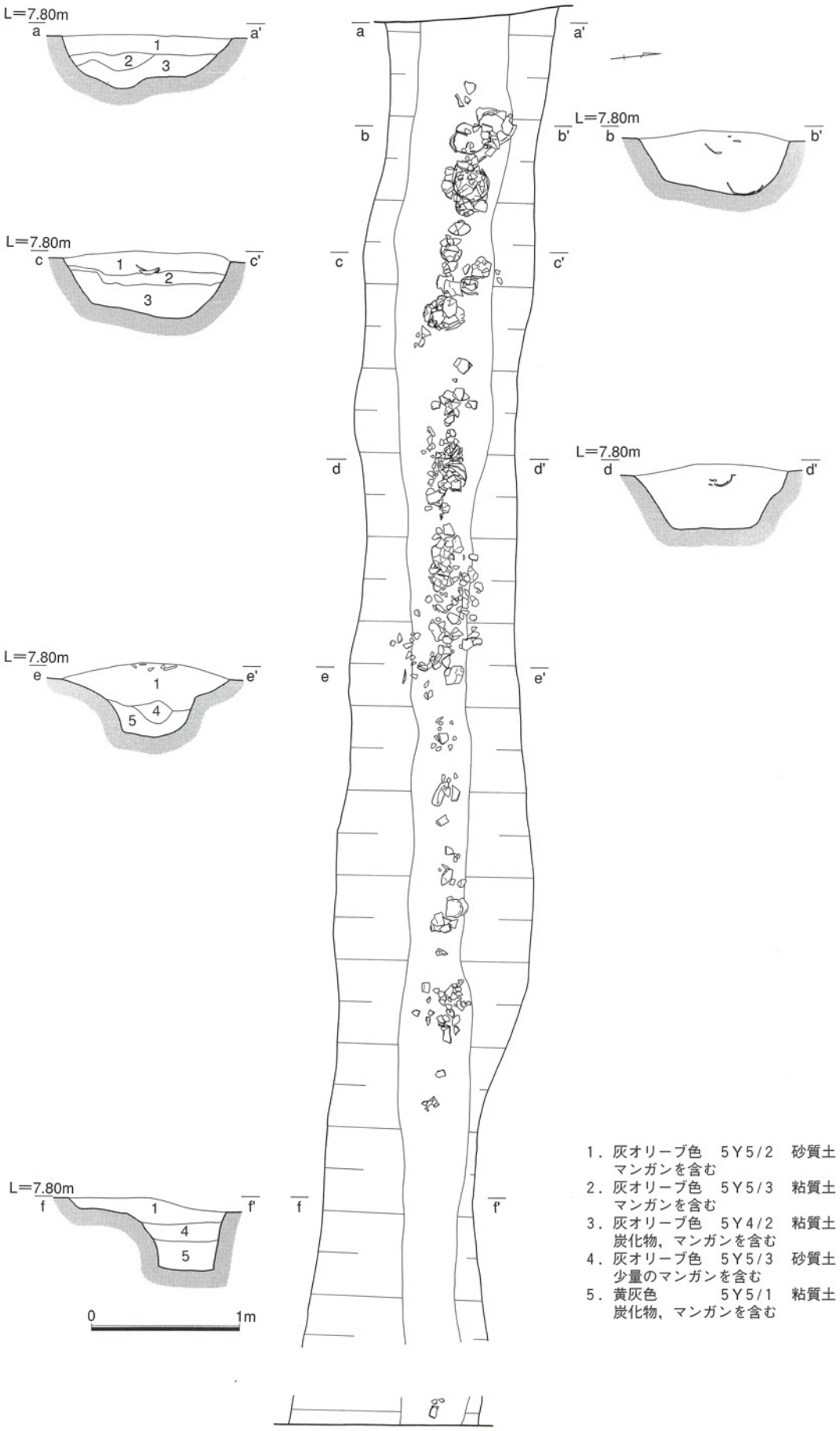
1480～1482は広口壺形土器である。口縁端部を方形に仕上げる1480，1482、上下に拡張する1481がある。

（第156図）

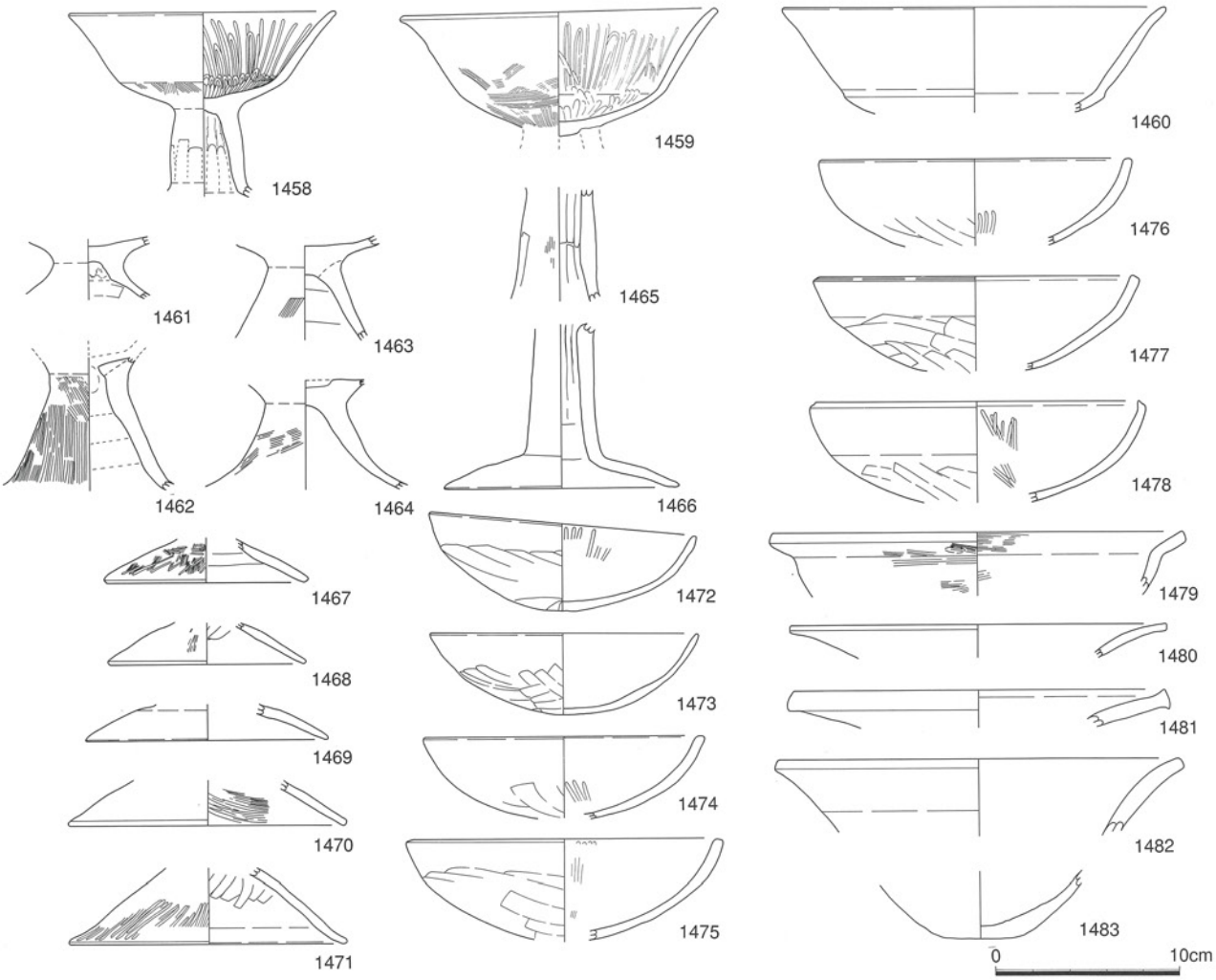
1484～1497は甕形土器である。1484は外反する短い口縁部を有し端部を方形に仕上げ、外面にタタキ目を残すものである。1485は口縁部が緩やかに外反し端部を方形に仕上げ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面ハケである。1486～1495は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を上方に摘み上げており、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なナナメハケである。1488，1489，1492，1493は口縁端部に１条の擬凹線を施し、1493は頸部に強いヨコナデを施している。1497は上げ底で口縁部が緩やかに外反し端部を丸く収める器形であり、体部内面ナナメハケのち上位にユビオサエがあり、体部外面にタテヘラミガキを施している。

溝 SD1045（第157図）

第10調査区において北西－南東方向に掘られた溝である。一部を SK1086，SK1087及び SK1088



第154図　SD1044実測図



第155図　SD1044出土遺物実測図(1)

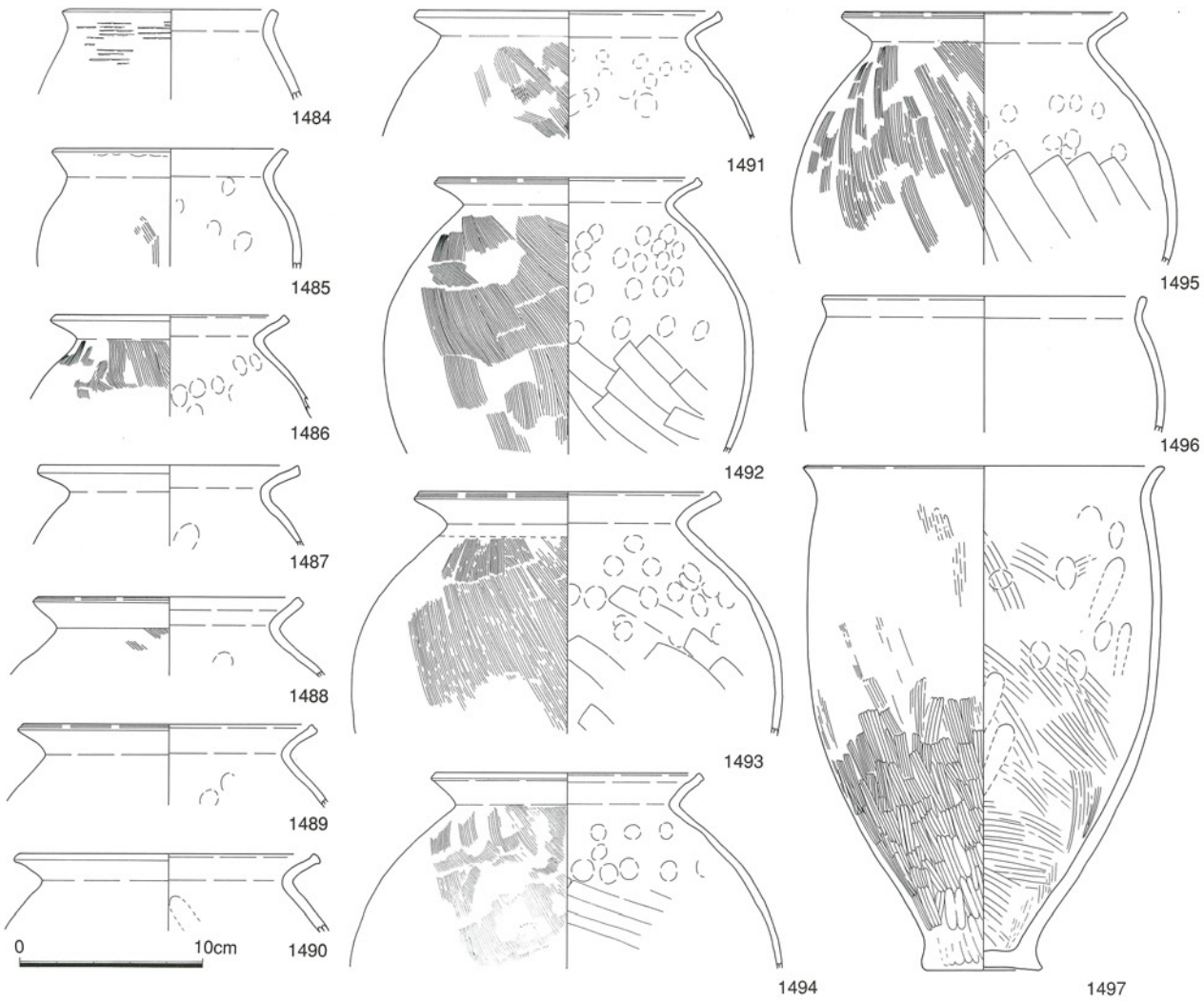
に切られるが、最大幅2.10m，最大深さ0.21m を測り、主軸方位 N－45°－W を示すものである。断面は浅い皿形を呈し、南東側に緩やかに深くなる。

出土遺物（第158図）

1498～1502は高杯形土器である。1498は接合部に棒状工具で下方から押圧した痕跡が認められる。1499は裾部内面に不定方向のハケ、外面にタテハケを施す。1501は裾部内面上位ヘラケズリ，下位ハケであり外面に綿密なタテハケを施す。

1503，1504は鉢形土器のミニチュアである。ともに手捏ね成形であり、外面に縦しわ痕をとどめない。

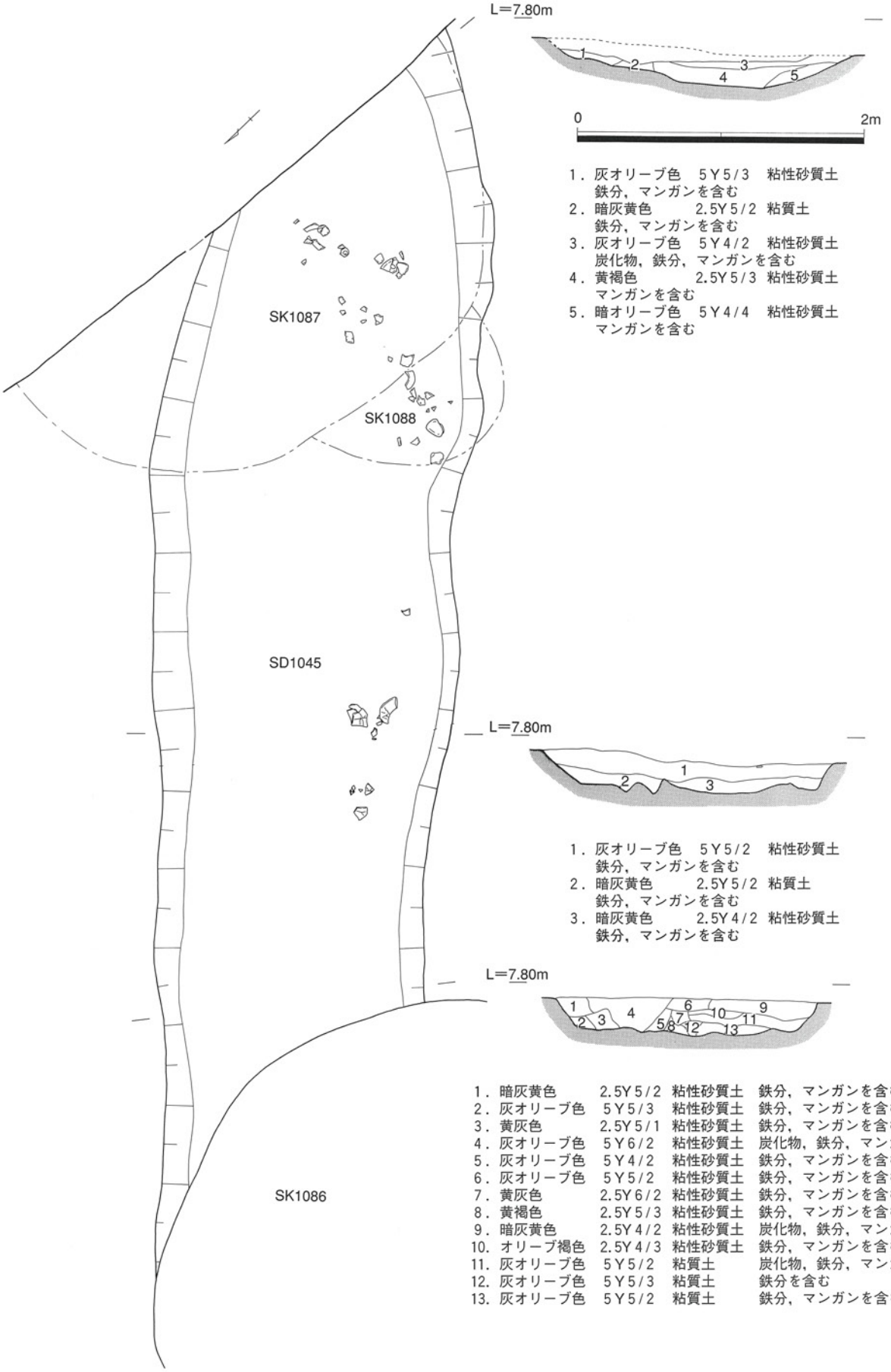
1505～1511は鉢形土器である。口縁部の屈曲する1505と、屈曲しない1506～1511があり、そのうち1507は口縁端部が方形であり、内面は黒色を呈しヘラミガキを施す。1506，1508～1511は口縁端部が内側に拡張するものである。1505，1507，1511は外面の口縁部から体部上位にかけて縦しわ痕をとどめるのに対し、1506，1510は外面に強いヨコナデを施し縦しわ痕をとどめない。1510は内面に赤色塗彩の痕跡が認められる。



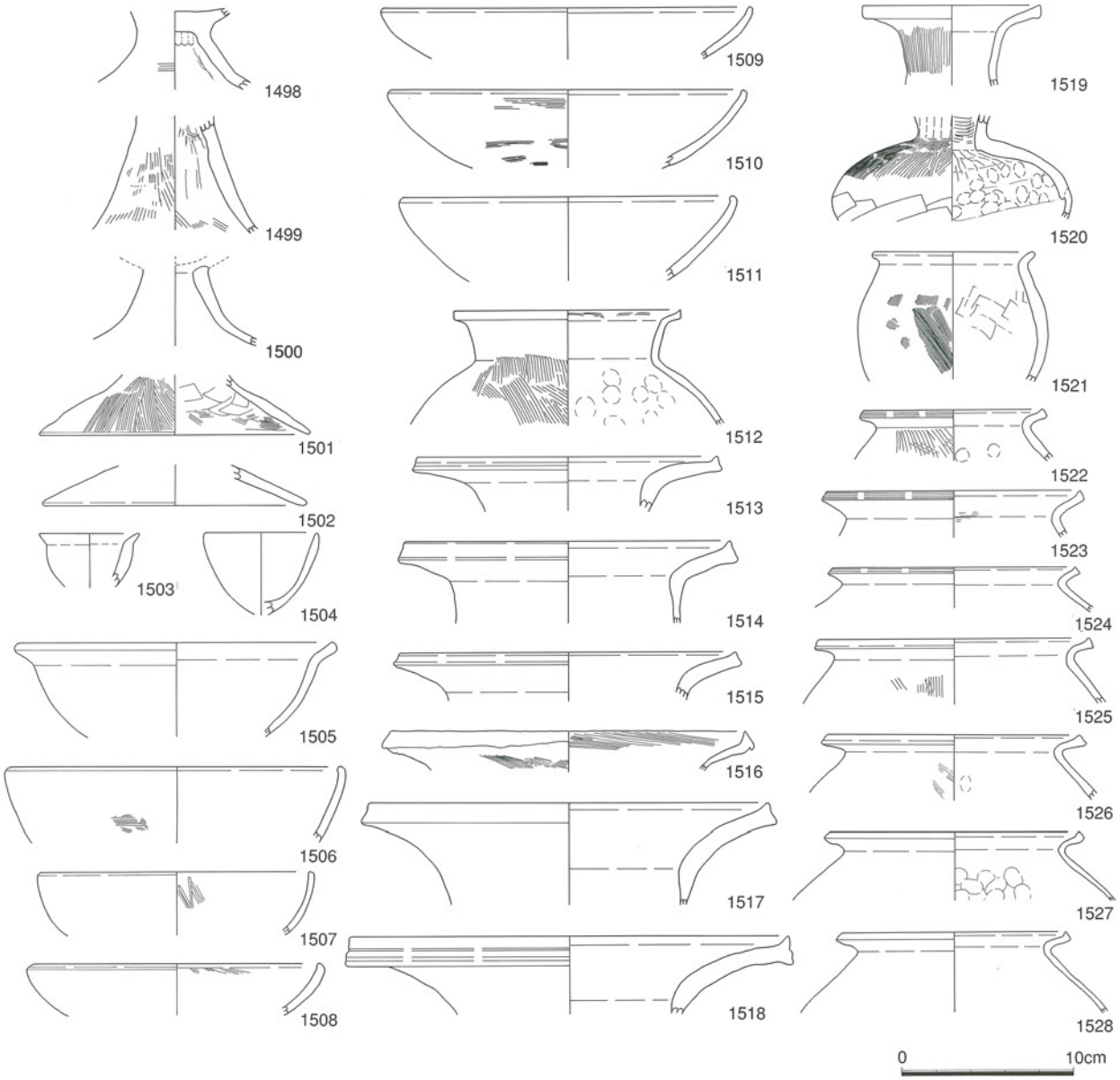
第156図　SD1044出土遺物実測図(2)

1512～1519は広口壺形土器である。1519は頸部が外反気味に立ち上がり、口縁部は大きく開き端部が下方に拡張するものであり、頸部外面にタテハケを施す。1512は外方に立ち上がる頸部と外反する口縁部を有し、端部が上方に拡張し弱い擬凹線を廻らせている。体部外面に細密なタテハケを施す。1513～1515は口縁端部を上方に拡張し、1516～1518は口縁端部を上下に拡張し、1518は端面に２条の擬凹線を有するものである。1516は口縁部の器形が歪であり、内面にヨコハケ、外面にナナメハケを施す。

1520は細頸壺である。体部内面最大径部に顕著な段差を有し、段差より上位にはユビオサエ痕が顕著であるのに対し、下位は丁寧なヨコナデが施され器表が平滑であることから、分割成形の痕跡を明瞭にとどめている。さらに体部内面上位に1.8㎝幅程度の粘土紐巻き上げ痕があり、上端には絞り跡が観られ、頸部境界に粘土紐痕が存在する。頸部内面はヨコハケ調整である。一方外面は体部下位ヘラケズリ，上位タテハケである。すなわち体部下半を先に成形し、その口縁端部内面に粘土紐を接着して巻き上げながら体部上半を成形し口縁部を絞り、さらに頸部を接合したものと理解できる。



第157図　SD1045実測図

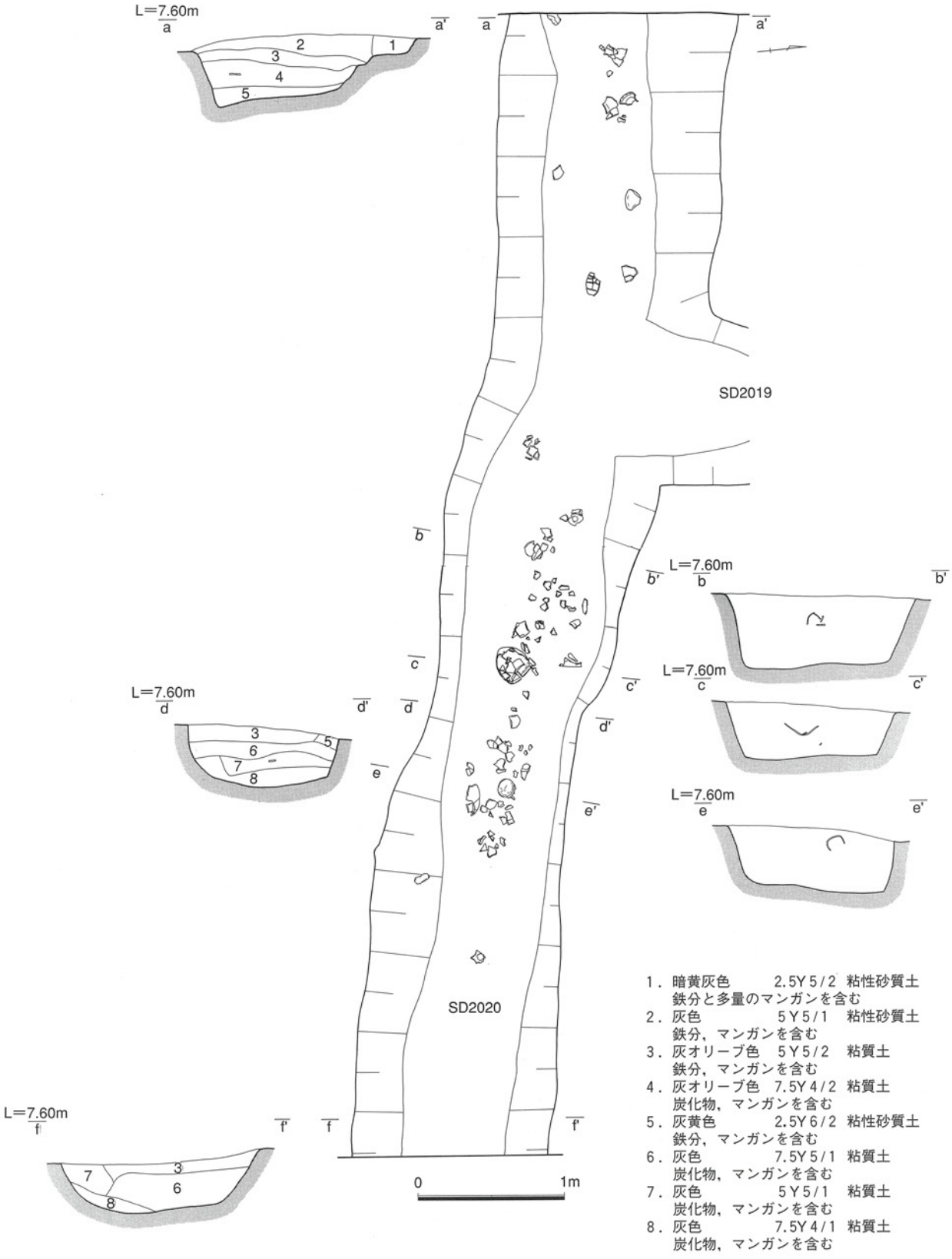


第158図　SD1045出土遺物実測図

1521～1528は甕形土器である。1521は外反する短い口縁部を持ち端部を丸く収めるものであり、体部内面ユビオサエ、外面細密なナナメハケである。1522～1528は口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を上方に摘み上げるものであり、1522～1526は端面に１～２条の擬凹線をとどめ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面ハケである。

溝 SD2020（第159図，図版４－５）

第10調査区第２遺構面を東西に貫く溝であり、北側にSD2019を分岐するものである。最大幅1.53m，最大深さ1.34mを測り、主軸方位N－76°－Wを示す。断面台形を呈し、埋土は４～５層からなり、中部，西部では平行堆積の様相を示している。溝の中央に完形の鉢，甕が置かれ、祭祀の痕跡を色濃くとどめている。



第159図　SD2020実測図

出土遺物（第160図）

1529は高杯形土器である。裾部外反しながら開き、端部を尖り気味に仕上げる。

1530～1537は鉢形土器である。1530～1532は体部内灣しながら立ち上がり口縁端部を上方に拡張する器形である。1531は内面に放射状のヘラミガキ、体部外面上位に型作りの痕跡をとどめる縦しわ痕を有し、外面下位は右下がりのヘラケズリである。1533はほぼ完形であり、丸底で体部内灣し、口縁端部を外方に拡張するものである。内面にナナメハケのち螺旋状のヘラミガキを施し、外面は上位に右上がりのタタキを残している。1534は口縁端部を尖り気味に仕上げるものである。1535はほぼ完形であり、球形の体部に短く直立する口縁部が付き端部を尖り気味に仕上げる。口縁部内面に粗いヨコハケ、体部外面はタタキでのちに下位にヘラケズリを施している。1536，1537は口縁部が外反し、口縁端部に弱い擬凹線を廻らせるものであり、1536は端部を方形に仕上げるのに対し、1537は摘み上げている。

1538，1539は広口壺形土器である。1538は口縁端部を僅かに上方に拡張し、1539は頸部直立し、口縁部大きく外反し、端部を上下に拡張するものである。

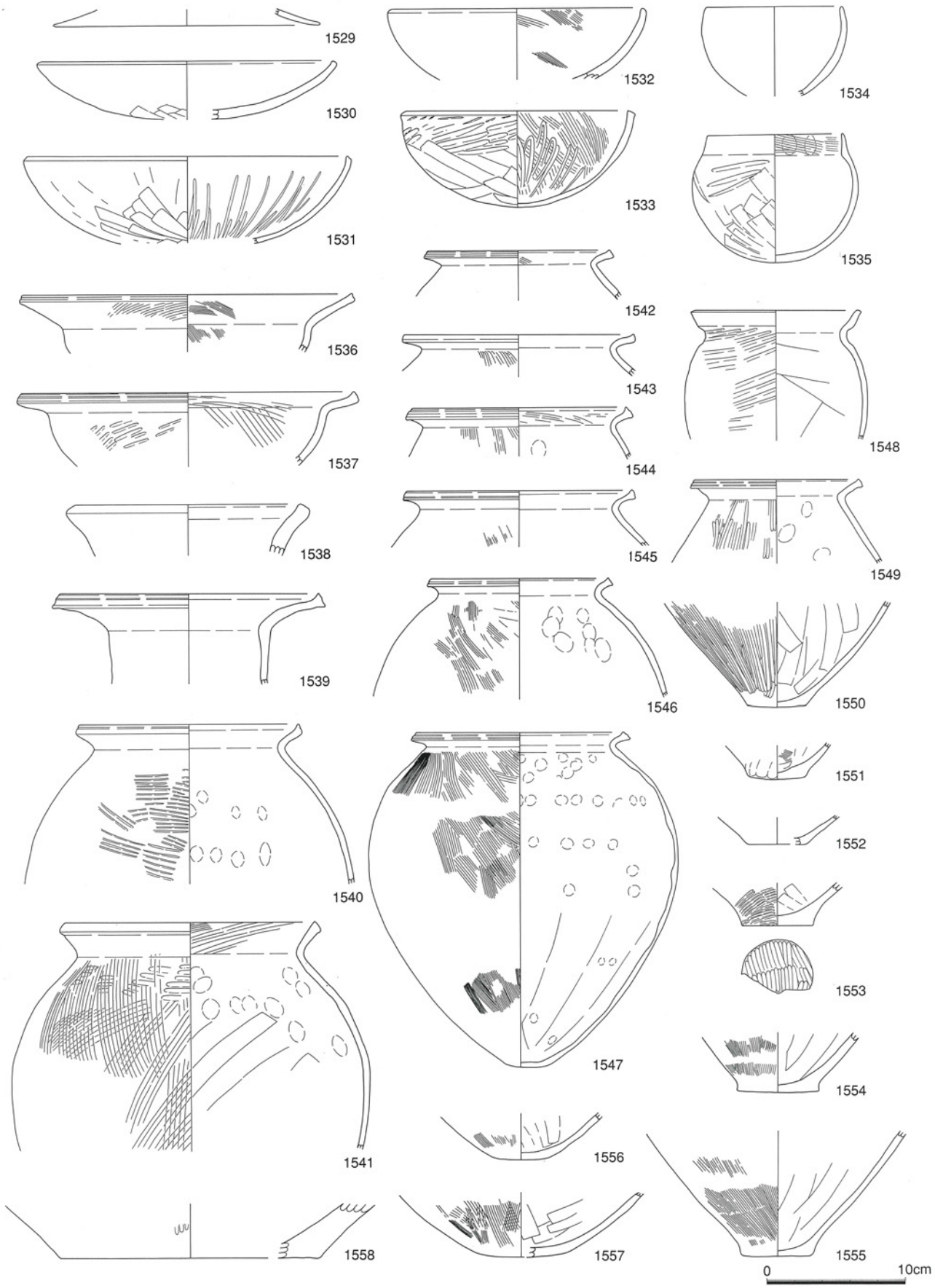
1540～1549は甕形土器である。1540は口縁部が屈曲し端部が上方に拡張し、１条の擬凹線を廻らせ、体部内面ユビオサエ、外面横位のタタキである。1541は口縁部が外反し端部は下方に拡張するもので、体部内面上位ユビオサエ，中下位ヘラケズリ、体部外面横位のタタキのち格子状の粗いナナメハケを施している。1542～1549は口縁部が「く」の字状に屈曲し、1542，1544～1546は端部が上下に拡張して２条の擬凹線を廻らせる。1542～1549は体部内面上位ユビオサエ、体部外面ナナメハケである。1547はほぼ完形であり、平底で最大径部を体部中程より上方に有し、口縁部は「く」の字に屈曲し端部を上方に摘み上げる。体部内面上半ユビオサエ、下半ヘラケズリで、体部外面はナナメハケである。1548は体部が長胴形を呈し、口縁部は緩やかに屈曲して内灣気味に立ち上がり端部を方形に仕上げる。体部内面ヘラケズリで、体部外面右上がりのタタキ目をとどめるもので、外面には煤の付着が顕著である。1549は体部外面にタテハケのちヘラミガキを施している。

1550～1558は底部である。1550は僅かに突出した平底であり、内面ヘラケズリ、外面タテヘラミガキである。胎土中に結晶片岩粒を含まない搬入土器であり、角閃石を含む讃岐産のものと想定できる。1551，1553～1555は僅かに突出する平底であり、1552，1556，1557は突出しない平底である。1554～1557は底部外面にハケを施している。

土坑

土坑 SK1074（第161図，図版３－２）

第６調査区第１遺構面北端に位置する、平面不整長方形，断面U字形の土坑であり、長軸1.93m，短軸1.35m，深さ0.51m を測る。埋土は３層に分層できるが、そのうち第３層である炭化物，マンガンを含む灰色シルト層から、完形にまで復元できた10点以上の鉢形土器を含む、総数100点以上という膨大な土器を検出しており、出土状況からも一括性の高い遺物群である。



第160図　SD2020出土遺物実測図

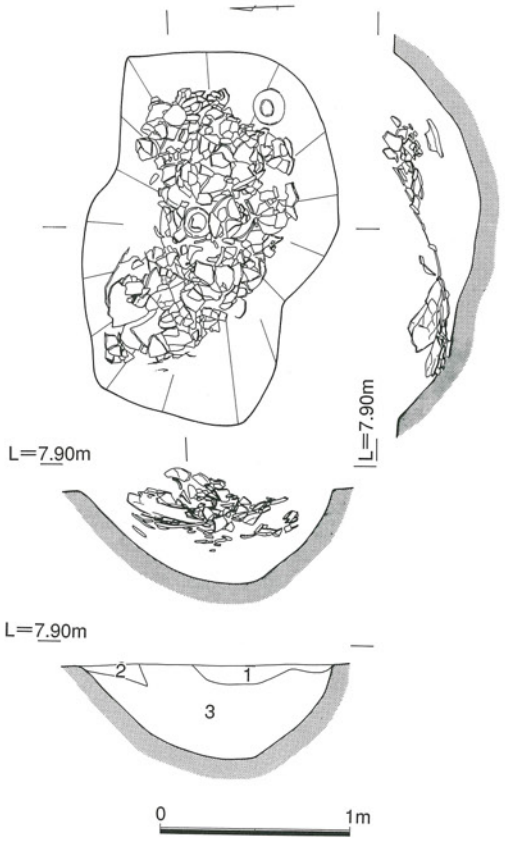
出土遺物（第162図）

本遺構からの出土遺物は図化し本書に掲載できた分だけで117点に上るが、内訳は高杯形土器１％，鉢形土器29％，壺形土器７％，甕形土器63％である。時期的には、黒谷川Ⅱ式新相段階に比定できる。

1559は高杯形土器の杯部である。屈曲して口縁部が外反する器形であり、内面ヨコハケのちタテヘラミガキである。

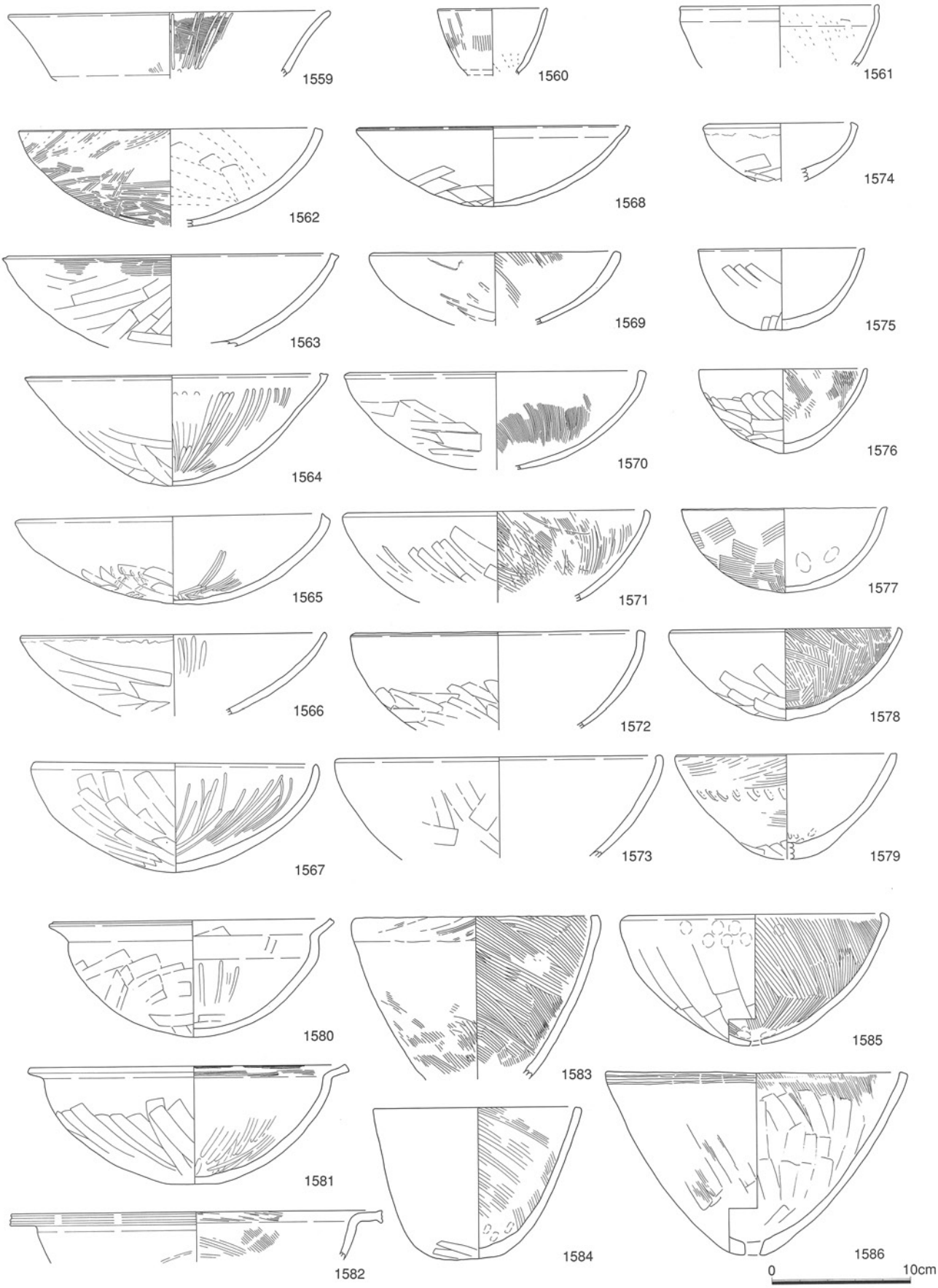
1560は小型丸底鉢形土器である。口縁部が僅かに内灣しながら立ち上がり端部が尖り気味である。外面に縦ハケを施す。

1561～1584は鉢形土器である。丸底で体部が内灣し口縁部がそのまま伸びる1562～1579、口縁部が外側に屈曲する1580～1582及び、砲弾形を呈する1583，1584に分けられるが、体部外面にヘラケズリ痕を残すとともに縦しわ痕をとどめるものが殆どである。1561は口縁部が内側に小さく屈曲し端部を外側に拡張している。型作りを示す縦しわ痕が顕著である。1562は口縁端部を方形に仕上げ端面に１条の擬凹線を施している。外面に縦しわ痕がありハケを施す。1563は口縁端部を僅かに外側に拡張しており、口縁部外面上位にヨコハケを施す。1564は尖り気味の丸底を呈し口縁端部を内側に拡張しており、内面に放射状のヘラミガキを施す。完形である。1565～1567は内面に放射状のヘラミガキを施すが、口縁端部の形状に差異があり、口縁端部を僅かに内側に拡張する1565、口縁端部を方形に仕上げる1566、口縁端部を丸く収める1567に細分できる。1565，1567は完形である。1568も剥離のため詳細不明であるが1565と同様のタイプである。1569～1571，1578は内面にハケを施すが、口縁端部を方形に仕上げる1569、僅かに外側に拡張する1570、内側に拡張する1571，1578に細分できる。1572は胎土褐灰色を呈し、口縁端部を内外に拡張し、内面はナデ調整である。1574～1576は小型のタイプであるが、1574は口縁端部を内側に拡張し、1575は口縁端部を僅かに外側に拡張する。1576は尖り気味の丸底を呈し口縁端部を方形に仕上げ、内面にハケを施す。1575，1576は完形である。1577は口縁端部を方形に仕上げ外面に粗いハケ調整を施している。1579は尖り気味の丸底で底部が肥厚し口縁端部を方形に仕上げる。口縁部外面にヨコハケを施し、体部中位に楕円形の工具押え痕を１列廻らせている。1580～1582は口縁部を外側に屈曲させるタイプである。1580は口縁端部を方形に仕上げ端面に１条の擬凹線を施し、1581は口縁端部を上方に拡張させている。共に完形であり、内面に放射状のヘラミガキを施している。1582は口縁端部を上下に拡張



1．暗灰黄色　2.5Y 5/2　シルト　炭化物，マンガンを含む
2．灰オリーブ色　5Y 5/2　シルト　炭化物，マンガンを含む
3．灰色　5Y 4/1　シルト　炭化物，マンガンを含む

第161図　SK1074実測図



第162図　SK1074出土遺物実測図(1)

して端面に２条の擬凹線を施すもので、内面にハケを施している。1583，1584は砲弾形を呈し、口縁端部を1583は内側に拡張、1584は方形に仕上げるもので、共に内面にハケを施している。

1585，1586は有孔鉢である。1585は丸底で口縁部に粘土接合痕を明瞭に残し、口縁端部を内側に拡張する。体部内面ハケ，外面ヘラケズリであり、口縁部外面に縦しわ痕をとどめる。1586は尖り気味の丸底で体部が内灣し口縁端部を方形に仕上げるもので、内面口縁部ナナメハケ，体部ヘラケズリ、外面口縁部ヨコハケ，体部ナナメハケのちナデである。共に底部に円形の穿孔があり、完形である。

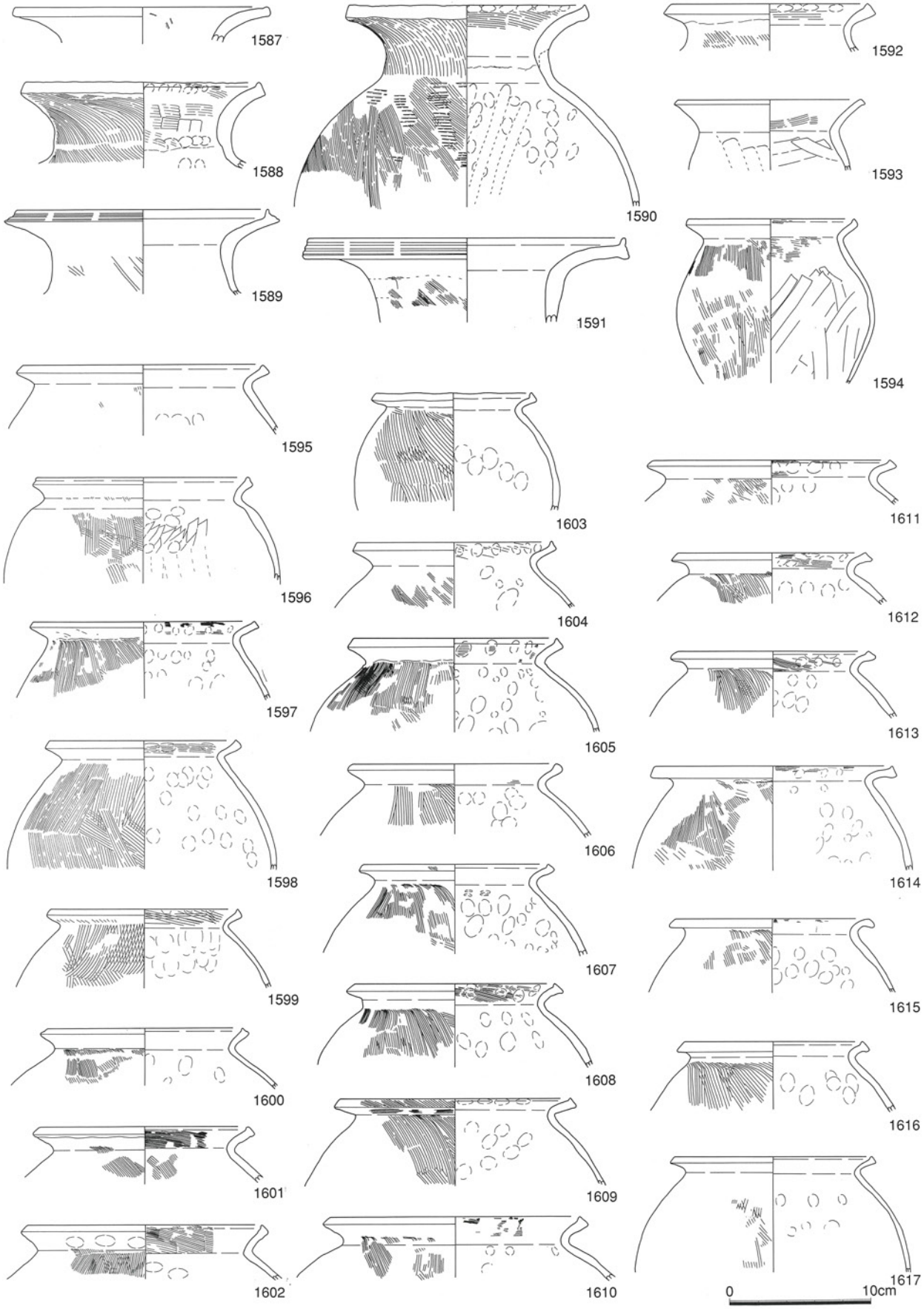
（第163図）

1587～1592は広口壺形土器である。1588～1592は頸部内側に口縁部を貼り付けた痕跡が粘土接合痕に明瞭に観られる。いずれも口縁端部を上方に拡張しているが、1588，1590，1592が口縁部にヨコハケがあるが指頭圧痕を残し擬凹線のない歪んだ口縁部であるのに対し、1589，1591は口縁部を丁寧なヨコナデで整え端面に３条の擬凹線をとどめている。また1588～1590，1592が頸部から口縁部にかけて大きく外反するのに対し、1591は頸部直立する。

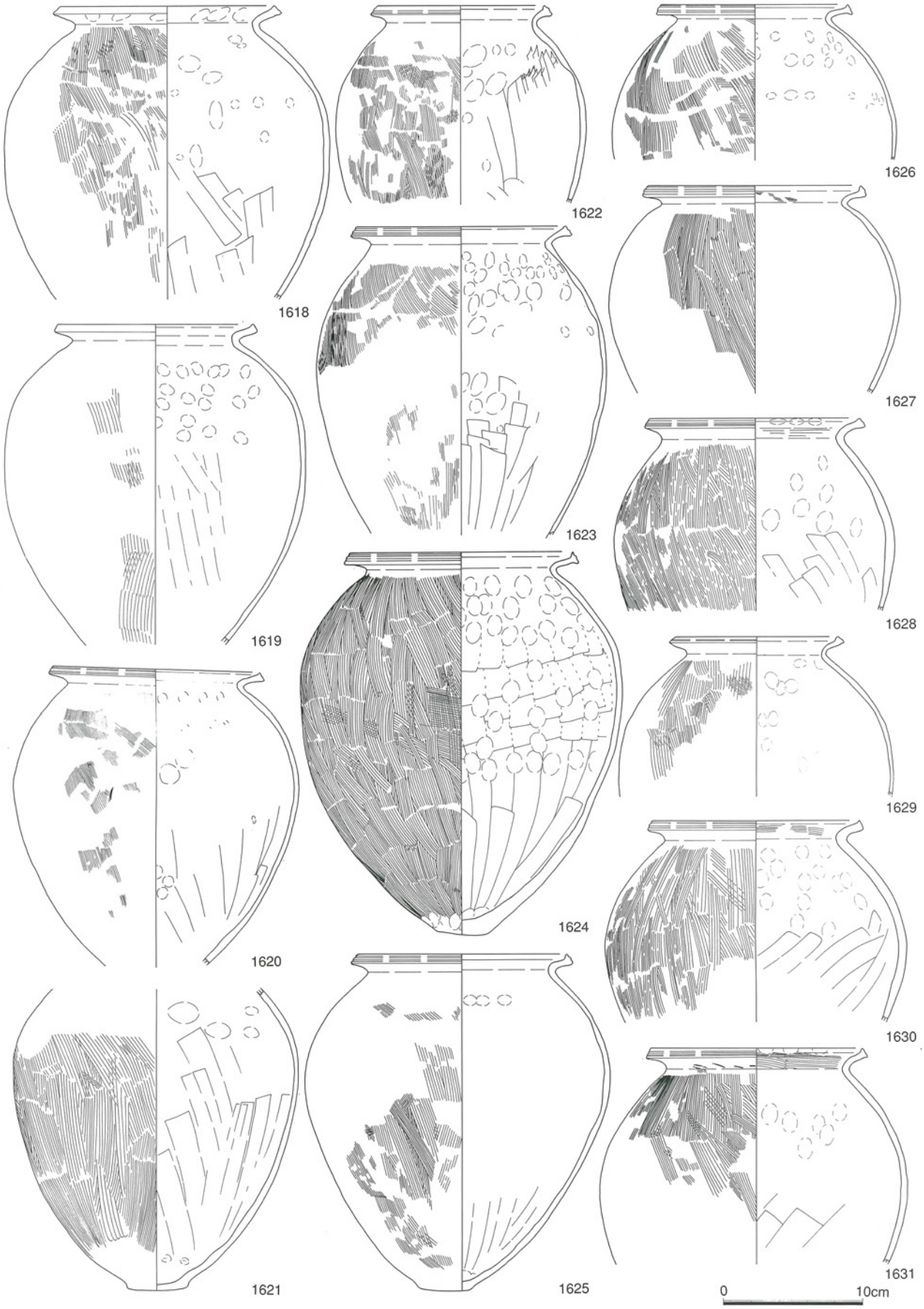
1593～1617は甕形土器である。1593は長胴型の体部を有し口縁部が緩やかに外反し端部を僅かに下方に拡張するものであり、体部内面ヘラケズリ、体部外面板ナデである。1594は長胴型の体部を有するもので、口縁部が屈曲し端部を上方に拡張する。体部内面下位ヘラケズリ，上位ユビオサエのちヨコハケであり、体部外面に細密なタテハケを施す。1595も同様の器形、調整の口縁部を有する。1596は口縁端部を摘み上げ１条の擬凹線をとどめる。1597～1614は胎土がにぶい橙色系を呈し結晶片岩を含む。口縁部が「く」の字状に屈曲し端部を上方に拡張し、体部内面上位がユビオサエ、体部外面は細密なハケを施すものである。ただし口縁部内外に指頭圧痕が顕著であり内面にヨコハケを施すものもあるが、総じて口縁部の形状が歪で厚めであり、端面に擬凹線を有しない。これらはさらに体部の器形及び、口縁部の屈曲角度等から細分できる。1597，1598，1604は後述のものに比べ肩が張らず体部最大径部が比較的下方にあり、口縁部の屈曲角度も90°以上であり、端部に向かって直線的に伸びるタイプである。1599～1602は口縁部の屈曲角度が80～90°とやや強くなるが直線的に伸びることに変わりはない。1605～1610は口縁部の屈曲角度が60～80°と強くなるとともに端部に向かって外反するものもある。1611～1614は一層屈曲が強くなり外反している。1615は胎土色調及び調整は前述のものと同様であるが、口縁端部を上方に摘み上げず、寧ろ下方に拡張気味であることに特徴がある。1616は胎土がにぶい橙色を呈し他に比べ口縁部が短く端部を上下に拡張している。1617は口縁部が屈曲して端部を摘み上げ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面ハケである在地産の特徴を示すが、他とは異なり胎土が精良でありやや軟質の橙色を呈し、器壁が全体に薄い特徴を持つ。後述の1629もこれと同様のタイプである。

（第164図）

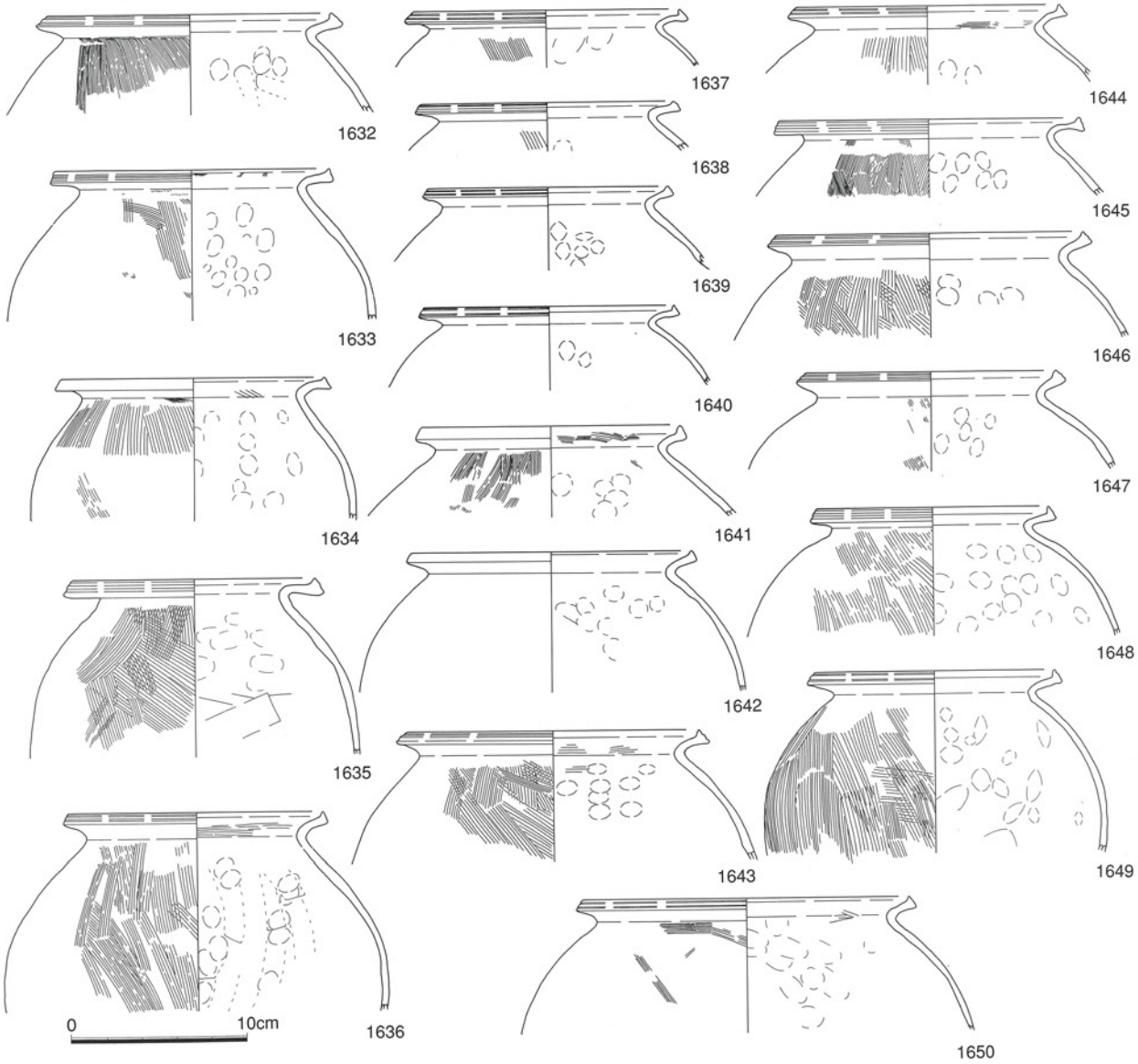
1618～1631は甕形土器である。1618～1628，1630，1631は胎土がにぶい橙色系を呈し結晶片岩粒を含み、平底若しくは突出気味の座りの悪い平底であり，口縁部が「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げる。体部内面上半ユビオサエ，下半ヘラケズリ、体部外面に細密なハケを施す在地産



第163図　SK1074出土遺物実測図(2)

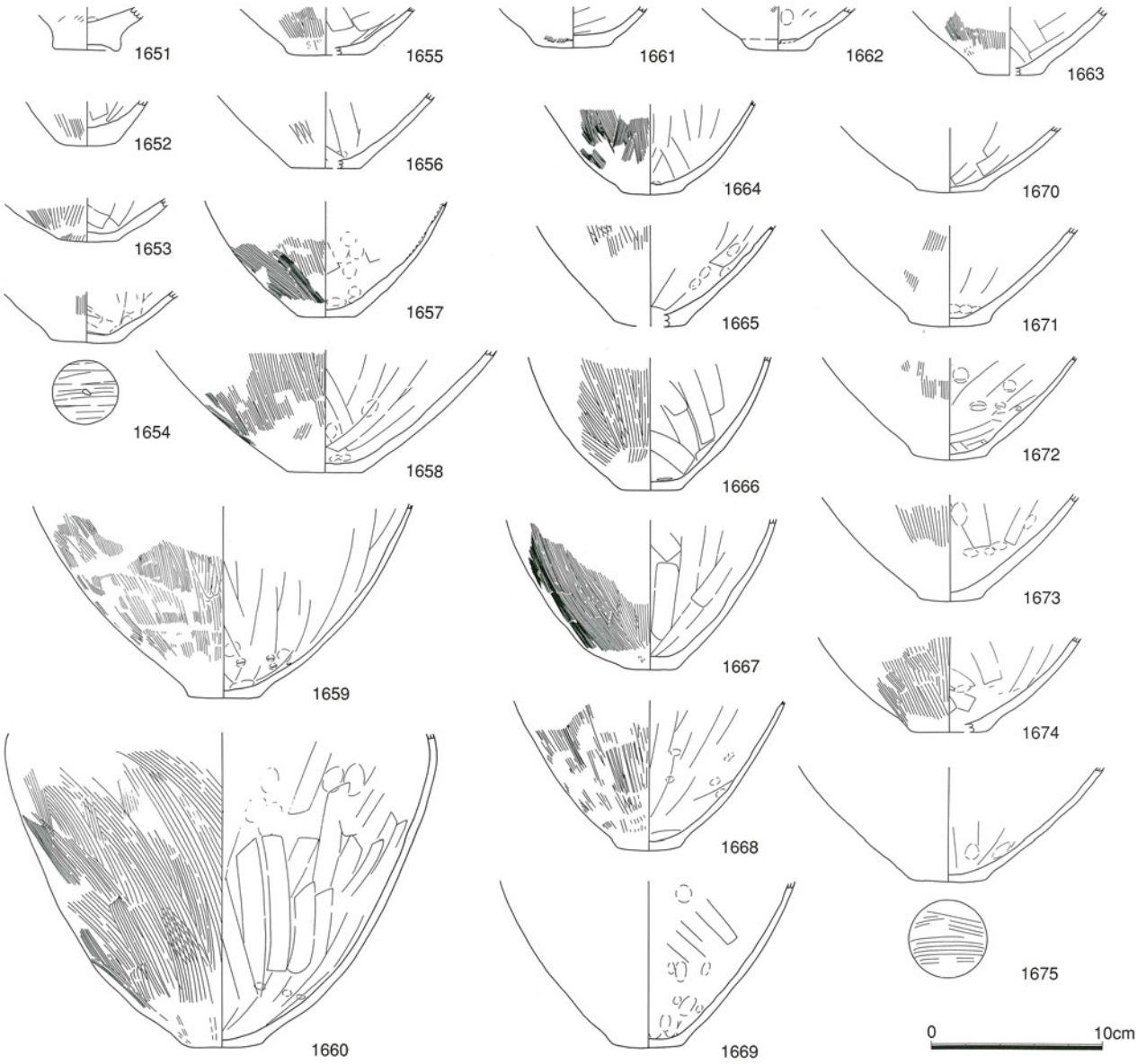


第164図　SK1074出土遺物実測図(3)



第165図　SK1074出土遺物実測図(4)

のものである。そのうち1618，1627，1628，1630，1631は、口縁部は厚めで歪み気味であり、ヨコナデが不十分な指頭圧痕をとどめるタイプである。一方、1619～1626，1629は口縁部内外面に丁寧なヨコナデを加えるため口縁部の形状が整っており端部には2条程度の擬凹線をとどめている。口縁部の屈曲の程度及び、体部の形状から3種類に細分される。1622，1623，1628は比較的長胴型であり体部最大径部が中程にあり口縁部の屈曲も小さい。1624は突出しない平底で体部下半に膨らみが増して肩が張る器形となり口縁部の屈曲も一層強くなる。体部最大径部は器高の64％程度の位置まで上がる。1618～1621，1626，1627，1630，1631も同様である。1618は体部外面及び内面下位に炭化物の付着が顕著に観られる。1630は体部内面全体が褐灰色を呈し、外面はにぶい橙色である。1625は突出気味の平底となり、体部下半がシャープになるとともに一層肩が張り口縁部の屈曲も強くなる。1620,1621は体部外面下半に炭化物の付着が観られる。1629は前述の1617同様精選された橙色の胎土を持ち、やや軟質で器壁が薄いものであるが、丸みのある体部



第166図　SK1074出土遺物実測図(5)

で口縁部が「く」の字状に屈曲し端部を上方に摘み上げ２条の擬凹線をとどめる。体部内面上半ユビオサエ、体部外面ハケという東阿波型土器の特徴を備えている。

（第165図）

1632～1650は甕形土器である。にぶい橙色を呈する胎土中に結晶片岩を含み、口縁部が「く」の字状に屈曲し端部を上方に摘み上げ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面に縦または斜め方向のハケを施す在地産の東阿波型甕形土器である。丁寧なヨコナデにより整った口縁部を成形し、端面に２条程度の擬凹線をとどめる。口径14～17㎝のものが中心であるが、口縁部の屈曲の度合と肩部の張り具合から細分可能である。すなわち口縁部の屈曲が弱く肩の張りが弱い体部中半に最大径部を持つ長胴型の体部を有するものと、口縁部の屈曲が強く肩の張りが強い最大径部を上位に持つ丸みを持った体部を有するものとがある。前者に比定できるのが1632～1636であり、後

者が1637～1650である。

（第166図）

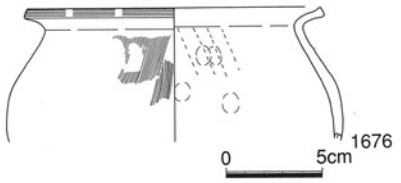
1651～1675は甕形土器と考えられる底部である。いずれも結晶片岩を含むものである。1651はドーナツ底であり、胎土は大粒の石英，結晶片岩粒を含み橙色を呈する。1652は肥厚する平底である。1653～1658は肥厚せず突出しない平底である。1659～1675は突出気味の平底であり、そのうち体部の立ち上がり角度が大きいつまり長胴型の体部であろう1659～1669、立ち上り角度が小さいつまり丸みのある体部を有するもの1670～1675に分類できる。いずれも体部内面下半ヘラケズリ、底部内面ユビオサエ、体部外面ハケであり、底部外面にハケ、底部側面にヨコナデを施すものもある。

土坑 SK1077（第146図）

第６調査区中央部 E55～56グリッドに位置する平面円形，断面台形状の土坑である。SD1022及び SX1005を切り、東端は調査区外に一部かかるが、長軸1.40m 以上，短軸1.36m，深さ0.22 m を測る。埋土は黄褐色及びオリーブ褐色粘質土の平行２層に分層でき、第１層には10～25㎝程度の礫が多量に含まれ、それに混じった少量の土器片を検出した。

出土遺物（第167図）

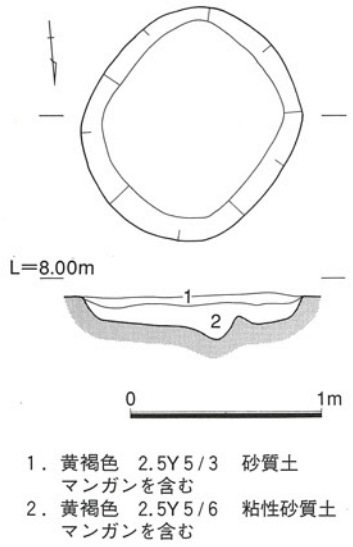
図化し得た遺物は１点である。1676は甕形土器である。口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を上方に僅かに摘み上げる。体部内面上位ユビオサエ、体部外面に細密なハケを施し、口縁部は丁寧なヨコナデにより成形が整っており端面に２条の擬凹線をとどめる。



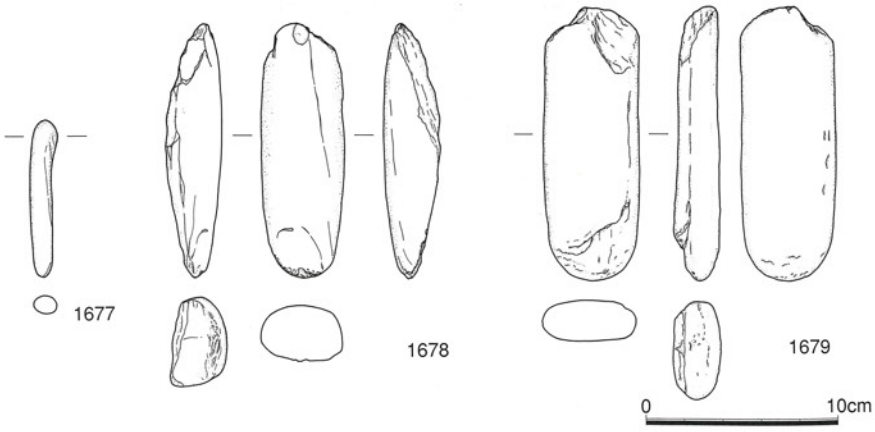
第167図　SK1077出土遺物実測図

土坑 SK1078（第168図）

第６調査区 E56グリッドに位置する平面不整円形，断面レンズ状を呈する土坑であるが中央部が１段下がっている。長軸1.21m，



第168図　SK1078実測図

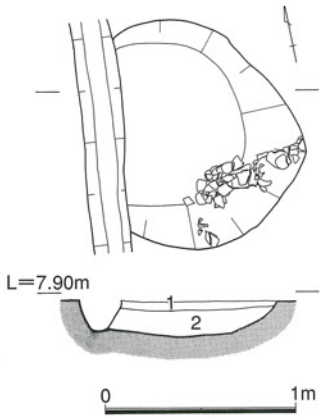


第169図　SK1078出土遺物実測図

短軸1.16m，深さ0.23mを測り、黄褐色砂質土及び黄褐色粘性砂質土２層からなる。第２層から石器類及び土器片を少量検出した。

出土遺物（第169図）

1677は擂石、1678，1679は叩石である。1677，1678は輝緑岩製、1679は結晶片岩製である。

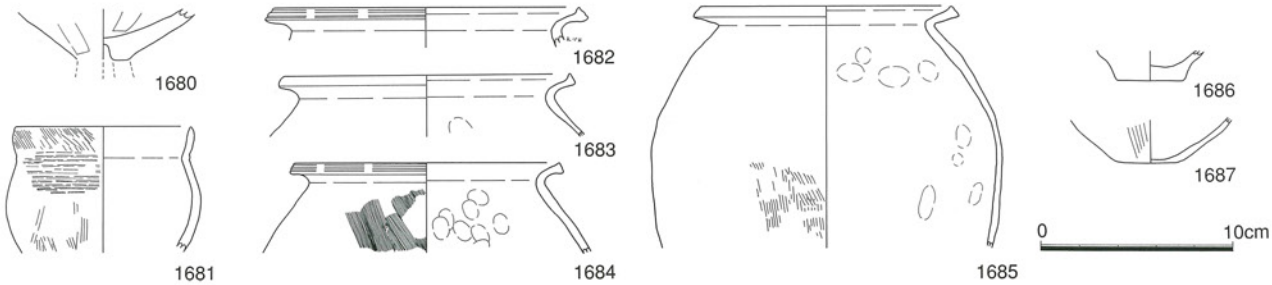


1．黄褐色　2.5Y 5/3　砂質土
　マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y 5/4　粘性砂質土
　マンガンを含む

第170図　SK1079実測図

土坑 SK1079（第170図）

第６調査区 E56グリッドに位置する平面不整円形，断面レンズ状を呈する土坑であり、西側を SD1024に切られるが、長軸1.22m以上，短軸1.12m，深さ0.18mを測る。黄褐色砂質土及び黄褐色粘性砂質土の２層に平行に分層でき、第２層からは土器片を検出している。



第171図　SK1079出土遺物実測図

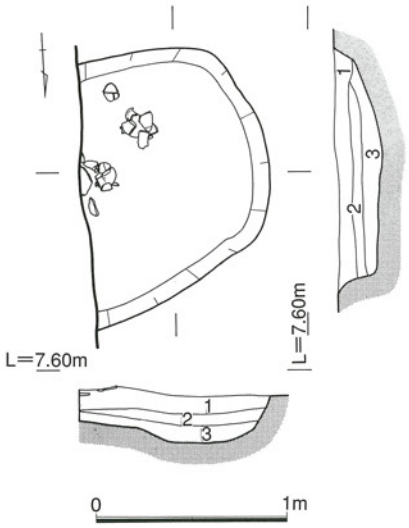
出土遺物（第171図）

1680は台付鉢形土器である。接合部は下方に突出して半球形に抉られている。

1681は鉢形土器である。にぶい橙色系を呈する胎土中に結晶片岩を含み、丸みのある体部から緩やかに口縁部が屈曲して端部を尖り気味に仕上げる。体部外面上位に横位のタタキ目をとどめ下位にはタテハケ、口縁部にはナナメハケを施す。

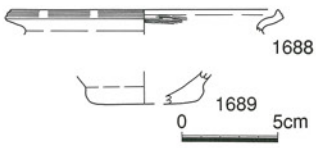
1682～1685は甕形土器である。口縁部「く」の字状に屈曲し端部を上方に摘み上げ、体部内面上位ユビオサエ、体部外面は細密なハケであり、口縁部は丁寧なヨコナデを施すもので、1682，1684は端面に２条程度の擬凹線をとどめる。

1686は突出する平底、1687は肥厚しない平底である。



1．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土
　鉄分，マンガンを含む
2．暗灰黄色　2.5Y 5/2　粘質土
　マンガンを含む
3．灰オリーブ色　5Y 5/3　粘質土
　マンガンを含む

第172図　SK2034実測図



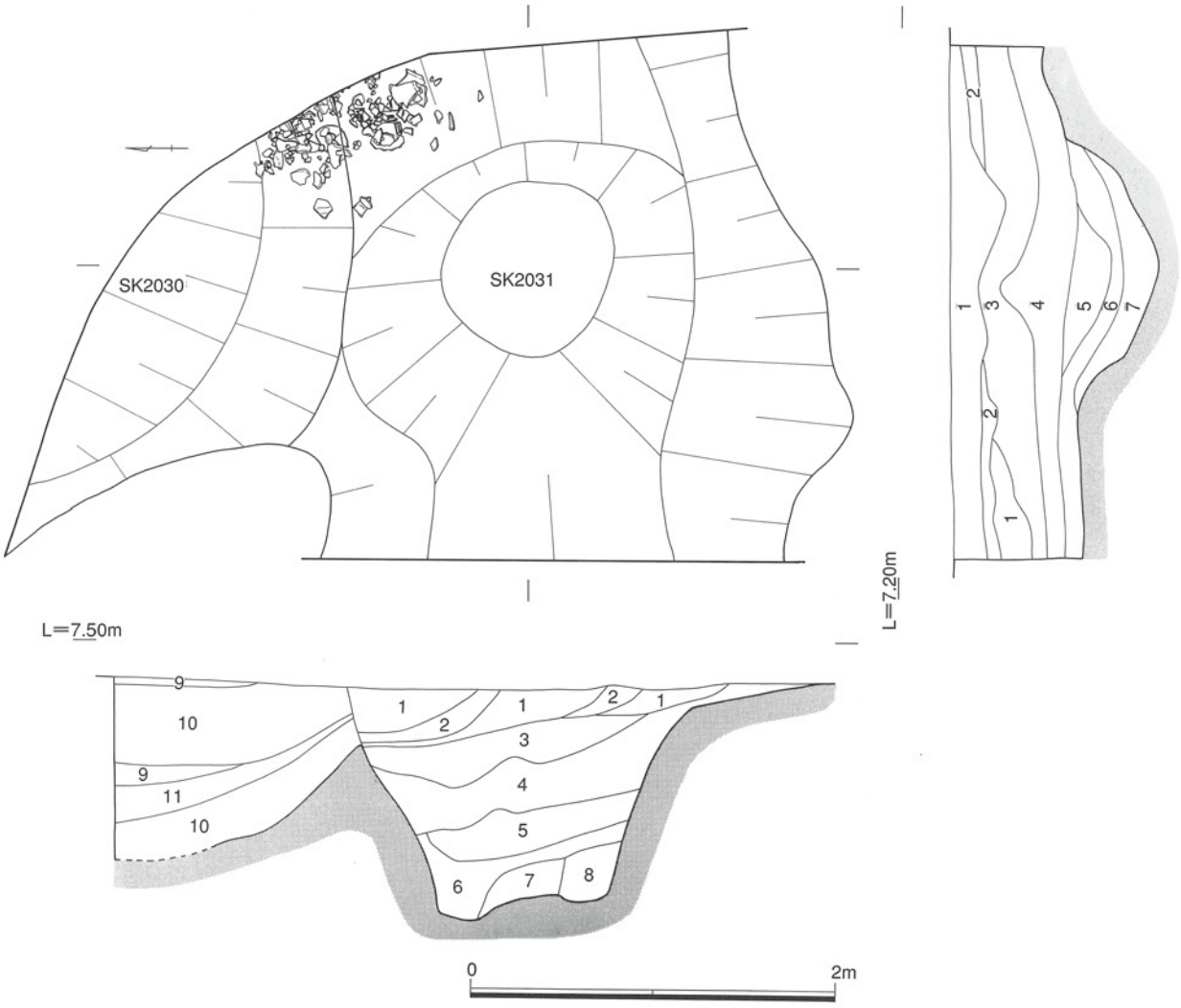
第173図　SK2034出土遺物実測図

土坑 SK2034（第172図）

第８調査区北部 D60～61及び E60～61グリッドに位置する土坑であり、東側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、短軸1.32m，深さ0.24m を測り、断面台形状を呈する。埋土は、黄褐色，暗灰黄及び灰オリーブ色粘質土からなるほぼ平行な３層に分層でき、第１層からは礫に混じり少量の土器片を検出した。

出土遺物（第173図）

1688は甕形土器である。口縁端部を摘み上げ丁寧なヨコナデを施し端面に２条の擬凹線をとどめている。1689は突出気味の底部である。



1.	黄褐色	2.5Y 5/4	粘質土	鉄分，マンガンを含む
2.	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘質土	鉄分，マンガンを含む
3.	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	粘質土	鉄分，マンガンを含む
4.	にぶい黄色	2.5Y 5/4	粘土	鉄分，マンガンを含む
5.	黄褐色	2.5Y 5/3	粘土	
6.	黄褐色	2.5Y 5/3	粘土	鉄分，マンガンを多量に含む
7.	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	粘質土	鉄分，マンガンを含む
8.	黄褐色	2.5Y 5/3	粘質土	鉄分，マンガンを含む
9.	暗灰黄色	2.5Y 4/2	粘質土	鉄分，マンガンを含む
10.	灰オリーブ色	5Y 5/2	粘質土	多量の鉄分とマンガンを含む
11.	オリーブ色	5Y 6/3	粘質土	多量の鉄分とマンガンを含む

第174図　SK2030，SK2031実測図

土坑 SK2030（第174図）

第７調査区北端 F～G59グリッドに位置し、一部が調査区外にかかるとともに SK2031に切られるものであり、深さは0.99m 以上を測る。埋土は粘質土５層以上に分層できる。

出土遺物（第175図）

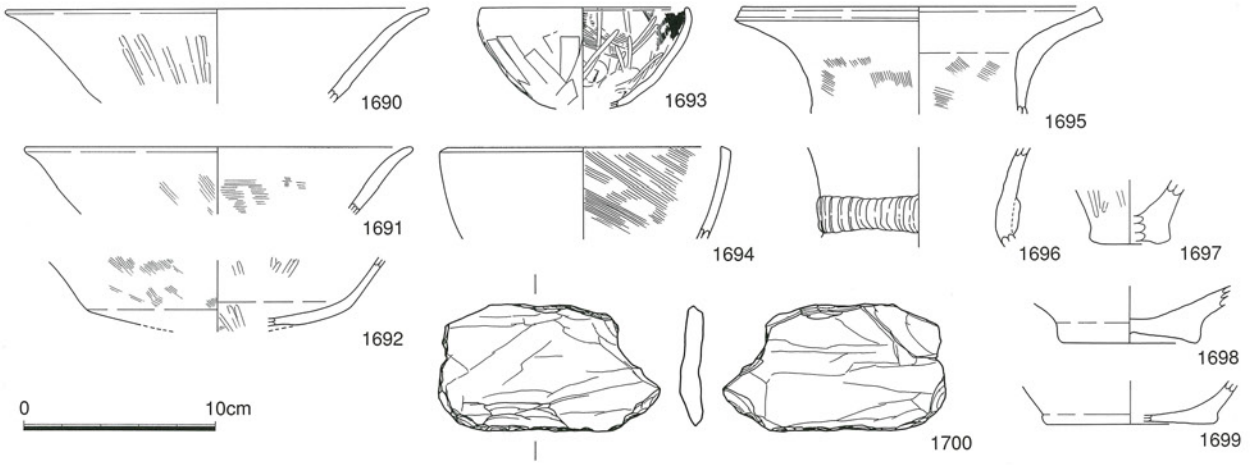
1690～1692は高杯形土器である。1690は外面に、1692は杯部内面にそれぞれ放射状のヘラミガキを施す。

1693，1694は鉢形土器である。1693は口縁部を丸く収め、内面に放射状のヘラミガキ、口縁部内外面上端に強いヨコナデを施す。1694は口縁部を方形に仕上げ、内面に細密なナナメハケ、外面に縦しわ痕をとどめる。

1695，1696は広口壺形土器である。1695は直立する頸部を有し、口縁部は丁寧なヨコナデを加え端部を摘み上げて擬凹線をとどめる。1696は頸部に刻目突帯文を貼付けている。

1697～1699は底部である。結晶片岩を含むものである。ドーナツ底または突出する平底を呈している。

1700は片岩製の打製石庖丁である。



第175図　SK2030出土遺物実測図

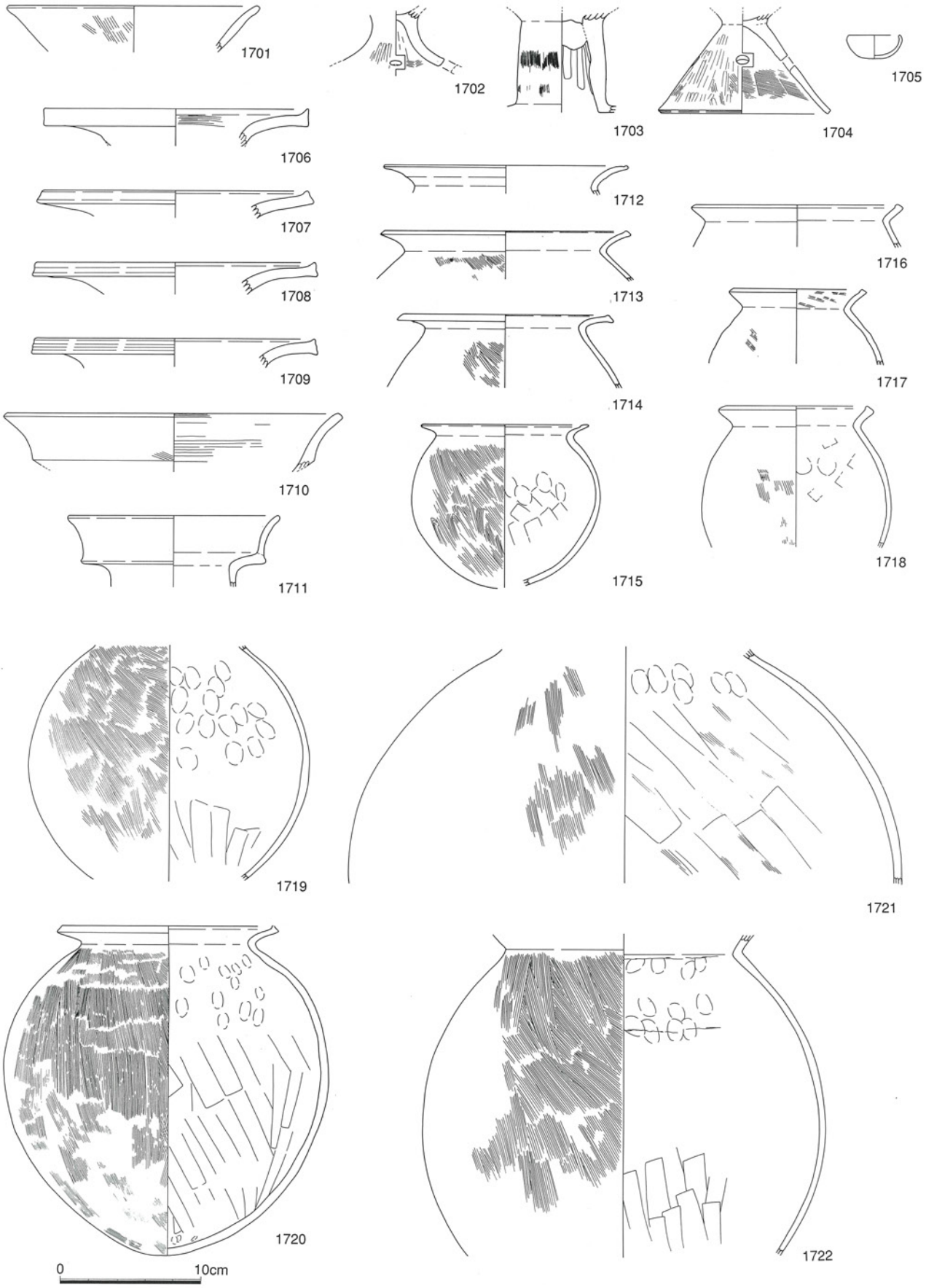
土坑 SK2031（第174図）

第７調査区北部に位置する大型の土坑であり、東西が調査区外にまたがり北部が SK2030を切るものである。深さは最大1.27m を測るものの、平面では不明瞭で検出できなかったが、断面からは３基以上の遺構の切合が確認できる。遺物は第３層から検出されている。

出土遺物（第176図）

図化し得た遺物は、完形の甕２個体を含む22点であるが、その内訳は高杯形土器15%，器台形土器，ミニチュア鉢形土器各５％，壺形土器30%，甕型土器45%である。

1701～1703は高杯形土器である。1702は脚部が緩やかに開くもので４方に透かし穴を穿孔し、外面に放射状のヘラミガキを施す。1703は円筒形の脚柱部から裾部が強く屈曲して開くものであり接合部に粘土塊を充填しており、外面に非常に細密なタテハケを施す。



第176図　SK2031出土遺物実測図

1704は器台形土器である。裾端部が僅かに外反し方形に仕上げ１条の擬凹線をとどめるものであり、４方に透かし穴を外側から穿孔する。内面下位に細密な蜘蛛の巣状ハケ、外面にタテハケのち放射状のヘラミガキを施す。

1705はミニチュアの鉢形土器である。丁寧な手捏ね成形であり、口縁端部が内灣する。

1706～1709は広口壺形土器である。1706，1707は口縁端部を摘み上げ、1708，1709は口縁端部を上下に拡張し擬凹線をとどめる。

1710，1711は二重口縁壺形土器である。1710は口縁端部を方形に仕上げるのに対し、1711は直立する頸部を有し、口縁端部を丸く収める。

1712～1722は甕形土器である。1712は口縁部が緩やかに外反し端部を尖り気味に仕上げ、内側に１条の擬凹線を廻らせる。1715は丸底で球形の体部を有し、口縁部が「く」の字状に強く屈曲し端部を上方に拡張し断面三角形に仕上げる。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なハケであり、口縁部は丁寧なヨコナデを施し整った器形である。1713，1714も同様の形態の口縁部である。1716～1718は結晶片岩を含有し、長胴型の体部で、口縁部は「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ方形に仕上げるが内面にヨコハケ、外面にユビオサエまたは工具痕をとどめた歪な形である。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、外面ナナメハケである。1720は丸底で体部球形であり、口縁部は「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ、丁寧なヨコナデにより1713～1716同様器形が整っている。体部内面上位ユビオサエ，中位以下ヘラケズリ、体部外面細密な縦位のハケである。完形である。

土坑 SK2032（第177図）

第７調査区中央部に位置する巨大な土坑であり東西が調査区外にかかり、最大で深さ2.29mを測る。第13，17層から土器片を検出している。

出土遺物（第178図）

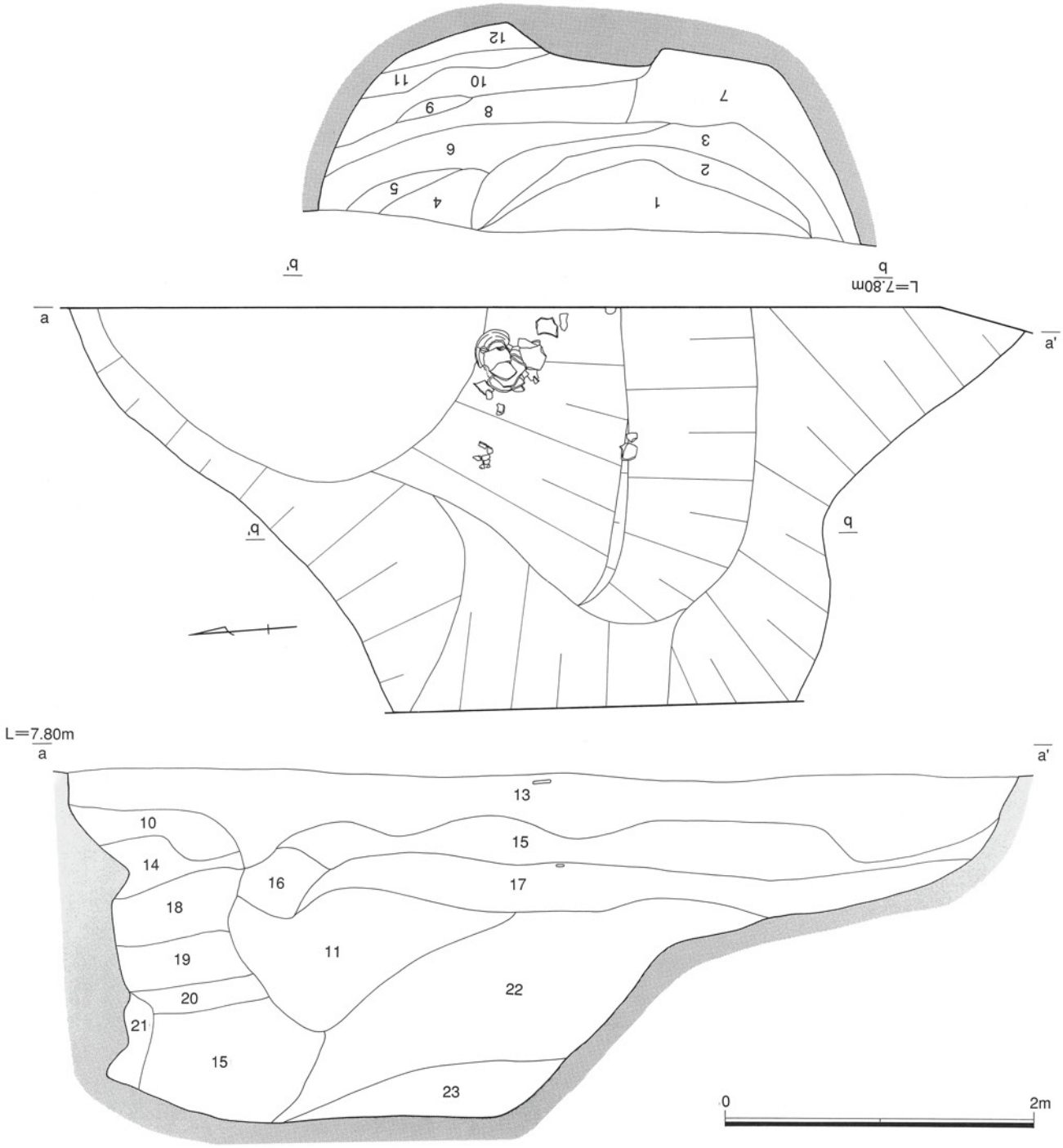
1723は高杯形土器の脚部であり、中空である。

1724，1725は甕形土器である。口縁部は「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ２条の擬凹線を施し、丁寧なヨコナデにより整った成形である。

1726は広口壺形土器である。肩の張る体部であり、直立する頸部から口縁部は大きく開き端部を摘み上げ１条の擬凹線をとどめる。口縁部は丁寧なヨコナデであり、体部内面上位にユビオサエ，下位にヘラケズリ、体部外面に細密なハケを施す。いずれも結晶片岩を含むものである。

土坑 SK2033（第179図）

第７調査区南部に位置し、東西が調査区外にかかるため全容は不明であり、平面からは不明瞭なため検出できず、また最深部まで発掘できなかったが、断面から２基以上の土坑であることは明らかである。遺物は第10，12層及び第17，20層から出土している。第17，20層出土遺物には縄文時代晩期の鉢形土器２点が含まれている。



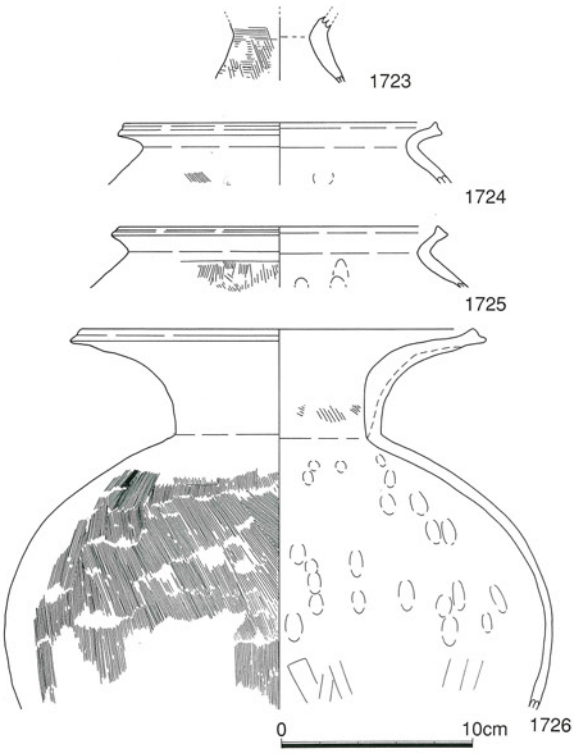
1.	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土	鉄分を含む
2.	褐黄灰色	2.5Y4/2	粘質土	炭化物を多量に含む
3.	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質土	鉄分と多量のマンガンを含む
4.	灰色	5YR5/1	粘質土	マンガンを少量含む
5.	灰色	10Y6/1	粘質土	鉄分、マンガンを含む
6.	灰オリーブ色	7.5Y6/2	粘質土	炭化物と多量の鉄分とマンガンを含む
7.	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質土	多量の鉄分とマンガンを少量含む
8.	黄灰色	2.5Y6/1	粘質土	炭化物、鉄分を含む
9.	灰色	5Y6/1	粘土	鉄分を含む
10.	灰色オリーブ色	5Y6/2	粘質土	鉄分、マンガンを多量に含む
11.	黄灰色	2.5Y5/1	粘質土	鉄分、マンガンを含む
12.	灰オリーブ色	5Y6/2	粘質土	鉄分、マンガンを含む
13.	灰色	5Y5/1	粘質土	炭化物、鉄分、マンガンを含む
14.	灰色	2.5Y5/1	粘質土	鉄分、マンガンを含む
15.	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質土	少量の炭化物と多量の鉄分とマンガンを含む
16.	オリーブ黄色	5Y6/3	粘質土	鉄分と多量のマンガンを含む
17.	灰色	7.5Y5/1	粘質土	多量の炭化物と鉄分と多量のマンガンを含む
18.	灰色	7.5Y5/1	粘質土	鉄分、マンガンを多量に含む
19.	灰色	5Y5/1	粘質土	鉄分、マンガンを多量に含む
20.	黄灰色	2.5Y4/1	粘質土	マンガンを含む
21.	黄灰色	2.5Y4/1	粘質土	炭化物、鉄分、マンガンを含む
22.	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質土	鉄分、マンガンを含む
23.	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土	鉄分と多量のマンガンを含む

第177図　SK2032実測図

出土遺物（第180図）

1727，1728は縄文土器浅鉢，深鉢である。1728は胎土中に結晶片岩及び多量の石英，砂粒を含むものであり、口縁部に刻目突帯文を貼り付けている。

1729～1740は高杯形土器である。1729，1730は精良な橙色系の胎土で焼成固く薄手な作りであり、1729が口縁端部をわずかに上方に拡張し丸く収めるのに対し、1730は尖り気味に仕上げる。1731は褐色系の結晶片岩を含む胎土で焼成固く、口縁端部が外反して方形であり１条の擬凹線をとどめる。内面に条線状ヘラミガキを施し外面は細密なタテハケである。1732～1736は橙色系の胎土でやや軟質であり磨耗が激しいが、体部上端に付いた口縁部が大きく開き、端部の形状は1732が尖り気味、1733～1736が丸く収めるものである。



第178図　SK2032出土遺物実測図

1741は器台形土器の脚部である。短い脚柱部に薄い円盤を充填している。外面にハケのち横位のヘラミガキを施す。

1742，1743は小型丸底鉢形土器である。共に胎土中に結晶片岩を含み、内外面に放射状ヘラミガキを施す。

1744は甕形土器である。口縁部が屈曲して直線的に開き端部を丸く収め、体部外面にタテハケを施す。

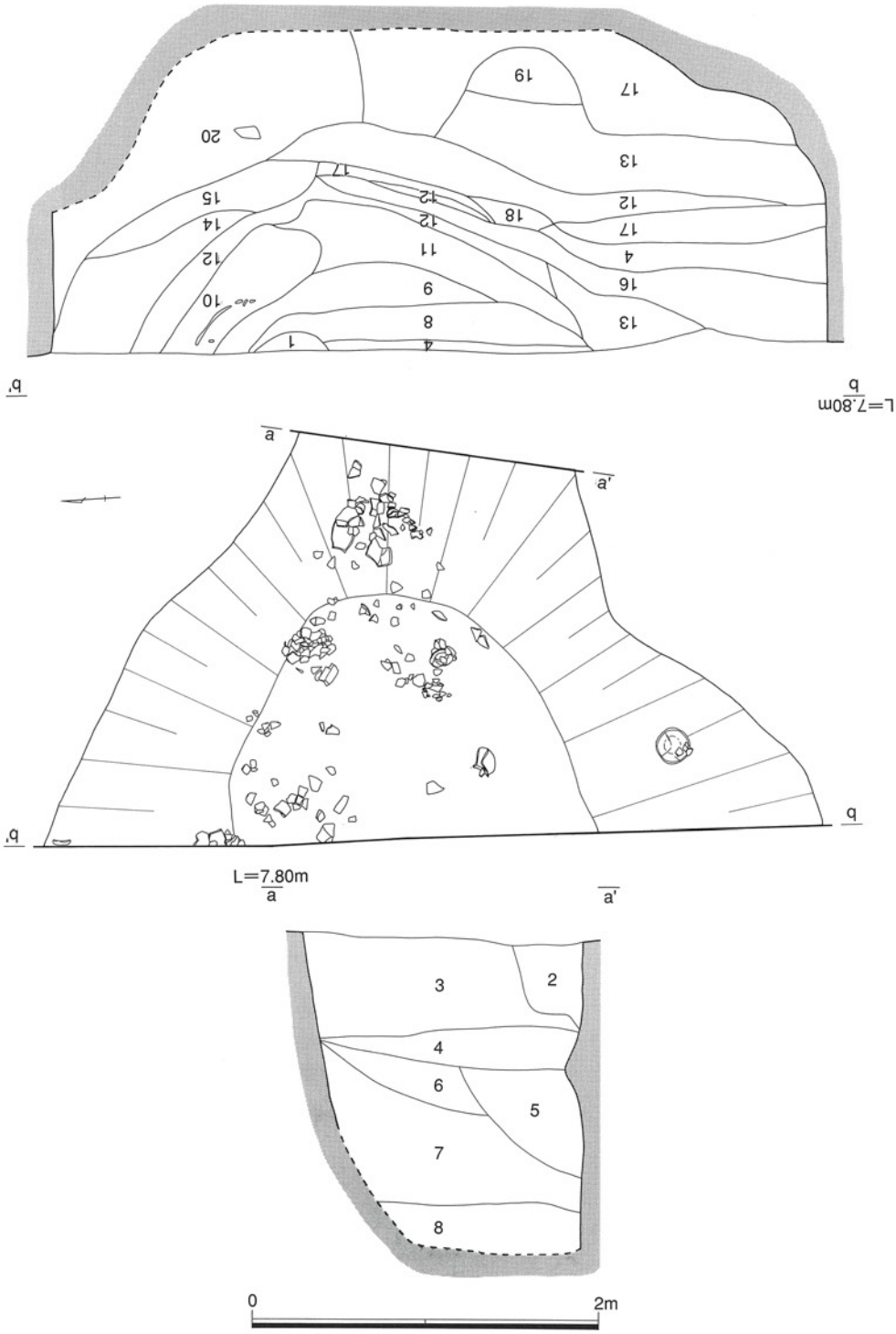
1745～1754は鉢形土器である。1745は短い口縁部を外側に屈曲させ尖り気味に仕上げる。1746～1751は口縁端部を丸く収め、1752は方形に仕上げ、1753，1754は僅かに内側に拡張する。1748，1752～1754は内面に放射状のヘラミガキを施し、1754は完形であり、外面に細かいタタキ目を残す。

1755は鉢形土器，1756は小型丸底鉢形土器の共に体部と考えられ、内面に水銀朱の付着が認められる。

1757～1762は広口壺形土器である。口縁部を丁寧なヨコナデにより整った器形に成形し、外面に２～３条の擬凹線をとどめるものであり、1757～1760，1762は口縁端部を上方に拡張し、1761は上下に拡張する。

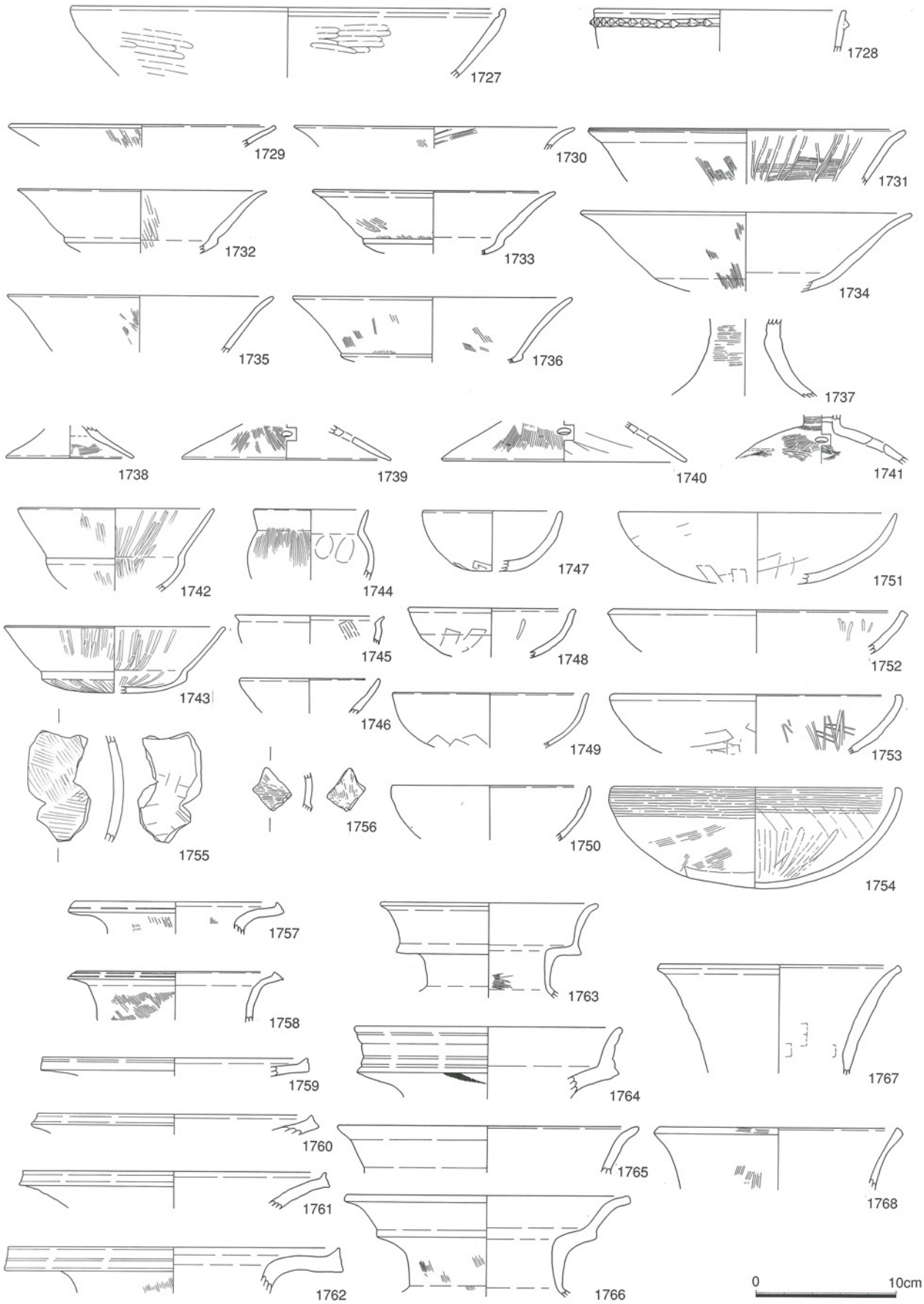
1763～1766は二重口縁壺形土器である。いずれも胎土中に結晶片岩を含み、直立する頸部から短く開く一次口縁上端部に二次口縁が接合し擬口縁下半が露胎するものであり、1764は口縁部外面に４条の擬凹線をとどめる。

1767，1768は広口壺形土器である。明瞭な頸部を持たず，口縁部が大きく開く。口縁端部を1767

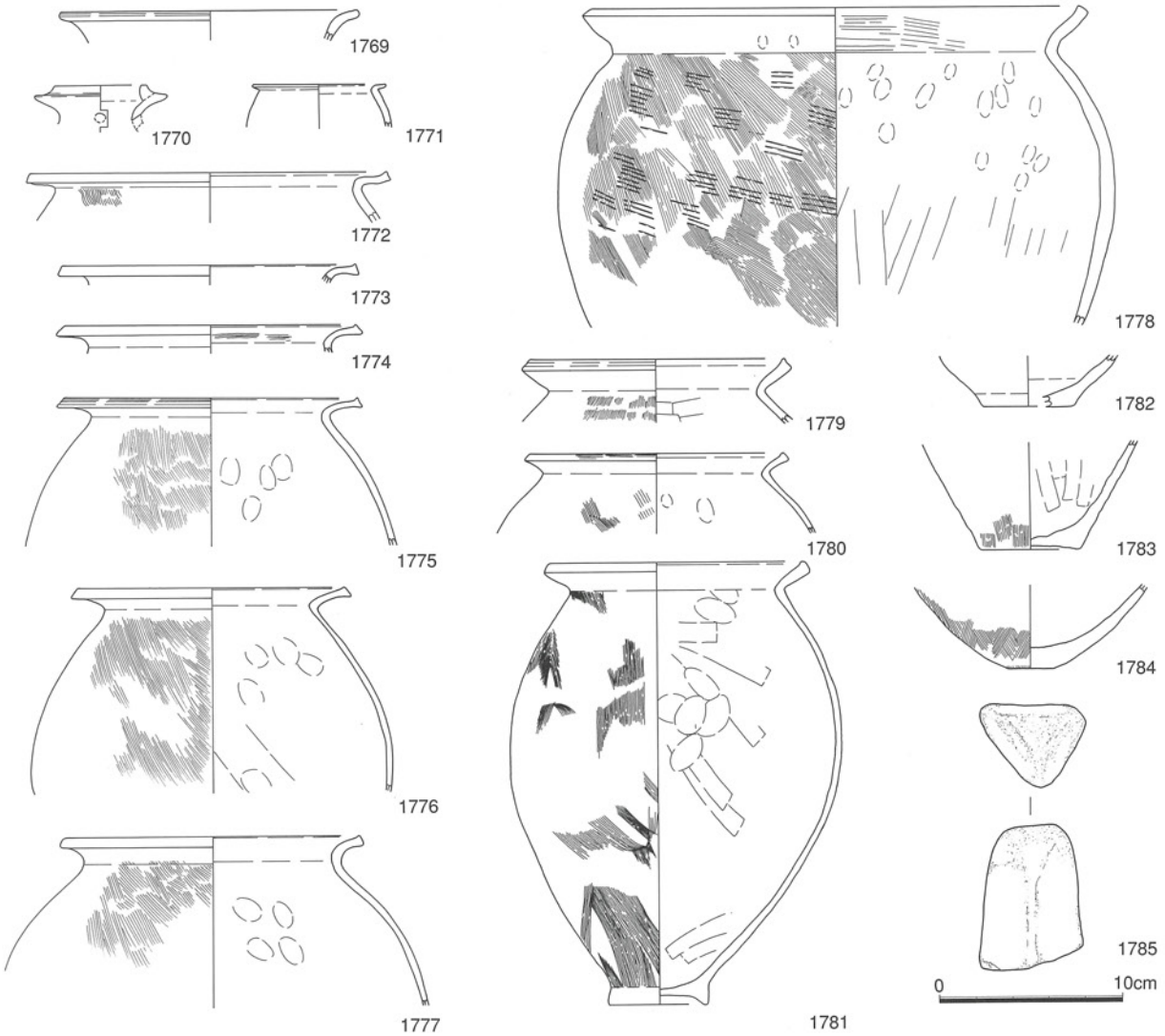


1.	灰色	5Y5/1	粘質土	マンガンを含む	11.	灰オリーブ色	7.5Y6/2	粘質土	
2.	灰色	5Y5/1	粘質土	多量の鉄分とマンガンを含む	12.	黄灰色	2.5Y5/1	粘質土	鉄分を含む
3.	灰オリーブ色	7.5Y5/2	粘質土	鉄分とマンガンを含む	13.	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土	鉄分、マンガンを含む
4.	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土	鉄分、マンガンを含む	14.	暗灰黄色	2.5Y6/2	粘質土	鉄分と多量のマンガンを含む
5.	灰色	5Y5/1	粘質土	多量の鉄分とマンガンを含む	15.	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質土	多量の鉄分とマンガンを少量含む
6.	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質土	炭化物と少量の鉄分とマンガンを含む	16.	灰オリーブ色	5Y6/2	粘質土	少量の鉄分とマンガンを含む
7.	灰色	7.5Y5/1	粘質土	炭化物と少量の鉄分とマンガンを含む	17.	オリーブ黄色	5Y6/3	粘質土	鉄分、マンガンを含む
8.	灰色	5YR5/1	粘質土	マンガンを含む	18.	黄褐色	2.5Y5/3	粘質土	多量の鉄分とマンガンを含む
9.	灰オリーブ色	5Y6/2	粘質土	鉄分、マンガンを含む	19.	灰オリーブ色	5Y4/1	粘質土	
10.	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質土	炭化物を含む	20.	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土	鉄分、マンガンを含む

第179図　SK2033実測図



第180図　SK2033出土遺物実測図(1)



第181図　SK2033出土遺物実測図(2)

は丸く収め、1768は方形状に仕上げる。

（第181図）

1771～1781は甕形土器である。1771はミニチュアで内外面をナデにより仕上げる。1772～1776は胎土中に結晶片岩を含有し、口縁部が「く」の字状に強く屈曲し、端部を強く上方に拡張し断面三角形に仕上げ擬凹線をとどめるものであり、内外面を丁寧なヨコナデにより整った器形の口縁部にしている。体部内面上位にユビオサエのちナデ，外面に細密なナナメハケを施す。1777も胎土及び体部内外の調整は同様であるが、口縁部の屈曲は緩やかであり端部を摘み上げ１条の擬凹線をとどめるものである。1778は口縁部が120°程度に屈曲し端部を摘み上げ、内面に粗いヨコハケを施すが擬凹線をとどめず、やや歪な器形の口縁部である。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なナナメハケである。1781は突出したドーナツ底の長胴型の体部であり、体部中程よりやや上位に口径よりも大きい最大径部を有し、口縁部90°程度に屈曲し端部を摘み上げる。口縁部内外面に丁寧なヨコナデを施し端面に数条の擬凹線をとどめる整った器形の

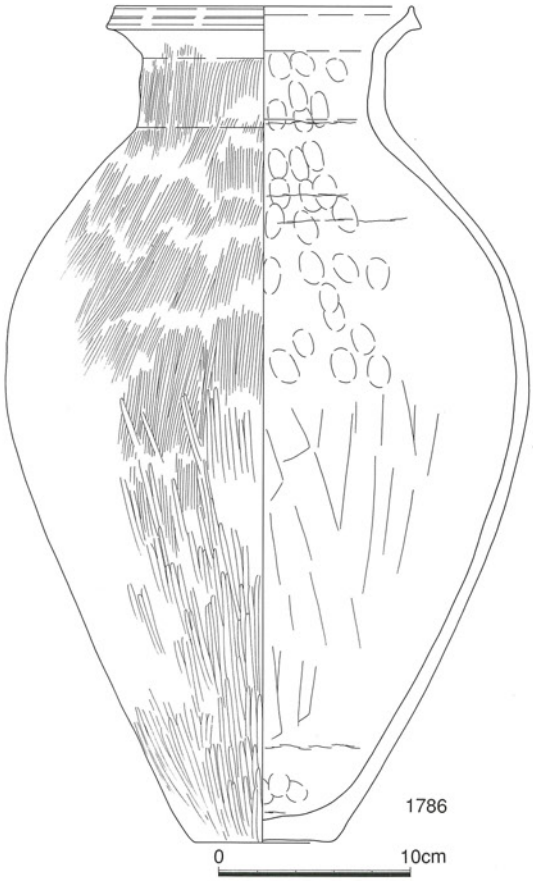
口縁部である。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリであり、体部外面に細密なナナメハケを施す。

1782は突出気味の底部、1783はドーナツ底、1784は突出しない平底である。いずれも底部外面にハケを施す。

1785は石杵である。平面形状は棒状であり半分が欠損する。断面三角形であり、摩滅した先端部には水銀朱の付着が認められる。

（第182図）

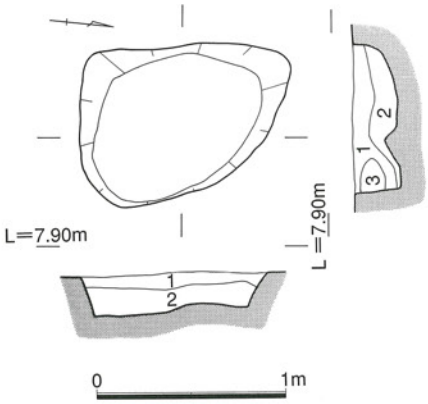
1786は広口壺形土器である。結晶片岩を含有する橙色の胎土であり、上げ底気味の平底で体部高63%位に最大径部を有し、頸部直立して口縁部屈曲して短く外反気味に開き、端部を上下に拡張し２条の擬凹線をとどめる。口縁部は丁寧なヨコナデ、内面頸部から体部上半にユビオサエのちヨコナデ、体部下半にヘラケズリ、外面頸部から体部上半にタテハケ、体部下半にタテヘラミガキを施す。



第182図　SK2033出土遺物実測図(3)

土坑 SK1081（第183図）

第９調査区北部 E67グリッドに位置し、平面は南西側が隅丸長方形，北東側が円形、断面は台形を呈する土坑であり、長軸1.23m，短軸0.87m，深さ0.24m を測る。埋土は炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色，黄褐色及び暗灰黄色粘質土３層に分層でき、各層から少量の土器片を検出している。

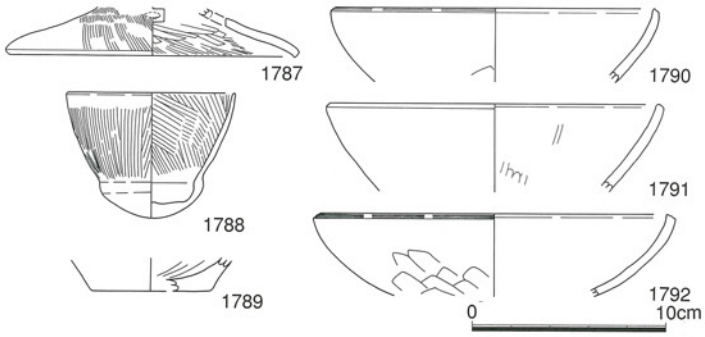


1．オリーブ褐色　2.5Y 4/6　粘質土
　炭化物，マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土
　炭化物，マンガンを含む
3．暗灰黄色　2.5Y 5/2　粘質土
　炭化物，マンガンを含む

第183図　SK1081実測図

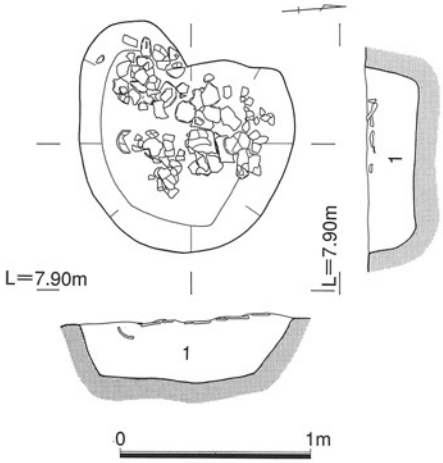
出土遺物（第184図）

1787は高杯形土器の裾部である。裾端部は内灣し僅かに下方に拡張して方形に仕上げる。1788は小型丸底鉢形土器である。偏平な体部から発達した口縁部が内灣しながら立ち上がり端部



第184図　SK1081出土遺物実測図

を丸く収める。口縁部内面ナナメハケ、口縁部外面タテハケである。1789は突出しない平底である。底部外面にハケを施す。1790～1792は鉢形土器である。胎土はにぶい橙色を呈し、口縁端部を内側に拡張して方形に仕上げるものであり、1791は内面にタテヘラミガキ、体部外面に縦しわ痕が観られる。



1．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘性砂質土
炭化物、マンガンを含む

第185図　SK1083実測図

土坑 SK1083（第185図，図版３－７）

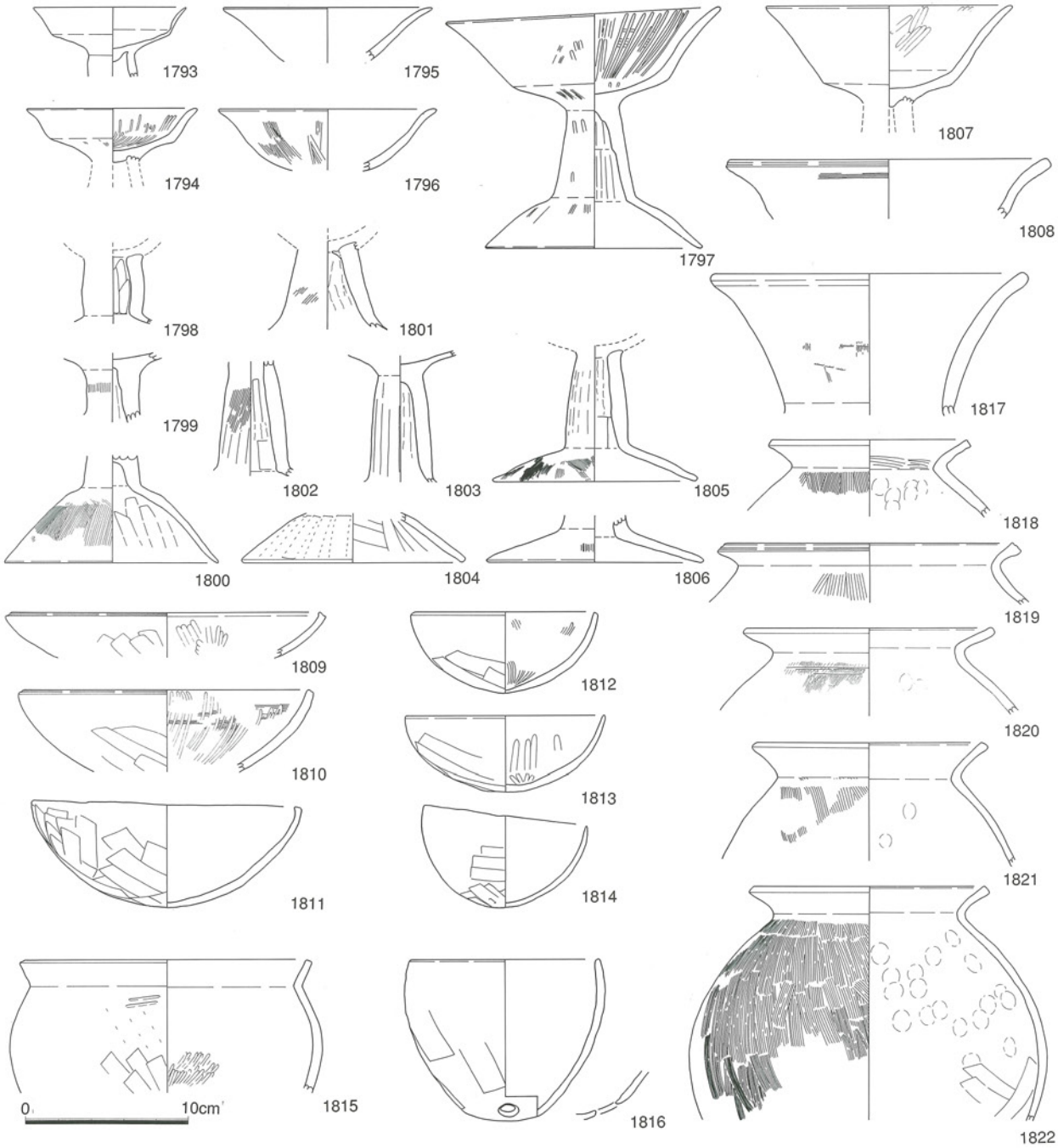
第９調査区北部、F67グリッドに位置し、平面不整形，断面台形を呈する土坑であり、長軸1.20m，短軸0.86m，深さ0.29mを測る。埋土は炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色粘性砂質土１層で構成され、多量の土器片を含有している。

出土遺物（第186図）

出土遺物のうち図化できたものは28点であり、内訳は高杯形土器46％，鉢形土器32％，壺形土器４％，甕型土器18％である。

1793～1808は高杯形土器である。1793は結晶片岩，赤色斑を多量に含む橙色の胎土であり焼成は甘目で器壁が非常に薄く、口縁部が屈曲して端部を尖らせている。1803も同タイプであり、1795も胎土がこれと近い。1794は同様に結晶片岩を含有し口縁部が屈曲するが、胎土は灰褐色で焼成は硬めであり、器壁は厚く端部を丸く収めるものであり、内面に放射状のヘラミガキを施す。1800がこれと同様の胎土である。1796～1799，1802，1804～1806は結晶片岩を含み比較的焼成は固めである。1795,1796は杯部が緩やかに内灣しながら立ち上がり端部は外反し尖り気味に仕上げる。1797は口縁部が屈曲して大きく開き端部を丸く収め、裾部は内灣しながら開き端部を丸く収める。杯部内外面及び脚柱部外面にタテヘラミガキを施すものであり、杯部と裾部の内外面に水銀朱の塗彩が認められる。1798～1800は短脚タイプであり，1800は裾端部が僅かに外反して尖り気味に仕上げ外面細密なタテハケである。1801は結晶片岩を含む橙色の胎土で、脚部に明瞭な屈曲点を持たず緩やかに開くタイプであり、1800と同様に接合部に挿入した薄い円盤状の粘土が残っている。1804は裾部が内灣気味に開き端部は僅かに外反気味で方形に仕上げる。外面に縦位の板ナデを施す。1805，1806は裾部が直線的に開き端部を丸く仕上げる。1807は胎土中に角閃石，雲母を含み結晶片岩を含まず色調は橙色を呈するもので搬入品と考えられる。口縁部が屈曲して大きく開き端部を尖り気味に仕上げており、内面にヘラミガキが認められる。

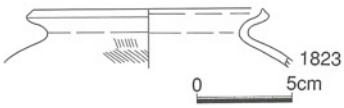
1809～1816は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1809，1812，1813，1815は体部外面に縦しわ痕が認められる。1809は口縁端部を内側に拡張し、内面にタテヘラミガキを施し、1810は口縁端部が方形状で内面が黄灰色を呈し放射状のヘラミガキを施す。1812は口縁端部を丸く収め、1813，1814は胎土が橙色を呈し焼成が甘目であり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。1816は有孔鉢である。結晶片岩及び大粒の石英，長石を含むもので、砲弾形を呈し底部中心よりも上方に直径1.4cmの穿孔がある。体部外面下位に数カ所の棒状圧痕が認められる。



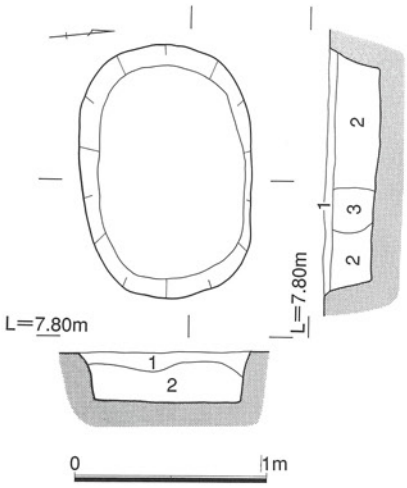
第186図　SK1083出土遺物実測図

1817は広口長頸壺である。口縁端部を丸く収め内外面にスリップ痕が認められる。

1818～1822は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含むものである。1818は内面が黄灰色を呈し、口縁部を「く」の字に屈曲させ端部を下方に拡張する。1819は口縁端部を上下に拡張し２条の擬凹線をとどめる。1820～1823は口縁端部を僅かに摘み上げる。1821は胎土が橙色を呈し焼成が甘目である。



第187図　SK1084出土遺物実測図



1．灰オリーブ色　5Y6/2　粘性砂質土
鉄分、マンガンを含む
2．暗灰黄色　2.5Y5/2　粘性砂質土
マンガンを含む
3．灰黄色　2.5Y6/2　粘質土
マンガンを含む

第188図　SK1085実測図

土坑 SK1084（第143図）

第９調査区 F67～68グリッドに位置し、平面楕円形、断面レンズ状の土坑であり、長軸2.42m，短軸1.68m，深さ0.23m を測る。

出土遺物（第187図）

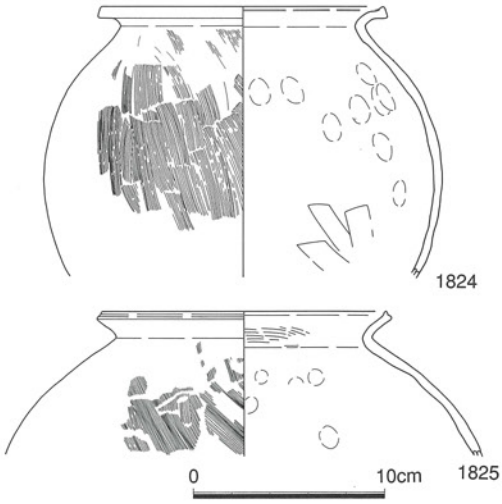
図化し得た遺物は１点のみである。1823は甕形土器である。口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を摘み上げ内外面に丁寧なヨコナデを加えて整った器形の口縁部としている。体部外面にナナメハケを施す。

土坑 SK1085（第188図）

第10調査区北部 E92～93グリッドに位置し、平面隅丸方形，断面台形を呈する土坑であり、長軸1.35m，短軸0.90m，深さ0.25m を測り、主軸方位 N－88°－W を示す。埋土は灰オリーブ色及び暗灰黄色粘性砂質土２層に分層でき平行堆積であり、平面からは検出できなかったが、断面から小穴の掘り込みが認められる。少量の土器片が検出されている。

出土遺物（第189図）

1824，1825は甕形土器である。共に結晶片岩を含むものであり、口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げる。体部内面上位ユビオサエ、下位ヘラケズリ、体部外面ナナメハケである。口縁部の器形は1824が歪であるのに対し、1825は丁寧なヨコナデにより整えられ、端面に２条の擬凹線をとどめるものである。



第189図　SK1085出土遺物実測図

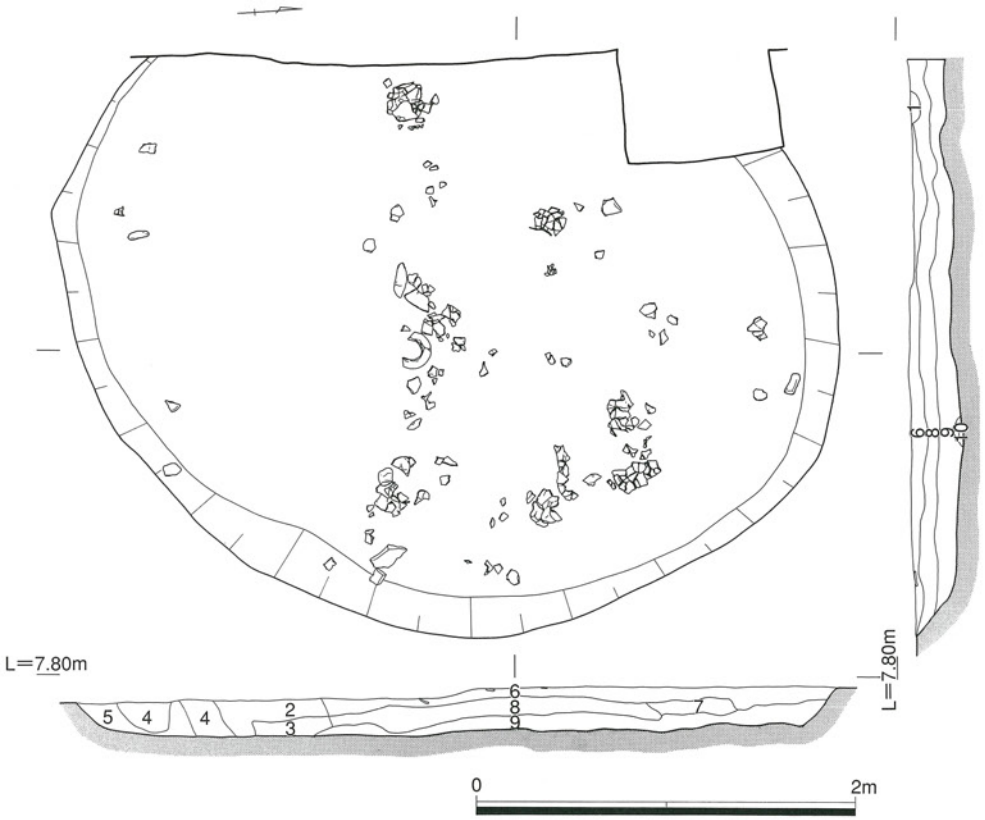
土坑 SK1086（第190図，図版４－３）

第10調査区北部 F91～92グリッドに位置する、平面楕円形，断面浅い台形状を呈する土坑であり、西側が調査区外にかかるが、長軸4.02m，断面0.27m を測る。溝 SD 1045を切っている。第６層から土器片を検出している。

出土遺物（第191図）

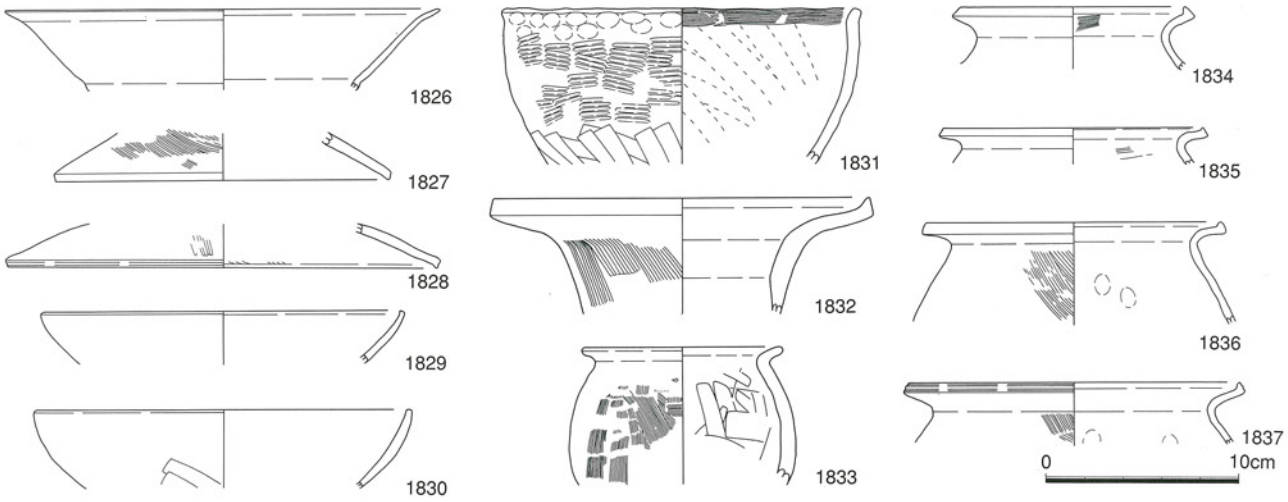
1826～1828は高杯形土器である。1826は結晶片岩を含む橙色を呈する胎土で焼成はやや軟質であり、口縁部が屈曲し端部は外反して尖り気味に仕上げる。1827，1828は裾端部が下方に拡張し方形に仕上げ１条の擬凹線をとどめるものであり、1827は外面にナナメハケ、1828はヘラミガキを施す。

1829～1831は鉢形土器である。1829，1830は結晶片岩を含む橙色の胎土であるが、1829は口縁



1.	灰黄褐色	10YR 5/2	粘性砂質土	鉄分を含む
2.	暗灰黄色	2.5Y 5/2	砂質土	多量のマンガンを含む
3.	灰オリーブ色	2.5Y 4/2	粘性砂質土	多量のマンガンを含む
4.	黄褐色	2.5Y 5/3	砂質土	マンガンを含む
5.	オリーブ褐色	2.5Y 4/3	砂質土	少量のマンガンを含む
6.	灰オリーブ色	5Y 4/2	砂質土	炭化物，マンガンを多量に含む
7.	暗灰黄色	2.5Y 5/2	砂質土	多量のマンガンを含む
8.	黄灰色	2.5Y 5/1	粘性砂質土	多量のマンガンを含む
9.	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘質土	マンガンを含む
10.	灰黄色	2.5Y 6/1	粘質土	

第190図　SK1086実測図



第191図　SK1086出土遺物実測図

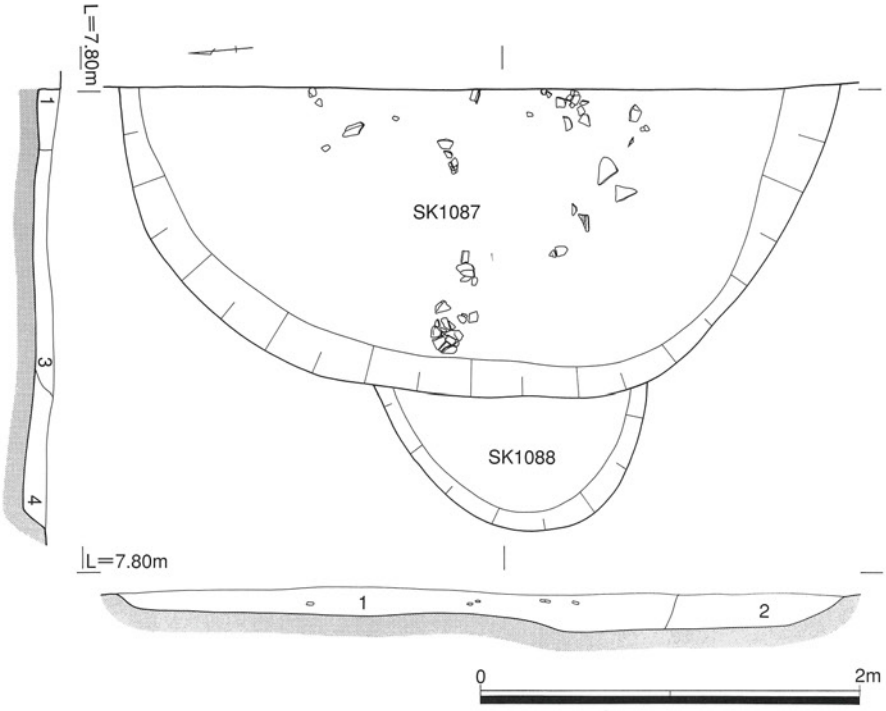
端部を内側に拡張し方形に仕上げるの対し、1830は丸く収めている。1831は結晶片岩を含むもので、口縁端部が外反して方形に仕上げているが器形は歪であり、体部外面に縦しわ痕は認められず、口縁部ユビオサエ、体部上位に横位のタタキ，下位ヘラケズリである。内面は口縁部ヨコハケ、体部は板ナデである。

1832は広口壺形土器である。外方に立ち上がる頸部から口縁部が大きく開き端部を上方に拡張するが、端部の処理は不十分なため上端は歪であり擬凹線はとどめない。

1833～1837は甕形土器である。1833は口径よりやや大きい体部最大径部を有し口縁部が短く屈曲し端部を丸く収める。体部外面は細密なハケ調整されているが、内面は粗いヘラケズリのみである。1834～1837は口縁部屈曲し端部を摘み上げるが、1834は口縁部が歪な形状であるのに対し、1835～1837は口縁部に丁寧なヨコナデが施され整った形状である。

土坑 SK1087（第192図）

第10調査区北部 E92～93グリッドに位置するもので、平面不整円形，断面浅い台形を呈し、底部はほぼ平坦であるが南側が１段深くなっている。SD1045及び SK1088を切るとともに、東半分が調査区外にかかるため全容は不明であるが、長軸3.75m，深さ0.21m を測る。第１層及び３層から多量の土器を検出している。



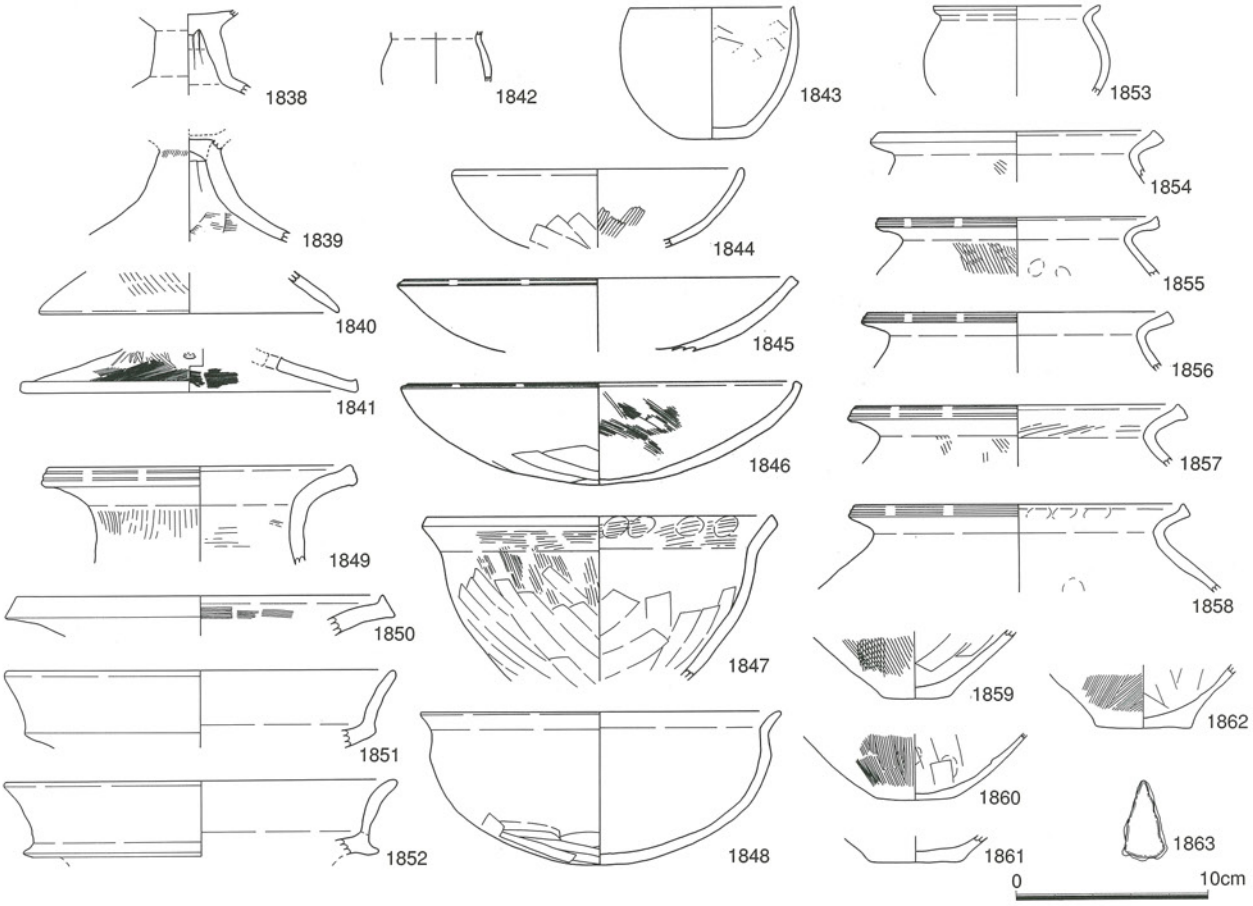
1．暗灰黄色　2.5Y 4/2　粘性砂質土　多量の炭化物と鉄分，マンガンを含む
2．灰オリーブ色　5Y 5/2　粘性砂質土　炭化物，マンガンを含む
3．暗灰黄色　2.5Y 5/2　粘性砂質土　マンガンを含む
4．灰オリーブ色　5Y 5/2　粘性砂質土　鉄分と多量のマンガンを含む

第192図　SK1087，SK1088実測図

出土遺物（第193図）

1838～1841は高杯形土器である。1838，1839は橙色を呈する胎土で焼成が軟質であり、1838は短い脚柱部から裾部が屈曲するタイプであり、接合部は上方から球状の粘土を挿入し下方からの押圧はしていない。1839は脚部に明瞭な屈曲点を持たず裾部が大きく開き、接合部には下方からの入念な指頭圧痕が観られるものであり、接合部外面ハケ、脚部外面丁寧なナデまたはタテヘラミガキである。1840は裾端部を丸く収めるのに対し、1841はにぶい橙色を呈し焼成固く、裾端部を上方に拡張し弱い擬凹線をとどめ、内面から開けた透かし穴を有する。

1842～1848は鉢形土器である。1844は口縁端部を丸く収めるが、1845は方形に仕上げる。1846



第193図　SK1087出土遺物実測図

はほぼ完形にまで復元できたが、結晶片岩を含む橙色を呈する胎土であり、口縁端部を内側に拡張する。体部外面上位に縦しわ痕が認められ、体部内面にはハケを施す。1847は胎土中に結晶片岩を含み、頸部を持たず口縁部が外方に屈曲し内面には稜をとどめるものであり、端部を方形に仕上げ、口縁部の器形はやや歪である。体部外面に縦しわ痕が認められ、下位はハケ状の鋭いケズリ、体部内面下位はヘラケズリである。1848は結晶片岩と多量の赤色斑粒を含み胎土が橙色を呈する焼成が軟質なものであり、頸部がやや括れ口縁部が外方に屈曲して端部を丸く収め、体部外面に縦しわ痕が観られる。1843も1848と同様の胎土であり、平底で口径よりも大きい最大径部を体部に有し、口縁端部は僅かに外反し尖り気味である。体部内面上位に板ナデが認められる以外に調整は不明瞭であるが内外面とも平滑に仕上げられている。

1849, 1850は広口壺形土器である。1849は頸部から連続する口縁部が緩やかに開き、1850と同様に端部を上下に拡張し、２条の擬凹線をとどめるもので、頸部外面に粗いタテハケを施す。

1851, 1852は二重口縁壺形土器である。ともに結晶片岩を含み、水平気味に開く一次口縁上端部に二次口縁が接合し擬口縁下半が露胎するものであり、1852の擬口縁先端は尖り気味に突出している。

1853～1858は甕形土器である。1853は結晶片岩を含む橙色の焼成が軟質のものであり、屈曲する短い口縁部を有する。1854～1858は口縁部「く」の字状に屈曲し端部に２条の擬凹線をとどめ

るが、1854，1855，1858は端部が上方に拡張するのに対し、1856，1857は上下に拡張する。

1859～1861は突出しない平底、1862は突出気味の平底であり、いずれも底部外面にハケを施す。

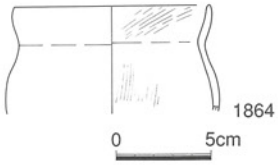
1863は金属製品である。

土坑 SK1088（第192図）

第10調査区北部 E92～93グリッドに位置する。SD1045を切るものであり、東側がSK1087に切られるため全容は不明であるが、断面は浅い台形を呈し、長軸1.40m，深さ0.14m を測る。埋土は鉄分，多量のマンガンを含む灰オリーブ色粘性砂質土１層で構成され、若干の遺物を検出している。

出土遺物（第194図）

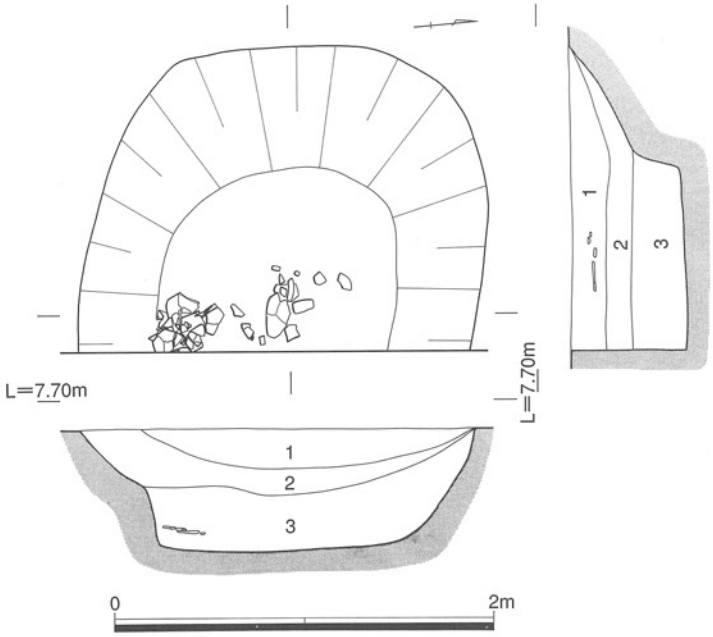
1864は鉢形土器である。結晶片岩を含み、口縁部が緩やかに屈曲して内灣し端部を尖り気味に仕上げるが上端はやや歪である。内面は平滑であり口縁部にナナメハケ、体部にタテハケを施す。



第194図　SK1088出土遺物実測図

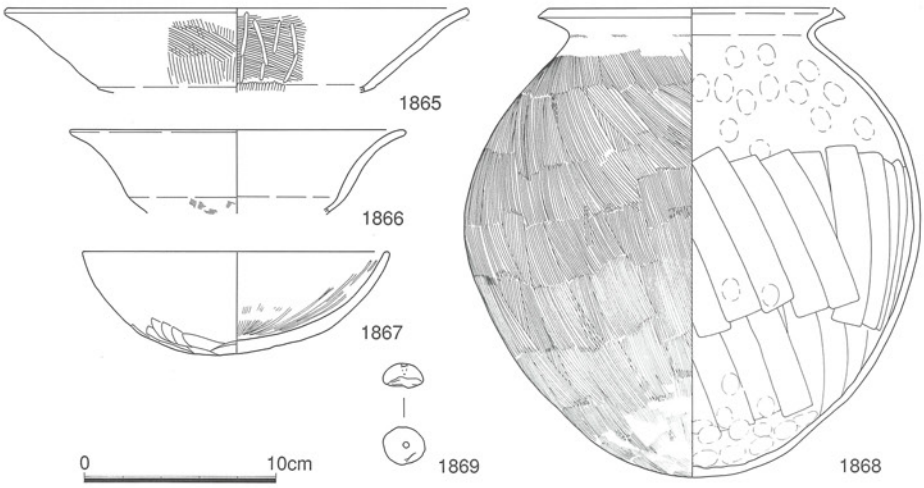
土坑 SK2038（第195図）

第９調査区北部 E67～68グリッドに位置する土坑であり、東側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、平面隅丸長方形，断面台形を呈し、南西側は途中からほぼ垂直に掘り込まれている。短軸2.09m，深さ0.63m を測り、主軸方位はN－77°－W を示す。埋土は平行な３層に分層でき、第１層が炭化物，マンガンを含む暗灰黄色粘性砂質土、第２層が炭化物，マンガンを含むオリーブ褐色粘質土、第３層がマンガンを含むオリーブ褐色粘質土である。少量の土器片を含有してい



1．暗灰黄色　2.5Y 4/2　粘性砂質土　炭化物，マンガンを含む
2．オリーブ褐色　2.5Y 4/3　粘質土　炭化物，マンガンを含む
3．オリーブ褐色　2.5Y 4/4　粘質土　マンガンを含む

第195図　SK2038実測図



第196図　SK2038出土遺物実測図

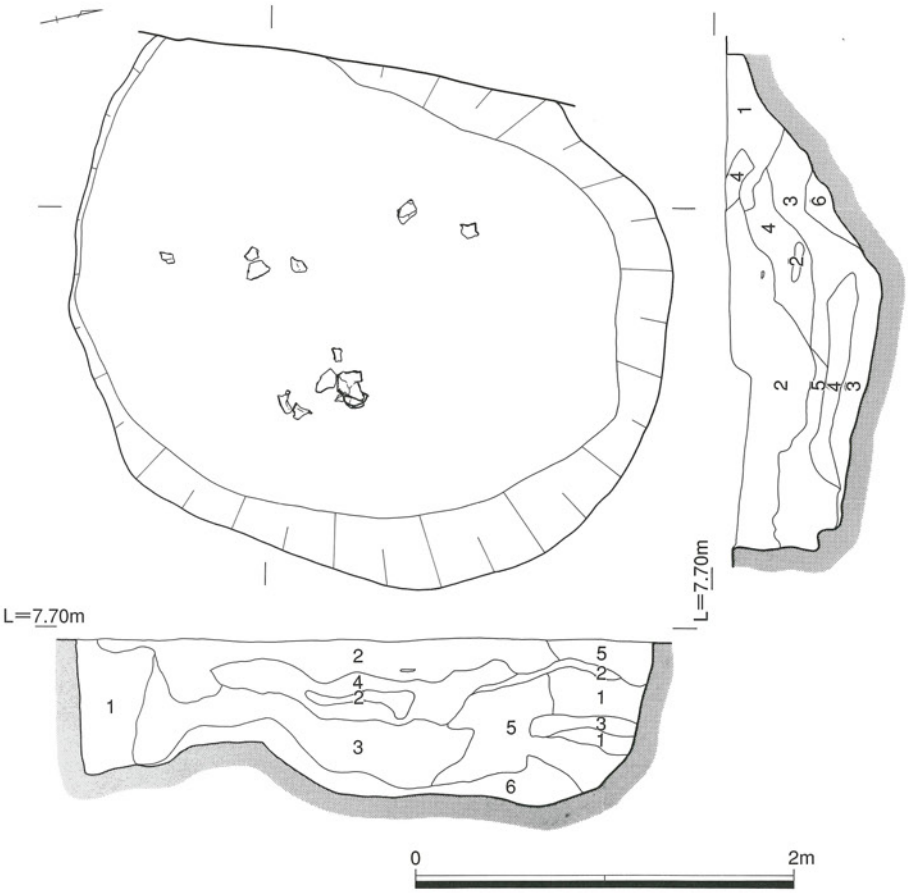
る。

出土遺物（第196図）

1865，1866は高杯形土器である。口縁部が大きく外反し端部を丸く収めるものであり1865は内面ナナメハケのちヘラミガキを施す。

1867は鉢形土器である。口縁端部を丸く収め、外面に縦しわ痕をとどめ、内面に放射状のヘラミガキを施す。

1868は甕形土器である。結晶片岩を含むにぶい橙色の胎土であり、体部は丸底で球形を呈し、口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ口縁端部が断面三角形である。口縁部内外面ヨコナデであるが端面に擬凹線はとどめずやや歪な口縁部の器形である。体部内面上位ユビオサエ，下位タテヘラケズリ、体部外面細密なハケである。完形である。黒谷川Ⅳ式以降に比定される。



1．灰黄色　2.5Y 6/2　粘性砂質土　炭化物，マンガンを含む
2．暗灰黄色　2.5Y 4/2　粘性砂質土　炭化物と多量のマンガンを含む
3．黄灰色　2.5Y 4/1　粘質土　炭化物と多量のマンガンを含む
4．黄褐色　2.5Y 5/3　粘性砂質土　マンガンを含む
5．黄褐色　2.5Y 5/4　砂質土　マンガンを含む
6．にぶい黄色　2.5Y 6/3　粘質土　マンガンを含む

第197図　SK2039実測図

1869は土玉である。下半部を欠損するが、手捏ね成形であり、突刺穴を有する。

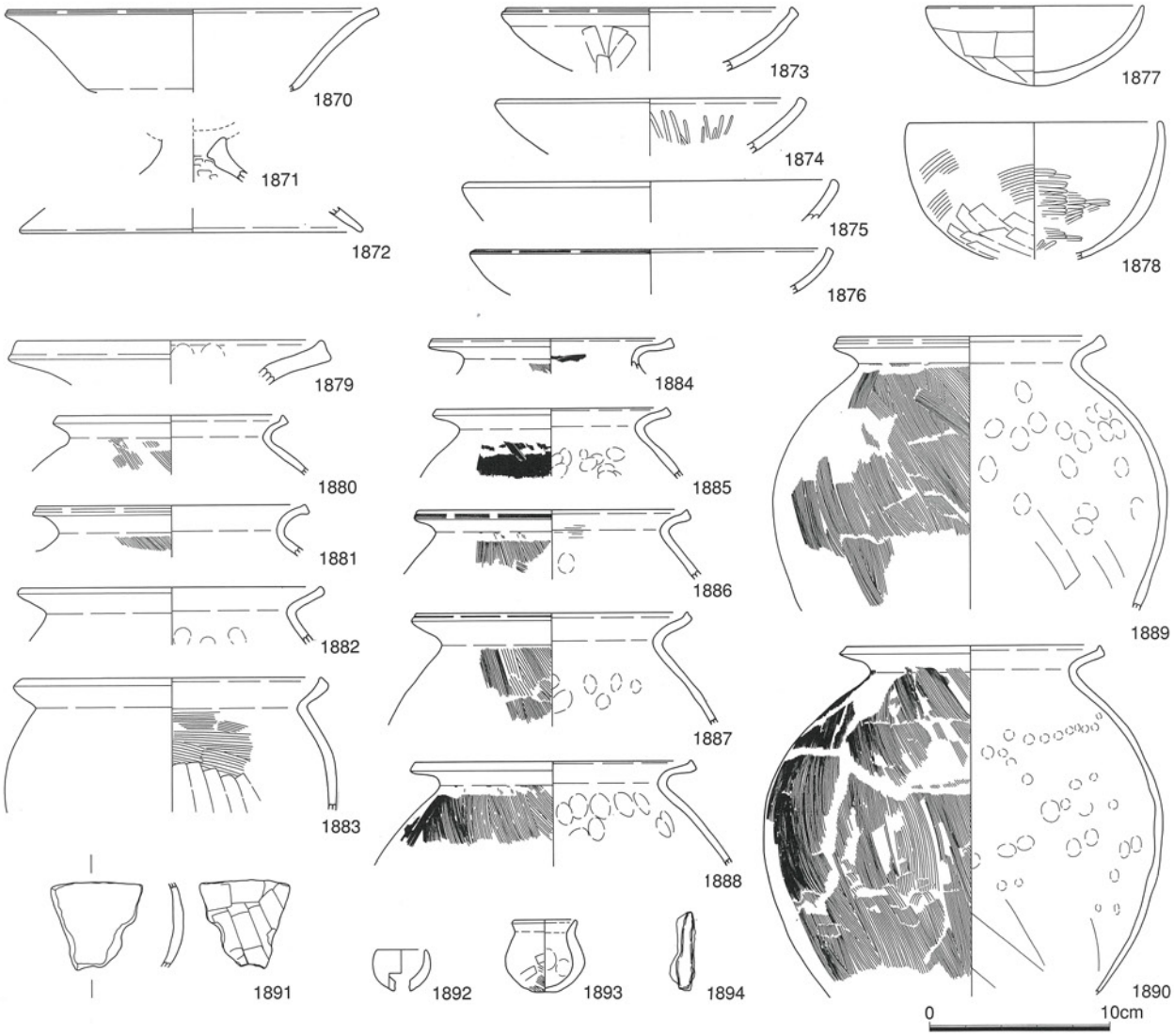
土坑 SK2039（第197図）

第９調査区 F67グリッドに位置する、平面隅丸長方形，断面台形状を呈する土坑であり、底部にうねりがあり、西側が調査区外にかかっている。長軸3.20m，短軸2.70m 以上，深さ0.44mを測る。第２，３層から土器片が検出されている。

出土遺物（第198図）

1870～1872は高杯形土器である。いずれも胎土橙色の焼成甘目のものであり、1870は口縁端部が僅かに外反し方形状を呈し、1872は裾端部を丸く仕上げている。

1873～1878は鉢形土器である。1873～1876は口縁端部が内側に拡張して方形状を呈するもので、外面に縦しわ痕をとどめ、1874は内面にタテヘラミガキを施す。1877は胎土橙色の焼成の甘

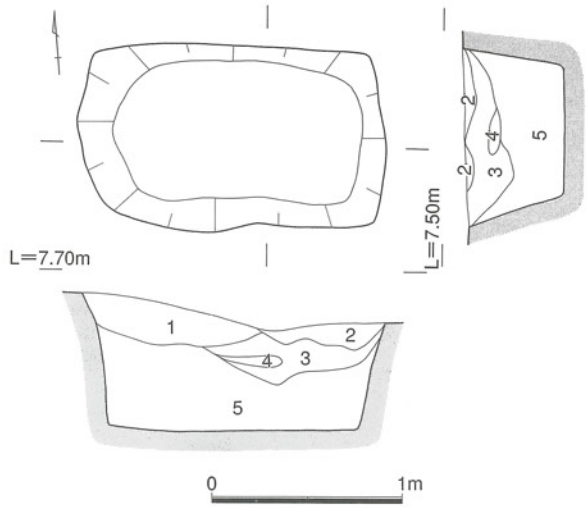


第198図　SK2039出土遺物実測図

いものであり、口縁端部を丸く収め外面上位に縦しわ痕，下位にヘラケズリ痕をとどめる。1878は口縁端部を丸く収めるが一部内側に拡張する歪なものであり、内面にヘラミガキ、体部外面にハケのちナデ，下位がヘラケズリである。

1879は広口壺形土器である。口縁端部を上方に拡張し、内面ユビオサエのちヨコナデである。

1880～1890は甕形土器である。いずれも胎土中に結晶片岩を含むものであるが、口縁部の形態，体部の調整等により分類できる。1881はにぶい橙色を呈する胎土で焼成は硬く、口縁部が緩やかに屈曲して端部は上下に拡張する。1882は口縁部が「く」の字に強く屈曲し端部を僅かに摘み上げる。1883は分厚い口縁部を「く」の字状に屈曲し、端部肥厚して僅かに上方に拡張し断面方形に仕上げる。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面上位ヨコハケ，下位ヘラケズリである。1880，1884～1890は口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げ口縁部にヨコナデを施し擬凹線をとどめる。体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面細密なハケである。1885は内外面が黒色系を呈し他のにぶい橙色または橙色系のものに比べ硬めの焼成である。



1．黄褐色	2.5Y 5／4	粘性砂質土	マンガンを含む
2．オリーブ褐色	2.5Y 4／6	粘質土	マンガンを含む
3．オリーブ褐色	2.5Y 4／4	粘質土	マンガンを含む
4．暗黄褐色	2.5Y 6／6	粘質土	マンガンを含む
5．灰オリーブ色	5Y 5／2	粘質土	マンガンを含む

第199図　SK2041実測図

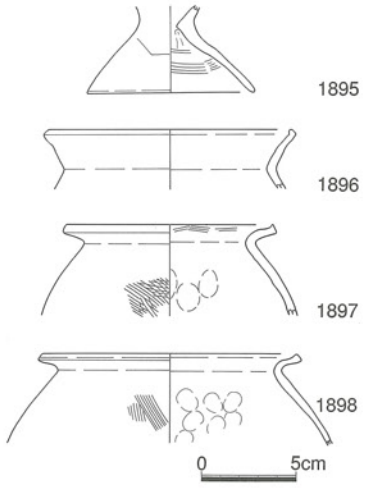
1891は鉢形土器の体部と考えられ、内面に水銀朱の付着が顕著に認められる。

1892, 1893はミニチュア鉢形土器である。1892は手捏ね成形であり底部に内面からの穿孔を有し、1893は底部外面にヘラケズリのちハケを施す。

1894は刀子と考えられる金属製品である。

土坑 SK2041（第199図）

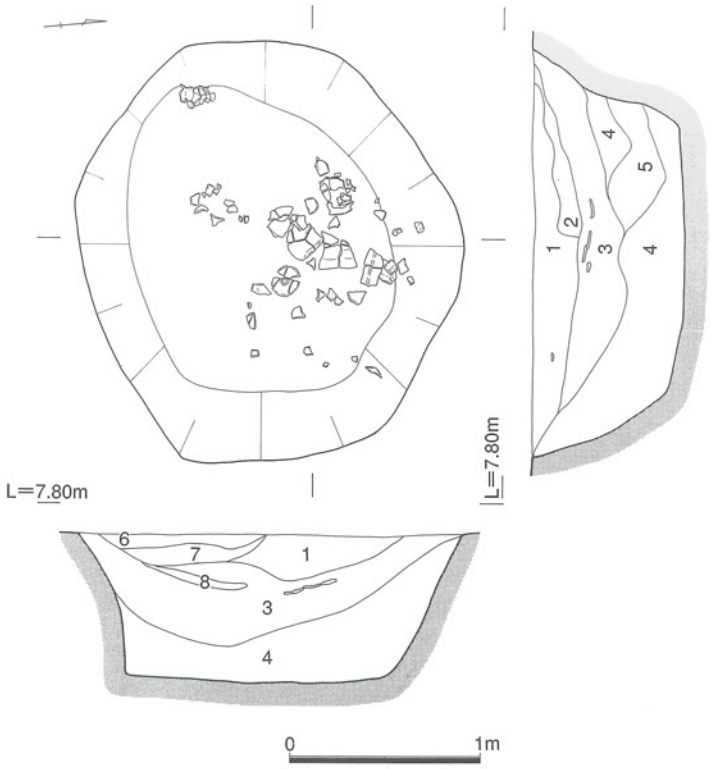
第９調査区北部 F67～68グリッドに位置する、平面隅丸長方形，断面台形を呈する土坑であり、長軸1.65m，短軸0.99m，深さ0.46mを測り、主軸方位はN－82°－Wを示す。埋土は５層に分層でき、第３層から若干の土器片を検出している。



第200図　SK2041出土遺物実測図

出土遺物（第200図）

1895は高杯形土器である。脚柱部非常に短く裾部が内灣しながら開き端部は方形であり、杯接合部の挿入粘土は遺存しないが、裾部内面に蜘蛛の巣状ハケを施す。1896～1898は甕形土器である。1896は胎土灰白色を呈し結晶片



1．暗灰黄色	2.5Y 5／2	粘性砂質土	炭化物，マンガンを含む
2．にぶい黄色	2.5Y 6／4	粘質土	マンガンを含む
3．黄褐色	2.5Y 5／3	粘質土	炭化物，マンガンを含む
4．にぶい黄色	2.5Y 6／3	砂質土	マンガンを含む
5．暗灰黄色	2.5Y 5／2	粘質土	マンガンを含む
6．明黄褐色	2.5Y 6／6	粘性砂質土	マンガンを含む
7．黄褐色	2.5Y 5／4	粘性砂質土	マンガンを含む
8．黄褐色	2.5Y 5／6	粘性砂質土	マンガンを含む

第201図　SK2042実測図

岩を含有せず、多量の赤色及び黒色の鉱物を含むものであり、口縁端部を上方に拡張する。搬入品である。1897は黄灰色系を呈し、短い口縁部を屈曲させ端部を摘み上げる。1898は胎土橙色で焼成が軟質のものであり、短い口縁部を「く」の字状に屈曲し端部を摘み上げる。

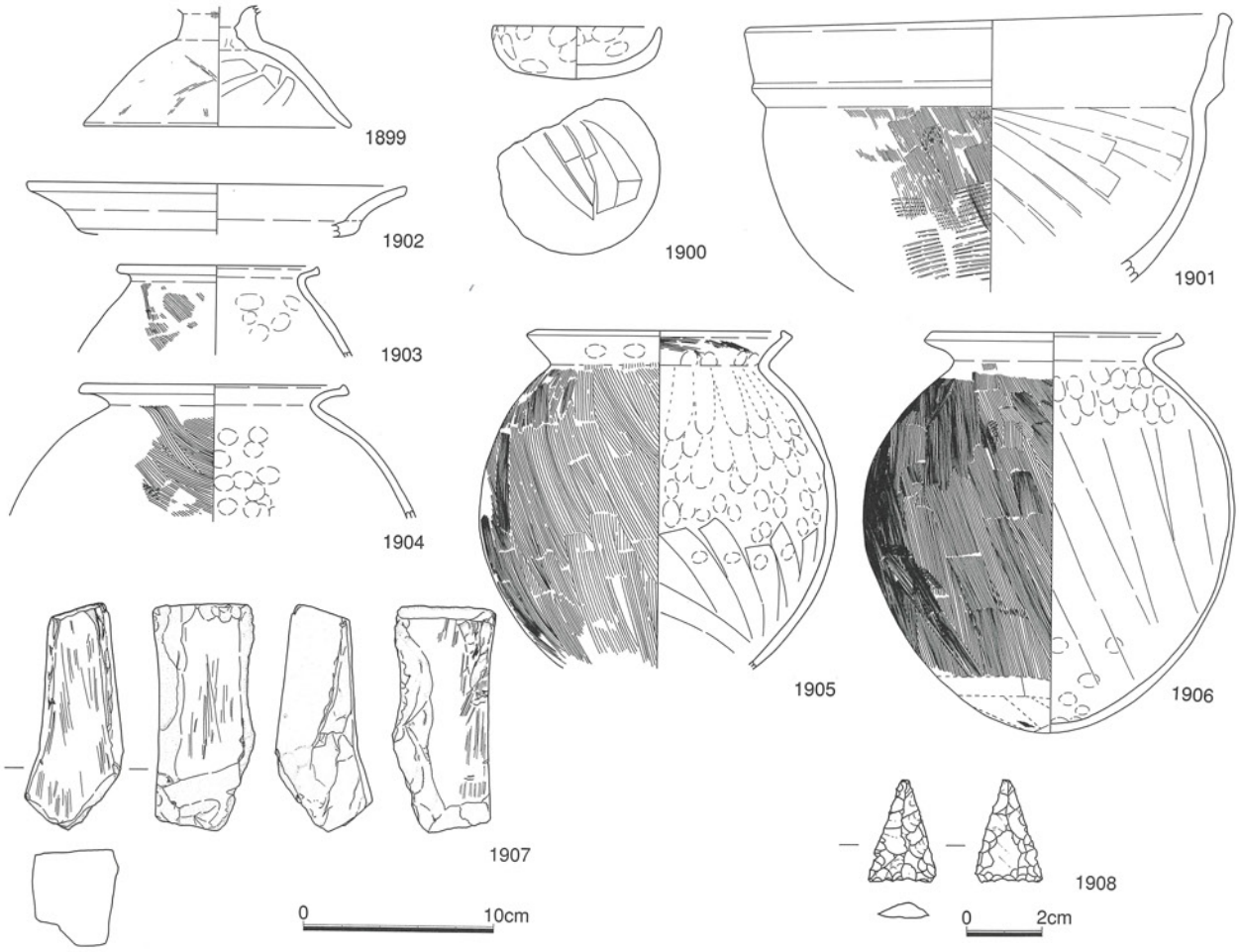
土坑 SK2042（第201図）

第９調査区中央部F68グリッドに位置する、平面不整楕円形，断面台形状を呈する土坑であり、長軸2.20m，短軸2.00m，深さ0.70m を測る。埋土は８層に分層でき、第１，３層から土器片、石器等を検出している。

出土遺物（第202図）

1899は高杯形土器である。橙色を呈する焼成の甘いものであり、短い脚柱部から裾部が内灣しながら開き端部を外反させて丸く収めるものである。1900は鉢形土器である。結晶片岩を含み、にぶい橙色を呈するものであり、口径に対し器高が非常に小さい皿型を呈し、全体に器壁が厚く口縁端部は尖り気味である。体部外面に縦しわ痕が観られ、底部外面をヘラケズリ、口縁部内外面はユビオサエである。

1901は有段鉢である。この器種は本調査区中における唯一の出土である。結晶片岩を含む胎土



第202図　SK2042出土遺物実測図

で焼成がやや甘く橙色を呈し、内灣する体部と直立する口縁部との間に段差を有し、端部は内側に僅かに拡張して丸く収める。口縁部内外面は横位の板ナデ、体部内面ヘラケズリ、体部外面上位はナナメハケであり、下位にタタキの痕跡をとどめる。

1902は二重口縁壺形土器である。一次口縁の上端部に低く立ち上がる二次口縁が付けられ端部は方形を呈するが、接合部は強くヨコナデが施され擬口縁下半露出部は丸く処理されている。

1903～1906は甕形土器である。いずれも結晶片岩を含み、口縁端部を摘み上げるが胎土色，焼成，口縁部の形態等に差異がある。1903は口縁部が短いタイプであり胎土がにぶい橙色を呈し焼成は硬い。1904は胎土橙色で焼成甘く、口縁部の屈曲は強く内外面に強いヨコナデを施す。1905は同様に橙色の焼成の甘いものであるが、口縁部は直角に屈曲し内外面に指頭圧痕が顕著でやや歪な形状である。1906はにぶい橙色を呈し焼成硬く、丸底で体部球形を呈し口縁部は強いヨコナデにより器形が整えられている。1905同様体部内面上位ユビオサエ、体部外面細密なハケであるが、体部内面のヘラケズリが上位にまで及び、体部外面下位に板ナデを施している。

1907は砥石である。流紋岩製で長側面のうち３面を使用している。

1908は石鏃である。サヌカイト製平基式である。

土坑 SK2044（第203図，図版３－８）

第９調査区南部 F69～70グリッドに位置する、平面不整楕円形，断面台形を呈する土坑であり、長軸2.36m，短軸1.94m，深さ0.85m を測る。特に南側は掘り込み角度が垂直に近いものである。埋土は５層に分層でき、第２層から大量の土器類等を検出している。

出土遺物（第204図）

図化可能で掲載した遺物は完形の鉢形土器，壺形土器，甕形土器４点を含む51点に上るが、内訳は高杯形土器30%，鉢形土器20%，壺形土器16%，甕形土器30%，砥石５%である。

1909～1921は高杯形土器である。1909，1910は杯部の短い体部から口縁部が大きく開き端部外反して尖り気味である。1912も同様の器形であり、杯底部内面に粘土充填後のナデ痕が残り、内面体部から口縁部にかけて放射状のナナメヘラミガキ、外面はハケである。1913は口縁部大きく開き端部そのまま伸びて丸く収め、内面に螺旋状のヘラミガキ、外面にタテハケを施す。1915，1918は胎土橙色の焼成の甘いものであり、1915は脚柱部内面に薄い円盤状の粘土盤の痕跡が認められ、1918は裾部内灣気味で端部を丸く収める。1916は脚部に明瞭な稜を有し，1919は裾端部が僅かに外反して方形に仕上げ１条の擬凹線をとどめる。1917，1920，1921は裾端部が僅かに外反して丸く収める。

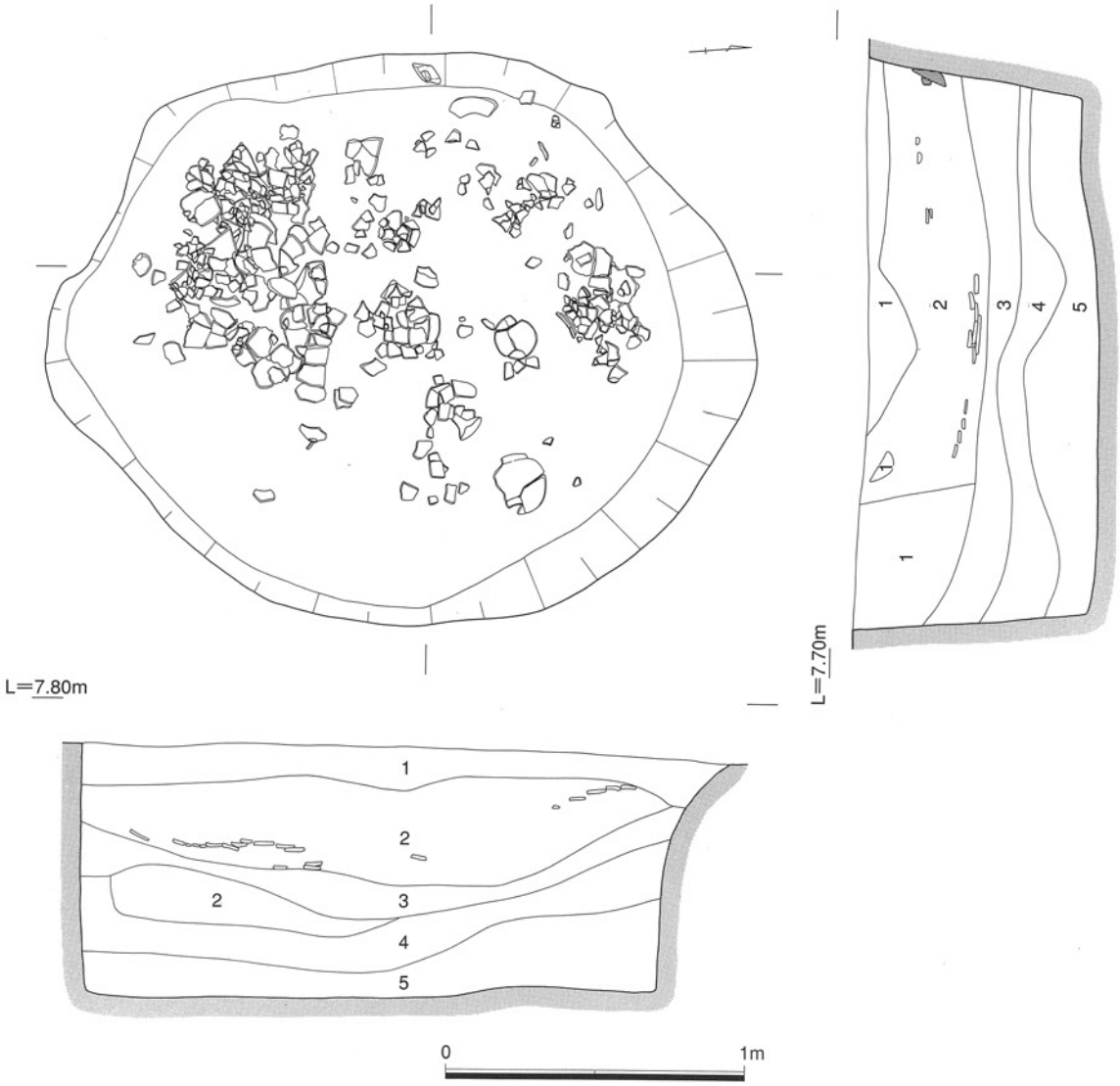
1922～1930は鉢形土器である。いずれも結晶片岩を含む胎土であり、そのうち1922～1928は体部外面に縦しわ痕をとどめ，底部外面ヘラケズリであるが，口縁端部等に差違がある。すなわち1924は口縁端部が内灣し丸く収め、1922，1923は口縁端部がそのまま伸びて丸く収める。完形の1925は丸底で口縁端部がやや尖り気味であり、内面に蓮弁状のヘラミガキを施す。1927は口縁端部が内側に拡張し方形状を呈する。1926は平底で口縁端部僅かに内側に拡張して丸く収めるもの

で、体部外面に縦しわ痕をとどめ、底部外面タタキのちヘラケズリ、体部内面ナナメハケのちナデである。1928は胎土橙色を呈し焼成が軟質であり口縁端部は方形状である。1929は口縁端部方形であり、体部外面に粗いタタキをとどめ、底部内外面はヘラケズリである。

1930は有孔鉢形土器である。胎土は結晶片岩を含む橙色を呈し焼成が軟質であり、砲弾形の体部から口縁部緩やかに外反して端部を方形に仕上げる。口縁部及び体部外面が横位のタタキ、底部内外面がヘラケズリである。完形である。

1931～1934は鉢形土器の体部片と考えられ、内面に水銀朱の付着が観られる。

1935は無頸壺形土器である。結晶片岩を含み胎土橙色の焼成の硬いものであり、球形の体部で口縁部が直立して端部を丸く収める。体部外面上位に縦しわ痕をとどめ、底部外面ヘラケズリ、内面はケズリで体部はのち板ナデである。完形である。

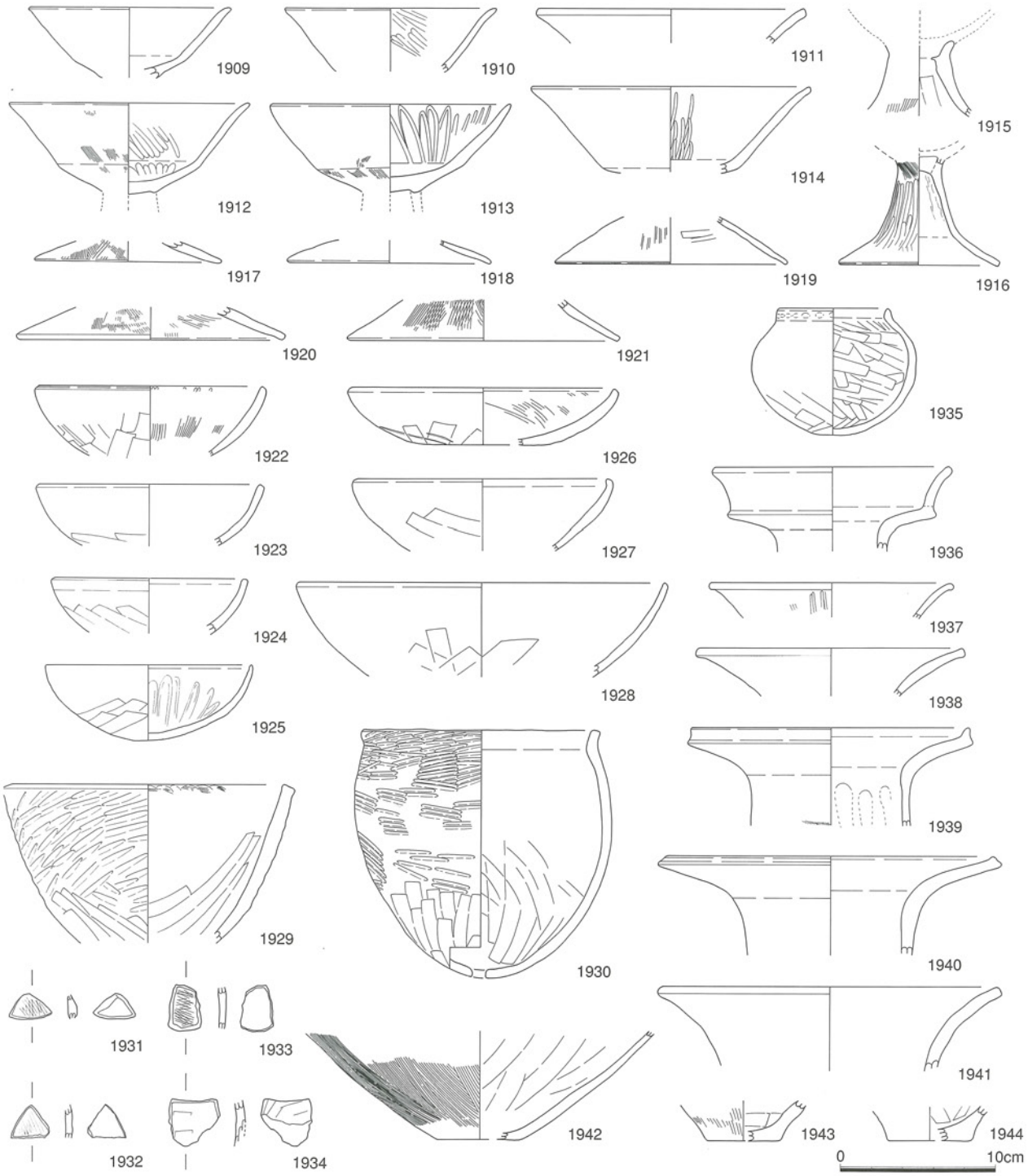


1．黄褐色	2.5Y 5/4	粘性砂質土	炭化物，マンガンを含む
2．暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘質土	炭化物，マンガンを含む
3．にぶい黄色	2.5Y 6/3	粘質土	少量の炭化物とマンガンを含む
4．オリーブ褐色	2.5Y 4/3	粘質土	少量の炭化物とマンガンを含む
5．暗灰黄色	2.5Y 4/2	粘質土	マンガンを含む

第203図　SK2044実測図

1936は二重口縁壺形土器である。水平気味に開く一次口縁の上端部に二次口縁を接合し、擬口縁下半が露胎している。内外面ヨコナデである。

1937～1941は広口壺形土器である。1937は胎土橙色を呈し焼成の甘いもので口縁端部が僅かに下方に拡張して方形に仕上げる。1938，1941は口縁端部が方形であり、1939，1940は口縁端部を上方に拡張する。

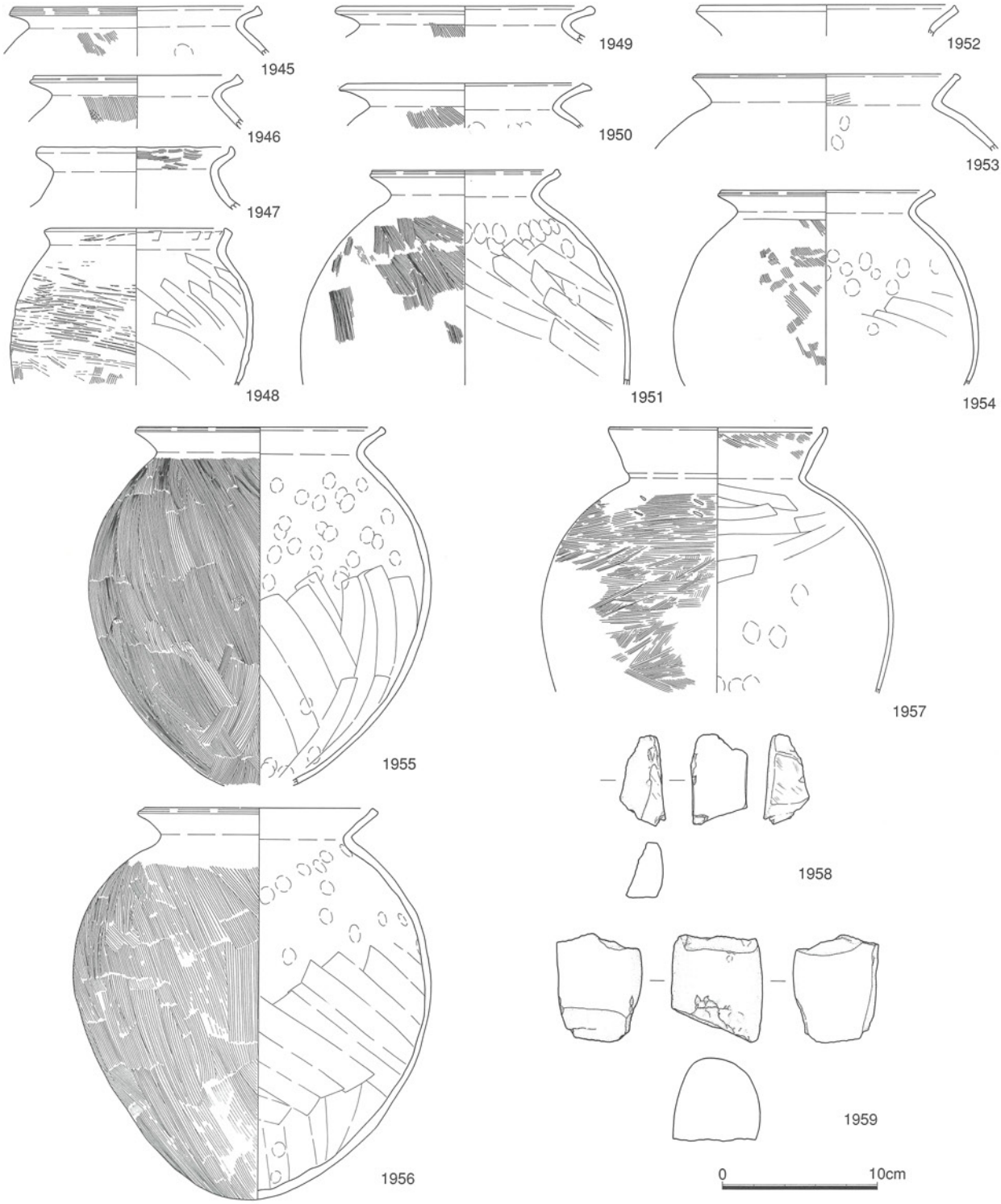


第204図　SK2044出土遺物実測図(1)

1942～1944は平底を呈する底部である。

（第205図）

1945～1957は甕形土器である。1957を除きいずれも結晶片岩を含むものである。1945～1947，1949～1955は口縁端部を摘み上げるものであるが胎土色，焼成及び口縁部の形状により細分できる。



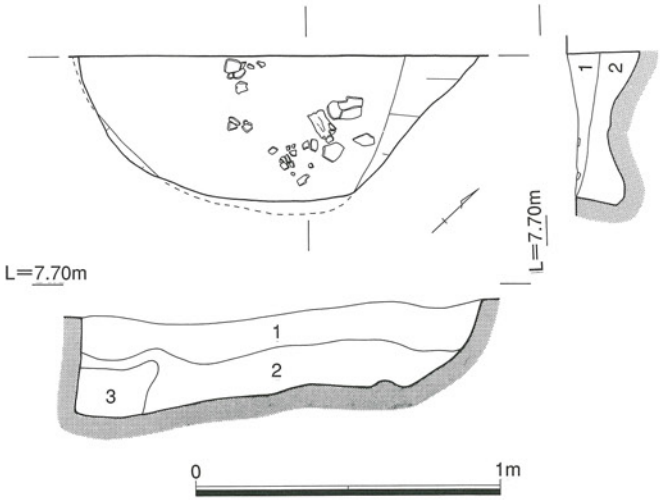
第205図　SK2044出土遺物実測図(2)

1947はヨコナデが弱く歪な器形の口縁部であり、1949は焼成硬く、口縁部に強いヨコナデを施し１条の擬凹線をとどめる整った器形に仕上げている。1945は胎土橙色で焼成甘く薄手であるが、ヨコナデにより端面に擬凹線をとどめる整った口縁部であり、1949，1950は口縁端部が断面三角形状を呈する。1951～1955はいずれも口縁部がヨコナデにより整えられ、端部に擬凹線をとどめることが多く、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、底部内面ユビオサエ、体部外面細密なナナメハケである。1948は長胴型の体部から口縁部緩やかに屈曲して外反し端部を方形に仕上げる。体部内面は左上がりのヘラケズリをとどめ、体部外面は横位のタタキのちナデまたはタテハケである。1956は丸底で最大径部を体部中程やや上位に有し、口縁部を「く」の字状に屈曲して端部を摘み上げず方形に仕上げる。口縁部内外面は強いヨコナデにより整えられ、体部内面上位ユビオサエ，下位ヘラケズリ、体部外面にナナメハケを施す。1957は結晶片岩を含まず石英，雲母及び多量の黒色鉱物を含有する灰白色の胎土である。全体に薄手で、口縁部屈曲して直線的に開き端部が僅かに内灣して内側に拡張して丸く収める。内面は口縁部ナナメハケのちヨコナデ、体部上位が横位のヘラケズリ、中下位が極浅いタテヘラケズリで一部ユビオサエが認められる。外面は口縁部ヨコナデ、体部上位がタテハケのち強いヨコハケで、中下位がタテハケのちナナメハケであるが上位に比べ浅いものである。肩部外面に縦２列２組の右下がりの列点が刻まれている。また頸部直下には焼成後の穿孔が施されている。体部中下位及び口縁部外面には炭化物の付着が認められ、そのうち外面はタール状の有機物の付着が顕著である。口縁端部の形状，器壁の薄さ及び調整から布留１式に比定される搬入品である。

1958，1959は砥石である。1958は流紋岩製であり、３面を欠損するが、表裏２面に使用痕が認められ凹状になっている。1959は砂岩製であり、１面に使用痕が認められる。

土坑 SK2045（第206図）

第９調査区南部西側境界付近に位置する土坑であり、全容は不明であるがその規模は長軸1.31m 以上，深さ0.33m 以上を測る。南部及び東部では垂直に掘り込まれるが、北側に向かって傾斜は徐々に緩やかなＵ字状になっている。埋土は３層に分層でき、第１層から少量の土器片を検出している。



1．暗灰黄色　2.5Y 4/2　粘質土　マンガンを含む
2．黄褐色　2.5Y 5/3　粘質土　マンガンを含む
3．黄灰色　2.5Y 4/1　粘質土　マンガンを含む

第206図　SK2045実測図

出土遺物（第207図）

1960は高杯形土器である。裾端部僅かに内灣し方形に仕上げ、透かし穴を内面から穿孔している。内面ナナメハケ、外面タテハケである。1961は鉢形土器である。結晶片岩を含むもので内面黄灰色、外面明黄褐色を呈し、